(財)八尾市文化財調査研究会報告94

大竹西遺跡第1次発掘調査報告書

—大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う—

2007年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

大竹西遺跡第１次発掘調査報告書

—大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う—

２００７年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

今回報告書を刊行するに至った大竹西遺跡は、大阪府八尾市北東部の楽音寺２丁目、大竹２丁目、西高安町３丁目、上尾町７・８丁目に広がる縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡であります。

本遺跡は、生駒山地西麓部から河内平野にかけて東西方向に展開する遺跡で、特に平野部については、旧郡名である河内郡、高安郡の条里制に伴う水田が広がる長閑な田園地帯であります。

平成元年に上尾町７丁目で八尾市教育委員会により、大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う試掘調査が実施された結果、縄文時代晩期以降の遺構・遺物が重層的に存在することが確認され、遺跡範囲の平野部分における遺跡実態が明らかとなりました。

これらの試掘結果を受けて実施した第１次調査では、弥生時代前期から近世に至る遺構・遺物が検出されました。なかでも、弥生時代前期の墓域や古墳時代初頭から前期にわたる居住域の存在、遺物では、類例の無い古墳時代前期の瑪瑙製鏃形石製品の出土をはじめとする数多くの調査成果がありました。

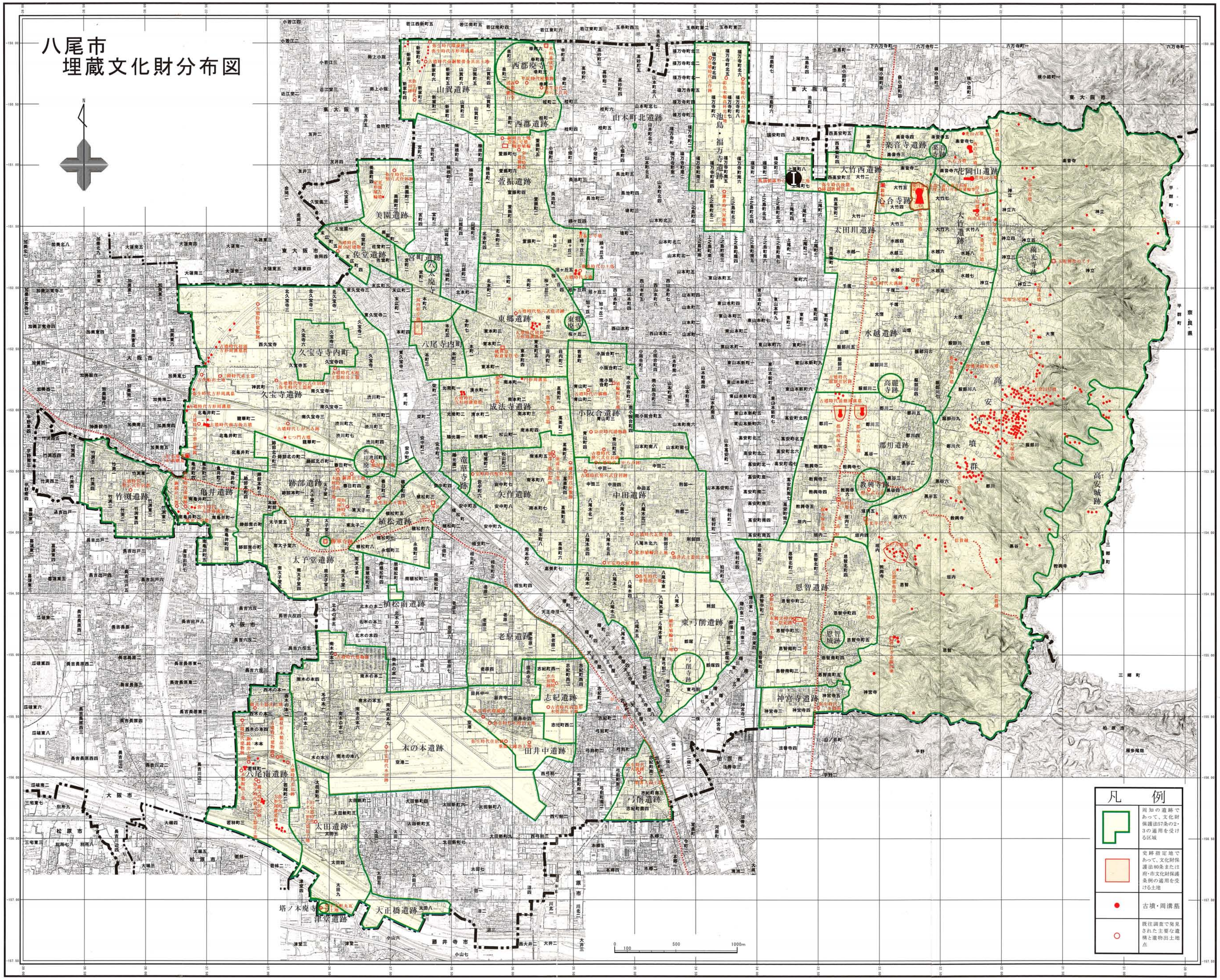
調査成果の公表および速やかな報告書の刊行は、調査担当機関に課せられた責務であり、そのため、当財団では整理係を設置し、報告書作成に向け鋭意努力しております。しかしながら、今回の報告書が遷延する結果を招いたことについて、心よりお詫び申し上げます。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　　岩崎健二


八尾市
埋蔵文化財分布図
凡例
周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適用を受ける区域
史跡指定地であって、文化財保護法80条または府・市文化財保護条例の適用を受ける土地
古墳・周溝墓
既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点
山賀遺跡
西郡廃寺
西郡遺跡
萱振遺跡
池島・福万寺遺跡
美園遺跡
佐堂遺跡
宮町遺跡
東郷遺跡
八尾寺内町
久宝寺寺内町
久宝寺遺跡
成法寺遺跡
小阪合遺跡
竹渕遺跡
亀井遺跡
跡部遺跡
植松遺跡
太子堂遺跡
矢作遺跡
中田遺跡
東弓削遺跡
老原遺跡
志紀遺跡
田井中遺跡
木の本遺跡
八尾南遺跡
太田遺跡
弓削遺跡
弓削寺跡
植松南遺跡
天正橋遺跡
塔ノ本廃寺
楽音寺遺跡
大竹西遺跡
花岡山遺跡
心合寺跡
太田川遺跡
大竹遺跡
水越遺跡
高麗寺跡
郡川遺跡
教興寺跡
恩智遺跡
神宮寺遺跡
高安城跡
高安古墳群
東大阪市
大阪市
松原市
柏原市
奈良県

調査地遠景(北西から)19910207撮影

ＳＫ356検出状況(南東から)

瑪瑙製石鏃形石製品(75)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市上尾町７丁目で実施した大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う大竹西遺跡第１次調査（ＯＴＮ90－１）の発掘調査報告書である。

1．調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪市環境事業局から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は高萩千秋・西村公助・岡田清一・井西貴子（現　大阪府教育委員会）が担当した。

1．現地調査は、平成２年６月25日に着手し、平成４年７月９日に終了した。調査面積は約9,000㎡である。

1．現地調査においては、荒川和哉・岩本多貴子・市森千恵子・上辻恵美子・岡田聖一・竹内浩伸・田中義雄・中西明美・永井剛史・正木洋二・三木明日香・村井俊子・村田英子・森本治一・山本美鈴・若竹慶弘の参加を得た。

1．内業整理業務は平成18年４月３日から平成18年11月に実施した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－市森・北原清子・徳谷尚子・西岡千恵子・村田知子・村田英子、図面トレース－山内千惠子、遺物写真撮影－尾崎良史が行った。整理作業には上記のほか黒田幸代・藤原由理子が参加した。

1．本書の執筆・編集は、整理係の原田昌則、荒川和哉が担当した。文責については目次で示した。

1．基準点測量は㈱八州に委託した。

1．花粉・珪藻分析は総合科学㈱に委託した。

1．歯牙分析は嶋田武男氏（大阪市立大学医学部解剖学教室）に委託した。

1．現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。（敬称略、所属は調査時点）

村川行弘・橋本　久（大阪経済法科大学）、堅田　直（帝塚山大学）、泉森　皎（奈良県庁）、工楽善通（奈良文化財研究所）、近江俊秀（橿原考古学研究所）、藤田善成（近畿大学）、常松幹雄（福岡市教育委員会）、森下友子（香川県教育委員会）、井西貴子・広瀬雅信・林日佐子・西川寿勝・亀島重則・森井貞雄（大阪府教育委員会）、寺川史郎（大阪文化財センター）、神谷正弘（高石市教育委員会）、堀江門也・西村　歩（大阪府文化財協会）、松田順一郎（東大阪市文化財協会）、大阪市環境事業局、八尾市廃棄物処理施設対策室、大末建設㈱、㈱島田組、㈱八州、総合科学㈱

1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成６年修正・平成８年７月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成18年６月改定版)を使用した。
1．本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1．本書で用いた方位は、国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕の座標北である。
1．本書で記載した地層名については、「標準土色帖」によるマンセル表記で示されたものと独自の基準により示されたものがある。粒径区分についても、調査担当者により基準が異なるものが混在しているが、あえて統一せず調査時点の表記のまま記載した。
1．遺構は下記の略号で示した。
掘立柱建物－ＳＢ　井戸－ＳＥ　　土坑－ＳＫ　　溝－ＳＤ　　小穴－ＳＰ
落ち込み－ＳＯ　土器集積－ＳＷ　　自然河川－ＮＲ
1．遺構図面の縮尺には、平面全図1/100・1/200・1/400、断面全図1/40・1/50がある。部分図面の縮尺には1/20・1/40がある。
1．遺物図面の縮尺は、土器類1/4、石器類1/１、2/3に統一した。断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・金属類は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品・土製品は斜線を用いた。
1．遺構番号は、面毎に調査区番号の先のものから順に通し番号を付けた。
1．本書で記述した古墳時代初頭～前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式－古相・新相)、古墳時代前期前半から後半(布留式－古相・中相・新相)に区別した。当該期の土器形式分類および土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(1993)に従った。
1．土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、ｐ121・122に提示した。

本　文　目　次

はしがき
八尾市埋蔵文化財分布図
巻頭図版
例言
凡例
第１章　調査に至る経過……（原田）１
第２章　地理・歴史的環境　……（原田）１
第３章　調査概要……８
　第１節　調査方法と経過……（原田）８
　第２節　南調査区（１～４区）の基本層序……（荒川）11
　第３節　南調査区（１～４区）の検出遺構と出土遺物……14
　　１）各調査面の概要　……14
　　・第１面　……（原田）14
　　・第２面　……（〃）19
　　・第３面　……（〃）24
　　・第４面　……（荒川）65
　　・第５面　……（〃）70
　　・第６面　……（〃）79
　　・第７面　……（〃）83
　　２）遺構に伴わない遺物……（原田）104
　第４節　北調査区（５区）検出遺構と出土遺物　……111
　　１）各調査面の概要……（〃）111
第４章　自然科学的分析　……123
　大竹西遺跡第１次調査における花粉・珪藻分析（総合科学株式会社）
第５章　まとめ　……（原田）162

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺図……２
第２図　調査地周辺図……９
第３図　調査区設定図および地区割図……10
第４図　１～４区基本層序模式図……13
第５図　１～４区地層断面図……15

第６図　調査地周辺の条里区画地図……16
第７図　１～４区第２面検出遺構平面図……20
第８図　ＳＢ301平断面図 ……24
第９図　１～４区第３面検出遺構平面図……25－26
第10図　ＳＥ301出土遺物実測図 ……27
第11図　ＳＥ301平断面図 ……27
第12図　ＳＥ303平断面図 ……28
第13図　ＳＥ303出土遺物実測図 ……29
第14図　ＳＥ304出土遺物実測図 ……30
第15図　ＳＥ304平断面図 ……30
第16図　ＳＥ305平断面図 ……31
第17図　ＳＥ305出土遺物実測図 ……32
第18図　ＳＥ307平断面図 ……33
第19図　ＳＥ307、ＳＥ308出土遺物実測図……34
第20図　ＳＥ308平断面図 ……34
第21図　ＳＥ309平断面図 ……34
第22図　ＳＥ309出土遺物実測図 ……35
第23図　ＳＥ310平断面図 ……35
第24図　ＳＥ311出土遺物実測図 ……36
第25図　ＳＥ311平断面図 ……36
第26図　ＳＫ303出土遺物実測図 ……37
第27図　ＳＫ303平断面図 ……37
第28図　ＳＫ310平断面図 ……38
第29図　ＳＫ310出土遺物実測図 ……38
第30図　ＳＫ311出土遺物実測図 ……38
第31図　ＳＫ311平断面図 ……38
第32図　ＳＫ323平断面図 ……39
第33図　ＳＫ327平断面図 ……40
第34図　ＳＫ341平断面図 ……40
第35図　ＳＫ339平断面図 ……40
第36図　ＳＫ346平断面図 ……41
第37図　ＳＫ347平断面図 ……41
第38図　ＳＫ323、ＳＫ327、ＳＫ339、ＳＫ341、ＳＫ346、ＳＫ347出土遺物実測図……42
第39図　ＳＫ355平断面図 ……42
第40図　ＳＫ355出土遺物実測図 ……42
第41図　ＳＫ356平断面図 ……43
第42図　ＳＫ356出土遺物実測図 ……44
第43図　ＳＫ358平断面図 ……45

第44図　ＳＫ358出土遺物実測図 ……45
第45図　ＳＫ359出土遺物実測図 ……46
第46図　ＳＫ359平断面図 ……46
第47図　ＳＫ382出土遺物実測図 ……46
第48図　ＳＫ382平断面図 ……47
第49図　ＳＯ302出土遺物実測図 ……50
第50図　ＳＯ302平断面図 ……50
第51図　ＳＯ303出土遺物実測図 ……51
第52図　ＳＯ305出土遺物実測図 ……51
第53図　ＳＯ303平断面図 ……52
第54図　ＳＤ301断面図 ……53
第55図　ＳＤ301出土遺物実測図 ……53
第56図　ＳＤ311出土遺物実測図 ……53
第57図　ＳＤ311土器集積部分平断面図 ……54
第58図　ＳＰ3080、ＳＰ3134、ＳＰ3174、ＳＰ3175、ＳＰ3196、ＳＰ3198、ＳＰ3200、
ＳＰ3226出土遺物実測図……56
第59図　ＳＰ3080、ＳＰ3134、ＳＰ3174、ＳＰ3175、ＳＰ3196、ＳＰ3198、ＳＰ3200、
ＳＰ3226平断面図……57
第60図　１～４区第４面検出遺構平面図……66
第61図　流路403出土遺物実測図 ……67
第62図　流路401出土遺物実測図 ……69
第63図　１～４区第５面検出遺構平面図……71
第64図　流路503出土遺物実測図 ……72
第65図　堰501・杭列501平立面図……75－76
第66図　杭列502平立面図 ……77－78
第67図　大畦畔601出土遺物実測図 ……79
第68図　大畦畔601断面図 ……79
第69図　１～４区第６面検出遺構平面図……80
第70図　中畦畔602出土遺物実測図 ……81
第71図　ＳＫ601出土遺物実測図 ……82
第72図　１～４区第７面検出遺構平面図……84
第73図　墓域Ⅰ検出墓平面図……85
第74図　木棺墓701平断面 ……87
第75図　土壙墓701平断面図および出土遺物実測図 ……87
第76図　土器棺墓701出土遺物実測図 ……89
第77図　墓域Ⅰ内出土遺物実測図……90
第78図　ＳＫ702・ＳＫ703断面図……90
第79図　木棺墓702平断面図 ……91

第80図　木棺墓703平断面および棺材見通し断面図……92
第81図　土壙墓702出土遺物実測図……93
第82図　土壙墓702平面図……93
第83図　ＳＫ701・ＳＫ704・ＳＫ705平断面図……95
第84図　ＳＫ712出土遺物実測図……96
第85図　ＳＤ705出土遺物実測図……97
第86図　ＳＤ708出土遺物実測図……97
第87図　ＳＤ711出土遺物実測図……98
第88図　第７面溝断面図①……99
第89図　第７面溝断面図②……101
第90図　ＳＯ702出土遺物実測図……103
第91図　第Ⅳ層出土遺物実測図……105
第92図　第Ⅵ層出土遺物実測図……107
第93図　第Ⅻ層出土遺物実測図－１……109
第94図　第Ⅻ層出土遺物実測図－２……110
第95図　北調査区（５区）断面図……111
第96図　５区第１面平面図……113
第97図　５区第２面平面図……113
第98図　５区第３面平面図……117
第99図　５区第４面平面図……117
第100図　５区第５面平面図……119
第101図　５区第６面平面図……119
第102図　５区第７面平面図……120
第103図　５区第８面平面図……120

写　真　目　次

写真１　第１回現地説明会風景……８
写真２　３区　水口101検出状況……14
写真３　３区　水口102検出状況……14
写真４　４区　ＳＥ104検出状況……18
写真５　４区　ＳＥ107検出状況……18
写真６　３区　土坑検出状況……19
写真７　１区　溝検出状況……21
写真８　１区　ＳＥ302検出状況……28

写真９　弥生時代後期溝群……65
写真10　土壙墓701遺物出土状況 ……86
写真11　土器棺墓701検出状況 ……88
写真12　墓域Ⅰ内遺物出土状況……90
写真13　木棺墓702人歯出土状況 ……91
写真14　土壙墓702断面および遺物出土状況 ……93

表　目　次

第１表　第１面　水田一覧表……17
第２表　第１面　畦畔一覧表……17
第３表　第２面　土坑（ＳＫ）一覧表……19
第４表　第２面　溝（ＳＤ）一覧表……21
第５表　第２面　小穴（ＳＰ）一覧表……23
第６表　第３面　土坑（ＳＫ）一覧表……48
第７表　第３面　溝（ＳＤ）一覧表……55
第８表　第３面　小穴（ＳＰ）一覧表……58
第９表　第４－１面　溝（ＳＤ）一覧表……65
第10表　第４－２面　水田一覧表……68
第11表　第５－１面　溝（ＳＤ）一覧表……74
第12表　第６面　水田一覧表……82
第13表　第６面　土坑（ＳＫ）一覧表……82
第14表　第６面　溝（ＳＤ）一覧表……82
第15表　第６面　小穴（ＳＰ）一覧表……83
第16表　第７面　土坑（ＳＫ）一覧表……95
第17表　第７面　小穴（ＳＰ）一覧表 ……102
第18表　第２面　溝（ＳＤ）一覧表 ……114
第19表　第２面　小穴（ＳＰ）一覧表 ……115
第20表　第６面　水田一覧表 ……118
第21表　第６面　畦畔一覧表 ……118

図　版　目　次

図版一　調査地より東方生駒山地を望む
調査地より南方を望む
図版二　全景
図版三　全景
図版四　1区　全景
1区　全景
図版五　2区　全景
2区　全景
図版六　3区　全景
4区　全景
図版七　1区　SB301検出状況
1区　SE301検出状況
図版八　1区　SE303検出状況
1区　SE304検出状況
図版九　1区　SE305検出状況
1区　SE307検出状況
図版一〇　1区　SE308検出状況
1区　SE309検出状況
図版一一　2区　SE311検出状況
1区　SK310検出状況
図版一二　1区　SK311検出状況
2区　SK346検出状況
図版一三　1区　SK323検出状況
2区　SK327検出状況
2区　SK339検出状況
図版一四　2区　SK341検出状況
2区　SK347検出状況
2区　SK355検出状況
図版一五　2区　SK356検出状況
2区　SK356鏃形石製品出土状況
図版一六　2区　SK358検出状況
2区　SK359検出状況
図版一七　4区　SK382・SK383検出状況
1区　SO301検出状況
図版一八　1区　SO302検出状況
1区　SO303検出状況
図版一九　2区　SO305検出状況
2区　SD311遺物出土状況
図版二〇　1区　SD301検出状況
2区　SD301検出状況
1区　SD301遺物出土状況
図版二一　2区　SP3080検出状況
2区　SP3134検出状況
2区　SP3175検出状況
図版二二　3区　SP3196検出状況
3区　SP3198検出状況
4区　SP3226検出状況
図版二三　全景
図版二四　1区　全景
2区　全景
図版二五　3区　全景
4区　全景
図版二六　1区　全景
2区東部　上層全景
図版二七　2区東部　下層全景
1区北東部　溝群検出状況
図版二八　2区　畦畔501検出状況
2・3区間側溝北壁畦畔501・SD506部分断面
2区　SD506検出状況
図版二九　2区　堰501検出状況
2区　杭列501検出状況
図版三〇　3区　杭列502検出状況①
3区　杭列502検出状況②
2区　杭列502検出状況③
図版三一　全景
図版三二　1区　全景
2区　全景
図版三三　3区　全景

4区　全景
図版三四　3区　大畦畔601検出状況
4区　大畦畔601検出状況
図版三五　4区　大畦畔601石群601検出状況
4区　大畦畔601石群602検出状況
3区　中畦畔602盛土下面土器出土状況
図版三六　1区　中畦畔601検出状況
1区　中畦畔601下部杭列検出状況
4区　中畦畔602検出状況
図版三七　全景
図版三八　1区　全景
2区　全景
図版三九　3区　全景
4区　上層全景
図版四〇　4区　下層全景
1区　墓域Ⅰ検出状況
図版四一　1区　墓域Ⅰ木棺墓701検出状況
1区　墓域Ⅰ土壙墓701検出状況
1区　墓域Ⅰ土器棺墓701土器棺検出状況
図版四二　1区　墓域ⅠＳＫ702検出状況
1区　墓域ⅠＳＫ703検出状況
4区　墓域Ⅲ土壙墓702検出状況
図版四三　3区　墓域Ⅱ木棺墓702検出状況
3区　墓域Ⅱ木棺墓702完掘状況
4区　墓域Ⅲ木棺墓703検出状況
図版四四　1区　ＳＫ701
2区　ＳＫ704
3区　ＳＫ705
図版四五　3・4区東部　上層遺構群
3区　ＳＤ704・ＳＤ705埋土断面
4区　ＳＤ709・ＳＤ711
図版四六　5区　第1面検出状況
5区　第1面水田細部
図版四七　5区　第2面検出状況
5区　第2面細部
図版四八　5区　第3面検出状況
5区　ＳＤ301検出状況
図版四九　5区　第4面検出状況
5区　第4面遺構検出状況
図版五〇　5区　第5面検出状況
5区　第5面ＳＤ501・502検出状況
図版五一　5区　第6面検出状況
5区　第7・8面検出状況
図版五二　ＳＥ301・ＳＥ303・ＳＥ304・ＳＥ305出土遺物
図版五三　ＳＥ305・ＳＥ307・ＳＥ308出土遺物
図版五四　ＳＥ309・ＳＥ311・ＳＫ303・ＳＫ310・ＳＫ327・ＳＫ339・ＳＫ346・ＳＫ347出土遺物
図版五五　ＳＫ355・ＳＫ356・ＳＫ358出土遺物
図版五六　ＳＫ358・ＳＫ359・ＳＫ382・ＳＯ302・ＳＯ303・ＳＯ305・ＳＤ301・ＳＤ311出土遺物
図版五七　ＳＤ311・ＳＰ3080・ＳＰ3200・ＳＰ3134・ＳＰ3174・ＳＰ3198・ＳＰ3175出土遺物
図版五八　ＳＰ3175・流路503・大畦畔601・中畦畔602・ＳＫ601出土遺物
図版五九　土器棺墓701・墓域Ⅰ・土壙墓702・ＳＫ712・ＳＤ705出土遺物
図版六〇　ＳＤ708・ＳＤ711・ＳＯ702・第Ⅳ層出土遺物
図版六一　第Ⅳ層・第Ⅵ層出土遺物
図版六二　第Ⅵ層・第Ⅻ層出土遺物
図版六三　第Ⅻ層出土遺物
図版六四　第Ⅻ層出土遺物

第１章　調査に至る経過

大阪市環境事業局八尾工場建替えに伴う大竹西遺跡の第１次発掘調査（ＯＴＮ90－１）は、当調査研究会が大阪市環境事業局の委託を受けて実施したものである。

調査の経緯は昭和63年６月14日の開発問題協議会で、大阪市環境事業局から上尾町７丁目に所在する八尾焼却場地内において八尾工場建替えの事業計画が提出された。八尾市教育委員会（以下市教育委員会）では、その事業計画地の付近には池島遺跡・福万寺遺跡が存在し、隣接する八尾学園敷地内から埋蔵文化財が確認されていることや、事業計画は大規模な開発であることから遺跡確認調査の実施が必要であると判断した。平成元年12月５日～25日にかけて市教育委員会が試掘調査を実施した結果、現地表下約2.7m～5.2m（T.P.＋5.0～2.8m）に存在する地層内に、縄文、弥生、古墳、鎌倉時代の各時代の遺物を含む地層を確認した。

市教育委員会は試掘調査の結果をもとにして平成２年１月９日付けで、事業計画の工場本体部分8,500㎡と煙突部分500㎡に対して、発掘調査が必要であることを大阪市環境事業局に通知した。

その後、大阪市環境事業局、市教育委員会および当調査研究会の三者間で、具体的な調査方法・調査体制等についての度重なる協議を行った。その結果、工場本体部分（１～４区）が平成２年６月１日から平成３年７月12日、煙突部分（５区）が平成４年４月13日から７月９日に発掘調査を実施することが決定され、平成２年４月27日付けで三者間での協定を締結した。

第２章　地理・歴史的環境

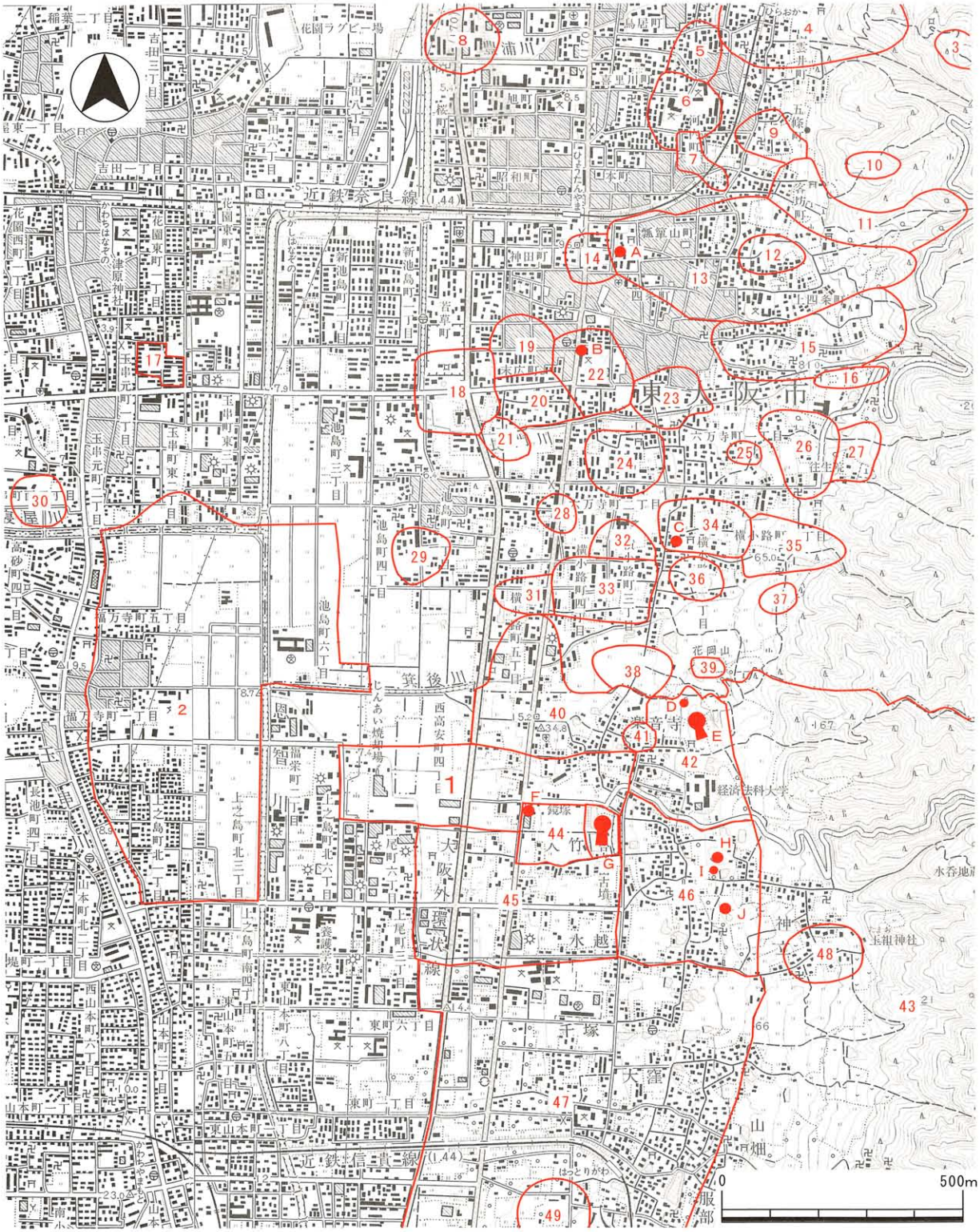
大竹西遺跡は大阪府八尾市北東部の大竹２丁目、西高安町３丁目、上尾町７・８丁目一帯の東西1.2km、南北0.35kmに展開する縄文時代晩期から室町時代にかけての複合遺跡である。

遺跡内の地勢は、東部が生駒山地西麓部の傾斜変更線を境とする扇状地性低地（扇状地中位面から下位面）を経て氾濫平野である西部の河内平野に至るもので、標高は東端の生駒山地西麓部でT.P.＋32.8m、西端の平野部でT.P.＋7.5mを測る。平野部においては、近年まで条里制を色濃く残す水田景観を呈しており、その中を生駒山地西麓部に端を発する水越川が東西方向に流下している。

当遺跡の周辺では、北東に西の口遺跡（東大阪市）、東に楽音寺遺跡、花岡山遺跡、大竹遺跡、楽音寺・大竹古墳群、高安古墳群、南東に太田川遺跡、水越遺跡、西に恩智川を挟んで池島・福万寺遺跡などが位置している。

以下、当遺跡を中心とした生駒山地西麓部および平野部に立地する遺跡群を時期毎に概観してみたい。

旧石器時代においては、その生業たる狩猟・採集を推進するうえで生駒山西麓部は格好の場所であったことは想像に難くない。しかしながら、この時期の遺物は不時発見や後の遺物と共伴するものが多く、検出例はさほど多くない。東大阪市域では、山畑遺跡でナイフ形石器・尖頭器、坊主山遺跡と千手寺山遺跡からはナイフ形石器、神並遺跡からは国府型ナイフ形石器・縦長ナイフ形石器・横長ナイフ形石器・翼状剥片が採集されている。八尾市域では恩智遺跡でナイフ形石



1. **大竹西遺跡**　2. 池島・福万寺遺跡　3. 神津嶽祭祀遺跡　4. 出雲井遺跡群　5. 狐塚遺跡　6. 皿池遺跡　7. 河内寺遺跡
8. 鵜立遺跡　9. 水走氏館跡　10. 五条山古墳群　11. 客坊山遺跡群　12. 山畑遺跡　13. 山畑古墳群　14. 市尻遺跡
15. 花草山古墳群　16. 五里山古墳群　17. 花園遺跡　18. 北鳥池遺跡　19. 五合田遺跡　20. 段上遺跡　21. 下六万寺遺跡
22. 縄手遺跡　23. 上六万寺遺跡　24. 船山遺跡　25. 桜井古墳群　26. 岩滝山遺跡　27. 往生院金堂跡　28. コモ田遺跡
29. 池島東遺跡　30. 玉串遺跡　31. 西代遺跡　32. 北屋敷遺跡　33. 馬場川遺跡　34. 半堂遺跡　35. 浄土寺谷古墳群
36. 貝花遺跡　37. 浄土寺遺跡　38. 西の口遺跡　39. 萩山遺跡　40. 楽音寺遺跡　41. 楽音寺跡　42. 大光寺山遺跡　43. 高安古墳群
44. 心合寺跡　45. 太田川遺跡　46. 大竹遺跡　47. 水越遺跡　48. 薗光寺跡　49. 高麗寺跡　A. 瓢箪山古墳　B. えのき塚古墳
C. 大賀世古墳　D. 禿山古墳　E. 西の山古墳　F. 鏡塚古墳　G. 心合寺山古墳　H. 向山古墳　I. 向山瓦窯　J. 愛宕塚古墳

第１図　遺跡周辺図

器が採集されている。続く、縄文時代草創期のものとしては生駒山地西麓の草香山(東大阪市)と六万寺(東大阪市)から有舌尖頭器が単独で出土している。

縄文時代早期の遺跡には神並遺跡(東大阪市)がある。神並遺跡は生駒山地西麓の標高30m前後に位置する中位段丘上に位置するもので、神宮寺式に代表される押型文土器群に共伴して膨大な石器類が出土している。縄文時代前期の河内平野の自然環境は「河内湾Ⅰの時代」と呼ばれる時代で、温暖化に伴う海進現象により海岸線が内陸部に及んだことが地質調査等で明らかにされている。これら自然環境の変化から推定される生業等の変質に即応して、遺跡の立地がやや低位置に移動する傾向がみられ、前期前葉の北白川下層Ⅱ式の段階に成立する恩智遺跡は、扇状地末端部の標高10～15mに立地している。

縄文時代中期では、恩智遺跡のほか、中期初頭～中葉においては瀬戸内地方を中心に分布する船元Ⅰ式土器の出土をみた縄手遺跡(東大阪市)と、中期末～後期初頭には馬場川Ｏ式土器(中津式併行)が出土した馬場川遺跡(東大阪市)、北白川Ｃ式土器が出土した水越遺跡が生駒山地西麓部に成立している。なお、大竹西遺跡第４次調査(ＯＴＮ99－４)では、現地表下11.6～13.2m(T.P.－0.3～2.0m)において、内湾の砂海に生息した貝化石が確認されており、当該期の遺跡立地を考えるうえで貴重である。

縄文時代後期においては、縄手遺跡・馬場川遺跡・恩智遺跡が継続して営まれる他、花岡山遺跡・楽音寺遺跡(八尾市)が新たに出現している。土器の形式では、後期初頭においては瀬戸内系の中津式、後期前半では関東系の堀ノ内式、瀬戸内系の津雲Ａ式が認められる。また、後期前半の段階で漁労活動を示す石錘の存在が認められており、この期の段階で河内湾を中心とした新しい生業体系が確立している。縄文時代晩期では馬場川遺跡が晩期前半、恩智遺跡が晩期中葉に大規模な集落を形成している。恩智遺跡では、在地系の土器に共伴して東北系の大洞Ｂ－Ｃ式・大洞Ｃ式や瀬戸内系の原下層式が出土しており、当時の活発な地域間交流が窺える。一方、平野部に位置する池島・福万寺遺跡では晩期の土坑墓が検出されている。

弥生時代前期では、縄文時代晩期から継続する鬼塚遺跡・植附遺跡(東大阪市)が古段階に出現するほか、前期中段階に池島・福万寺遺跡・大竹西遺跡・郡川遺跡、前期新段階に恩智遺跡で集落の成立をみるが、大勢としては水稲耕作の深化に伴う集落の拡大傾向に符合して、平野部を中心とした集落の成立が顕在化している。続く、弥生時代中期では、恩智遺跡のほか環濠集落の形態を示す水越遺跡があり、同時期に存在した平野部の集落と比較する上で貴重な資料を提供している。弥生時代後期の遺跡は生駒山地西麓部末端に、馬場川遺跡・上六万寺遺跡(東大阪市)・大竹遺跡・花岡山遺跡・水越遺跡・郡川遺跡・恩智遺跡、平野部に北鳥池遺跡(東大阪市)・池島・福万寺遺跡・大竹西遺跡・太田川遺跡がある他、生駒山地西麓部の海抜80m付近には高地性集落である岩滝山遺跡(東大阪市)がある。大竹西遺跡第３次調査では、弥生時代後期初頭の鋳造鉄剣が出土しており、当該期の周辺部における集落の動向を推定するうえで貴重である。

古墳時代初頭(庄内式期)では、古相のものが西の口遺跡(東大阪市)、池島・福万寺遺跡で検出されているのを除けば、水越遺跡・郡川遺跡のように庄内式期後半に成立したものが多い。古墳時代前期(布留式期)においては、郡川遺跡・水越遺跡・恩智遺跡・大竹西遺跡で集落が形成されている。

古墳時代中期から後期にかけては、池島・福万寺遺跡・太田川遺跡・水越遺跡・郡川遺跡・恩

智遺跡がある。なお、玉作りに関連した遺物が5世紀後半においては水越遺跡、6世紀初頭から中葉にかけては池島・福万寺遺跡において検出されているほか、鉄生産に関連した5世紀代の遺物が太田川遺跡・郡川遺跡から出土している。古代氏族としては、古事記の孝元記七年二月条に「次妃河内青玉繫女埴安媛生二武埴安彦一」と記されるように、天皇家との婚姻関係を持つ有力な在地勢力が存在したようである。

一方、古墳としては、八尾市北東部の生駒山西麓部を中心として、前期の西ノ山古墳・花岡山古墳、中期初頭の心合寺山古墳、中期末の鏡塚古墳に至るまで累世的な形成を示す「楽音寺・大竹古墳群」が存在している。特に心合寺山古墳については、全長160mを測る中河内最大の前方後円墳で、平成5年(1993)～平成12年(2000)にかけて史跡整備に伴う発掘調査が行われている。その結果、後円部で3基の粘土槨で構成される主体部、前方部で埋葬施設を伴う方形檀や西側に張り出した造り出しが確認されている。主体部については、3基のうち西槨のみが調査されており、三角板革綴短甲・三角板革綴衝角付冑・夔鳳鏡・三葉環頭大刀・鉄剣・針状鉄製品・勾玉・管玉・竪櫛等の副葬品が出土している。埴輪類は約3000本が確認されており、円筒埴輪・朝顔形埴輪や形象埴輪としては造り出し部分から出土した「水の祭祀場を表した埴輪」の他、家・蓋・壷・盾・靫・甲冑・鶏等の豊富な埴輪類が出土している。

その他の中期古墳としては、花岡山遺跡東方の標高150m地点で検出された組合式箱式石棺を主体部に持つ中ノ谷古墳、教興寺遺跡の第1次調査(KO91－1)で検出された竪穴式石室、服部川の森田山古墳、垣内の塚本塚古墳がある。中期末から後期初頭にかけては、横穴式石室を主体部に持つ郡川東塚古墳・郡川西塚古墳の前方後円墳が築造されている。2基の前方後円墳は前期後半から中期後半にかけて安定した政治集団の存在を認めた「楽音寺・大竹古墳群」とは、位置的にも離れていることから、系統を異にする新興首長の墳墓であった可能性が高い。この期を境として、生駒山地西麓部一帯では横穴式石室を主体部に持つ小型円墳を中心とした造墓活動が顕在化しており、特に後期後半以降の造墓活動により高安古墳群と称される群集墳が形成されるに至っている。

高安古墳群については、『河内名所図会』にも描かれているように、古くから破壊がおよんだことが明らかであり、『中河内郡誌』に掲載されている大正11年段階の640基から平成2年の調査では185基が検出されたに過ぎず、多くの古墳がこの間に消滅したようである。昭和42年以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により発掘調査が実施されており、その実体の一部が明らかにされている。昭和42年には、高安古墳群のなかでも最大級の横穴式石室を主体部に持つ愛宕塚古墳(6C後半)の調査が実施され豊富な土器類をはじめ馬具類・武具類が出土している。それ以降、昭和55年度には高安山1号墳・2号墳(7C中葉)、昭和58年度には郡川の法蔵寺境内2号墳・3号墳・3－B号墳(7C代)、昭和60年には垣内で垣内1号墳(6C末築造・7C初頭追葬)・垣内2号墳(7C後半)・垣内3号墳(7C前半)、平成元年度には神立で芝塚古墳(6C後半築造・7C初頭追葬)、平成2年度には楽音寺で大石古墳(6C後半築造・7C初頭追葬)、同年には大窪の日宝寺墓地3号墳・4号墳(6C末～7C初頭)、平成4年度には黒谷の妙見寺境内1号墳・2号墳(6C後半)、平成5年度には山畑で195号墳(7C前半～中葉)、平成16年には神立で芝塚2号墳(6C後半)、平成17年度には大窪で大窪29号墳(6C後半)、黒谷で黒谷10号墳(6世紀中葉)の調査が実施されてきた。以上の調査成果や従来の知見から高安古墳群をまとめれば、全

長３～15.7mの規模を測る横穴式石室を主体部に持つ円墳が中心で、墳丘規模は径10～25m、高さ３～５mを測る。築造時期については５世紀後半以降であるが、その多くが６世紀後半期に集中していることが指摘できる。古墳時代の終末期とされる７世紀代においても、凝灰岩製刳抜式家形石棺が直葬されていた核山古墳やおんぢ山古墳、高安山山頂の標高480mに位置し小規模な横穴式石室を持つ高安山１号墳・２号墳が築造されており、終末期特有の立地条件や埋葬主体の形態が多様化する一面を呈し、少なくとも７世紀後半までは確実に造墓活動が行なわれている。

高安古墳群での古墳造営が終焉をむかえた７世紀後半以降は、古墳造営に邁進した氏族は古墳に代わって先祖神(氏神)崇拝の場所として寺院を建立し、氏族間の結び付きの強化が計られており、八尾市域の生駒山西麓部においても北から心合寺(飛鳥時代後期～鎌倉時代)・高麗寺(奈良時代前期～鎌倉)、教興寺(飛鳥時代後期～江戸時代)が建立されている。この時期の集落もこれらの寺域の周辺に存在したと推定されるが、調査例が乏しく明確にでき得たものはない。

平安時代の集落としては、西麓部を南北方向に走る東高野街道に沿った集落構成が推定されるが、平安時代中期を中心とする西の口遺跡(東大阪市)が確認されている程度で不明な点が多い。寺院跡としては神立に玉祖神社の神寺であった薗光寺(平安時代前期～明治)と楽音寺の大光寺(平安時代後期～室町時代)がある。なお、薗光寺については、平安時代末期において源頼朝の祈祷所として守護されており、重要文化財に指定されている文治元年(1185)銘の北条時政の制札が残されている。遺跡周辺部の式内社としては、生駒山地西麓部を中心とした高安郡の玉祖神社(神立)・御祖神社(大窪)・鴨神社(大竹)・佐麻多度神社(山畑)・春日戸社座御子神社(山畑)・都夫久美神社(水越)・天照大神高座神社(垣内)・恩智神社(恩智)、平野部の若江郡内に御野県主神社(上之島)がある。

当該期の荘園としては、当遺跡一帯を含む一帯に「玉櫛荘」が存在していた。「玉櫛荘」は当初、摂関家領であったが、京都宇治の平等院創建とともに平等院に施入されており、平等院の運営に深く関わった荘園と考えられる。遺跡東方の八尾市大竹にある向山瓦窯は平等院・醍醐寺などの寺院に屋瓦を供給したことが知られており、「玉櫛荘」の荘園を介在として「河内系軒瓦」の流通が平安時代後期を中心に展開されていたことが想定される。

続く鎌倉時代の集落は大竹遺跡・水越遺跡・花岡山遺跡・池島・福万寺遺跡で確認されている。中でも、八尾市立上之島小学校建設に先立って行った池島・福万寺遺跡の第１次調査(ＦＫ82－１)では、河内郡と高安郡の郡界を区画する東西道路を挟んで展開する鎌倉時代前半～室町時代初頭(13世紀前半～14世紀前半)の屋敷跡が検出されている。この屋敷跡は、溝で囲繞された区画内に比較的規模の大きい建物を南北に配置している他、園地と思われる遺構の存在や、硯、中国産磁器、鉄製武器等の金属製品が出土しており、土豪ならびに武士化した有力名主階層の居住地であったことが推定される。

なお当遺跡の北側には「十三街道」と通称される古街道が通っている。大阪の玉造から東へ向かい、市東北部の十三峠を経て奈良の平群、龍田方面に至る道である。平安時代の『伊勢物語』では在原業平が河内高安の娘のもとに通った河内越の道として知られ、古くから河内と大和を結ぶ街道であったことが推察される。江戸時代中期に編纂された地誌『河内志』では「河内嶺」、『大和志』では「十三越」あるいは「龍田越」と記されるなど呼称はまちまちだが、大阪府教育委員会が編集した『歴史の道調査報告集』では「十三嶺道」とされている。中世以降も発達した

と思われ、江戸時代には大阪や中河内方面から、亀瀬渓谷を経る大和川沿いの奈良街道ではなく、峠越えの近道として利用された。

また当遺跡に北接する東大阪市域の池島・福万寺地区は、河内郡の条里地割が良好に残存する「池島条里遺構」として周知されている。府の総合的な治水対策の一環とする恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査が(財)大阪府文化財センターにより現在も継続して実施されており、平安時代前期後半(10C前半)を条里制の施行初現年代として近世に至る重層的な耕作面の存在等が明らにされている。

参考文献

・藤井直正、都出比呂志　1967 『原始・古代の枚岡』東大阪市考古学研究会
・米田敏幸、佐藤良二　1982 「八尾市恩智遺跡の石器再考」『旧石器考古学24』旧石器文化談話会
・下村晴文、菅原章太他　1987 『神並遺跡Ⅱ』東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
・梶山彦太郎、市原　実　1986 『大阪平野のおいたち』青木書店
・原田　修　1971 『縄手遺跡１』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報９縄手遺跡調査会
・藤井直正、原田　修、中村友博他　1976 『縄手遺跡２』東大阪市遺跡保護調査会
・1975 『馬場川遺跡Ⅲ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14　東大阪市教育委員会
・大野　薫　1997「生駒西麓域の縄文集落」『河内文化研究論集』柏原市古文化研究会
・滝　斎　1997 「19. 水越遺跡(95－582)の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会
・田代克己他　1980 『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
・樋口　薫　2001 「Ⅳ大竹西遺跡第４次調査(ＯＴＮ99－４)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
・嶋村友子　1987 「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ」『八尾市文化財調査報告14』八尾市教育委員会
・1970 「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高等学校地歴部
・福永信雄　1997 「河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金関恕先生の古希をお祝いする会編　勉誠社
・原田昌則　1999 「Ⅲ郡川遺跡(第２次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1997 「Ⅴ水越遺跡(第２次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』(財)八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸　1997 「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内文化研究論集』柏原市古文化研究会
・福永信雄　1975 「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会
・1970 「北鳥池遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高等学校地歴部
・藤井直正他　1971 「岩滝山遺跡」『埋蔵文化財包蔵地調査概報５』東大阪市教育委員会
・菅原章太　1987 『西の口遺跡第１次発掘調査概要』(財)東大阪市文化財協会
・瀬川芳則　1978 「第２章第３節」『大阪府史　第一巻』大阪府
・原田　修、久貝　健、島田和子　1976 「清原得巌所蔵考古資料図録　第１部高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌第二巻・第二号・　通巻第６号』(財)大阪文化財センター
・吉田野々　1996 「史跡　心合寺山古墳基礎調査報告書」『八尾市文化財調査報告35』八尾市教育委員会
・坪田真一　2002 「教興寺跡　〈第１次調査・第２次調査〉」『(財)八尾市文化財調査研究会事業報告72』(財)八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫　2006 「郡川東塚古墳第１次調査(Ｔ2001ＫＯＨ)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告７　平成17年度』八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会
・1801　秋里籬島　『河内名所図会』
・1992 『中河内郡誌』中河内郡役所編
・安井良三他　1994 『河内愛宕塚古墳の研究』八尾市立歴史民俗資料館
・山本　彰他1981『高安城跡範囲確認調査概要・Ⅰ－八尾市服部川所在－』大阪府教育委員会
・米田敏幸1984 『八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書－高安古墳群の調査他－』 八尾市文化財調査報告10 八尾市教育委員会

・米田敏幸、嶋村友子1986 「３．高安古墳群の調査」『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告12 八尾市教育委員会
・高萩千秋1993 「高安古墳群 芝塚古墳－八尾市神立1081の農業用地道路新設工事に伴う古墳の発掘調査報告」『(財)八尾市文化財調査研究会報告38』(財)八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1995 「高安古墳群 大石古墳」『(財)八尾市文化財調査研究会報告44』(財)八尾市文化財調査研究会
・吉田野乃 1991 「19．高安古墳群(90－381)の調査」『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会
・吉田野乃 1993 「３．高安古墳群－妙見寺境内１・２号墳(91－562)の調査」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』 八尾市文化財調査報告27 八尾市教育委員会
・消 斎 1994 「９．高安古墳群(93－70～73)の調査」『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査 報告29 八尾市教育委員会
・成海佳子 2005「21．高安古墳群・薗光寺第１次調査(Ｔ2004－０Ｎ１)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・成海佳子 2006「17．高安古墳群第２次調査(Ｔ2005－２)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 2006「18．高安古墳群第３次調査(Ｔ2005－３)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・山本 昭 1968 「神立おんぢ山古墳調査概要」八尾市教育委員会
・江谷 寛 1994 「平安京出土の河内産搬入瓦」『古代学研究所研究紀要 第４輯』(財)古代学協会
・米田敏幸 1990 「福万寺遺跡－上之島町３丁目22－１の調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』(財)八尾市文化 財調査研究会
・棚橋利光他 1989 『歴史の道調査報告書第四集 奈良街道』大阪府教育委員会

第３章　調査の概要

第１節　調査方法と経過

調査では工場本体部分(8,500㎡)を南調査区とし、４分割して北から１区～４区と呼称した。南調査区の１区北東部に隣接する煙突部分(500㎡)の北調査区については、５区と呼称した。

南調査地の１区～４区の調査順序は、環境事業局車両の迂回路等の関係から工場本体部分の中央部にあたる３区→２区→４区→１区の順に実施することになり、平成２年６月25日から３区の重機掘削を開始した。調査の方法については、市教育委員会の試掘結果に基づき、上層調査・中間層調査・下層調査の３段階に分けての調査が計画されていた。

上層調査では、現地表下2.7～3.0m迄は機械掘削を行い、それより以下は人力掘削より第Ⅴ－１層・第Ⅵ層・第Ⅶ層を対象として弥生時代後期から江戸時代に至る３面(第１面～第３面)の調査を実施した。

中間層調査では、試掘調査で河川堆積層の存在が確認されていたため、調査計画ではそれに該当する約1.3mについては、機械掘削を実施することが決定されていた。最初に調査を実施した３区においては、計画通りに調査を実施したが、２区の中間層の掘削中に堰が検出されたため、以後の調査区では、第Ⅸ層・第Ⅹ－１層・第Ⅹ－２層・第Ⅺ層を対象として弥生時代中期後半から弥生時代後期前半に至る４面(第４－１～４－３面・第５面)の調査を実施した。

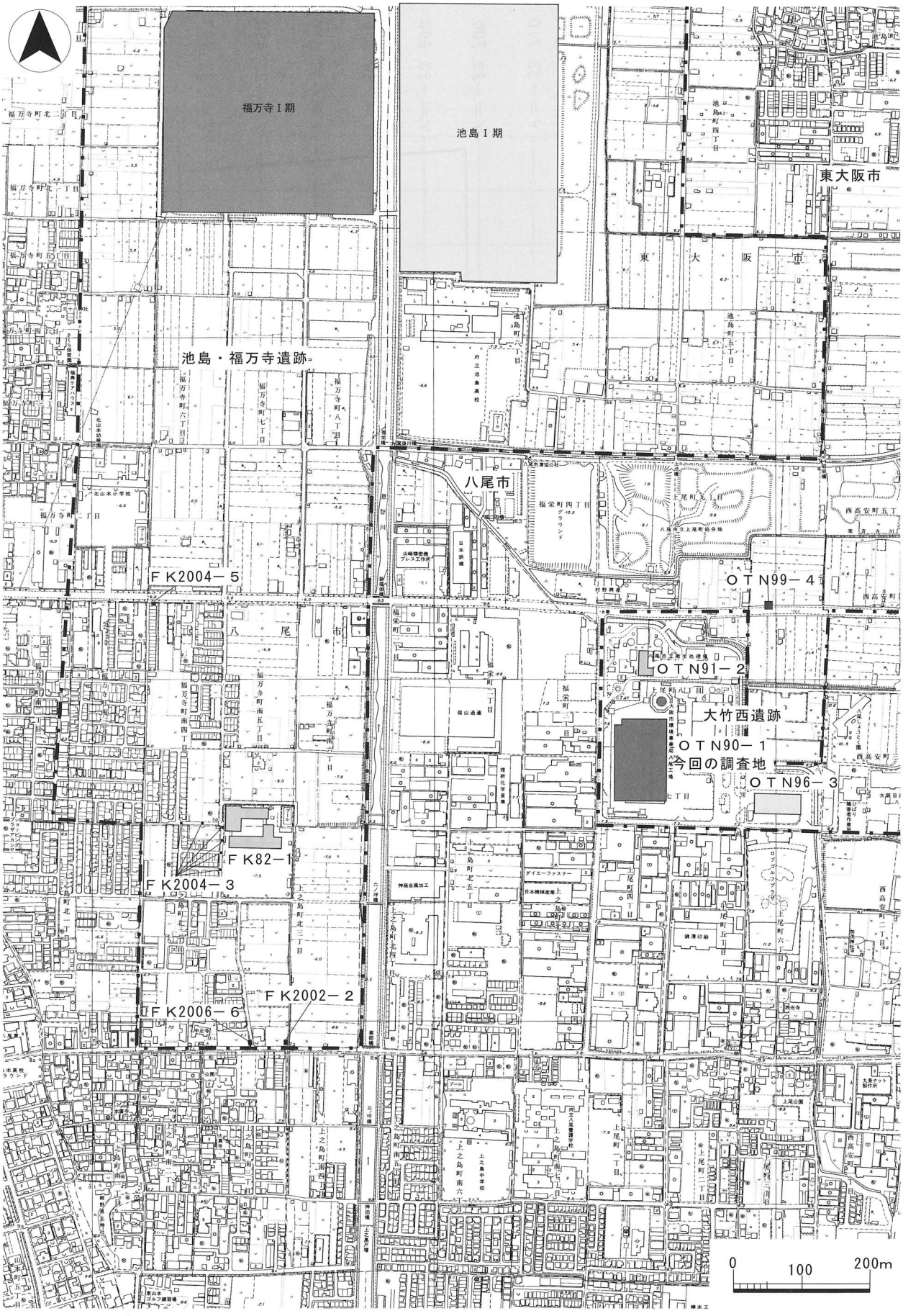
下層調査では、第Ⅻ層・第ⅩⅣ層を対象として弥生時代前期前半から弥生時代中期中葉に至る２面(第６・７面)の調査を実施した。

北調査区の５区は平成４年４月14日から実施した。南調査区と同様の調査を行い、弥生時代前期前半から江戸時代に至る８面(第１～８面)の調査を実施した。

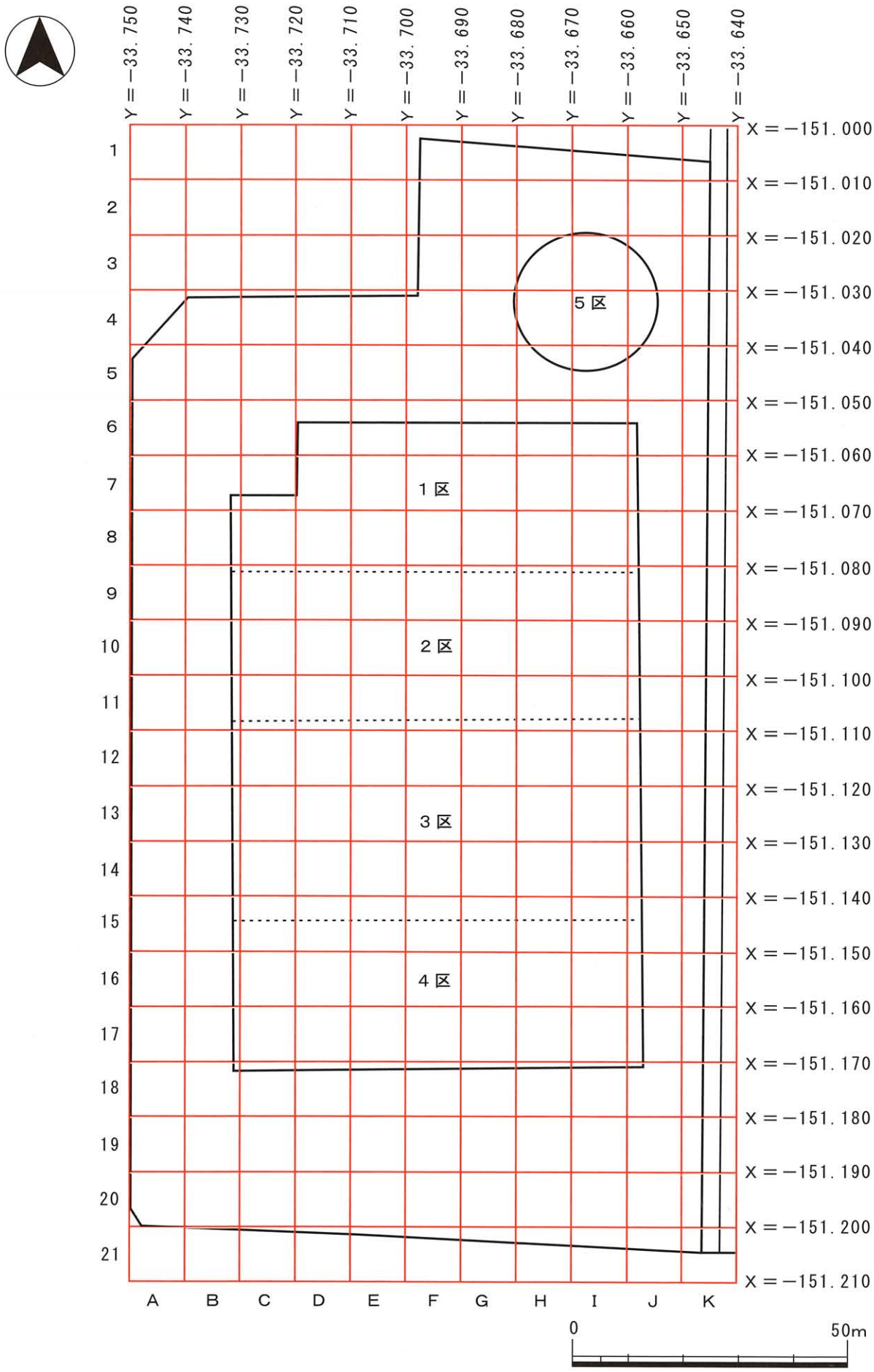
調査区全域の地区割については、国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕(原点－東経136°00′、北緯36°00′・福井県越前岬付近)を基準に使用し、調査区全体を10m単位に区割りした。地区名は北西隅を基点として東西方向がアルファベット(西からＡ～Ｋ)、南北方向が算用数字(北から１～21)とし、１Ａ地区～21Ｋ地区とした。地点の表示については、国土座標値を入れる方法を取った。なお、北西隅の座表値は(Ｘ＝－151.000.000、Ｙ＝－33.750.000)である。調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第１面」とした。遺構番号については、報告書作成段階に各調査面を統一した後、南調査区の１～４区については、１区から順番に通し番号を付けた。北調査区の５区については、各面毎に遺構番号をつけた。遺構番号は、遺構略号の後に面番号を付与し、３～４桁の遺構番号を合わせて表記した。〔凡例**ＳＥ101**〕。その他、古環境の復元を目的として花粉・珪藻分析についての自然科学分析を依頼している。

写真１　第１回現地説明会風景

調査の結果、弥生時代前期前半から江戸時代に亘る遺構・遺物を検出した。出土遺物は縄文時代晩期



第２図　調査地周辺図（Ｓ＝１/8000）



第3図　調査区設定図および地区割図（S＝1/1000）

から江戸時代に比定される土器・石器・石製品・木製品が出土しており、総数はコンテナ箱(40×60×20cm)105箱に及ぶ。

なお、平成2年10月10日には、古墳時代前期前半(布留式古相)の土坑内から国内初例となる瑪瑙製の鏃形石製品等が出土した古墳時代前期の集落跡を対象として、第1回現地説明会を実施し88名の参加を得た。また、平成3年3月16日には、弥生時代中期の水田・水利施設、前期の木棺墓等を対象として第2回の現地説明会を実施した結果、22名の参加を得た。

第2節　南調査区(1～4区)の基本層序(第4図)

調査地の地形は、南東から北西に行くに従い低くなっており、その地形に沿って地層が堆積している。弥生時代中期には自然流路が、南西－北東ないし南東－北西方向に流下しており、それらの流路の形成に伴う侵食により、下位の地層が削られ、砂礫を主体とする流路充填堆積物が堆積している。ここでは、各時期の地層が他より多く見られる調査地北部の1・2区間側溝壁と調査区北壁で確認した流路充填堆積物を除く地層を、帰属時期・人為の有無など、任意の基準により区分し、基本層序としてローマ数字で示した(第Ⅰ層～第XV層)。第4図は、第Ⅳ層より上位を北壁断面に、第Ⅴ層より下位を1・2区間側溝北壁断面に基づいて作成した模式的な地層断面図である。

第Ⅰ層：客土・盛土層。ごみ焼却した灰・不燃廃棄物などを多く含む層である。上面の標高はT.P.＋7.6～7.8m。層厚は1.8～2.3mを測る。

第Ⅱ層：旧焼却場に伴う造成以前の旧水田耕作土。黒灰色粘質土・灰色礫混粘質土である。調査地で検出した近世～近代の井戸は、この層の下面に切込みを確認できる。上面は南側に僅かに低くなっており、南北で約0.2mの高低差がある。上面の標高はT.P.＋5.6～6.1m。層厚は約0.2mを測る。

第Ⅲ層：近世の水田耕作土。砂質土・砂混粘質土を主体とする数層の単層からなる。色調は場所により異なるが、灰色を基調とする。上面の標高はT.P.＋5.1～5.9m。層厚は0.1～0.7mを測る。

第Ⅳ層：室町時代の洪水層。灰色を呈する1～5㎜の砂礫を主体とする。西側では厚く、青灰色シルト～粘土の薄層を数層挟む。東側では薄く、3区東部と4区南部では、粘質シルトが堆積する。砂礫層には、古墳～室町時代の遺物を少量含んでいる。上面の標高はT.P.＋5.1～5.6m。層厚は0.05～0.8mを測る。場所により、第Ⅳ層の上面に島畑と見られる高まりが見られる。

第Ⅴ層：鎌倉時代～室町時代の水田耕作土。この耕作土は大きく3層に分けられる。室町時代の水田耕作土である第Ⅴ－1層は青灰色～暗青灰色を呈する砂礫混粘土、同じく第Ⅴ－2層は青灰色粘土である。第Ⅴ－3層は暗青灰色粘土で、鎌倉時代以前の遺物を含む。上面は西側に低くなっており、調査地の東西で約0.5mの高低差がある。第Ⅴ－1層上面は第1面で、水田を区画した畦畔が盛られ、耕作に伴うヒト・偶蹄類(牛)の足跡が無数に検出された。第2面で検出された南北方向・東西方向に伸びる耕作溝の一部は、第Ⅴ－3層を埋土とする。上面の標高はT.P.＋4.6～5.2m。層厚は0.2～0.5mを測る。

第Ⅵ層：弥生時代後期末～奈良時代の遺物を含む層。灰色・黄褐色を基調とする礫混砂質土であ

る。１区・２区北部で見られ、２区南部以南では殆ど見られない。第３面で検出された落込みは第Ⅵ層を埋土とするもの(第Ⅵ層下面遺構)が多い。上面の標高はT.P.＋4.4～4.7m。層厚は0.1～0.15mを測る。上面は第２面である(第１区・第２区北部。第３区・第４区では第Ⅵ層が見られないため、第２面・第３面を第Ⅶ層上面で検出した)。

第Ⅶ層：弥生時代後期。灰色を基調とする礫混粘質土である。上面の標高はT.P.＋4.3～4.6m。層厚は0.1m前後を測る。上面は第３面である。

第Ⅷ層：弥生時代後期。灰色を基調とする砂質土～粘質土である。調査地の北東端にのみ見られる。上面の標高はT.P.＋4.3～4.5m。層厚は0.1～0.35mを測る。

第Ⅸ層：弥生時代後期の洪水層。灰色を基調とする粗砂～細砂・砂質土～粘質シルトである。第３区南東部・第４区では見られない。粗砂～細砂層からは弥生土器(第Ⅴ様式)が出土している。上面の標高はT.P.＋4.0～4.3m。層厚は0.1～0.4mを測る。上面は第４－１面である。

第Ⅹ層：弥生時代後期の水田耕作土。２層に分けられ、上層の第Ⅹ－１層は青灰色を基調とする粘土で、下層の第Ⅹ－２層はシルト質である。上面の標高はT.P.＋3.9～4.4m。層厚は0.3～0.6mを測る。第Ⅹ－１層上面は第４－２面で、第Ⅹ－２層上面は第４－３面である。

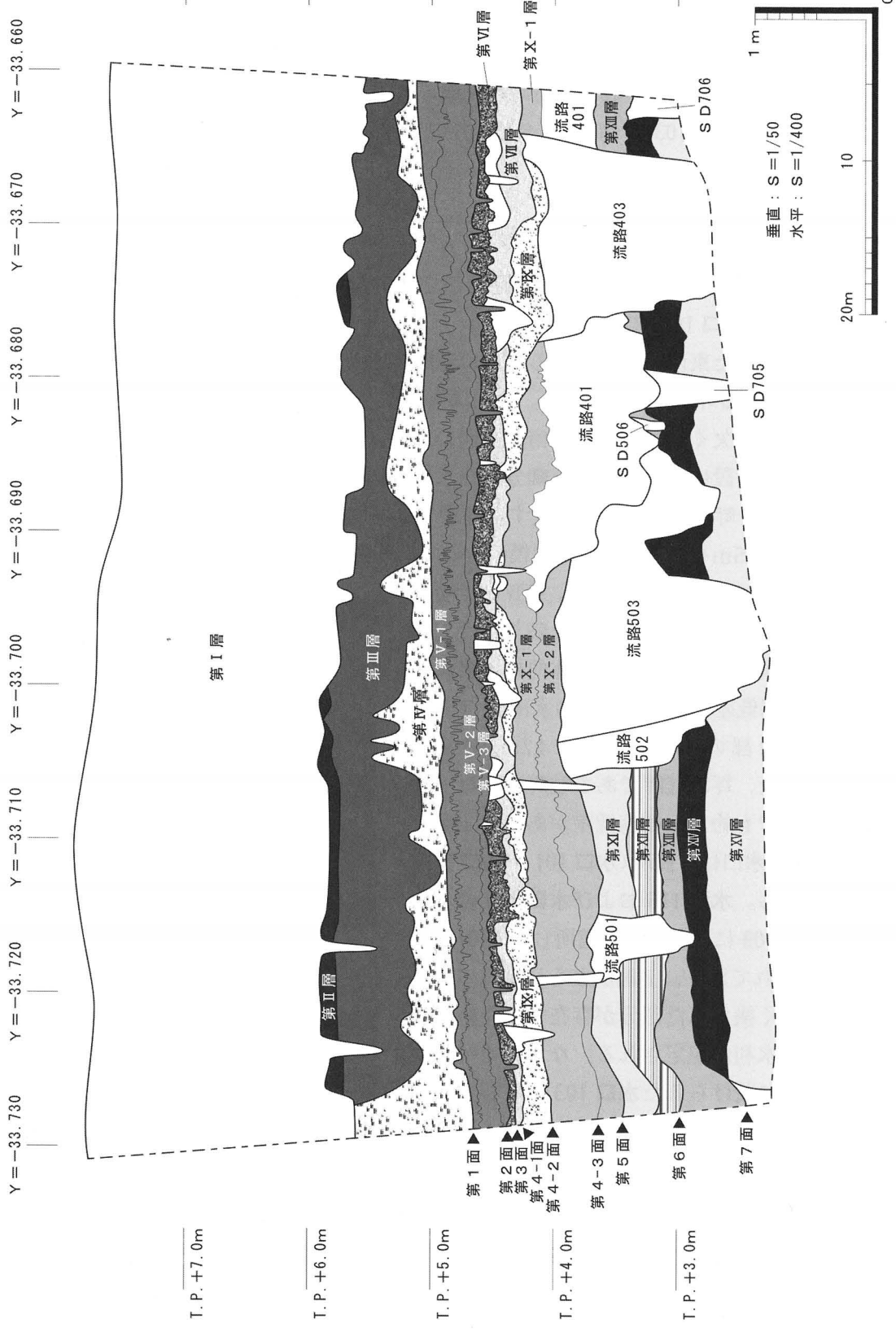
第Ⅺ層：弥生時代中期後葉の水田耕作土。灰色微砂混粘土～微砂混粘質土の単層ないし２層からなる。上層・下層の２層に分かれる部分では、下層の方が砂の混じりが少ない。上面の標高はT.P.＋3.4～4.1m。層厚は0.2～0.5mを測る。上面は第５面である。

第Ⅻ層：弥生時代中期中葉ないし後葉の自然堆積層。灰色を基調とする微砂～粘質土の互層である。上面の標高はT.P.＋3.1～3.8m。層厚は0.2～0.4mを測る。

第ⅩⅢ層：弥生時代中期中葉までの水田耕作土。大きく２層に分けられ、上層の第ⅩⅢ－１層は灰色粘土の単層ないし２層からなり、下層の第ⅩⅢ－２層は黒褐色砂礫混粘質土(所により、礫混砂質土)または黒色～灰色を呈する粘質シルト～粘土(所により、砂礫混じり)の単層ないし２層からなる。第ⅩⅢ－２層からは弥生土器(第Ⅰ様式・第Ⅲ様式)の破片が少量と箸状の木製品が出土した。上面の標高はT.P.＋2.9～3.5m。層厚は0.1～0.35m。第ⅩⅢ－２層上面は第６面の水田面である。

第ⅩⅣ層：第ⅩⅤ層の土壌化層。黒灰色・黒色を呈する微砂質土～粘質シルト・砂礫混粘質土である。下位層の影響で、場所により色調・土質が異なる。主に調査地東部で弥生土器(第Ⅰ様式)・石包丁の破片、石器剥片が出土した。出土した土器の中には残存率の高いものや完形に近いものもあることから、出土遺物の中には第ⅩⅣ層上面遺構の埋土に帰属するものが含まれる可能性がある。上面の標高はT.P.＋2.8m～3.3m。層厚は0.2m前後を測る。上面は第６面で検出した大畦畔の構築面でもある。所により、第ⅩⅢ－１層との間に粗砂を主体とする薄層を挟む。上面ないし下面は第７面である。

第ⅩⅤ層：暗オリーブ灰色・オリーブ灰色を呈する微砂質土～粘質シルト・砂礫である。上部は第ⅩⅣ層の影響で漸移的に黒色を呈する。調査地東部では微高地状に盛り上がった砂礫層が南北方向に伸びている。この砂礫層は自然河川が埋没したものである。上面の標高はT.P.＋2.6m～3.2m。層厚は0.4m以上を測る。



第4図　1～4区地層断面図

第３節　南調査区（１～４区）の検出遺構と出土遺物

１）各調査面の概要

・**第１面**〔室町時代～江戸時代〕（第５・６図、図版二）

第１面は洪水砂層である第Ⅳ層を取り除いた第Ⅴ層上面（T.P.＋4.7～5.2m）で検出した。検出した遺構には、条里区画に規制された室町時代初頭の水田遺構（**水田 101** ～**水田 124**、**畦畔 101** ～**畦畔 122**、**水口 101** ～**水口 103**）、溝１条（**ＳＤ 101**）と上部の第Ⅲ層上面から切り込む近世の農耕用井戸８基（**ＳＥ 101** ～**ＳＥ 108**）がある。

水田（**水田**）

水田面は24筆（**水田 101** ～**水田 124**）で、区画している畦畔は22条（**畦畔 101** ～**畦畔 122**）、水口が３箇所（**水口 101** ～**水口 103**）である。

３区北側で検出した東西方向に伸びる幅広の**畦畔 109** が、河内郡条里１条の「矢（やくさ）」の十四と十五を区画する坪境畦畔にあたる。水田は南北に主軸を持つ長地型を基準としているが、３・４区では一部畦畔を欠く部分がある。南北方向の水田区画の東西幅は10～12mで、それに取り付く東西方向の畦畔を設けて長地型内を細分した水田区画が一部認められる以外は、東西に区画する畦畔は少ない。畦畔は坪境畦畔を構成する**畦畔 109** がやや規模が大きく基底幅0.8～1.2m、上幅0.3～1.0m、高さ0.15mを測るほかは小規模のもので、基底幅0.3～1.2m、上幅0.1～1.0m、高さ0.04～0.12mを測る。畦畔の構築に際しは、第Ⅳ－１層とした青灰色礫砂混粘土～青灰色粘土を盛り上げて構築されている。水田面の標高は、全体的には東部と西部で約30cmの高低差があり、東部の水田面（T.P.＋5.0m）が高く、西部の水田面（T.P.＋4.7m）が低くなっている。また、坪境畦畔である**畦畔 109** を境にして南部と北部でも約10cmの高低差があり、北側が低くなっている。水口は３箇所（**水口 101** ～**水口 103**）で検出されている。**水田 116** および**水田 119** の北側を区画する**畦畔 109** に、水口が２箇所（**水口 101**・**水口 102**）が設けられており、２箇所ともに水口の北側に水流により深く抉られた部分が存在するため、南から北への灌漑水利が想定される。なお、４区で検出した**畦畔 114** に設けられた**水口 103** の水利方向は西から東が想定される。水田を構成する作土層は砂礫混粘土と青灰色粘土の２つに分れている。水田面の上面では、人や牛などの足跡が多数残っていた。水田面上を覆っている第Ⅴ層からは土師器や瓦器の小片がごく少量混入していた。水田面上面に堆積している第Ⅴ層の洪水砂層については、調査地点の西方約500m地点で昭和57年度に実施された福万寺遺

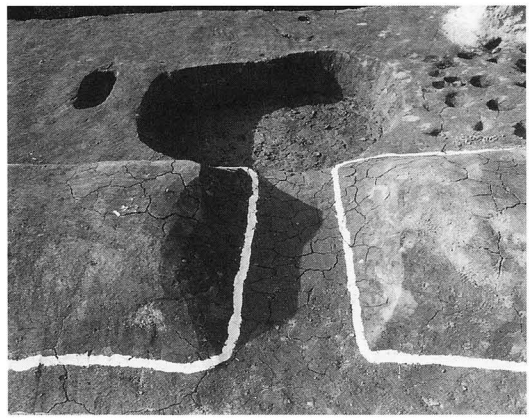


写真２　３区　水口 101 検出状況（南から）

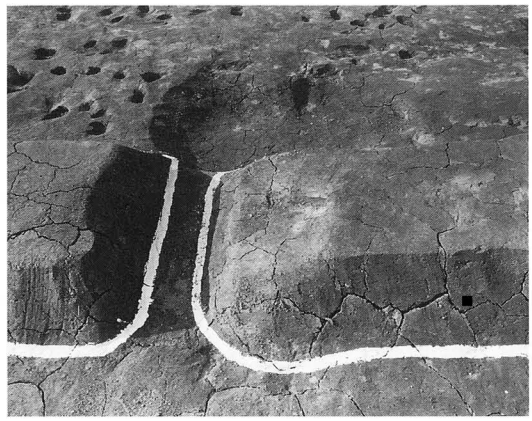
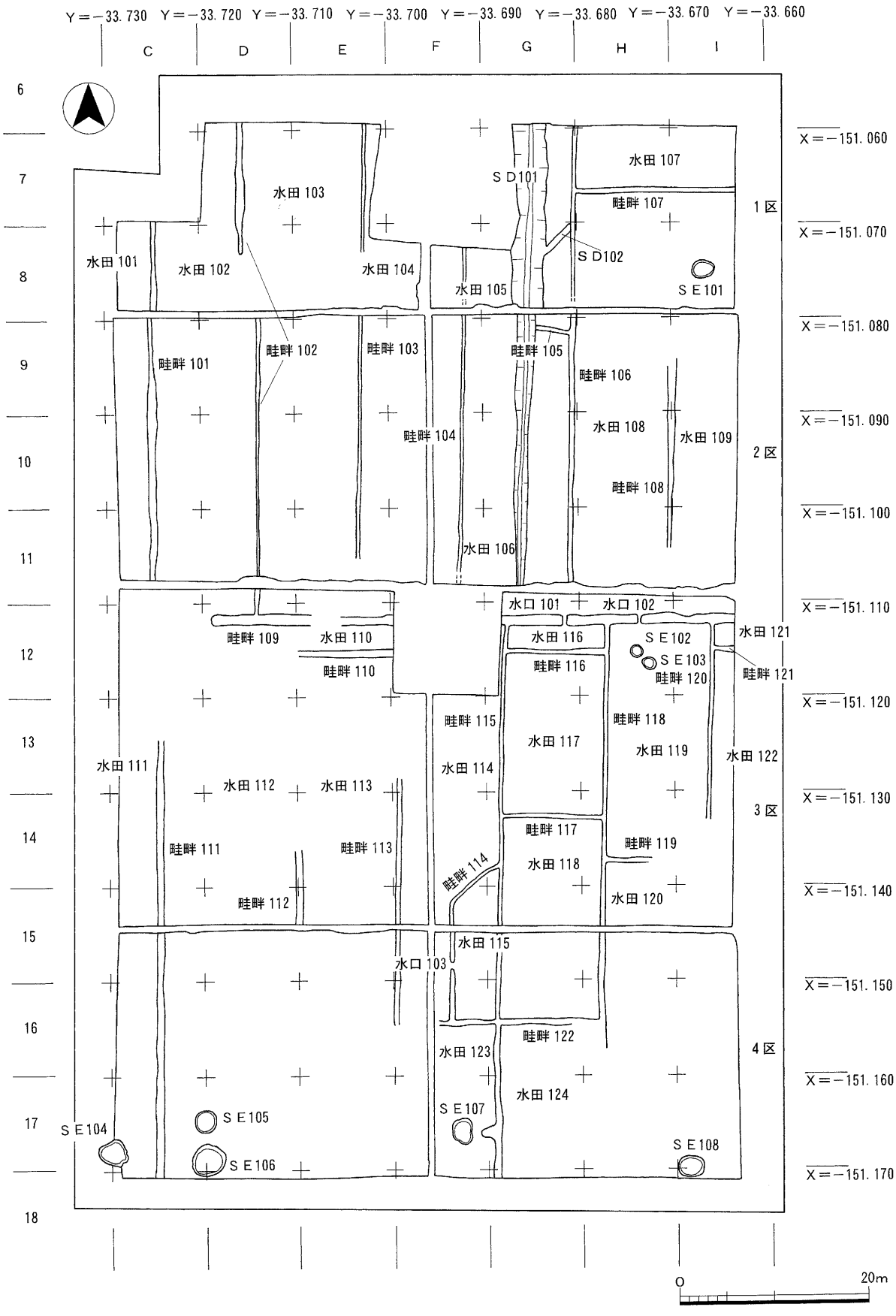
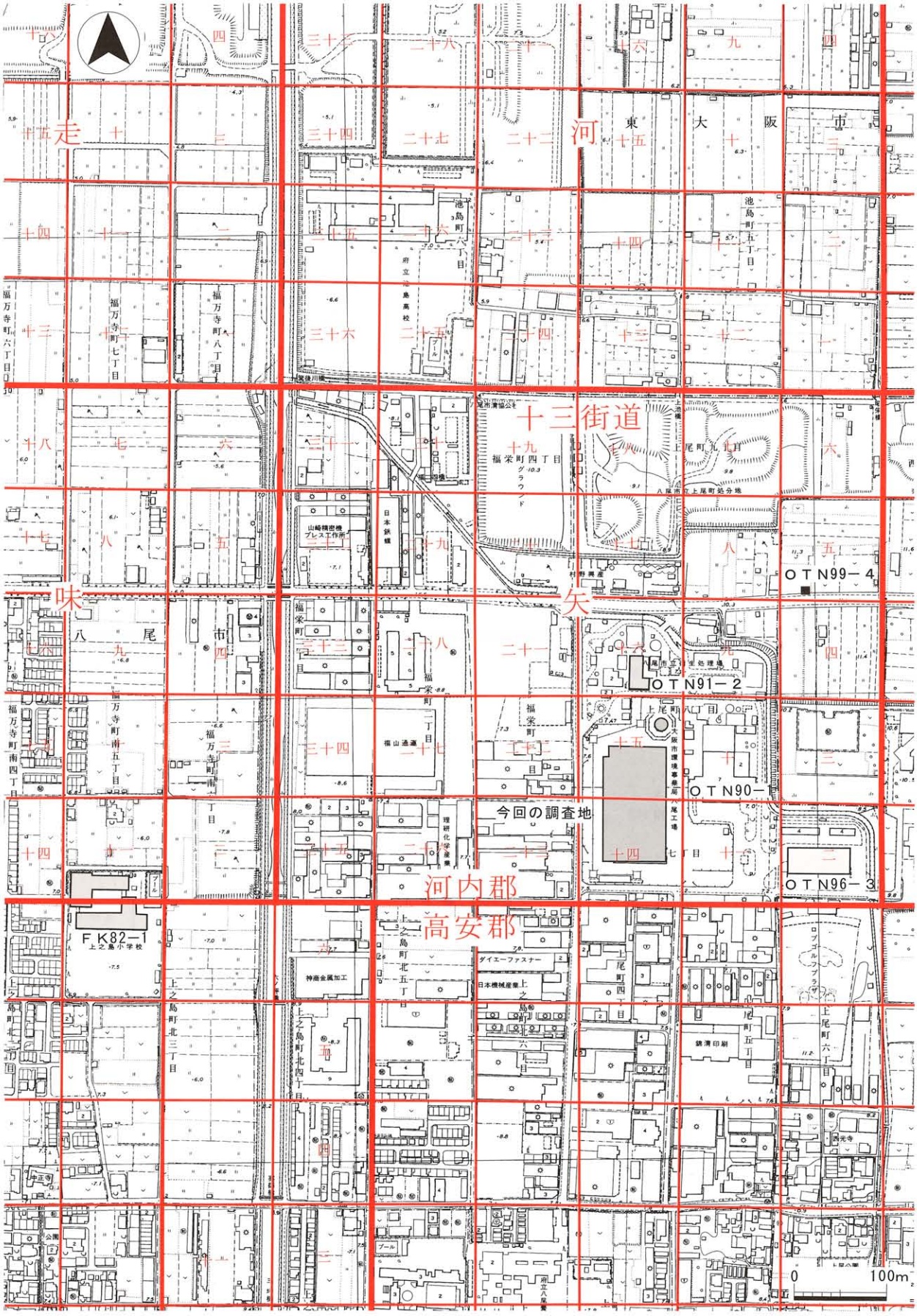


写真３　３区　水口 102 検出状況（南から）



第5図　1～4区第1面検出遺構平面図



第６図　調査区周辺の条里区画地図（Ｓ＝１/6000）

第1表　第1面　水田一覧表(単位m)

遺構番号	地　区	形　状	規模(東西×南北)	田積(㎡) ()検出値	標高(T.P.+)	備　考
水田101	7～12C	南北	35.0×41.0	(143.5)	4.60～4.75	
水田102	7～12CD	南北	9.00×52.0	(468.0)	4.61～4.81	
水田103	7～12DE	南北	13.0×52.0	(676.0)	4.73～4.83	
水田104	8～12EF	南北	5.50×39.0	(214.5)	4.84～4.94	
水田105	8FG	南北	5.00×6.50	(32.5)	4.93～4.99	
水田106	9～11FG	南北	5.50×28.5	(156.75)	4.78～4.96	
水田107	7HI	東西	16.8×6.50	(109.2)	4.19～5.03	
水田108	9～11H	南北	9.50×28.5	270.75	4.89～5.03	
水田109	9～11H	南北	6.50×29.0	188.5	4.82～5.02	
水田110	12C～F	東西	29.5×2.90	85.55	4.50～4.87	
水田111	12～15C	南北	4.00×31.8	(127.2)	4.50～4.68	
水田112	12～15C～D	南北	14.5×29.0	(420.5)	4.66～4.86	
水田113	12～15E	南北	10.0×28.0	(280.0)	4.84～4.91	
水田114	12～15F～G	南北	6.20×24.2	150.04	4.95～5.01	
水田115	15～16F	南北	4.50×9.50	42.75	4.91～5.02	
水田116	12GH	東西	10.2×2.50	25.5	4.95～4.99	
水田117	12～14GH	南北	10.5×17.0	178.5	4.93～5.06	
水田118	14～16GH	南北	10.6×21.0	222.6	4.97～5.05	
水田119	12～14HI	南北	10.6×25.0	26.5	4.96～5.04	
水田120	14～17HI	南北	13.4×33.0	444.2	4.98～5.21	
水田121	12I	南北	2.20×2.50	5.50	4.99～5.01	
水田122	12～14I	南北	2.20×21.9	(48.18)	4.95～5.03	
水田123	16～17FG	南北	6.40×15.9	(101.76)	4.96～5.03	
水田124	16～17GH	南北	10.6×16.0	(169.6)	4.98～5.16	

第2表　第1面　畦畔一覧表(単位m)

遺構番号	地　区	検出長	上　幅	基底幅	高さ	備考
畦畔101	7～11C	38.0	0.2～1.0	0.4～1.2	0.06	
畦畔102	7～12D	52.7	0.1～0.6	0.3～1.0	0.06	
畦畔103	9～11E	26.0	0.1～0.6	0.3～0.5	0.06	
畦畔104	8～11F	34.5	0.1～0.3	0.3～0.6	0.08	
畦畔105	9G	4.00	0.3～0.5	0.4～0.6	0.08	
畦畔106	7～11GH	48.5	0.15～0.6	0.4～0.8	0.07	
畦畔107	7HI	16.2	0.2～0.3	0.5～0.7	0.08	
畦畔108	9～11I	19.2	0.2～0.8	0.4～0.9	0.12	
畦畔109	12C～I	56.0	0.3～1.0	0.8～1.2	0.15	坪境畦畔　水口101・102
畦畔110	12E	9.60	0.2～0.7	0.6～0.9	0.07	
畦畔111	13～17C	45.8	0.3～1.0	0.5～1.0	0.04	
畦畔112	14～15D	7.80	0.3～0.6	0.7～0.9	0.09	
畦畔113	13～16F	27.4	0.1～0.5	0.45～0.7	0.06	
畦畔114	14～15F～G	8.80	0.2～0.3	0.4～0.5	0.04	水口103
畦畔115	12～17G	57.5	0.1～0.5	0.3～0.7	0.07	
畦畔116	12GH	10.7	0.2～0.4	0.5～0.8	0.08	
畦畔117	14GH	10.6	0.2～0.3	0.4～0.5	0.07	

遺構番号	地　区	検出長	上　幅	基底幅	高さ	備考
畦畔118	12～16H	44.8	0.1～0.3	0.5～0.6	0.10	
畦畔119	14H	5.10	0.3～0.4	0.5～0.6	0.06	
畦畔120	12～14I	20.9	0.1～0.3	0.3～0.6	0.08	
畦畔121	12I	2.20	0.2～0.3	0.4～0.5	0.05	
畦畔122	16FG	17.2	0.15～0.5	0.5～0.8	0.06	

跡１次調査で検出された砂層に対応するもので、室町時代初頭(14世紀前半)のものと考えられている。なお水田遺構に関する数値等の詳細については第１・２表に示した。

溝(ＳＤ)

ＳＤ101

１・２区の７～11Ｇ地区で検出した。南北方向に直線的に伸びるもので、検出長48.8m、幅0.5～3.4mを測る。深さは0.1～0.21mで北に行くに従って深度を増している。埋土は淡緑灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

井戸(ＳＥ)

８基(**ＳＥ101～ＳＥ108**)を検出した。第Ⅲ層上面(T.P.＋5.5～5.7m)から切り込む近世の農耕用井戸であるため、全て上部の約50cm以上が削平を受けていた他、最下部に至るまで調査が行われていないため、全容を把握したものは少ない。検出位置は、１区東部の８Ｉ地区で１基(**ＳＥ101**)、３区東部の12H地区で２基(**ＳＥ102・ＳＥ103**)、４区南部の17ＢＣ地区・17ＣＤ地区・17Ｆ地区・17・18Ｉ地区で５基(**ＳＥ104～ＳＥ108**)である。以下、井戸側の形態から近世農耕井戸を区別された河内一浩氏分類(河内1992)に従って記述する。**ＳＥ104・ＳＥ107**がⅠ類に分類される最下段から木組＋木組桶＋井戸瓦を持つもので、**ＳＥ107**の最下段の木組については、四天柱に縦板横桟を用いる通有のものではなく、松の丸太材を井型に積み重ねた構造を持つ類例の少ないものである。**ＳＥ105**はⅢ類に分類される最下段から木組＋井戸瓦を持つものである。**ＳＥ103**はⅣb類に分類されるもので、最下段から木組桶＋竹で編んだ籠＋井戸瓦を持つ井戸である。**ＳＥ101・ＳＥ102・ＳＥ106・ＳＥ108**がⅤ類に分類される素掘り井戸である。構築時期は江戸時代中期以降が考えられる。

写真４　４区　ＳＥ104検出状況(東から)

写真５　４区　ＳＥ107検出状況(東から)

・**第２面**〔鎌倉時代～室町時代初頭〕(第７図、図版三～六)

第Ⅵ層上面(T.P.＋4.3～4.6m)で検出した。鎌倉時代～室町時代初頭の生産域に関連した遺構が中心である。ただ、第２面調査時点においては第２面を浮かし掘りし、第３面とした第Ⅶ層上面(T.P.＋4.3～4.6m)においても同時に遺構検出を行ったため、帰属時期が不明瞭な遺構が含まれている。検出した遺構には、土坑22基(**ＳＫ 201 ～ＳＫ 222**)、溝70条(**ＳＤ 201 ～ＳＤ 270**)、小穴16個(**ＳＰ 201 ～ＳＰ 216**)がある。

土坑(ＳＫ)

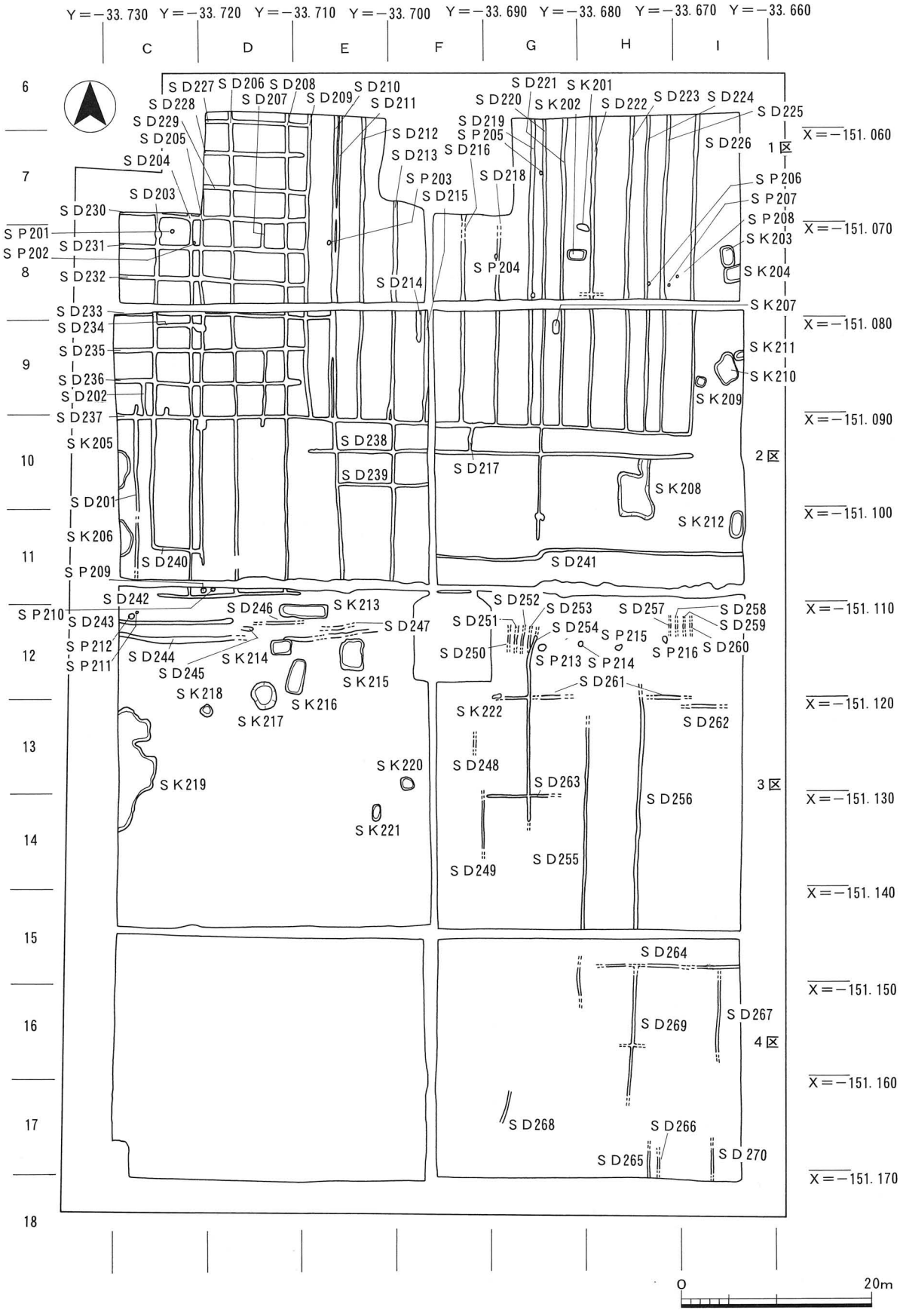
ＳＫ 201 ～ＳＫ 222

４区を除く調査区で検出した。水田に伴う遺構と推定されるもので、一部を除き、基本的には耕作に関連した小溝群に近接した部分に集中して構築されている。平面の形状では、方形・隅丸方形・楕円形・不整円形がある。上面の法量は幅0.8～13.0mを測り、掘方の上面形状が方形および隅丸方形を呈するものが規模的には大きい。深さは0.1～0.34mで、上面規模に比して、比較的浅く掘られたものが大半を占める。遺物は出土していない。埋土および法量等の詳細は第３表に示した。

写真６　３区　土坑検出状況(西から)

第３表　第２面　土坑(ＳＫ)一覧表(単位m)

遺構名	地　区	平面形	東西幅	南北幅	深さ	埋土	出土遺物
ＳＫ 201	８Ｇ	楕円形	0.85	0.60	0.03	暗灰色微砂混粘質土	
ＳＫ 202	８ＧＨ	〃	1.80	0.90	0.22	〃	
ＳＫ 203	８Ｉ	隅丸方形	1.10	2.20	0.11	〃	
ＳＫ 204	〃	不明	1.20	1.50	0.14	〃	
ＳＫ 205	10Ｃ	〃	1.20	4.00	0.13	暗茶灰色砂礫混粘質土	
ＳＫ 206	11Ｃ	〃	1.50	3.80	0.34	暗青灰色微砂混粘土	
ＳＫ 207	９Ｇ	隅丸方形	0.80	1.60	0.27	〃	
ＳＫ 208	10～11Ｈ	方形	3.90	6.00	0.34	〃	
ＳＫ 209	９Ｉ	〃	1.00	1.10	0.06	〃	
ＳＫ 210	〃	〃	2.60	3.40	0.04	〃	
ＳＫ 211	〃	不明	1.10	1.10	0.07	〃	
ＳＫ 212	11Ｉ	隅丸方形	1.30	2.80	0.28	〃	
ＳＫ 213	12ＤＥ	方形	5.00	1.40	0.32	オリーブ黒色シルト混粘土	
ＳＫ 214	12Ｄ	〃	2.00	1.50	0.20	オリーブ黒色細砂混粘土	
ＳＫ 215	12Ｅ	〃	2.36	3.10	0.40	青黒色シルト混粘土	
ＳＫ 216	12ＤＥ	不整円形	1.60	3.60	0.07	〃	
ＳＫ 217	12～13Ｄ	隅丸方形	2.28	2.80	0.18	暗灰色粘土	
ＳＫ 218	13Ｄ	不明	1.30	1.20	0.10	オリーブ黒色細砂混粘土	
ＳＫ 219	13～14Ｃ	〃	1.00	13.0	0.34	暗青灰色細砂混粘土	
ＳＫ 220	13Ｆ	方形	1.34	1.30	0.20	〃	
ＳＫ 221	14Ｅ	隅丸方形	0.84	1.75	0.12	〃	
ＳＫ 222	12Ｇ	不明	1.00	0.60	0.18	〃	



第７図　１～４区第２面検出遺構平面図

溝（ＳＤ）

ＳＤ 201 ～ＳＤ 270

水田耕作に関連した小溝群70条（**ＳＤ 201 ～ＳＤ 270**）を検出した。３・４区の西部で遺構を欠く以外は、全域に広がっている。上部の第１面で検出された水田耕作により畦畔が削平を受けており、１筆耕地を区画する単位は不明瞭である。阡陌に配された溝から推定される条里区画は第１面で検出した条里区画にほぼ対応しており、３区の西部で検出した東西方向に伸びる**ＳＤ 243**が河内郡条里１条の「矢（やくさ）」の十四と十五を区画した坪境畦畔に付随した小溝であった可能性が高い。検出された小溝から推定される水田区画は、南北方向に展開する長地型を基本としているが、１区西部から２区北西部においては、東西方向のものがある。

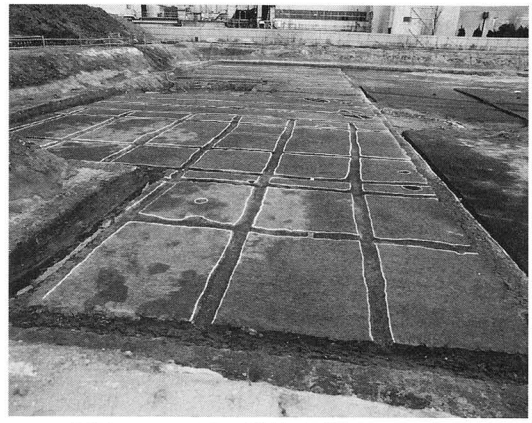


写真７　１区　溝検出状況（西から）

総数70条のうち、東西方向のものが25条、南北方向のものが45条である。規模は検出部で、幅0.2～0.7m、深さ0.02～0.17mを測る。埋土はシルト質粘土～粘土を主体とするものが大半を占める。切り合い関係は不明であるが、若干の時期差はあるものと思われる。小溝は耕作に関連するもので犂溝・畝立て溝等が考えられる。遺物は、溝内から土器類の細片が極少量出土しているが時期や図化できたものはない。法量等の詳細は第４表に示した。

第４表　第２面　溝（ＳＤ）一覧表（単位m）

遺構名	地区	全長（検出長）	幅（最大）	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＤ 201	9～11Ｃ	17.7	0.50	0.05	5G2/1緑黒色粘土	
ＳＤ 202	9Ｃ	3.40	0.60	0.07	〃	
ＳＤ 203	7～11Ｃ	34.5	0.35	0.12	〃	
ＳＤ 204	〃	39.2	0.50	0.14	5BG3/1暗青灰色粘土	
ＳＤ 205	7～11ＣＤ	36.2	0.50	0.11	5G2/1緑黒色粘土	
ＳＤ 206	6～11Ｄ	49.3	0.50	0.09	5BG3/1暗青灰色粘土	
ＳＤ 207	9～10Ｄ	2.00	0.35	0.15	〃	
ＳＤ 208	6～11Ｄ	47.8	0.45	0.14	〃	
ＳＤ 209	6～10Ｅ	31.5	0.50	0.11	〃	
ＳＤ 210	6～11Ｅ	31.0	0.40	0.09	〃	
ＳＤ 211	〃	48.2	0.30	0.07	〃	
ＳＤ 212	6～11Ｅ	31.1	0.50	0.09	〃	
ＳＤ 213	7・8Ｆ～9～11ＥＦ	40.0	0.50	0.13	〃	
ＳＤ 214	8～9Ｆ	3.30	0.50	0.10	〃	
ＳＤ 215	8～10Ｆ	11.2	0.50	0.17	5G2/1緑黒色粘土	
ＳＤ 216	7～10Ｆ	21.4	0.50	0.12	10G3/1暗緑灰色粘土	
ＳＤ 217	10Ｆ	2.70	0.40	0.09	〃	
ＳＤ 218	8～10Ｇ	19.5	0.40	0.12	〃	
ＳＤ 219	6～10Ｇ	31.5	0.50	0.13	〃	

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋　土	出土遺物
S D 220	6～11G	43.4	0.40	0.06	10G3/1暗緑灰色粘土	
S D 221	6～10G	31.5	0.40	0.06	5G2/1緑黒色粘土	
S D 222	6～10H	31.8	0.50	0.12	〃	
S D 223	〃	32.1	0.40	0.09	〃	
S D 224	〃	32.1	0.50	0.14	〃	
S D 225	〃	32.5	0.30	0.09	〃	
S D 226	6～10I	32.5	0.50	0.08	〃	
S D 227	6DE	8.10			5BG3/1暗青灰色粘土	
S D 228	7DE	10.2	0.40	0.09	〃	
S D 229	〃	10.5	0.50	0.11	〃	
S D 230	7CD	10.5	0.50	0.11	〃	
S D 231	8C～E	19.5	0.55	0.10	〃	
S D 232	〃	19.6	0.55	0.09	〃	
S D 233	〃	23.0	0.40	0.13	〃	
S D 234	9CD	5.5	0.40	0.12	〃	
S D 235	9C～E	19.7	0.50	0.13	〃	
S D 236	〃	19.5	0.40	0.07	〃	
S D 237	10C～I	60.0	0.70	0.14	10BG5/1青灰色砂礫混粘土	
S D 238	10E～I	40.8	0.40	0.09	〃	
S D 239	10EF	9.6	0.40	0.03	5B4/1暗青灰色微砂シルト	
S D 240	11C	4.80	0.40	0.11	〃	
S D 241	11F～I	31.8	0.50	0.08	〃	
S D 242	11C～E	15.1	0.30	0.13	暗青灰色粘土	
S D 243	12CD	12.0	0.50	0.07	〃	
S D 244	〃	12.4	0.70	0.07	〃	
S D 245	12D	1.40	0.50	0.09	〃	
S D 246	〃	3.60	0.30	0.08	〃	
S D 247	12E	1.80	0.40	0.04	〃	
S D 248	13F～E	0.6	0.50	0.09	〃	
S D 249	14F	5.0	0.20	0.02	暗青灰色シルト質粘土	
S D 250	12F	1.0	0.30	0.05	暗青灰色粘土	
S D 251	〃	1.10	0.30	0.03	〃	
S D 252	〃	1.10	0.30	0.22	〃	
S D 253	〃	1.30	0.30	0.02	暗青灰色シルト質粘土	
S D 254	12～14G	1.60	0.30	0.02	暗青灰色粘土	
S D 255	13～15GH	19.2	0.30	0.12	〃	
S D 256	13～17H	24.2	0.30	0.10	〃	
S D 257	12H	0.50	0.40	0.11	暗青灰色シルト質粘土	
S D 258	12H	0.50	0.20	0.03	〃	
S D 259	12H	0.60	0.25	0.03	〃	
S D 260	12I	0.60	0.30	0.08	〃	
S D 261	13H	2.8	0.30	0.02	暗青灰色粘土	
S D 262	13I	2.8	0.40	0.08	〃	
S D 263	14FG	6.5	0.30	0.08	暗青灰色シルト質粘土	
S D 264	15H～I	6.60	0.25	0.08	〃	
S D 265	17・18H	2.8	0.20	0.05	〃	

遺構名	地区	全長（検出長）	幅（最大）	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＤ 266	17H	1.00	0.20	0.05	暗青灰色シルト質粘土	
ＳＤ 267	16 I	7.5	0.20	0.02	〃	
ＳＤ 268	17G	3.6	0.30	0.05	〃	
ＳＤ 269	16～17H	12.4	0.30	0.05	〃	
ＳＤ 270	17・18 I	2.7	0.30	0.05	〃	

小穴（ＳＰ）

ＳＰ 201 ～ＳＰ 216

総数で16個を検出した。ＳＰ 201 ～ＳＰ 211 は１・２区の水田面で検出した。ＳＰ 212 ～ＳＰ 216 については、３区北部の坪境周辺に沿って検出されている。平面の形状は、円形・楕円形・不整円形・不定形のものがある。規模は径0.1～0.8m、深さ0.04～0.27mを測る。埋土は礫混砂質土～粘土である。遺物は出土していない。性格としては、３区の坪境付近で検出された小穴については、東西方向に分布する特徴から、坪境に沿って打設された杭に関連するもの、１・２区の水田面で検出されたものについては、水田遺構に関連した遺構と推定される。法量等の詳細は第５表に示した。

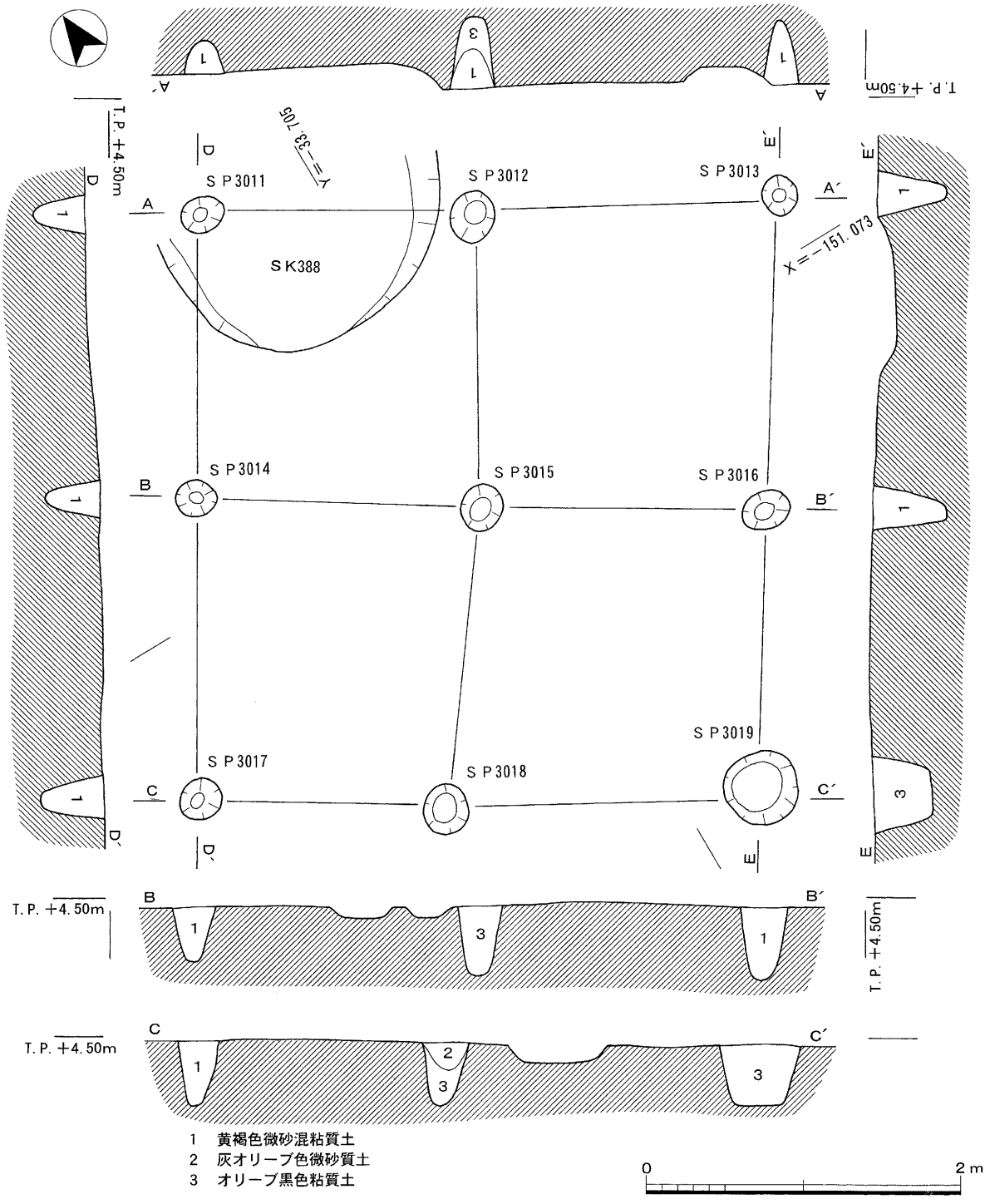
第５表　第２面　小穴（ＳＰ）一覧表（単位m）

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋　　土	出土遺物
ＳＰ 201	8C	円形	0.40	0.35	0.08	暗灰色砂礫混砂質土	
ＳＰ 202	〃	〃	0.30	0.30	0.09	暗青灰色砂礫混粘質土	
ＳＰ 203	8E	〃	0.30	0.30	0.09	暗灰色砂礫混砂質土	
ＳＰ 204	8G	楕円形	0.35	0.20	0.06	〃	
ＳＰ 205	7G	〃	0.50	0.30	0.10	〃	
ＳＰ 206	8H	〃	0.30	0.25	0.06	暗灰色微砂混粘質土	
ＳＰ 207	〃	円形	0.20	0.20	0.06	青灰色粘土	
ＳＰ 208	8 I	楕円形	0.20	0.10	0.04	〃	
ＳＰ 209	11D	円形	0.50	0.40	0.27	暗褐色砂礫混粘質土	
ＳＰ 210	〃	〃	0.30	0.25	0.12	〃	
ＳＰ 211	12C	不整円形	0.30	0.15	0.05	〃	
ＳＰ 212	〃	円形	0.55	0.50	0.10	〃	
ＳＰ 213	12G	楕円形	0.50	0.30	0.04	暗青灰色微砂質土	
ＳＰ 214	〃	〃	0.70	0.50	0.06	〃	
ＳＰ 215	12H	不整円形	0.40	0.35	0.15	〃	
ＳＰ 216	〃	〃	0.80	0.30	0.13	〃	

・**第３面**〔弥生時代後期～奈良時代〕(第８～59図、図版三～二二)

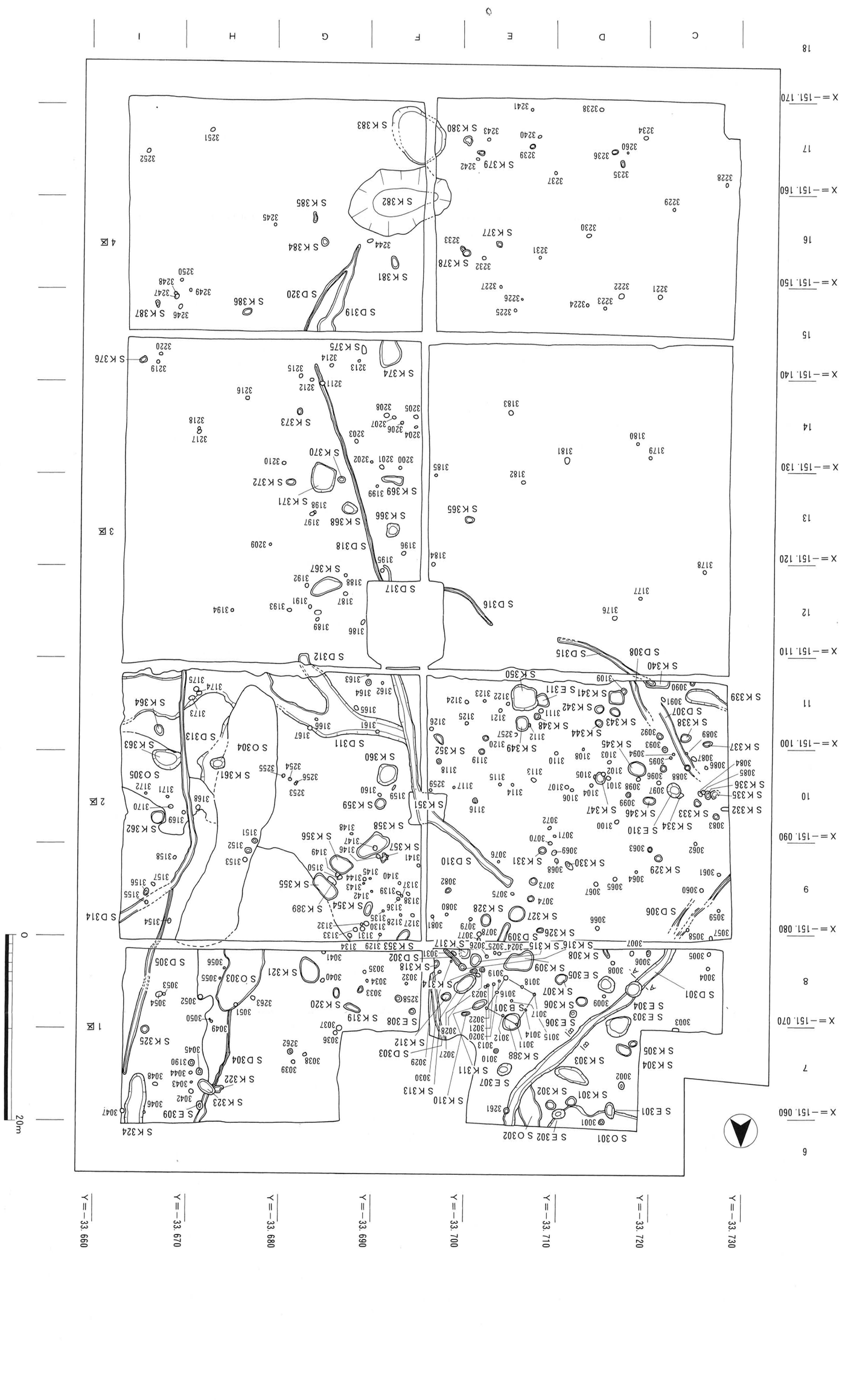
第Ⅶ層上面(T.P.＋4.3～4.5m)で弥生時代後期末、古墳時代前期、飛鳥時代前半、奈良時代前半の４時期にわたる遺構・遺物を検出した。検出した遺構には掘立柱建物１棟(**ＳＢ 301**)、井戸11基(**ＳＥ 301 ～ＳＥ 311**)、土坑89基(**ＳＫ 301 ～ＳＫ 389**)、落ち込み５箇所(**ＳＯ 301 ～Ｓ 0305**)、溝20条(**ＳＤ 301 ～ＳＤ 320**)、小穴263個(**ＳＰ 3001 ～ＳＰ 3263**)がある。

以下、遺構毎に遺物が出土した遺構を中心に記述し、その他は一覧表で明示した。



第８図　ＳＢ 301 平断面図

第９図　第３面検出遺構平面図（Ｓ＝１／４００）



掘立柱建物（ＳＢ）

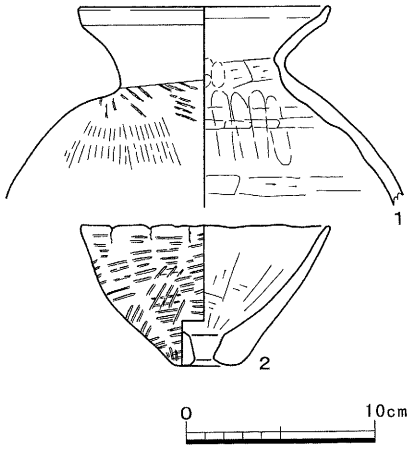
ＳＢ 301（第８図、図版七）

１区西部の８Ｅ区で検出した。９個の柱穴（**ＳＰ 3011 ～ＳＰ 3019**）で構成される掘立柱建物である。２間×２間の総柱建物で、主軸はＮ－35°－Ｅを示す。規模は東西幅3.6～3.7m、南北幅3.75m、床面積は約14㎡を測る。柱間は東西方向が1.55～2.0m（平均1.75m）、南北方向が1.75～2.0m（平均1.86m）を測る。柱穴の形状は円形で、径0.24～0.5m、深さ0.2～0.45mを測る。埋土は１層ないしは２層に分層される。建物を構成する**ＳＰ 3012・3018** からは弥生時代後期の土器片が出土しているが、周辺で検出した井戸・土坑の帰属時期から勘案して庄内式期のものと推定される。

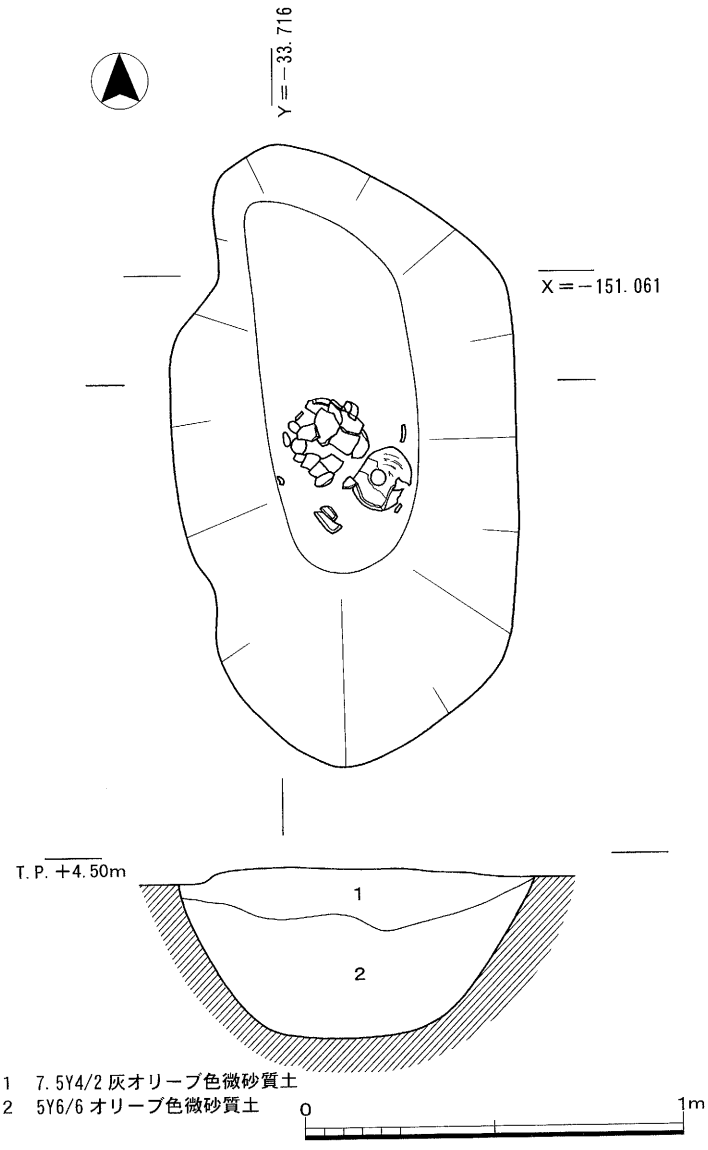
井戸（ＳＥ）

ＳＥ 301（第10・11図、図版七・五二）

１区北西部の７Ｄ地区で検出した。南北方向に長い不整の楕円形を呈する素掘り井戸である。東西径0.9m、南北径1.65m、深さ0.45mを測る。埋土は２層から成る。遺物は弥生時代後期後半に比定される土器が１層を中心に出土している。２点（**１・２**）を図化した。**１**は広口壺で口縁部から体部中位が残存している。大きく外反して開く口縁部を持つもので、端部は斜め上方に摘み上げられ幅広の端面を形成している。胎土は精良。色調は灰白色。**２**は波状口縁を持つ有孔鉢である。約1/2が残存しており、口径13.0cm、器高7.4cm、底部径3.1cmを測る。底部の孔は焼成前に穿たれており、径は上部で1.8cm、下部で0.9cmを測る。体部外面には水平方向のタタキを施す。色調は赤褐色。胎土は粗い。遺構の帰属時期は弥生時代後期後半に比定される。



第10図　ＳＥ 301 出土遺物実測図



第11図　ＳＥ 301 平断面図

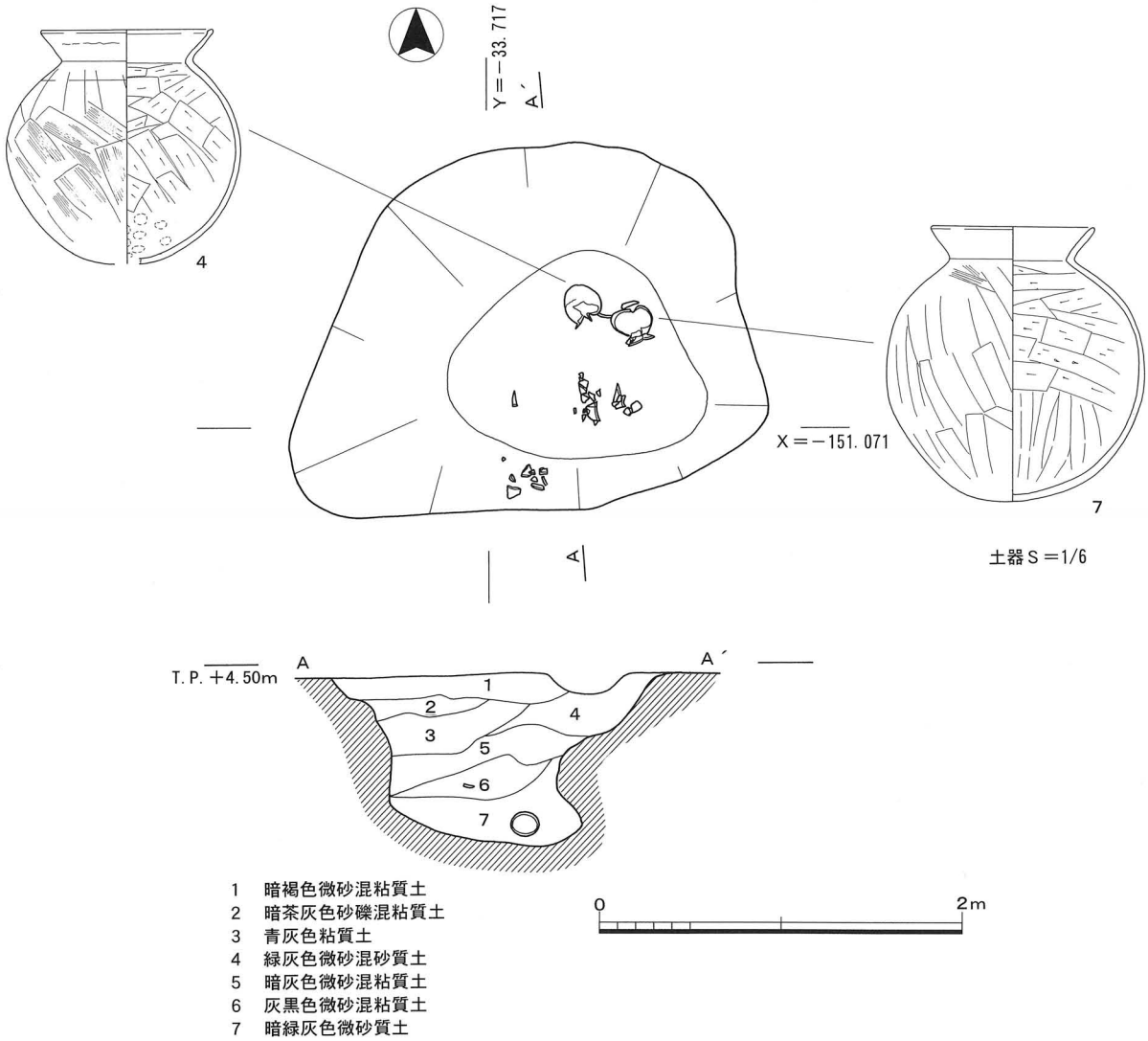
ＳＥ 302(写真８)

１区北西部の７Ｄ・Ｅ地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸である。東西径1.2m、南北径0.9mを測る。掘方の断面形状は逆台形で、深さ0.64mを測る。埋土は断面形状に沿って３層が堆積している。遺物は２層から弥生時代後期後半の弥生土器が少量出土しているが図化し得たものはない。出土した遺物からみて遺構の帰属時期は、弥生時代後期後半が推定される。

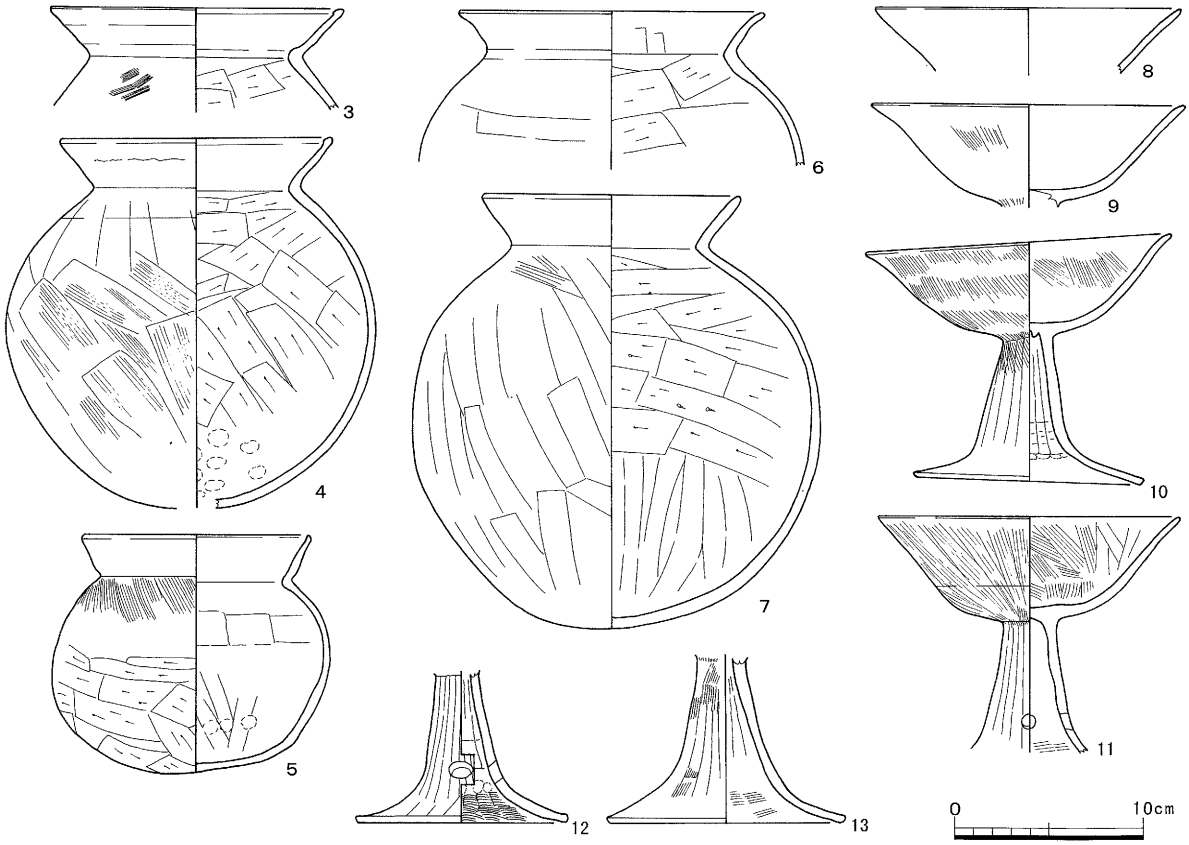
写真８　１区　ＳＥ 302 検出状況(西から)

ＳＥ 303(第12・13図、図版八・五二)

１区北西部の７・８Ｄ地区で検出した。不定形を呈する素掘り井戸である。東西幅2.6m、南北幅2.0m、深さ0.9mを測る。掘方の断面形状は不整逆台形で、東部の最下部付近では一部袋状に広がる部分がある。埋土は７層に分層され、その内の３・６・７層から古墳時代前期後半(布留式新



第12図　ＳＥ 303 平断面図

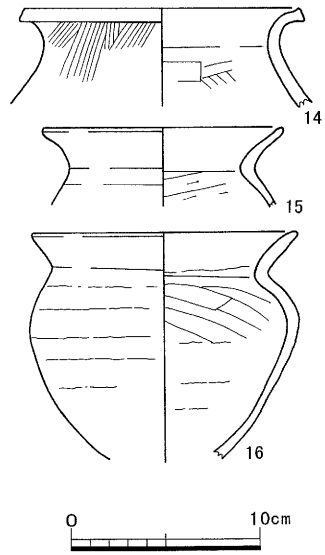


第13図　ＳＥ 303 出土遺物実測図

相)に比定される古式土師器類がコンテナ１箱分出土している。11点(３～13)を図化した。３・４は布留式甕(甕Ｆ$_2$)である。３は口縁部小片。４は約1/2が残存している。体部の器面調整は当該期の布留式甕に通有のハケ調整が施されておらずナデが多用されている。また、器壁が通有のものに比して厚いほか、当該期においては稀な生駒西麓産胎土を使用する等の特徴を持つ。５は小形甕である。扁球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、端部は小さく上方に摘み上げられている。図上で完形に復元されるもので、口径11.8cm、器高12.7cm、体部最大径14.6cmを測る。体部外面は上位が左上がりのハケ、中位以下にヘラケズリが施されている。色調は淡灰褐色。６・７は球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、口縁端部は直口を呈する。甕(甕Ｇ)に分類されるもので、古墳時代前期後半(布留式新相)に成立し、古墳時代中期にかけて盛行する器種の一つである。７が完形品で口径13.4cm、器高23.0cm、体部最大径21.5cmを測る。６・７共に体部外面はナデによる調整が施されている。色調は６が赤褐色。７が褐灰色。７の体部外面の上位以下に煤が付着している。８～13は高杯である。８・９が杯部、10・11が杯部～脚部、12・13が脚部片である。10・11は杯の稜部分が退化し丸みを持つ形態のもので、高杯Ａ$_6$に分類される。共に杯部外面には放射状にハケ調整が行われている。柱状部から裾部へ至る屈曲は、鋭く屈曲する10と緩やかに屈曲する12・13がある。脚部にスカシ孔を持つものは11・12で共に４方に穿たれている。８～13の色調は浅黄色である。遺構の帰属時期は、古墳時代前期後半(布留式新相)の布留Ⅳ期が想定される。

ＳＥ 304(第14・15図、図版八・五二)

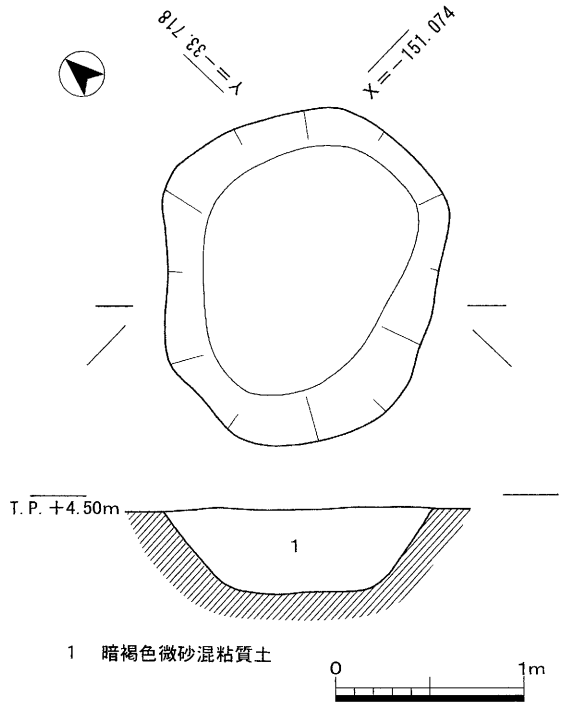
１区北西部の８Ｄ地区で検出した。不整円形を呈する素掘り井戸である。東西径1.7m、南北径1.7m、深さ0.35mを測る。埋土は１層から成る。遺物は古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される古式土師器類が少量出土している。３点(**14**～**16**)を図化した。**14**は甕の小片である。口縁部は外反して開くもので、口縁端部は外傾し幅広の端面を作る。色調は灰白色である。口縁部の形状から東四国系が推定される。**15**は甕片である。体部内面には横位のヘラケズリが施されており、Ｖ様式甕と庄内式甕の折衷様式を呈している。色調は淡赤褐色。**16**はＶ様式系甕である。やや小形の甕で底部を欠く。体部外面は弱いナデによる粗い調整で、随所にクラックが認められた。色調は褐灰色。生駒西麓産。遺構の帰属時期は古墳時代初頭前半(庄内式古相)が推定される。



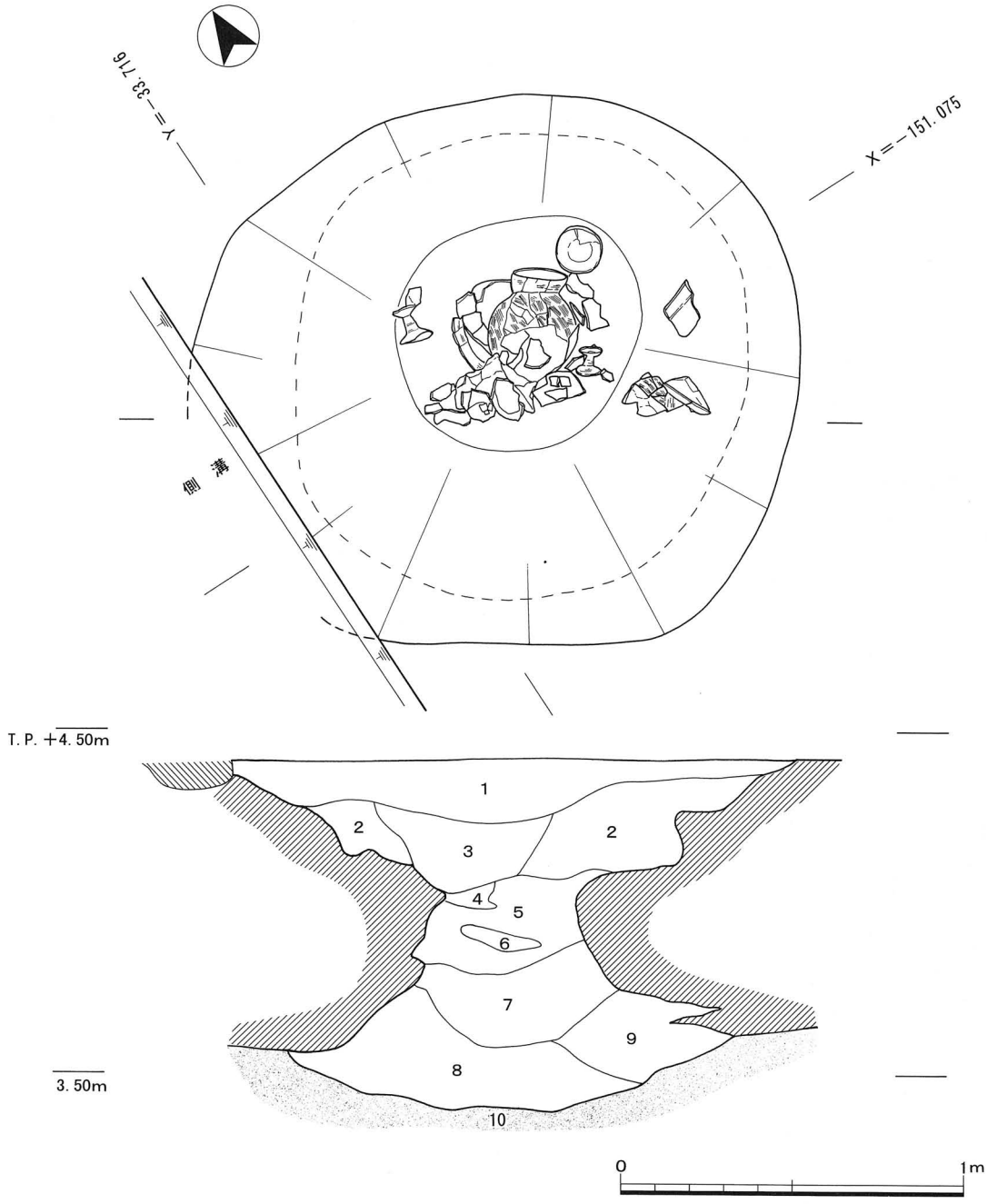
第14図　ＳＥ304出土遺物実測図

ＳＥ 305(第16・17図、図版九・五二・五三)

ＳＥ 304の東約1.2mで検出した。円形を呈する素掘り井戸である。東西径1.8m、南北径1.7m、深さ1.05mを測る。掘方の断面形状は鼓形で、中位の最も幅が狭い部分で径0.7m前後、下位では湧水層である砂層(10層)部分が抉られ袋状を呈する部分で径1.3m前後を測る。埋土は９層に分層が可能で、上層からは小形の布留式甕・紡錘車などの古式土師器、下層では８層から布留式傾向の甕・高杯などの古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器が集中して出土している。13点(**17**～**29**)を図化した。**17**～**23**は甕である。**17**は小形品でほぼ完形である。口径10.0cm、器高12.5cm、体部最大径12.1cmを測る。**18**・**19**は体部外面にハケ調整を多用する布留式影響の庄内式甕(甕Ｄ)に分類される。共に生駒西麓産。**20**～**23**は布留式甕(甕Ｆ$_2$)である。**22**・**23**がほぼ完存している。体部の器面調整は外面がハケ調整を多用しており、上位が横位、中位以下が縦位に施されており、**20**には上位に１条の波状文を施す。内面は屈曲部からやや下部以下にヘラケズリ、体底部に指頭圧痕を残す。**24**は大形鉢(鉢Ｊ)の口縁部片である。復元口径30.3cmを測る。色調は褐灰色。高杯は４点(**25**～**28**)を図化した。杯部口縁部が緩やかに外反して立ち上がる小形の高杯(高杯Ａ$_5$)である。４点ともに精製品で**27**・**28**の外面には横位の密なヘラミガキが行われている。色調は浅黄橙色系。**29**は中央部に径0.7cmを測る円孔を穿つ紡錘車である。全体に丁寧な作りのもので、径4.4cm、厚さ1.1cmを測る。遺構の帰属時期は古墳時代前期前半(布留式古相)の布留Ⅱ期に比定される。

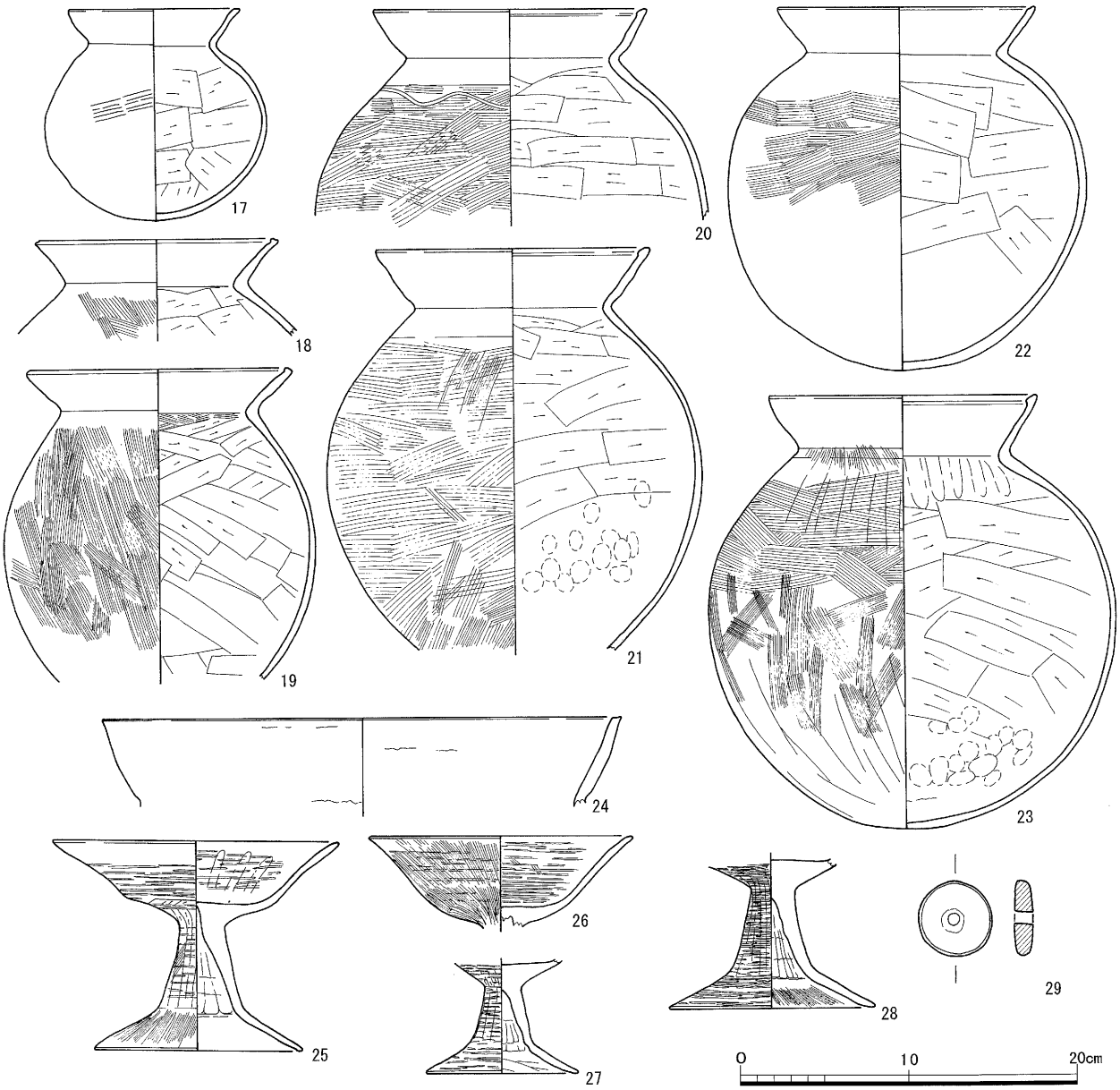


第15図　ＳＥ 304平断面図



1　暗褐色微砂混粘質土
2　暗茶灰色砂礫混粘質土
3　暗灰色砂礫混粘質土
4　青灰色粘質土
5　緑灰色微砂混砂質土
6　暗灰色微砂混粘質土
7　灰黒色微砂混粘質土
8　暗緑灰色微砂質土
9　暗緑灰色細砂質土

第16図　ＳＥ 305 平断面図



第17図　ＳＥ305出土遺物実測図

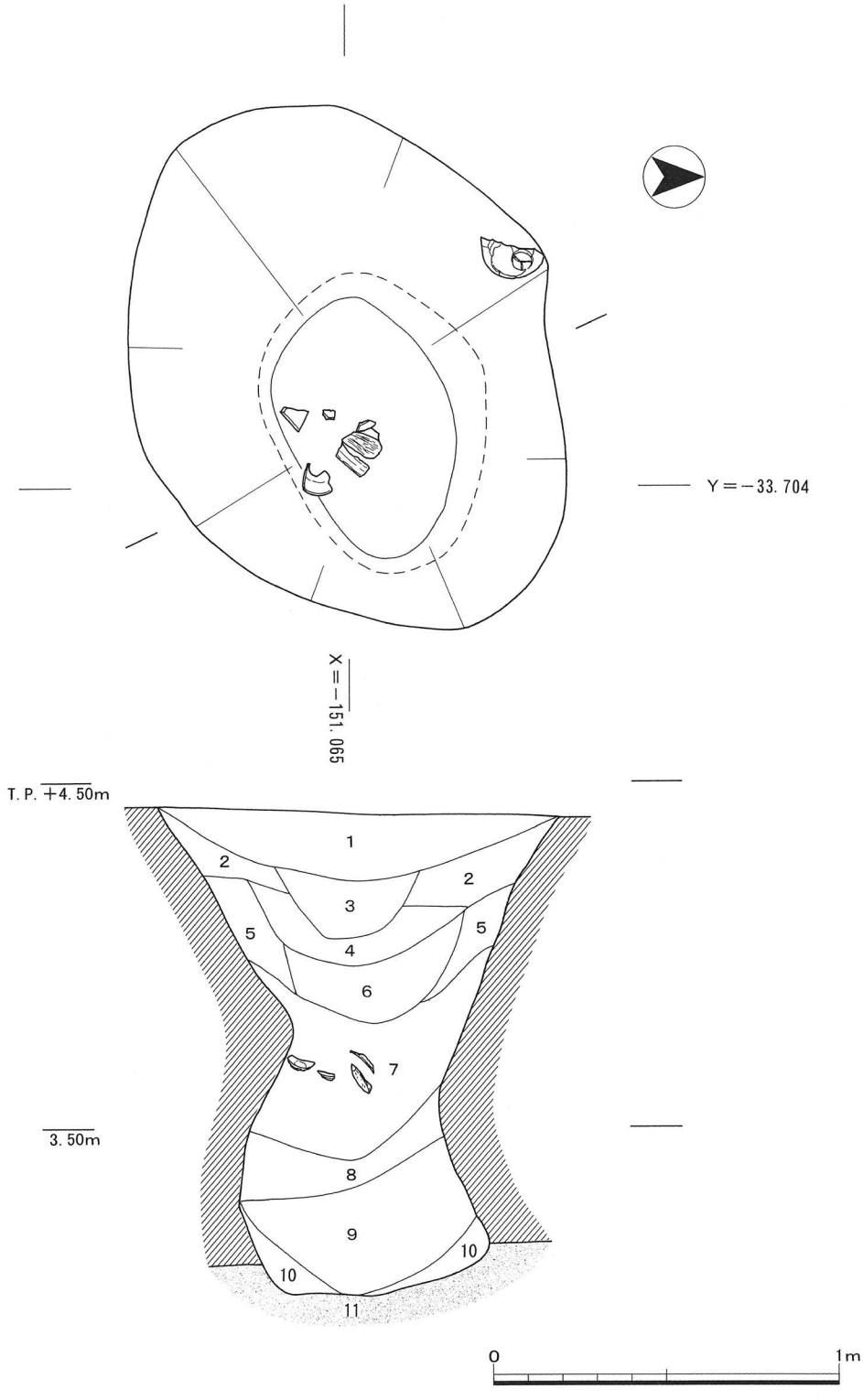
ＳＥ306

１区北西部の８Ｄ地区で検出した。円形を呈する素掘り井戸である。東西径0.69m、南北径0.78m、深さ0.47mを測る。掘方の断面形状は台形である。埋土は２層から成る。遺物は古墳時代初頭(庄内式期)の古式土師器の細片が少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

ＳＥ307(第18・19図、図版九・五三)

１区北西部の７Ｅ地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸である。東西径1.63m、南北径1.28m、深さ1.38mを測る。掘方の断面形状は、上位から中位が逆台形で以下は袋状に広がっており、最下層は湧水層である11層に達している。埋土は掘方の形状に沿って10層が堆積している。遺物は７層から弥生時代後期後半に比定される弥生土器が少量出土している。

Ⅴ様式甕１点(**30**)を図化した。**30**はⅤ様式甕で口縁部から体部中位の細片である。体部外面にやや細筋のタタキ調整を行う。色調は淡灰褐色。非生駒西麓産である。

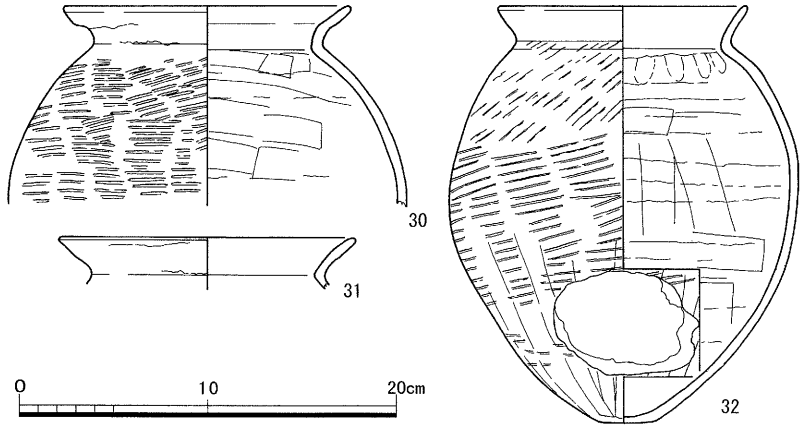


1　暗褐色砂礫混粘質土
2　淡褐色粘質土
3　青灰色粘質土
4　灰青色微砂混粘質土
5　淡灰色粘質土
6　灰色微砂混粘質土
7　灰黒色粘土（炭化物を多量に含む）
8　暗灰色粘土（植物遺体を含む）
9　黒灰色細砂混粘土
10　灰オリーブ色粘質土
11　灰色細砂

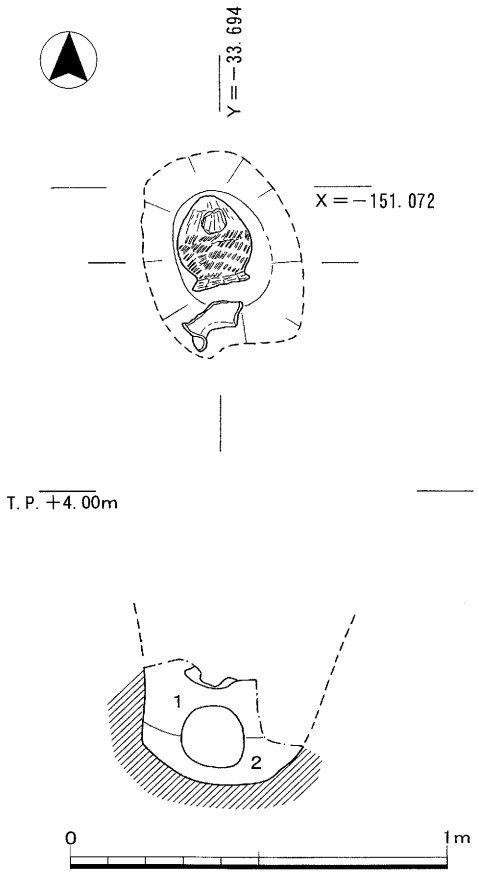
第18図　ＳＥ 307 平断面図

ＳＥ 308(第19・20図、図版一〇・五三)

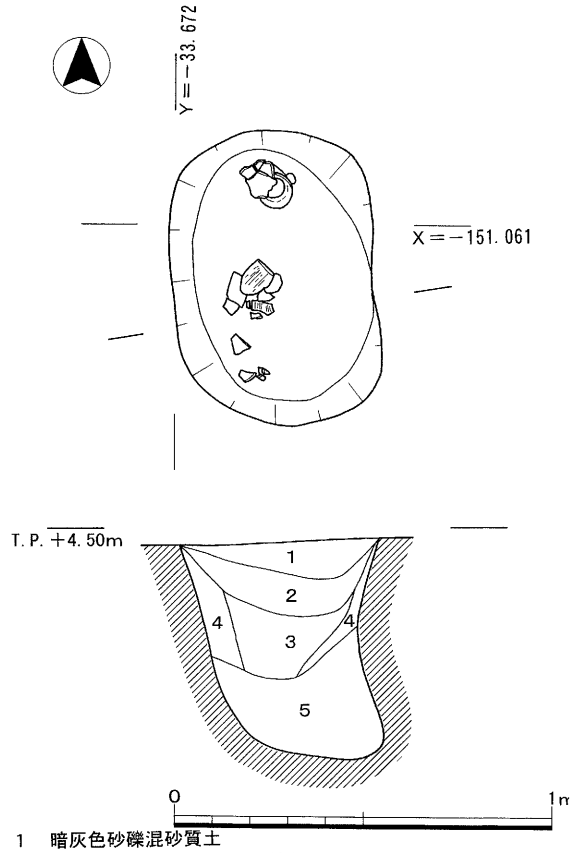
１区中央部の８Ｆ地区で検出した。第４面掘削時に検出したもので、上部は削平を受けており、掘方の上面形状は不明である。検出部分で東西幅0.42m、南北幅0.55mを測る。深さについては、検出部分では0.32mを測るのみであるが、本来は1.3m前後であったと推定される。埋土は２層が残存しており、埋土中から古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される甕が出土している。２点(**31・32**)を図化した。**31・32**はＶ様式系甕である。**31**が口縁部片。**32**が完形品で体部下位に円形の穿孔がある。口径13.0cm、器高22.1cm、体部最大径18.5cmを測る。体部外面は上位から中位にかけて右上がりの粗いタタキ、中位以下は縦位方向の板ナデを施す。底部は突出しない平底である。体部外面の上位から中位を中心に厚く煤が付着している。色調は淡褐灰色。生駒西麓産である。遺構の帰属時期は古墳時代初頭前半(庄内式古相)である。



第19図　ＳＥ 307(30)、ＳＥ 308(31・32)出土遺物実測図



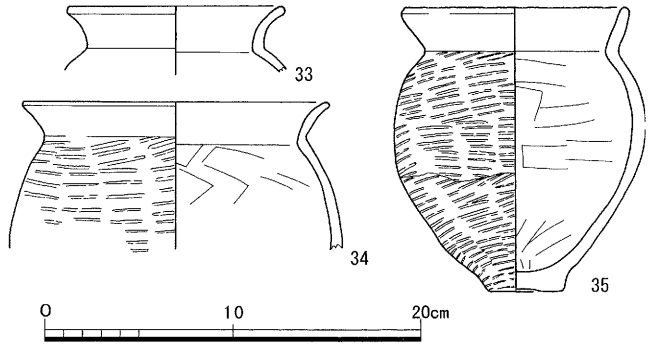
第20図　ＳＥ 308 平断面図



第21図　ＳＥ 309 平断面図

ＳＥ 309(第21・22図、図版一〇・五四)

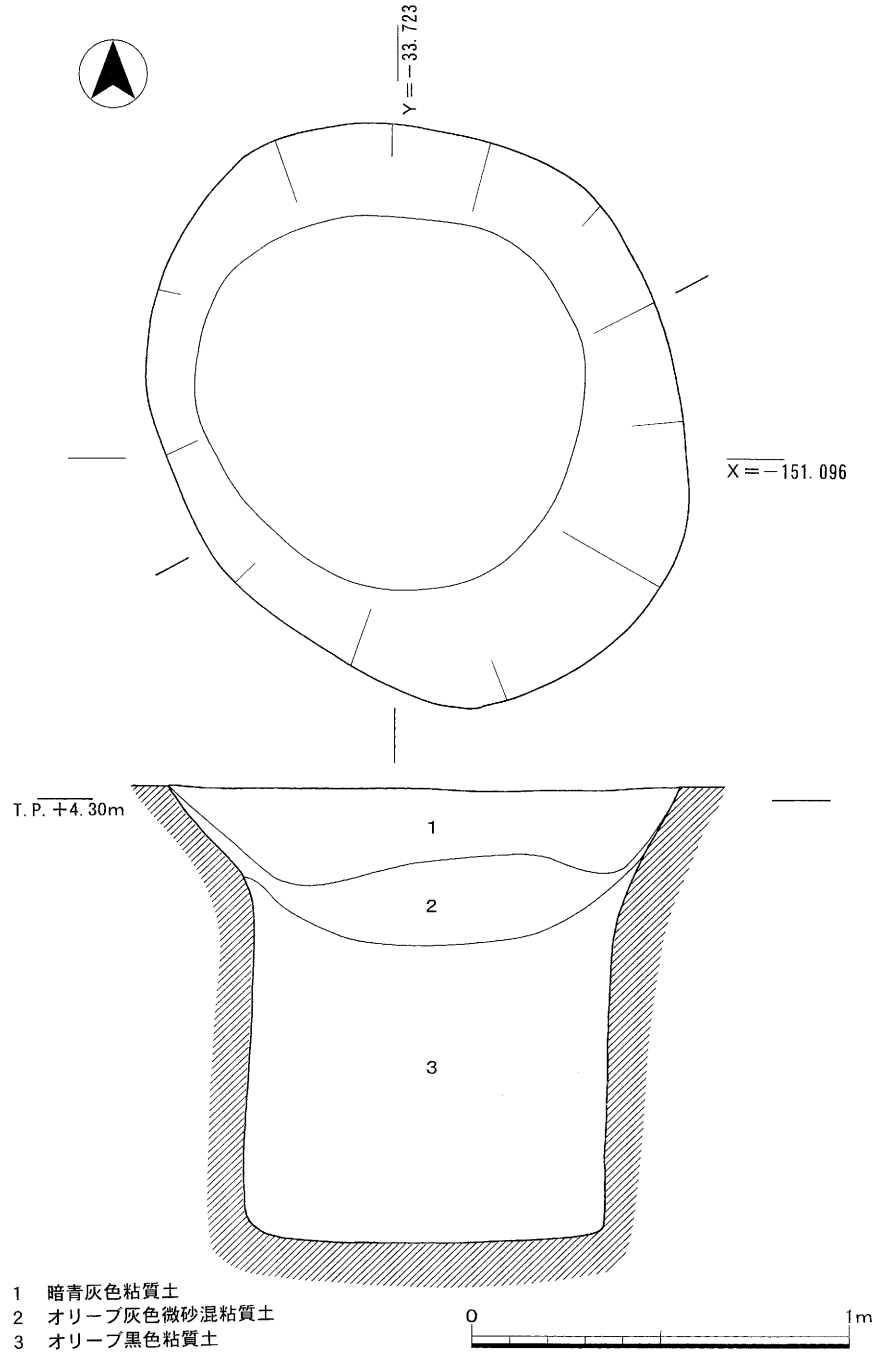
１区北東部の７Ｈ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸である。東西径0.53m、南北径0.78m、深さ0.58mを測る。掘方の断面形状は逆台形で、東部の最下層部分で一部袋状を呈する部分がある。埋土は５層に分層され、最下層の５層から弥生時代後期に比定される弥生土器片が出土している。３点(**33**～**35**)を図化した。**33**は広口壺の口縁部片である。復元口径11.2cmを測る。色調は赤褐色。**34**・**35**はＶ様式甕である。**34**は口縁部から体部片。**35**は小形品で図上で完形に復元できる。口径11.6cm、器高15.1cm、底径3.8cmを測る。底部は突出した平底で裏面はドーナツ底である。色調は**34**が褐灰色。**35**が淡褐灰色で共に生駒西麓産である。遺構の帰属時期は弥生時代後期後半である。



第22図　ＳＥ 309出土遺物実測図

ＳＥ 310(第23図、図版一一)

２区西部の10Ｃ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸である。東西径1.34m、南北径1.6m、深さ1.2mを測る。断面形状は底部から上位にかけてほぼ垂直に立ち上がり、上位で開く形状を呈している。埋土は粘質土を主体とする３層からなる。遺

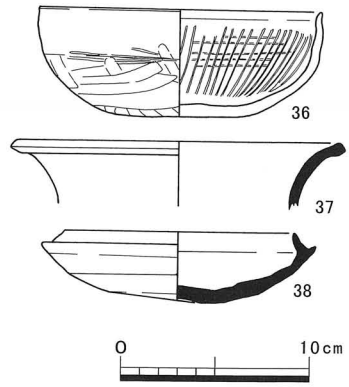


第23図　ＳＥ 310平断面図

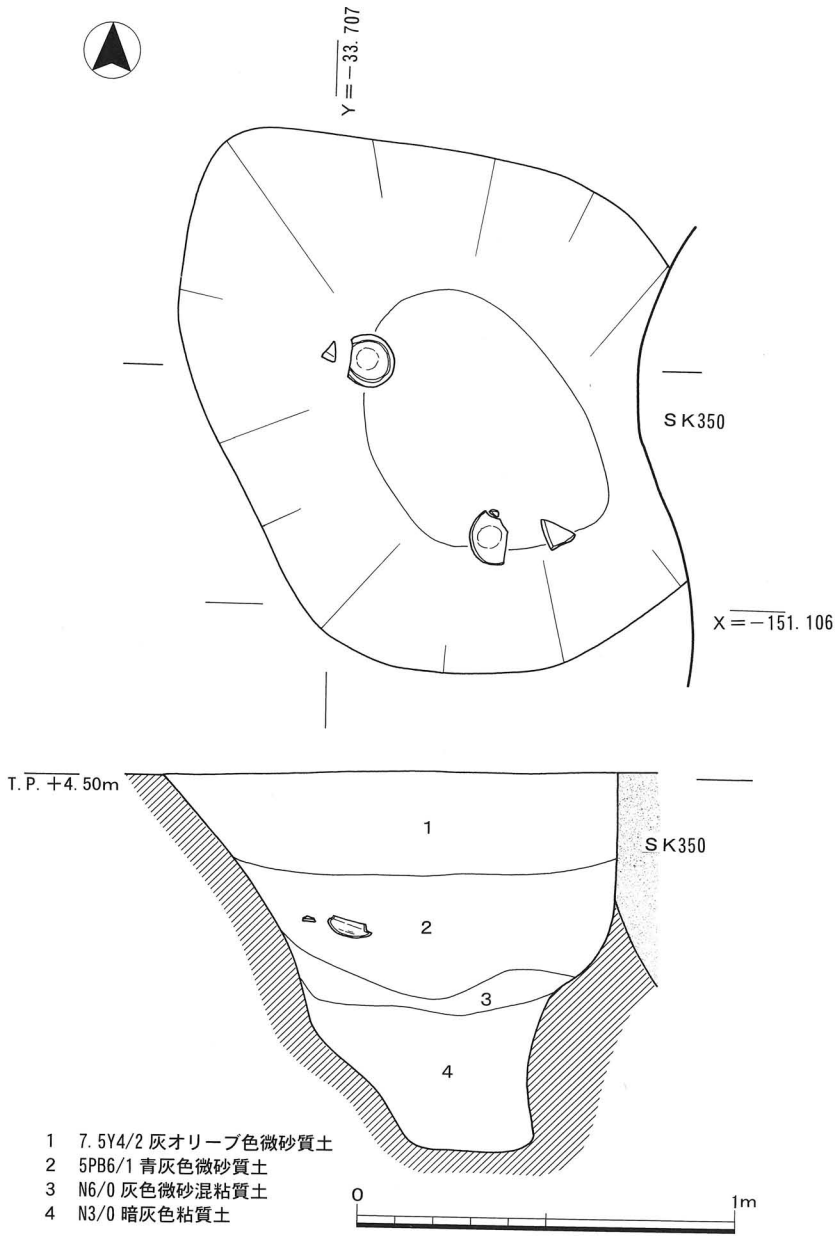
物は3層から古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器片が出土しているが、図化し得たものは無い。遺構の帰属時期は古墳時代前期後半(布留式新相)である。

ＳＥ 311(第24・25図、図版一一・五四)

2区西部の11Ｅ地区で検出した。不整円形を呈する素掘り井戸で、東部は**ＳＫ 350** に切られている。検出部分で東西径1.27m、南北径1.65m、深さ1.0mを測る。埋土は4層に分層が可能で、その内の2層から飛鳥時代前半に比定される土師器・須恵器が少量出土している。3点(**36** ～ **38**)を図化した。**36** は土師器杯Ｃである。約1/2が残存しており、口径14.9cm、器高5.7cmを測る。体部内面に放射状暗文が施文されている他、内底面にヘラによる「×」の記号文がある。色調は淡灰褐色。**37** は須恵器甕の口縁部片である。復元口径17.0cmを測る。外反して開く口縁部を持つもので、口縁端部は下方に肥厚し、端面は外傾する幅広の平坦面を作る。内外面に自然釉が認められる。色調は青灰色。焼成は良好。焼成は堅緻。**38** は須恵器杯身である。ほぼ完形品で、口径12.1cm、器高3.8cm、受部径14.5cmを測る。色調は淡青灰色。焼成は良好、堅緻である。共に田辺編年(田辺1966)のＴＫ209型式(7世紀前半)に比定される。出土遺物から遺構の帰属時期は飛鳥時代前半(7世紀前半)が推定される。



第24図　ＳＥ311 出土遺物実測図

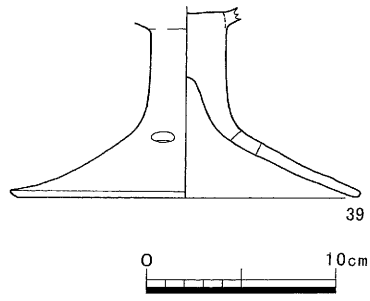


第25図　ＳＥ 311 平断面図

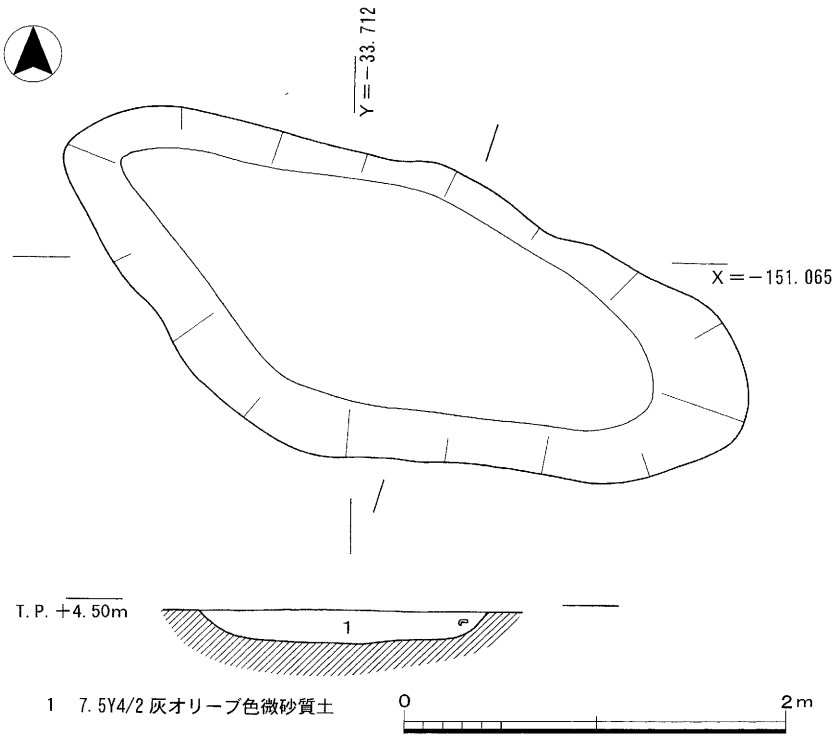
土坑（ＳＫ）

ＳＫ 303（第26・27図、図版五四）

１区北西部の７Ｄ地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈する。規模は東西径3.85m、南北径1.62m、深さ0.17mを測る。断面は浅い皿状形を呈する。埋土は7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土の単一層である。遺物は弥生時代後期末に比定される弥生土器片が少量出土している。高杯の脚部１点（**39**）を図化した。中空の柱状部から屈曲して大きく開く裾部が付く。裾部径18.5cmを測る。色調は赤褐色。胎土は粗い。スカシ孔は三方に穿たれている。遺構の帰属時期は弥生時代後期末。



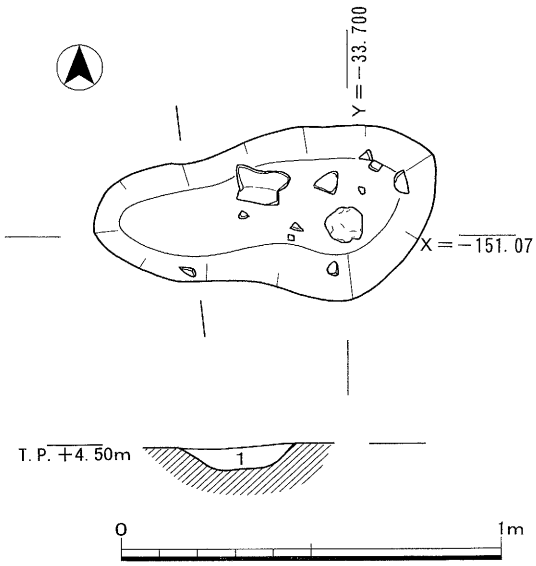
第 26 図　ＳＫ303 出土遺物実測図



第 27 図　ＳＫ 303 平断面図

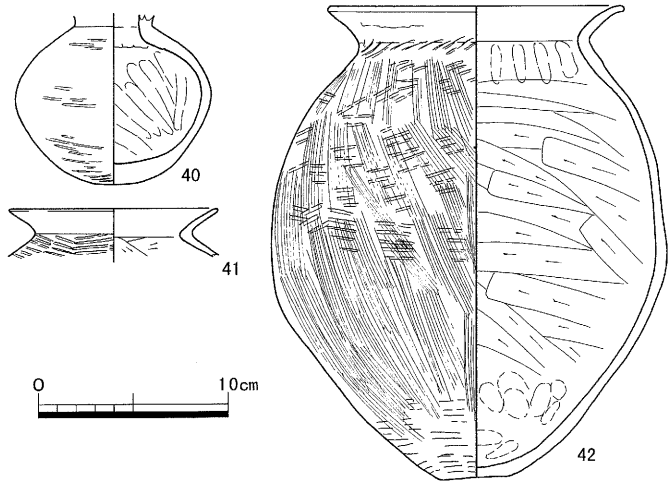
ＳＫ 310（第28・29図、図版一一・五四）

１区中央部の８Ｅ・Ｆ地区で検出した。東西方向に長い不整楕円形を呈する。規模は東西径0.91m、南北径0.42m、深さ0.05mを測る。断面は浅い皿状形を呈する。埋土は暗褐色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は内部から古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される古式土師器類が少量出土している。３点（**40**～**42**）を図化した。**40**は球形の体部を有する小形壺で口縁部を欠く。色調は淡灰褐色。**41**・**42**は甕である。**41**は庄内式甕の口縁部小片である。小片のため全容は知り得ないが残存部分での特徴から、河内型庄内式甕の最古形態（甕Ｂ$_1$）に位置付けられる。口縁部はやや小さく「く」の字に屈曲し、体部内面のヘラケズリは口縁屈曲部に及ばないため屈曲部に丸味を持つ他、体部外面のタタキ調整はやや細目（４本/cm）で水平方向に施されている。色調は赤褐色。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。**42**は長胴形の体部に平底の底部が付く甕である。ほぼ完形に復元が可能である。口径15.2cm、器高25.0cm、底径3.3cm、体部最大径20.7cmを測る。体部の器面調整は外面の上位が右上がり、中位以下が水平方向のタタキを行った後縦位のハケ、内面は口縁屈曲部より少し下がった部分以下をヘラケズリ、体底部に指ナデを残す。形態や調整方法からみて、Ｖ様式系甕と吉備系甕との属性を持つ折衷様式の甕に分類される。色調は褐灰色。生駒西麓産。遺構の帰属時期は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に位置付けられる。



1　暗褐色極細粒砂混粘質シルト

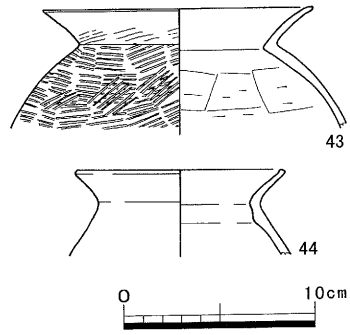
第28図　ＳＫ 310 平断面図



第29図　ＳＫ 310 出土遺物実測図

ＳＫ 311（第30・31図、図版一二）

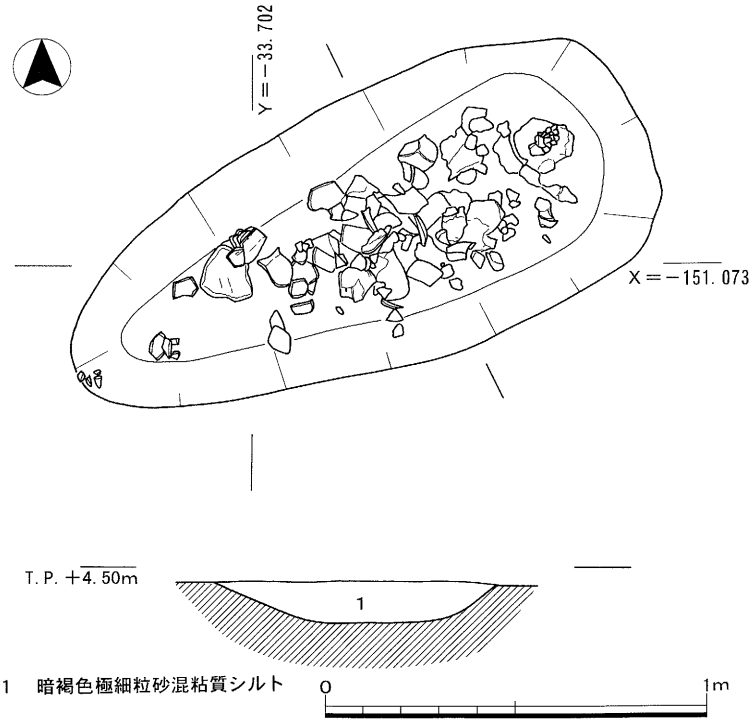
ＳＫ 310 の南西に近接している。南北方向に長い楕円形を呈する。規模は東西径1.61m、南北径0.72m、深さ0.1mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色極細粒砂混粘土質シルトである。遺物は古墳時代初頭後半（庄内式新相）の古式土師器類が少量出土している。甕片２点（**43・44**）を図化した。**43** は庄内式甕片である。体部外面のタタキはやや粗く４本/cmである。生駒西麓産。**44** は屈曲部内面に幅広の面を形成するもので、口縁端部は外傾し小端面を作る。色調は灰白色。東四国系のものと考えられる。



第30図　ＳＫ311 出土遺物実測図

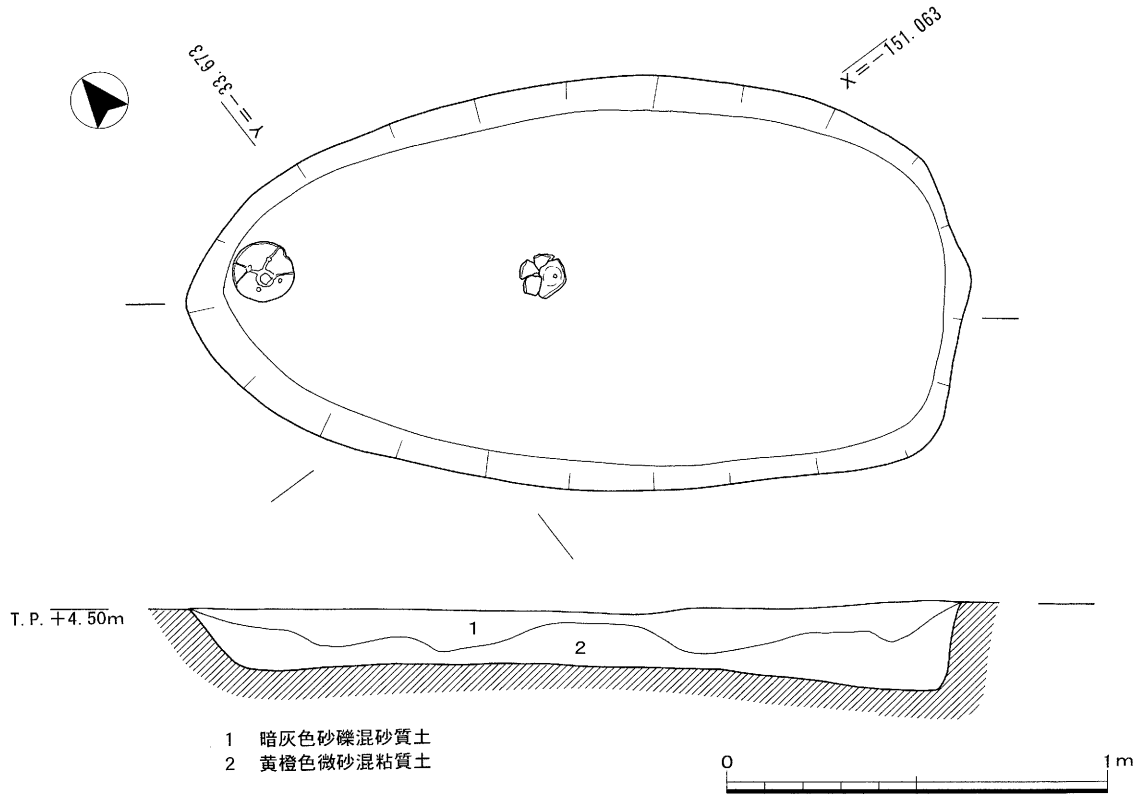
ＳＫ 323（第32・38図、図版一三）

１区東部の７Ｈ地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、西部ではＳＫ 322 を切っている。規模は東西径2.05m、南北1.1m、深さ0.22mを測る。断面は浅い皿状形を呈する。埋土は２層からなる。遺物は１層から弥生時代後期後半に比定される弥生土器片が少量出土している。高杯の裾部片１点（**45**）を図化した。低く大きく開く裾部を持つもので、椀形高杯の脚部であった可能性が高い。色調は淡褐灰色。



1　暗褐色極細粒砂混粘質シルト

第31図　ＳＫ 311 平断面図



第32図　ＳＫ323平断面図

ＳＫ327(第33・38図、図版一三・五四)

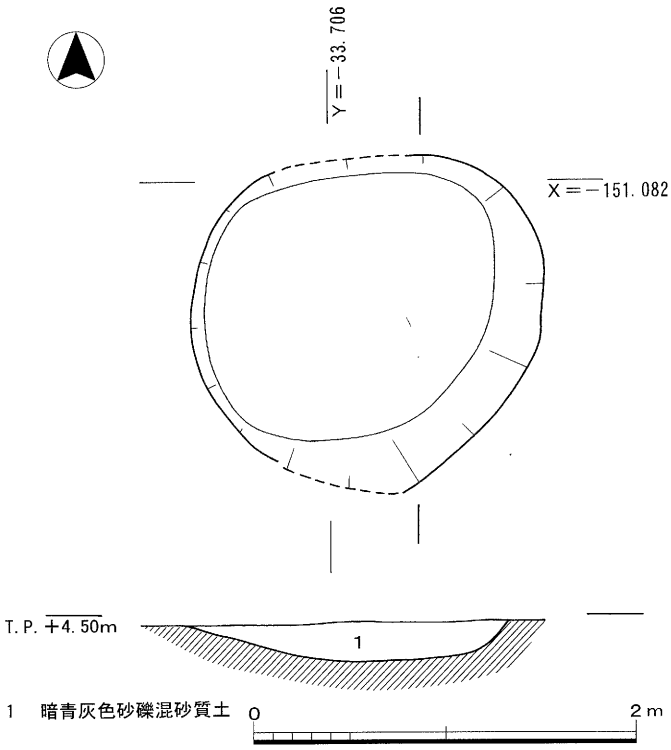
２区中央部の９Ｅ地区で検出した。不整円形を呈するもので、上部は一部ＳＤ210により切られている。規模は東西径1.82m、南北径1.75m、深さ0.2mを測る。断面は浅い皿形状を呈する。埋土は暗青灰色砂礫混砂質土の単一層である。遺物は古墳時代初頭(庄内式期)に比定される古式土師器片が少量出土している。２点(46・47)を図化した。46は体部外面にハケ調整を多用する甕である。口縁部から体部中位が残存している。胎土においては、河内型庄内式甕に通有な角閃石を含み褐灰色を呈するものが使用されているが、本例は体部内面のヘラケズリを欠くもので類例の少ない器種である。47は有孔鉢の底部である。色調は褐灰色。生駒西麓産である。

ＳＫ339(第35・38図、図版一三・五四)

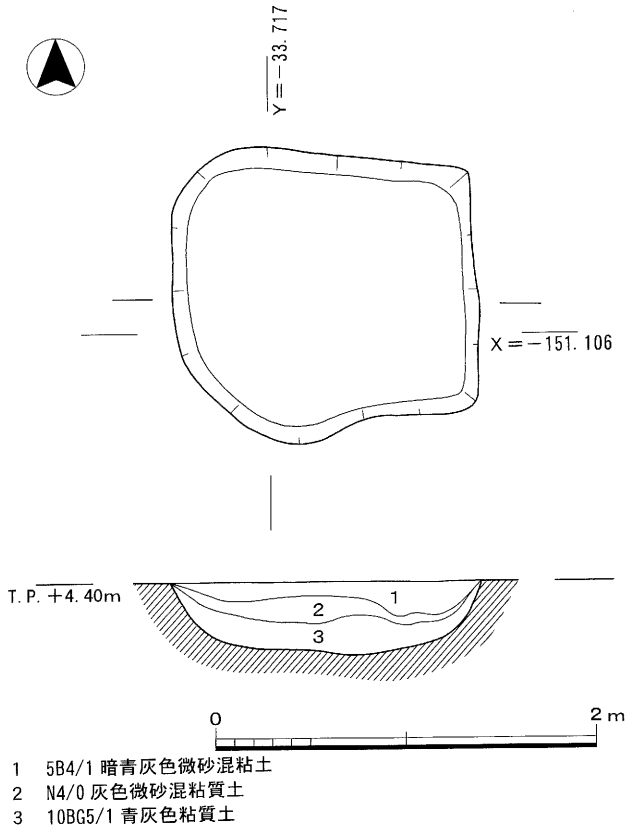
２区北西部の11Ｃ地区で検出した。西端でＳＫ206、上部でＳＤ201に切られている。東西方向に長い不定形で、規模は検出部分で東西幅4.65m、南北幅1.65m、深さ0.18mを測る。断面は浅い皿状形を呈する。埋土は灰オリーブ色微砂質土の単一層である。遺物は古墳時代前期中葉(布留式中葉)に比定される古式土師器片が少量出土している。５点(48～52)を図化した。48～51は小形丸底壺(小形壺Ｂ$_4$)である。50は口径が体部最大径を凌駕している。口径9.6cm、器高8.1cm、体部最大径9.1cmを測る。48～51はやや粗製品である。色調は褐灰色。52は布留式甕であるが、口縁端部は肥厚せず直口を呈する。布留Ⅲ期。

ＳＫ341(第34・38図、図版一四)

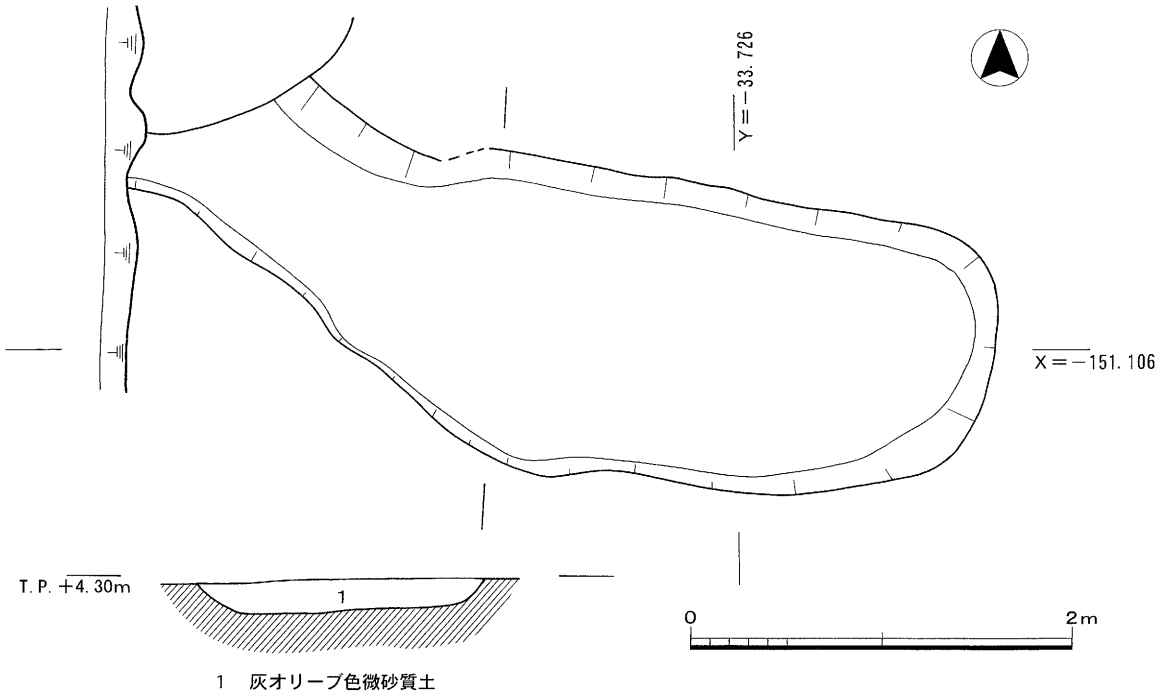
２区南西部の11Ｄ地区で検出した。不整方形を呈する。規模は東西幅1.64m、南北幅1.55m、深さ0.4mを測る。断面は浅い椀形状を呈する。埋土は断面形状に沿って３層が堆積している。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器片が少量出土している。鉢１点(53)を



第33図　ＳＫ 327 平断面図



第34図　ＳＫ 341 平断面図



第35図　ＳＫ 339 平断面図

図化した。椀形を呈する鉢で(鉢E_1)に分類される。復元口径11.4cmを測る。色調は浅黄橙色。古墳時代前期前半(布留式古相)の布留Ⅰ期～Ⅱ期に盛行する器種である。

ＳＫ 346(第36・38図、図版一二)

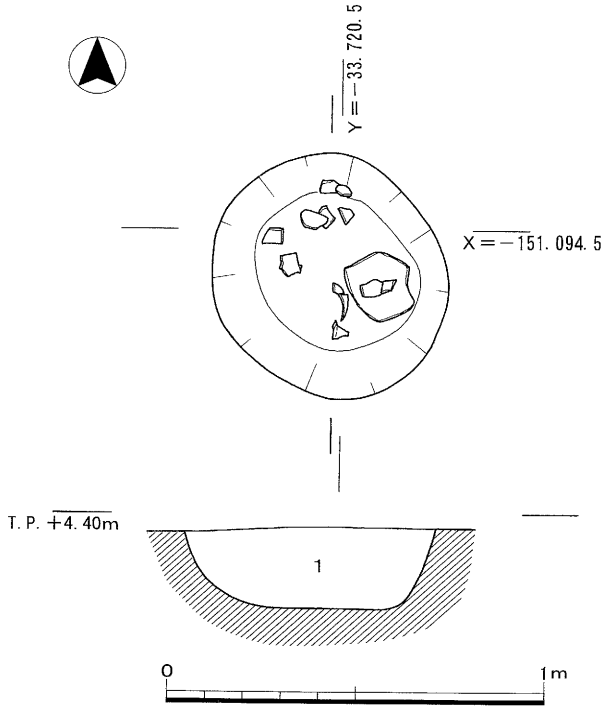
２区西部の10Ｃ・Ｄ地区で検出した。円形を呈する。規模は東西径0.63m、南北径0.65m、深さ0.21mを測る。断面は椀形を呈する。埋土は7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土の単一層である。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器片が少量出土している。**54**は布留式甕片である。復元口径13.6cmを測る。色調は淡褐灰色。角閃石を含む生駒西麓産である。布留Ⅰ期。

ＳＫ 347(第37・38図、図版一四・五四)

２区西部の10Ｄ地区で検出した。南西部が**ＳＰ 3102**に切られている。不整円形を呈するもので、規模は東西径1.15m、南北径1.3m、深さ0.17mを測る。断面は皿状で、一部西部で深くなる部分がある。埋土は7.5Y4/2灰オリーブ色極細粒砂である。遺物は内部から飛鳥時代前期に比定される土師器・須恵器の小片が少量出土している。須恵器杯身１点(**55**)を図化した。完形品で口径12.4cm、器高3.8cm、受部径14.9cmを測る。田辺編年のＴＫ209型式(７世紀前半)に比定される。

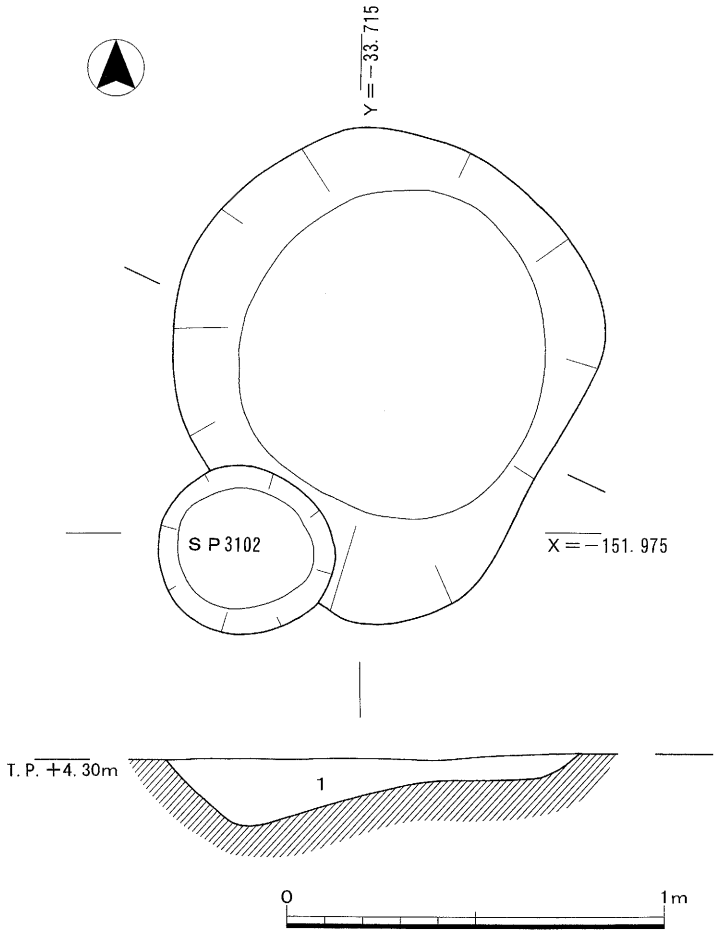
ＳＫ 355(第39・40図、図版一四・五五)

２区中東部の９Ｇ地区で検出した。上部が第２面で検出した**ＳＤ 219**・**ＳＤ 220**に切られ、西部では**ＳＫ 389**を切っている。北西－南東方向に長い楕円形を呈するもので、規模は長径3.15m、短径1.6m、深さ0.2mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は5B3/1暗青灰色粗粒砂混シルト質粘土である。遺物は古墳時代前期中葉(布留式中相)



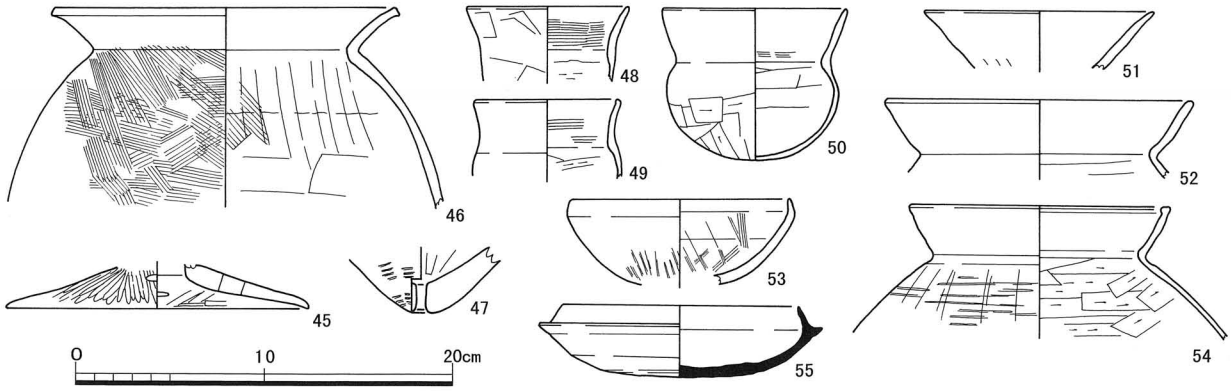
1　7. 5Y4/2 灰オリーブ色微砂質土

第 36 図　ＳＫ 346 平断面図

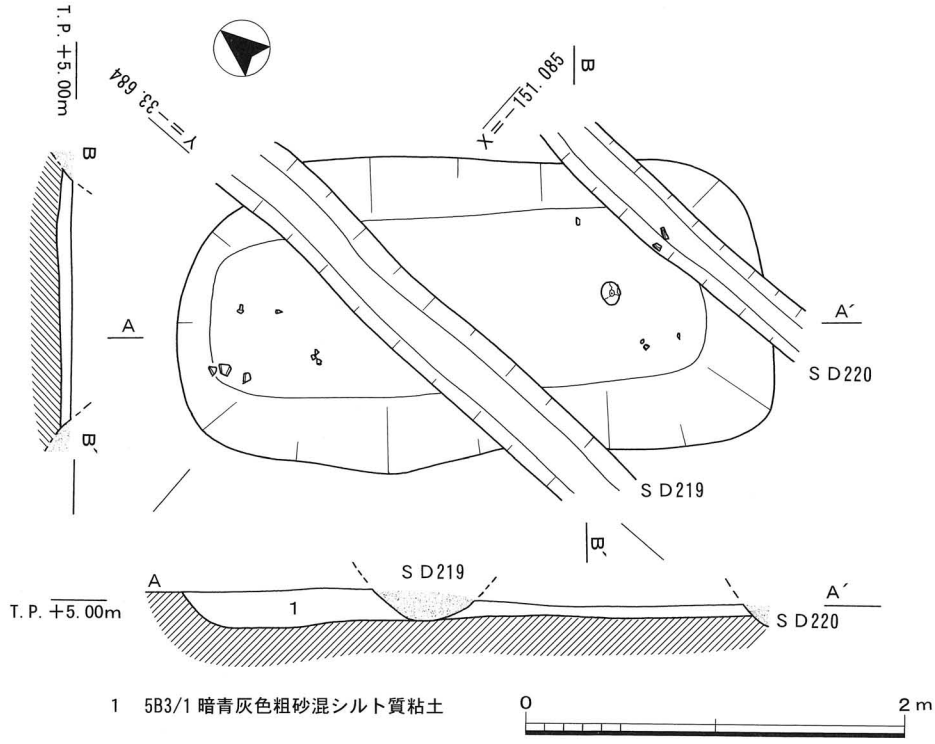


1　7. 5Y4/2 灰オリーブ色極細粒砂

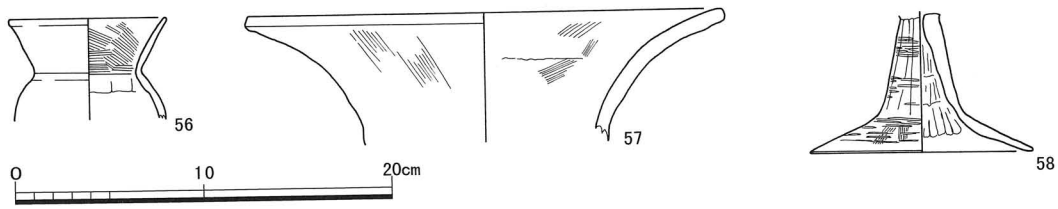
第 37 図　ＳＫ 347 平断面図



第 38 図　ＳＫ 323(45)、ＳＫ 327(46・47)、ＳＫ 339(48 ～ 52)、ＳＫ 341(53)、ＳＫ 346(54)、ＳＫ 347(55)出土遺物実測図



第 39 図　ＳＫ 355 平断面図

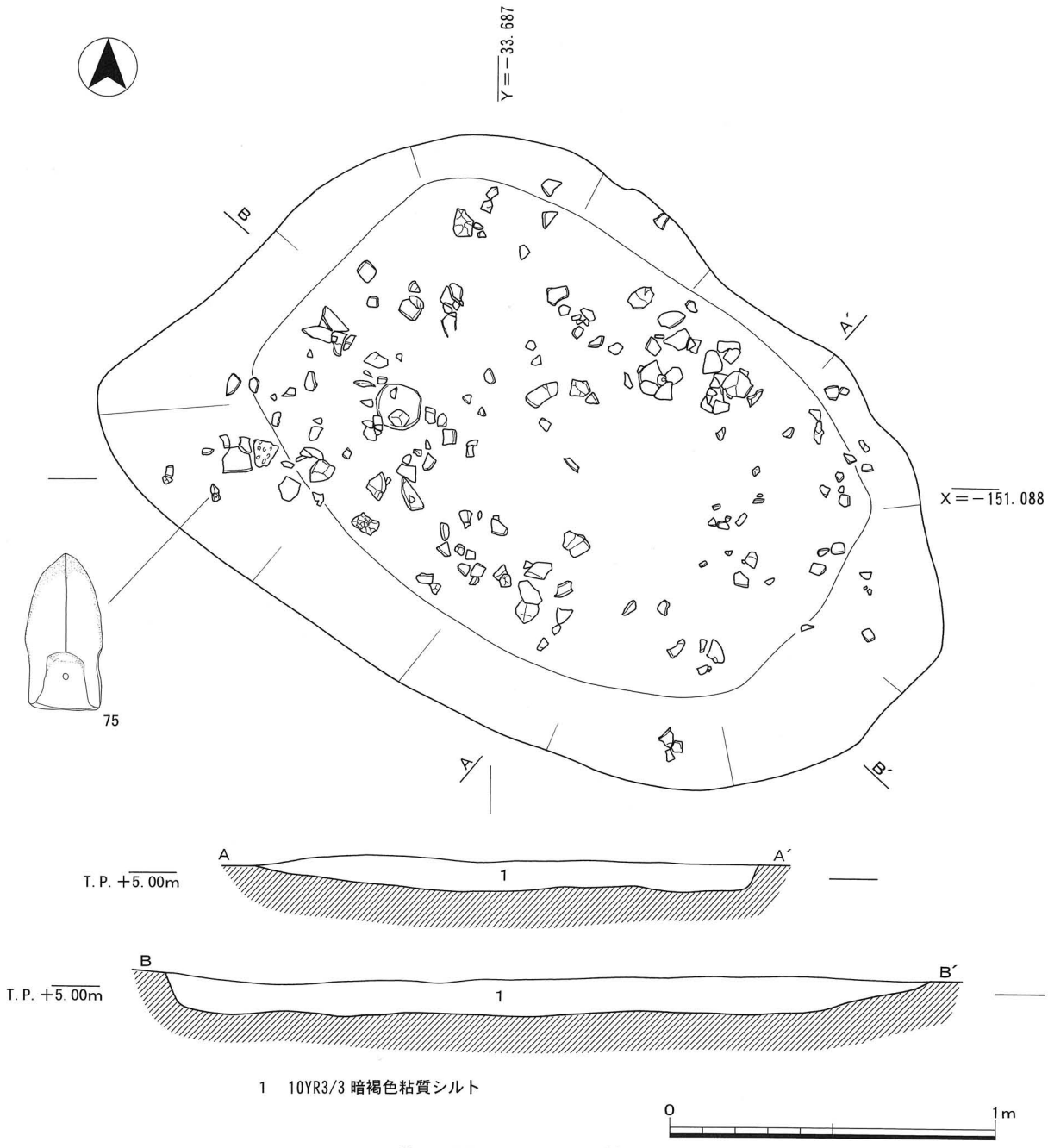


第 40 図　ＳＫ 355 出土遺物実測図

に比定される土師器片が少量出土している。

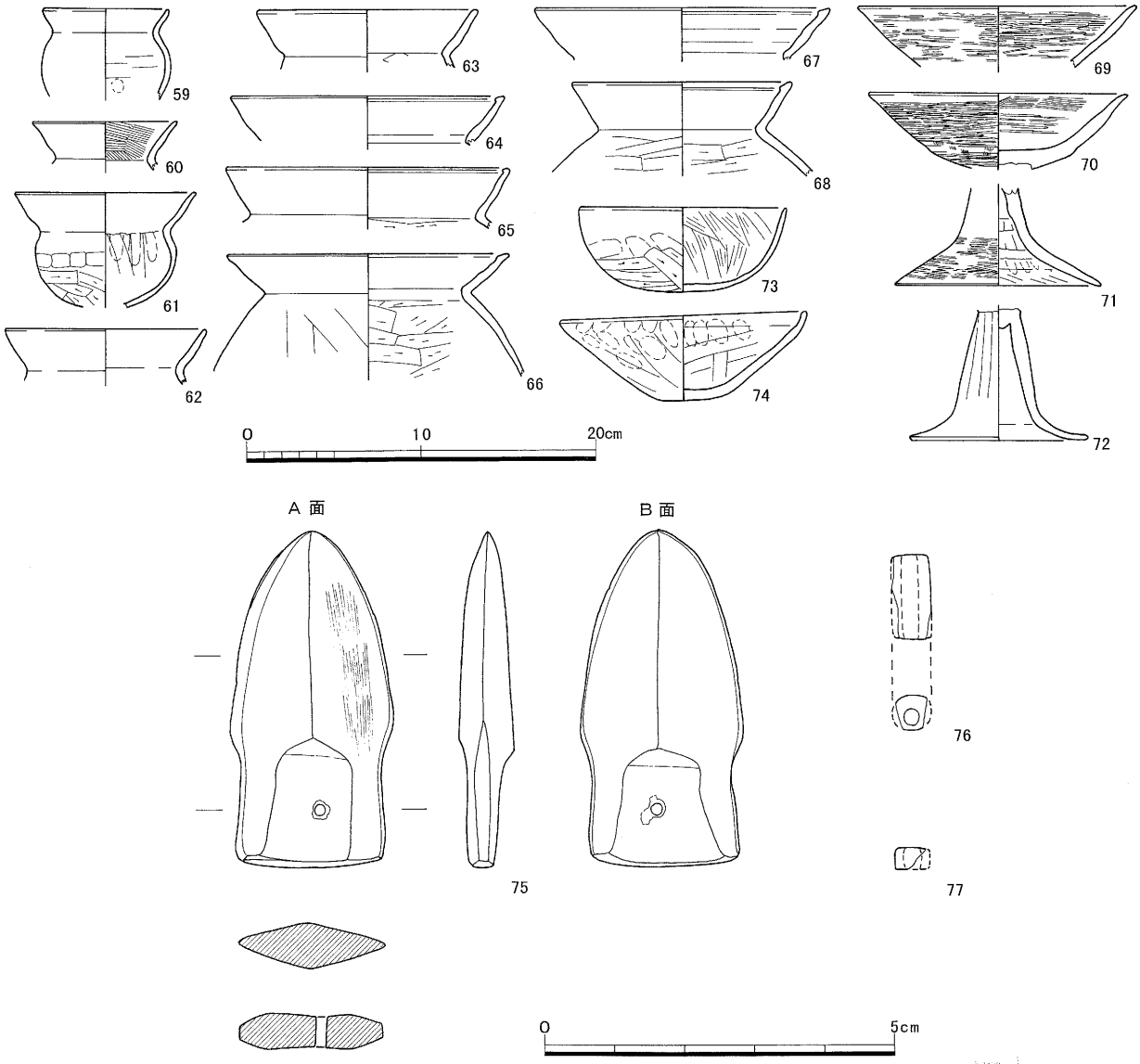
3 点(**56** ～ **58**)を図化した。**56** は小形丸底壷(小形壷Ｂ$_4$)。**57** は大きく開く口縁部を持つ広口壷。58は高杯脚部である。布留Ⅲ期。

ＳＫ 356(第41・42図、図版一五・五五)



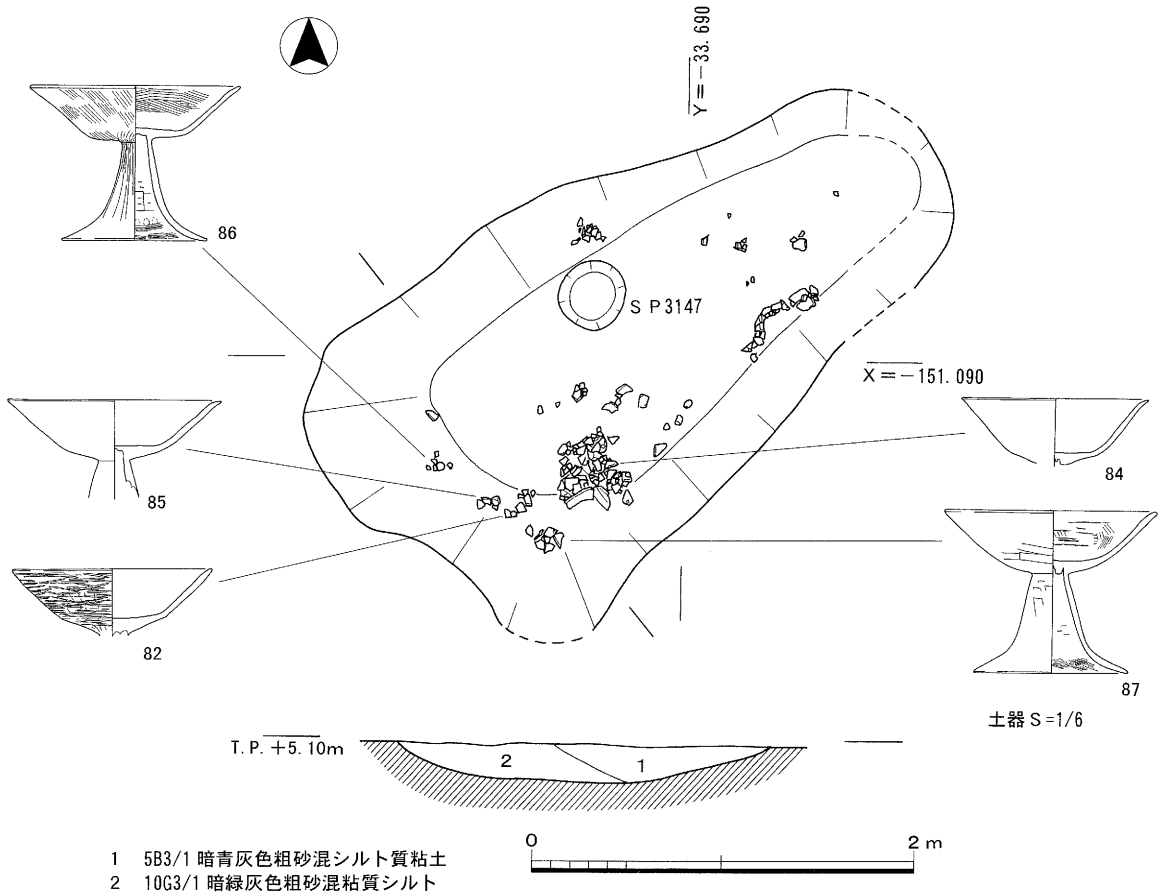
第41図　ＳＫ 356 平断面図

２区のほぼ中央部の９Ｇ地区で検出した。平面形状は隅丸方形で、長軸2.35m、短軸1.55m、深さ0.15mを測る。断面形状は浅い皿形状で、内部の埋土は暗褐色粘土質シルトが堆積している。この北西側では埋土を約５cm程度掘った地点から、刃先を北西に向けた状況で鏃形石製品が出土した。その周辺には古墳時代前期前半に比定される小形丸底壷・高杯・甕などの古式土師器片が多量に出土している。また、埋土を篩いにかけた結果、管玉と小玉が各１点出土している。19点(**59**～**77**)を図化した。**59**～**63**は小形丸底壷である。**59**は口径と体部最大径がほぼ等しい。**61**は口径が体部径を凌駕するもので小形壷B_4にあたる。**64**～**68**は布留式甕である。口縁端部の形態は、小さく内傾肥厚する**64**・**65**、肥厚せず口縁端部が尖り気味で終わる**66**、内面の肥厚幅が広い**67**・**68**がある。**69**～**72**は高杯である。**69**・**70**は杯部が斜上方に直線的に伸びる小形の精製高杯であ

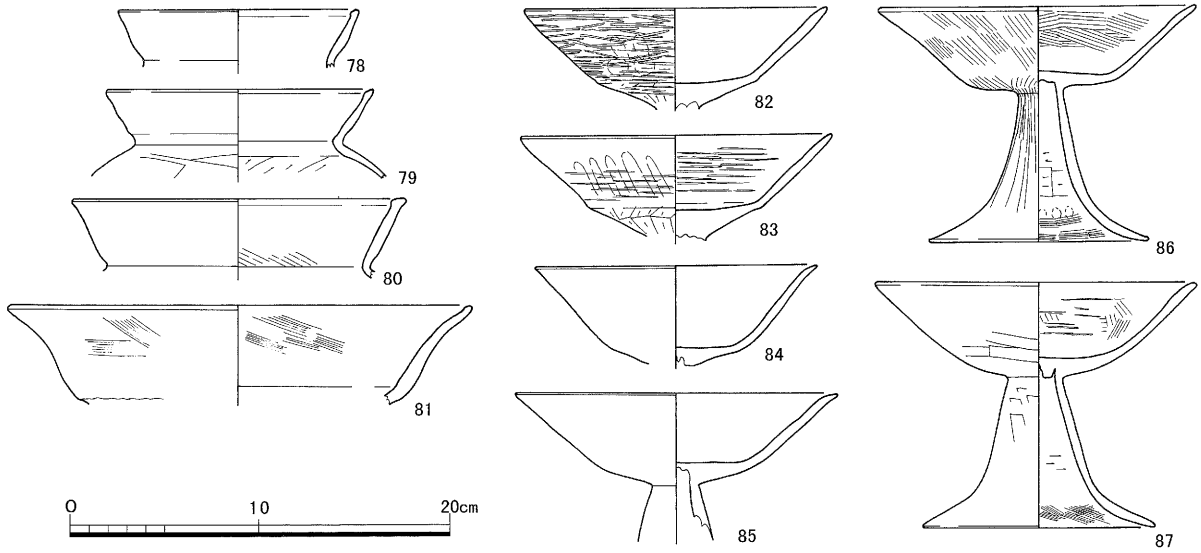


第 42 図　ＳＫ 356 出土遺物実測図

る。69・70 の杯部内外面の器面調整は横位のヘラミガキを多用している。71 の裾部裏面には布目痕が残る。73・74 は小形鉢である。73 が椀形を呈する鉢Ｅ$_1$にあたるもので、口径11.7cm、器高4.9cmを測る。色調は淡灰褐色。生駒西麓産。74 が逆台形を呈する吉備系鉢で(鉢Ｄ)にあたる。口径13.9cm、器高5.1cmを測る。粗製品で色調は褐灰色。生駒西麓産である。75 ～ 77 は石製品である。75 は無茎式に分類される瑪瑙製の鏃形石製品である。全長4.7cm、刃幅2.4cm、厚さ0.7cm、重さ 9 ｇを測る。鏃身は鏑を境に二分されており、断面形状が菱形を呈する。刃先および鏃身は鋭い刃を持つもので、頸部を境に幅を減じて直線的に伸びる。頸部は、矢柄を挿し込むために半楕円状に抉られており、その中央部に小孔が穿たれている。出土例としては古墳時代前期を中心として20数例あるが、製作遺跡から出土した一部を除けば、その大半が前期古墳からの出土であり、消費地遺跡からの出土としては本例が初例である。出土例の中で、類似した形状を持つものとしては、池ノ内７号墳[註1](奈良県)、大成洞13号墳[註2](韓国金海市)などの古墳出土例のほか、製作地遺跡では川合遺跡[註3](静岡県)がある。石材においては、瑪瑙製のものは本例のみで、一般的には碧玉・凝



第 43 図　ＳＫ 358 平断面図



第 44 図　ＳＫ 358 出土遺物実測図

灰岩が使用されている。瑪瑙の原産地を限定することは出来ないが、原石が産出される場所は、調査地付近では兵庫県日高郡日高町猪爪から豊岡市船谷付近、島根県八束郡玉造町玉造付近、石川県金沢市片山津付近があり、これらの地域から持ち運ばれたものと考えられる。76 は碧玉製の管玉で、３箇所に欠損部分がある。長さ1.1cm、径0.4cmを測る。色調は暗緑色。77 はガラス製小

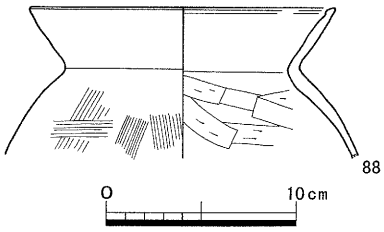
玉であるが、残片のため法量は明確でない。色調は透明感のある明青色を呈する。遺構の帰属時期は布留Ⅲ期である。

ＳＫ 358(第43・44図、図版一六・五五)

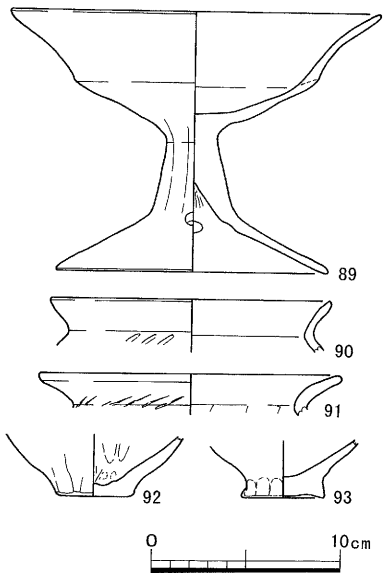
ＳＫ 356 の南西に近接している。東端部分が**ＳＤ 218**、西部で**ＳＰ 3147** に切られている。北東－南西に伸びる不整楕円形を呈するもので、長径3.6m、短径1.25m、深さ0.18mを測る。断面は浅い皿状形を呈する。埋土は２層からなる。遺物は古墳時代前期中葉(布留式中相)に比定される古式土師器片が少量出土している。10点(**78** ～ **87**)を図化した。**78** ～ **80** は布留式甕(甕Ｆ$_2$)の口縁部片である。色調は灰褐色～褐灰色。**81** は大形鉢と推定される。復元口径24.0cmを測る。色調は灰褐色。生駒西麓産。**82** ～ **87** は高杯である。当該期に通有な小形高杯である。杯部の形状では、稜部が明瞭な **82・83** が高杯Ａ$_5$、やや不明瞭な **84** ～ **87** が高杯(Ａ$_6$)に分類される。出土遺物は布留Ⅲ期を中心としている。

ＳＫ 359(第45・46図、図版一六・五六)

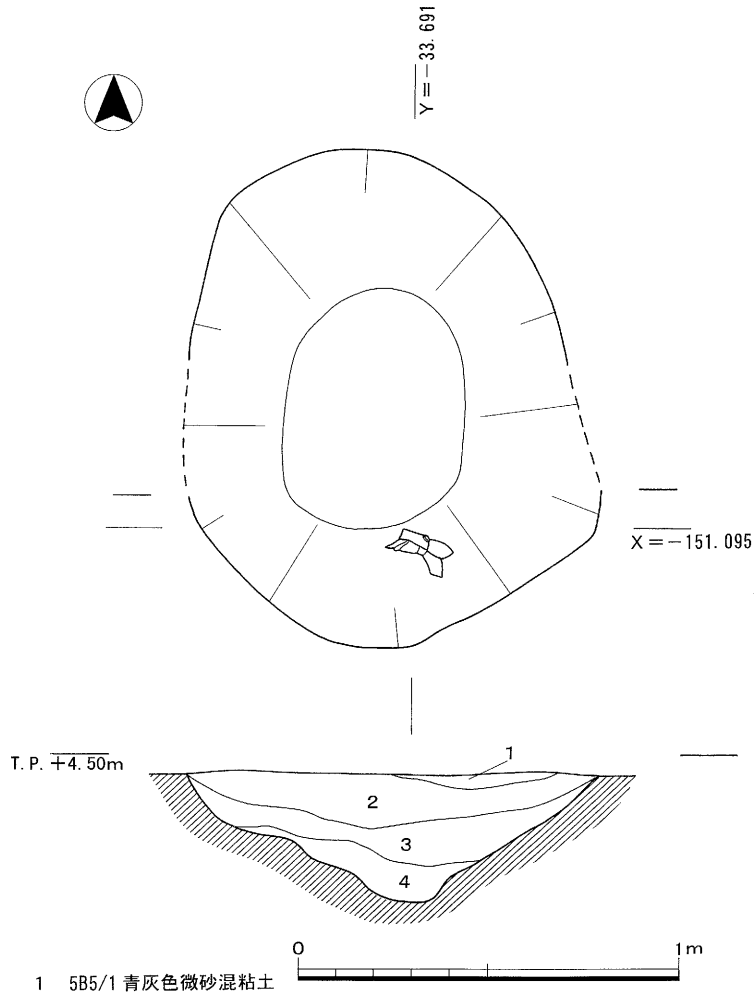
２区中央部の10Ｆ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、中央部分を東西に伸びる**ＳＤ 238** に切られている。規模は東西径1.0m、南北径1.3m、深さ0.34mを測る。断面は浅い逆三角形を呈する。埋土は４層から成る。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器片が少量出土している。



第 45 図　ＳＫ 359 出土遺物実測図



第 47 図　ＳＫ 382 出土遺物実測図

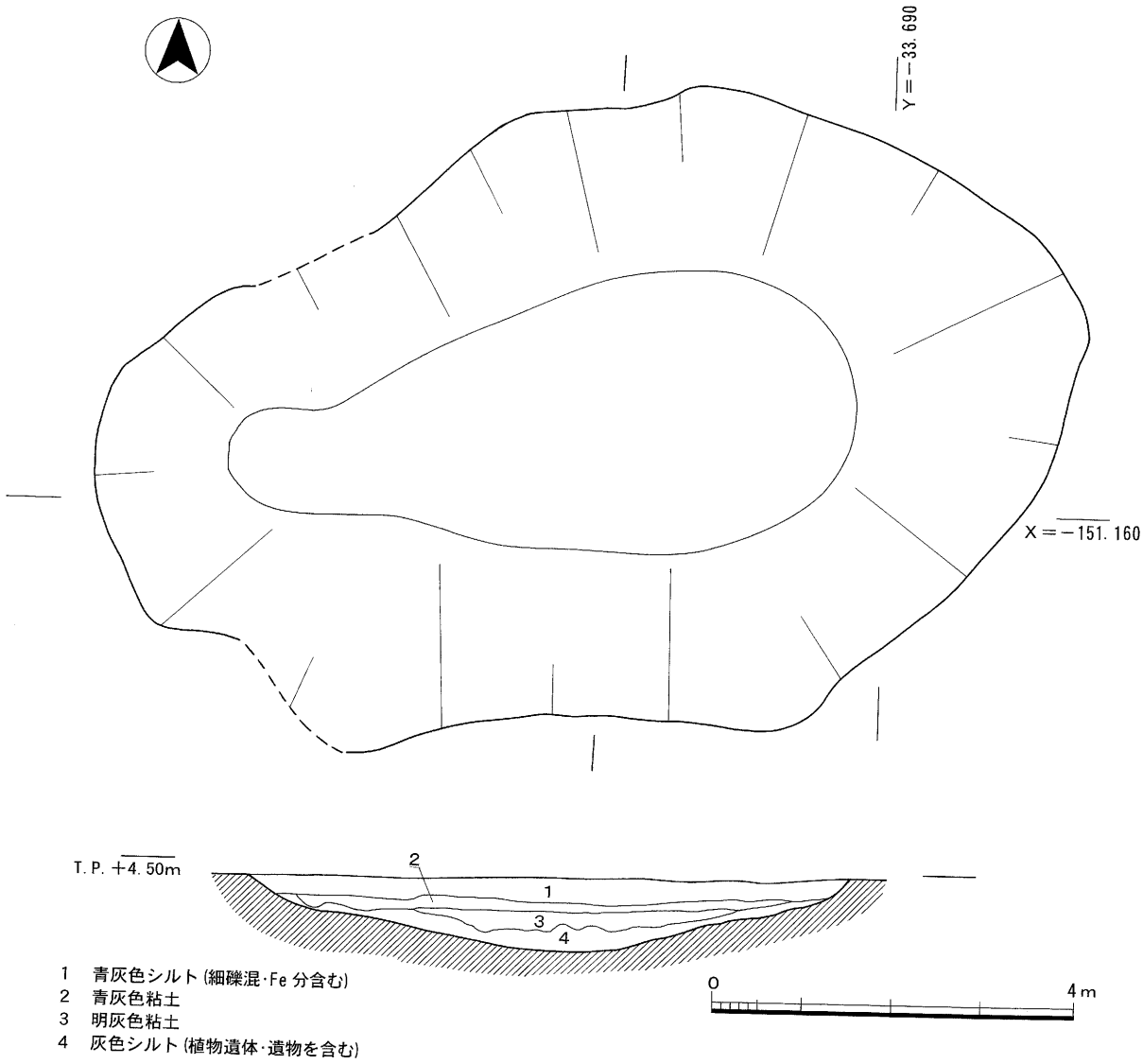


第 46 図　ＳＫ 359 平断面図

布留式甕１点(88)を図化した。口縁部から体部上半の細片で布留式甕(甕Ｆ$_3$)に分類される。色調は淡灰褐色。遺構の帰属時期は布留Ⅳ期。

ＳＫ 382(第47・48図、図版一七・五六)

４区中央部の16・17Ｆ・Ｇ地区で検出した。東西方向に長い不整楕円形を呈する大型の土坑である。規模は東西径11.1m、南北径6.8m、深さ0.8mを測る。断面は浅い逆三角形を呈する。埋土は４層から成る。遺物は弥生時代後期後半に比定される弥生土器片が少量出土している。５点(89～93)を図化した。89は有稜高杯である。ほぼ完形で口径19.2cm、器高13.9cm、裾部径14.1cmを測る。口径・稜径・口縁部長から導かれる数値は、口縁比25.7、口稜比65.9で原田分類(原田2003)の〔有稜高杯Ｄ$_1$〕にあたる。90・91はＶ様式甕の口縁部片である。色調は90が褐灰色、91が赤褐色。共に生駒西麓産。92・93は小形鉢で、平底の92〔小形鉢Ｂ$_1$〕と上げ底の93〔小形鉢Ｂ$_2$〕がある。色調は92が灰褐色。93が赤褐色。共に生駒西麓産。時期的には弥生時代後期末(弥生時代後期後半新相－様相３)にあたる。



第48図　ＳＫ 382平断面図

第6表　第3面　土坑（ＳＫ）一覧表（単位m）

遺構名	地区	平面形	東西幅	南北幅	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＫ 301	7D	円形	1.40	1.00	0.07	5PB4/1暗青灰色砂礫混砂質土	弥生土器（Ⅴ）
ＳＫ 302	7D・E	不整円形	1.10	1.00	0.11	〃	弥生土器（Ⅴ）
ＳＫ 304	7D	隅丸方形	1.60	1.12	0.05	〃	弥生土器（Ⅴ）
ＳＫ 305	〃	円形	0.88	0.75	0.06	〃	弥生土器（Ⅴ）
ＳＫ 306	8D	〃	1.20	0.95	1.09	暗褐色微砂混粘質土 黄灰色細砂 灰黒色粘質土 灰色微砂混粘質土	弥生土器（Ⅴ） 古式土師器
ＳＫ 307	〃	不整円形	1.20	1.08	0.10	5PB4/1暗青灰色砂礫混砂質土	
ＳＫ 308	〃	楕円形	0.45	0.85	0.12	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	古式土師器（布留）
ＳＫ 309	8E	隅丸方形	3.15	2.24	0.15	〃	弥生土器（Ⅴ）
ＳＫ 312	8F	円形	1.05	0.92	0.08	〃	弥生土器（Ⅴ）
ＳＫ 313	8E・F	楕円形	2.54	1.82	0.12	〃	古式土師器（布留古）
ＳＫ 314	8E	不整円形	0.78	0.58	0.17	〃	古式土師器（布留）
ＳＫ 315	〃	〃	1.12	1.41	0.19	〃	古式土師器（庄内古）
ＳＫ 316	8E・F	〃	0.72	0.81	0.13	〃	古式土師器（布留）
ＳＫ 317	〃	隅丸方形	1.40	0.85	0.09	〃	
ＳＫ 318	8F	不整円形	0.58	0.81	0.03	〃	古式土師器
ＳＫ 319	8G	隅丸方形	1.75	0.69	0.11	〃	
ＳＫ 320	〃	楕円形	0.69	1.03	0.10	〃	古式土師器（布留）
ＳＫ 321	〃	〃	2.05	2.88	0.09	〃	
ＳＫ 322	7H	不整円形	0.85	0.85	0.06	〃	古式土師器
ＳＫ 324	6・7I	楕円形	2.25	5.34	0.46	5GY6/1オリーブ灰色微砂質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
ＳＫ 325	7・8I	円形	0.90	0.68	0.10	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
ＳＫ 326	9E	〃	0.90	0.56	0.14	〃	弥生土器
ＳＫ 328	〃	不整円形	0.75	1.40	0.10	〃	古式土師器
ＳＫ 329	9C	円形	0.85	0.75	0.57	オリーブ灰色砂礫混砂質土 灰色細砂 青灰色粘土	
ＳＫ 330	9D	楕円形	0.56	1.10	0.10	N3/0暗灰色微砂質土	
ＳＫ 331	9E	円形	0.65	0.86	0.12	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	弥生土器（Ⅰ）
ＳＫ 332	10C	楕円形	0.71	0.31	0.08	N3/0暗灰色微砂質土	
ＳＫ 333	〃	円形	0.66	0.85	0.08	〃	古式土師器
ＳＫ 334	〃	不定形	0.41	0.71	0.08	〃	
ＳＫ 335	〃	楕円形	0.45	0.78	0.16	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土 5GY6/1オリーブ灰色微砂質土 10BG6/1青灰色微砂	
ＳＫ 336	〃	不整円形	0.56	0.98	0.12	N3/0暗灰色微砂質土	古式土師器（布留）
ＳＫ 337	11C	楕円形	1.03	0.65	0.06	〃	古式土師器・須恵器
ＳＫ 338	〃	不整円形	1.12	0.86	0.11	〃	古式土師器
ＳＫ 340	11C・D	方形	2.68	0.60	0.10	〃	
ＳＫ 342	11D	円形	0.91	0.95	0.46	N3/0暗灰色微砂質土 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 5GY6/1オリーブ灰色微砂質土	
ＳＫ 343	〃	方形	1.10	0.85	0.45	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土 10BG6/1青灰色微砂	
ＳＫ 344	〃	円形	0.90	0.80	0.27	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
ＳＫ 345	10D	円形	1.85	1.62	0.12	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	

遺構名	地区	平面形	東西幅	南北幅	深さ	埋　土	出土遺物
S K 348	11E	円形	0.70	0.76	0.07	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S K 349	〃	方形	1.25	1.60	0.21	暗青灰色微砂混粘土	
S K 350	〃	不整円形	2.75	2.80	0.32	5B4/1暗青灰色微砂混粘土	
S K 351	10F	方形	3.95	3.45	0.09	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S K 352	11F	楕円形	0.58	1.35	0.08		
S K 353	8·9F	〃	0.95	1.15	0.13	5B5/1青灰色微砂混粘土	
S K 354	9F·G	〃	0.70	1.55	0.48	暗灰色砂礫混土 青灰色細砂混粘質土	弥生土器 古式土師器
S K 357	9F	不定形	0.60	1.05	0.11		
S K 360	10F	隅丸方形	2.05	2.25	0.20	暗灰色砂礫混土(鉄分含む)	弥生土器
S K 361	10H	〃	1.45	1.05	0.45	黒色粘土(微砂ブロックで含む) 灰緑色シルト 灰色微砂混粘土 黒灰色微砂質土 灰色微砂混粘質土	弥生土器(V)
S K 362	10I	〃	1.45	1.30	0.22	N5/0灰色粘土 10BG6/1青灰色微砂 10BG6/1青灰色微砂	
S K 363	〃	〃	3.02	2.15	0.19		弥生土器(I)
S K 364	11I	楕円形	0.75	1.10	0.20	N3/0暗灰色微砂質土 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 5GY6/1オリーブ灰色微砂質土	
S K 365	13E	不整円形	0.90	0.71	0.14		
S K 366	13F	隅丸方形	1.30	1.38	0.44	N4/0灰色シルト混粘土 5Y5/6オリーブ色細砂 5Y4/1灰色シルト混粘土	
S K 367	12G	〃	3.35	1.45	0.07	N3/0暗灰色シルト混粘土	
S K 368	13G	不整円形	1.60	1.32	0.15		
S K 369	13F	隅丸方形	2.38	0.92	0.16	N3/0暗灰色細砂混粘土	
S K 370	13G	不整円形	0.82	0.65			
S K 371	13·14G	隅丸方形	2.60	3.05	0.31	N3/1オリーブ黒色シルト混粘土 5Y5/6オリーブ色細砂	
S K 372	13G	円形	0.85	0.70	0.14	5B4/1暗青灰色微砂シルト	
S K 373	14G	〃	0.63	0.72	0.13	N4/0灰色微砂混粘質土	
S K 374	15F	楕円形	2.35	2.95	0.27	5B4/1暗青灰色シルト混粘土	
S K 375	15G	〃	0.40	0.92	0.06	N4/0灰色細砂混粘土	
S K 376	15I	不整円形	0.85	0.65	0.14	N3/0暗灰色細砂混粘土	
S K 378	16EF	円形	0.95	0.75	0.12	暗褐色粘質土	
S K 379	17E	楕円形	0.85	0.55	0.19	灰色微砂混粘土	
S K 380	17EF	不定形	1.00	1.15	0.10	黒灰色微砂混粘質土 黒オリーブ灰色シルト	
S K 381	16F	楕円形	0.75	1.35	0.19		
S K 383	17F	〃	6.45	4.95	0.49	黒灰色細礫混シルト 青灰色微砂混粘質土 明灰色微砂	
S K 384	16G	〃	0.75	0.92	0.23	赤褐色シルト混粘土	
S K 385	〃	〃	0.35	1.15	0.12		
S K 386	15H	〃	1.37	0.61	0.18	暗オリーブ灰色粘質土 明褐色細砂	
S K 387	15I	〃	0.55	0.81	0.08		
S K 388	8E	円形	1.90	1.82	0.16	7.5Y4/2灰オリーブ色砂礫混微砂質土	弥生土器(II)
S K 389	9G	隅丸方形	0.45	0.95	0.09	5B3/1暗青灰色粗砂混シルト質粘土	古式土師器

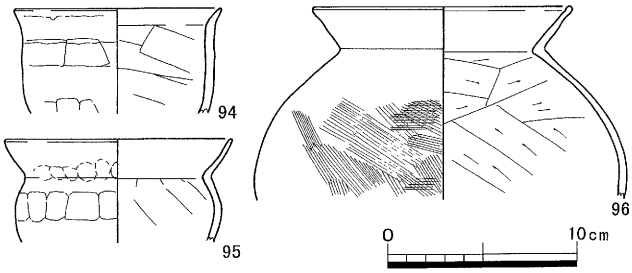
落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ 301（図版一七）

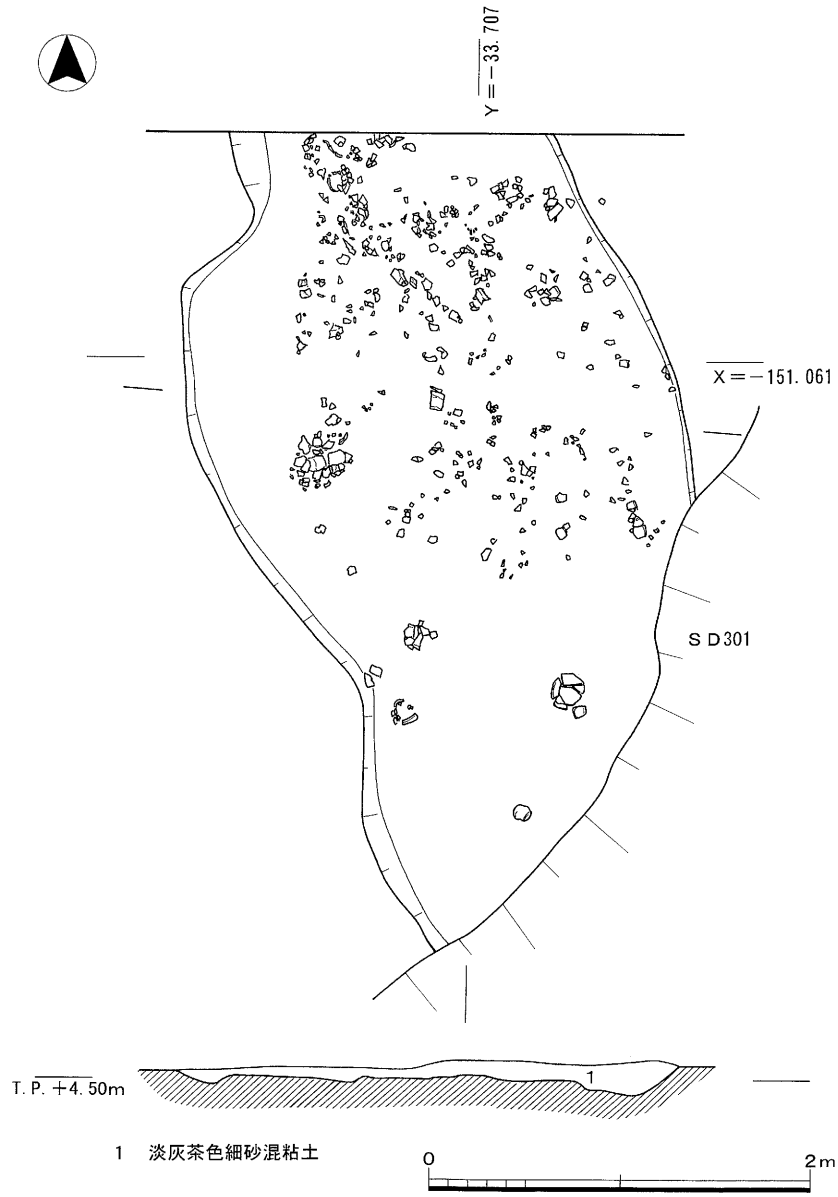
１区北西部の６・７Ｄ・Ｅ地区で検出した。北部および西部が調査区外に至るため全容は不明である。**ＳＥ 301・ＳＥ 302、ＳＰ 3001** に切られている。検出部分で東西幅10.08m、南北幅2.29m、深さ0.18mを測る。埋土は青灰色礫混砂質土である。遺物は弥生時代後期後半に比定される弥生土器が少量出土しているが実測し得たものはない。

ＳＯ 302（第49・50図、図版一八・五六）

１区北西部の６・７Ｅ地区で検出した。南北方向に伸びる不定形のもので、北部は調査区外、南部は**ＳＤ 301** に切られている。検出部分で東西幅3.4～5.2m、南北幅4.30m、深さ0.35mを測る。埋土は淡灰茶色細砂混粘土である。遺物は古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される古式土師器片が多量出土しているが細片化したものが大半を占めた。３点（**94** ～ **96**）を図化した。**94** は口縁部が小さく屈曲するやや粗製の小形鉢片である。色調は褐灰色。生駒西麓産。**95** は口径が体部最大径を凌駕する精製の小形丸底壷（小形壷Ｂ$_2$）片である。復元口径11.8cmを測る。色調は淡褐灰色。生駒西麓産で、実体鏡で角閃石の含有が認められる。**96** は布留式甕（甕Ｆ$_1$）片である。色調は淡褐灰色。生駒西麓産。**95** と同様、実体鏡により角閃石の含有が認めら



第 49 図　Ｓ 0302 出土遺物実測図

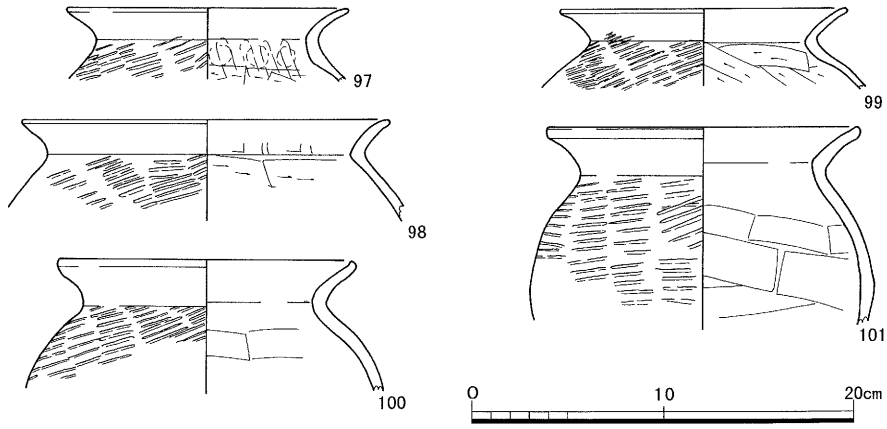


第 50 図　Ｓ 0302 平断面図

れる。布留Ⅰ期に比定される。

ＳＯ 303(第51・53図、図版一八・五六)

１区東部の８Ｈ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、南端は１・２区を区画する側溝で切られている。各遺構との関係では、北端から**ＳＤ 304** が北に向かって伸びている他、**ＳＰ 3051** に切られている。検出部分で東西幅4.27m、南北幅7.15m、深さ0.2mを測る。二段掘方を有するもので、東部がやや深くなっている。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトの単一層である。遺物は二段掘方の下段部分を中心に古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される細片化した古式土師器類が少量出土している。５点(**97** ～ **101**)を図化した。**97** ～ **99** は庄内式甕である。３点共に河内型庄内式甕の最古形式に分類される。屈曲部分の形態では、丸味を持つ **97** と「く」の字を呈する **98・99** があり、**97** についてはヘラケズリが屈曲部に及ばない。体部外面のタタキは４本/cm程度で右上がりに施されている。体部内面上位のヘラケズリは逆時計回りに水平方向に削られている。**100・101** はＶ様式系甕の小片である。共に口縁部は丸味を持って外反するもので、端面は外傾する小端面を作る。色調は褐灰色。生駒西麓産である。庄内Ⅰ期。



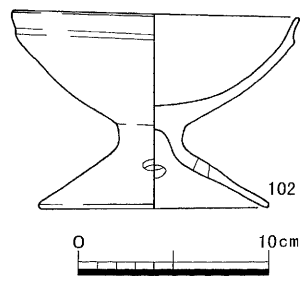
第 51 図　Ｓ 0303 出土遺物実測図

ＳＯ 304

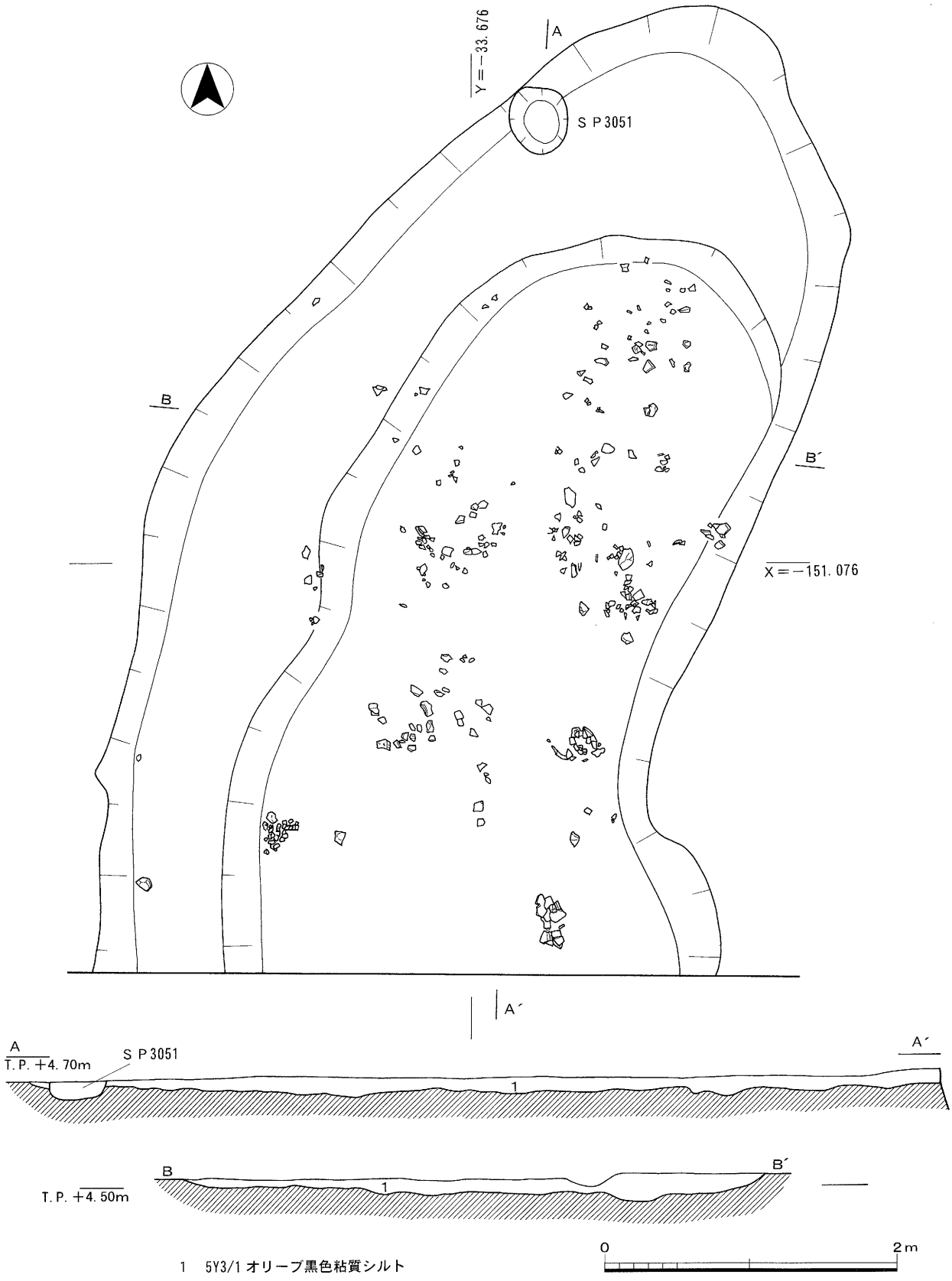
２区東部の９～11Ｇ～Ｈ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、北端は１・２区を区画する側溝に切られている。各遺構との関係では、２面の遺構である**ＳＫ 208**、**ＳＤ 223・224・225**、３面の遺構である**ＳＰ 3151** ～ **3153** に切られている。検出部分で東西幅4.15～6.75m、南北幅27.65m、深さ0.28mを測る。埋土は黄褐色砂質土である。遺物は土師器の小片が少量出土しているが、時期を明確に出来たものはない。

ＳＯ 305(第52図、図版一九・五六)

ＳＯ 304 南部の東に隣接している。北西－南東方向に広がる不定形の落ち込みで南東部分は調査区外に至る。各遺構との関係では、２面の遺構である**ＳＤ 226・237・238**、３面の遺構である**ＳＫ 363**、**ＳＰ 3168** ～ **3172** に切られている。検出部分で東西幅9.45m、南北幅9.05m、深さ0.19mを測る。埋土はN5/0灰色微砂質土である。遺物は弥生時代後期後半～古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される土器類の細片が少量出土している。高杯１点(**102**)を図化した。低い脚台に椀形の杯が付く高杯〔椀形高杯Ｃ〕である。スカシ孔は４個穿たれている。色調は淡橙色である。弥生時代後期末(弥生時代後期後半新相－様相３)にあたる。遺構の帰属時期については、最も新しい遺物から勘案して古墳時代前期後半(布留式新相)が推定される。



第 52 図　Ｓ 0305 出土遺物実測図

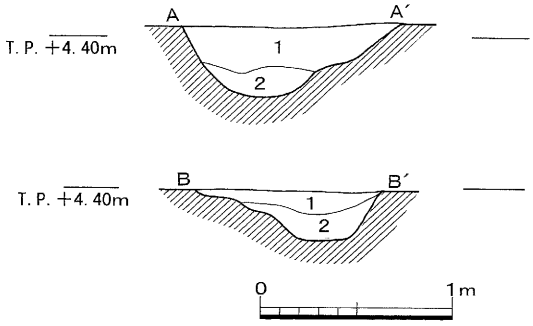


第 53 図　S O 303 平断面図

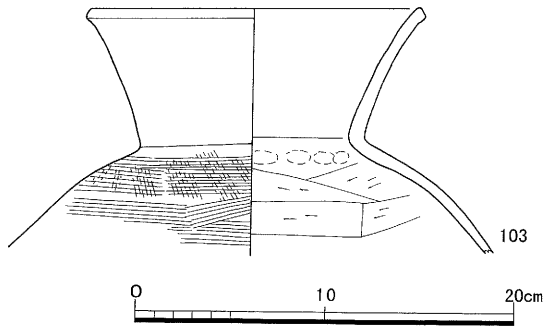
溝（ＳＤ）

ＳＤ 301（第54・55図、図版二〇・五六）

１・２区西部で検出した。北東－南西方向にほぼ直線的に伸びるもので、両端は調査区外に至る。**Ｓ 0302** を切る他、**ＳＥ 304・ＳＰ 3261** に切られている。検出長36.0ｍを測る。幅は北東に行くに従って漸増しており0.5～1.5ｍを測る。深さ0.21～0.43ｍで、溝底の標高は南西端でT.P.＋3.99ｍ、北東端でT.P.＋4.14ｍを測るため流下方向は北東から南西方向が推定される。埋土は２層からなる。遺物は古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される古式土師器が少量出土している。大形直口壺（大形直口壺Ａ）片１点（**103**）を図化した。口縁部から体部上半が残存している。口径17.3㎝を測る。口縁部が斜上方に外反して開くもので、端部は外傾し幅広の端面を形成している。色調は淡赤褐色。布留Ⅰ期。



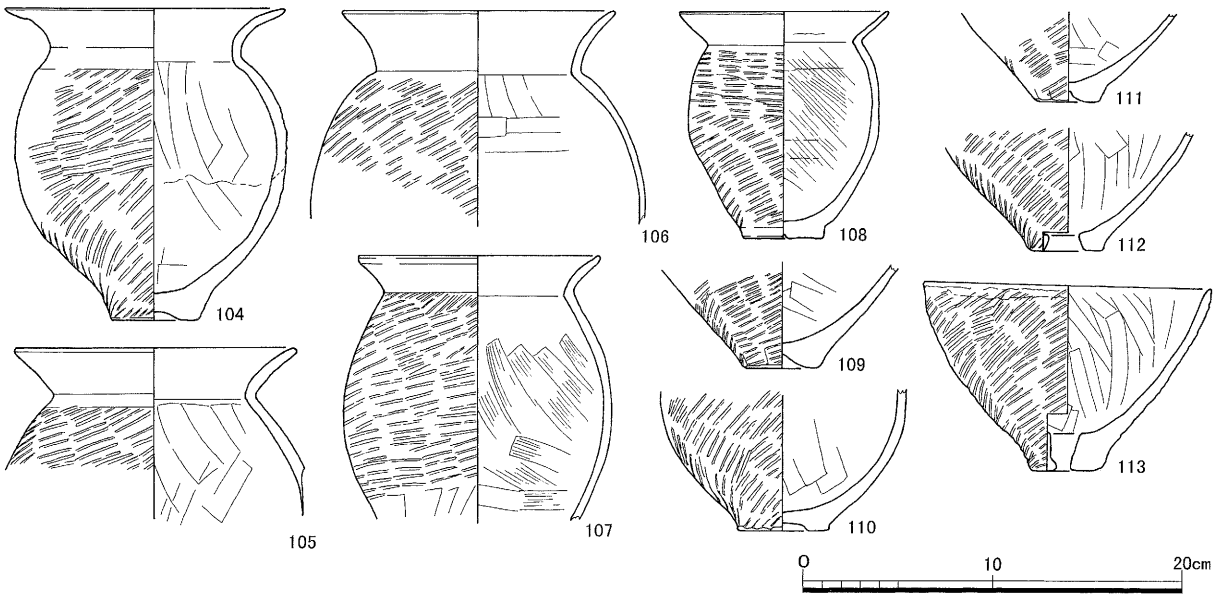
第 54 図　ＳＤ 301 断面図



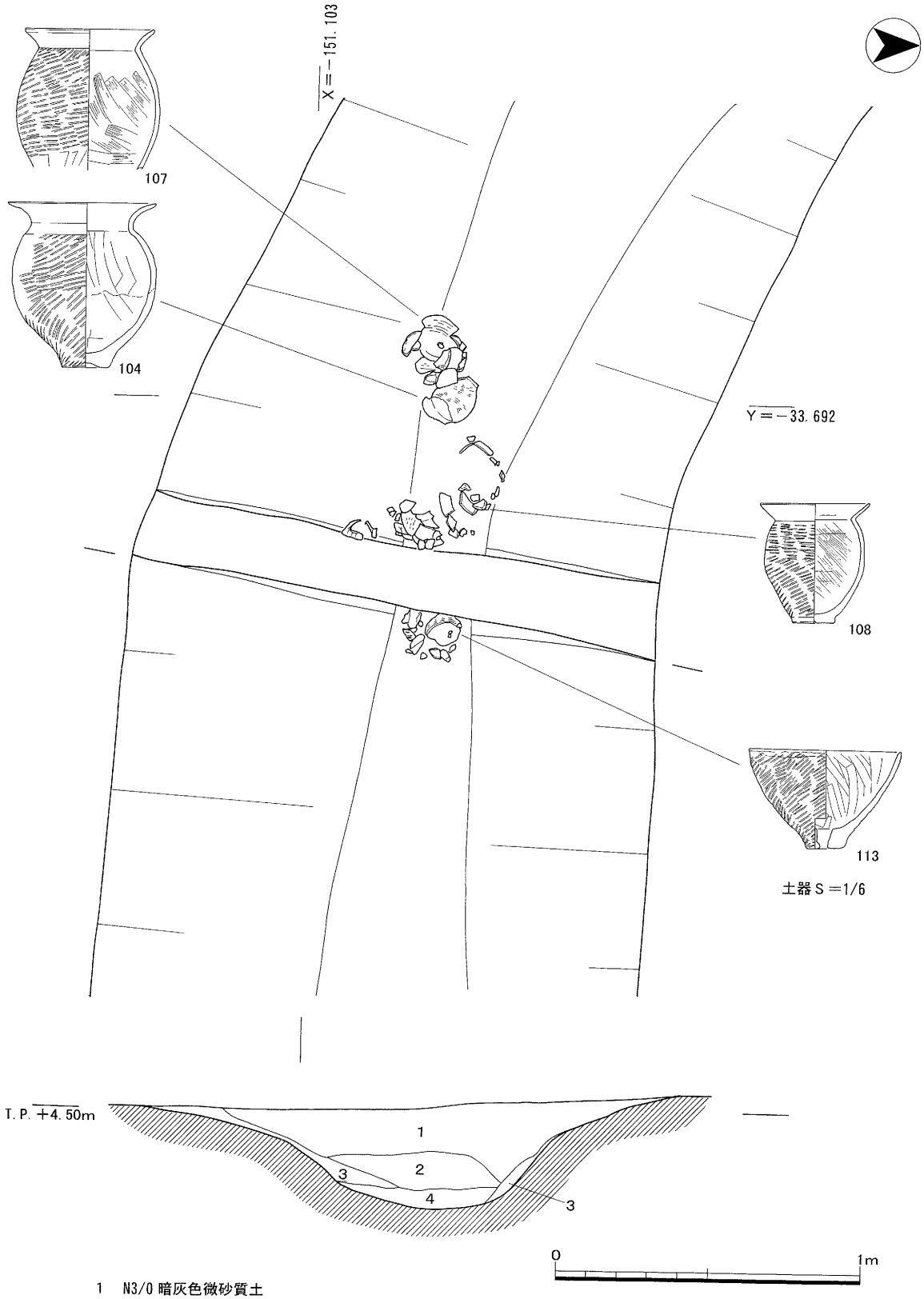
第 55 図　ＳＤ 301 出土遺物実測図

ＳＤ 311（第56・57図、図版一九・五六・五七）

２区東部の11Ｆ～Ⅰ地区で検出した。東西方向に蛇行して伸びるもので、東端は調査区外に至る。西端で**ＳＤ 310** に切られ、11Ｇ地区付近で**ＳＤ 312** と合流している。**ＳＰ 3161・3166・3167・3173 ～ 3175** に切られている。検出長22.0ｍ、幅0.5～4.5ｍ、深さ0.19～0.34ｍを測る。埋土は４層から成る。遺物は弥生時代後期後半に比定される弥生土器が出土している。特に、11Ｆ地区では



第 56 図　ＳＤ 311 出土遺物実測図



1　N3/0 暗灰色微砂質土
2　N4/0 灰色粘質土
3　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色微砂シルト
4　N7/0 灰白色微砂

第 57 図　ＳＤ 311 土器集積部分平断面図

土器が集中して出土した部分があった。10点(104 ～ 113)を図化した。104 ～ 111 はＶ様式甕である。108 が小形、他は中形である。口縁部の形態では、外反して開き口縁端部が丸く終わる 104 ～ 106、上方に摘み上げ気味に終わる 107、「く」の字に屈曲し端面が尖る 108 がある。底部は突出する 104・108・110 と突出しない 109・111 がある。底部は平底が 108、ドーナツ底が 104・109 ～ 111 である。色調は褐灰色。全て生駒西麓産である。112・113 は有孔鉢である。113 が完形品で口径15.2cm、器高9.7cm、底部径3.5cmを測る。体部外面調整は 112 がナデ、113 が右上がりのタタキを施す。色調は灰褐色。生駒西麓産である。弥生時代後期後半に比定される。

第７表　第３面　溝(ＳＤ)一覧表(単位m)

遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
ＳＤ 302	8F	2.50	0.40	0.13	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	古式土師器(布留新)
ＳＤ 303	7・8F	9.80	0.81	0.22	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 明黄灰色微砂質土 5GY6/1オリーブ灰色微砂質土	弥生土器(Ｖ)
ＳＤ 304	7･8H	8.40	0.81	0.12	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
ＳＤ 305	7～9I	20.4	0.75	0.25	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	古式土師器(庄内古)
ＳＤ 306	9C	2.60	0.61	0.11	N3/0暗灰色粘質土	
ＳＤ 307	10･11C	8.40	0.95	0.23	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 7.5YR7/8黄橙色微砂質土	古式土師器(布留)
ＳＤ 308	11D	4.40	0.82	0.10	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	弥生土器
ＳＤ 309	8･9E	2.05	0.75	0.11	N5/0灰色粘土	
ＳＤ 310	9～11E･F	27.15	1.20	0.22	N3/0暗灰色微砂質土	弥生土器(Ｖ)
ＳＤ 312	11･12G	7.70	1.60	0.91	2.5Y3/1黒褐色微砂質土 黒褐色シルト 2.5Y7/6明黄褐色微砂	弥生土器(Ｖ)
ＳＤ 313	10･11H	7.11	1.51	0.14	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
ＳＤ 314	9～11H･I	30.52	1.02	0.09	〃	弥生土器(Ｖ)
ＳＤ 315	11･12D	9.10	0.60	0.60	5B4/1暗青灰色粘土 5B3/1暗青灰色細砂混粘土	
ＳＤ 316	12E･F	6.72	0.45	0.75	5B4/1暗青灰色粘土	
ＳＤ 317	12F	1.80	0.31	0.80	〃	
ＳＤ 318	12～15F･G	24.11	0.45	0.35	灰褐色微砂質土 5B4/1暗青灰色粘土	
ＳＤ 319	15･16G	9.95	1.92	0.76	青灰色シルト	
ＳＤ 320	15･16G	8.20	0.44	0.15	〃	

小穴(ＳＰ)

総数で264個(ＳＰ 3001 ～ＳＰ 3264)を検出した。各調査区で検出されているが、特に弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする遺構が集中する１・２区での周密度が高い。時期的には弥生時代後期・古墳時代初頭前半(庄内式古相)・古墳時代前期前半～後半(布留式古～新相)・古墳時代後期・飛鳥時代のものがある。時期別の比率では、古墳時代前期(布留式期)のものが大半で、古墳時代後期のものは２区の一部と４区に集中している。飛鳥時代のものは、２区で散見される程度で構築面についても３面より上部が想定される。上面形状では、円形・不整円形・楕円形・方形・隅丸方形がある。規模は幅0.10～1.24m、深さ0.05～0.65mを測る。掘立柱建物を構成するＳＰ 3011 ～ＳＰ 3019 の他にも、一部柱痕を残すものがあったが建物跡を想定するに至っていない。

遺物が出土した小穴を中心に平断面図を掲載し、法量等の詳細については第８表に示した。

小穴出土遺物

ＳＰ 3080(第58図、図版二一・五七)

高杯２点(**114・115**)を図化した。**114** は杯部の稜部分に丸みを持つ小形高杯(高杯Ａ$_6$)である。**115** は脚部で完存している。脚部高8.9cm、裾部径11.7cmを測る。柱状部は縦方向のナデの後、横方向の細筋のヘラミガキを散発的に施す他、柱状部から裾部にかけて縦方向のハケを施す。色調は淡褐灰色。布留Ⅳ期。

ＳＰ 3134(第58図、図版二一・五七)

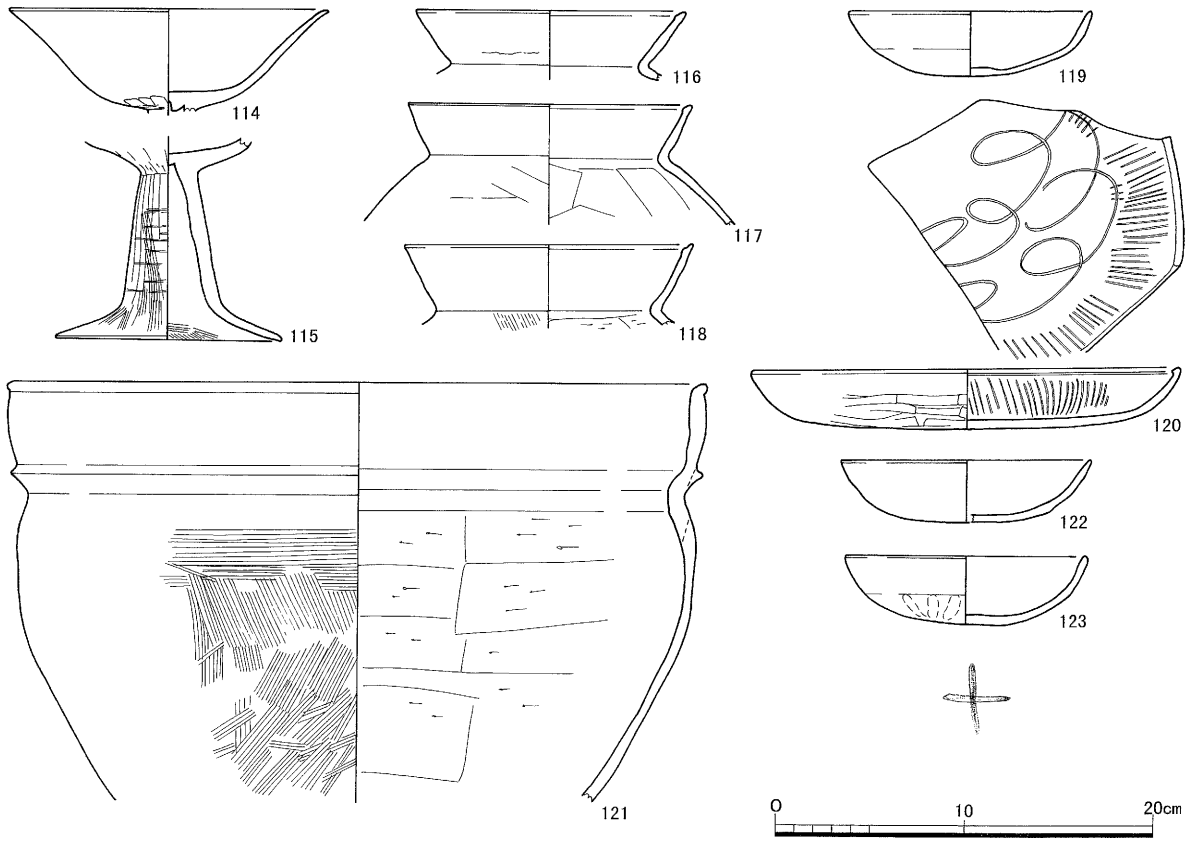
土師器杯１点(**119**)を図化した。完形品で口径12.6cm、器高3.45cmを測る。体部内面および口縁部外面は比較的丁寧なナデを多用しているが、体部外面中位から底部にかけては未調整で器壁面の凹凸が顕著である。色調は淡赤褐色。奈良時代前半。

ＳＰ 3174(第58図、図版五七)

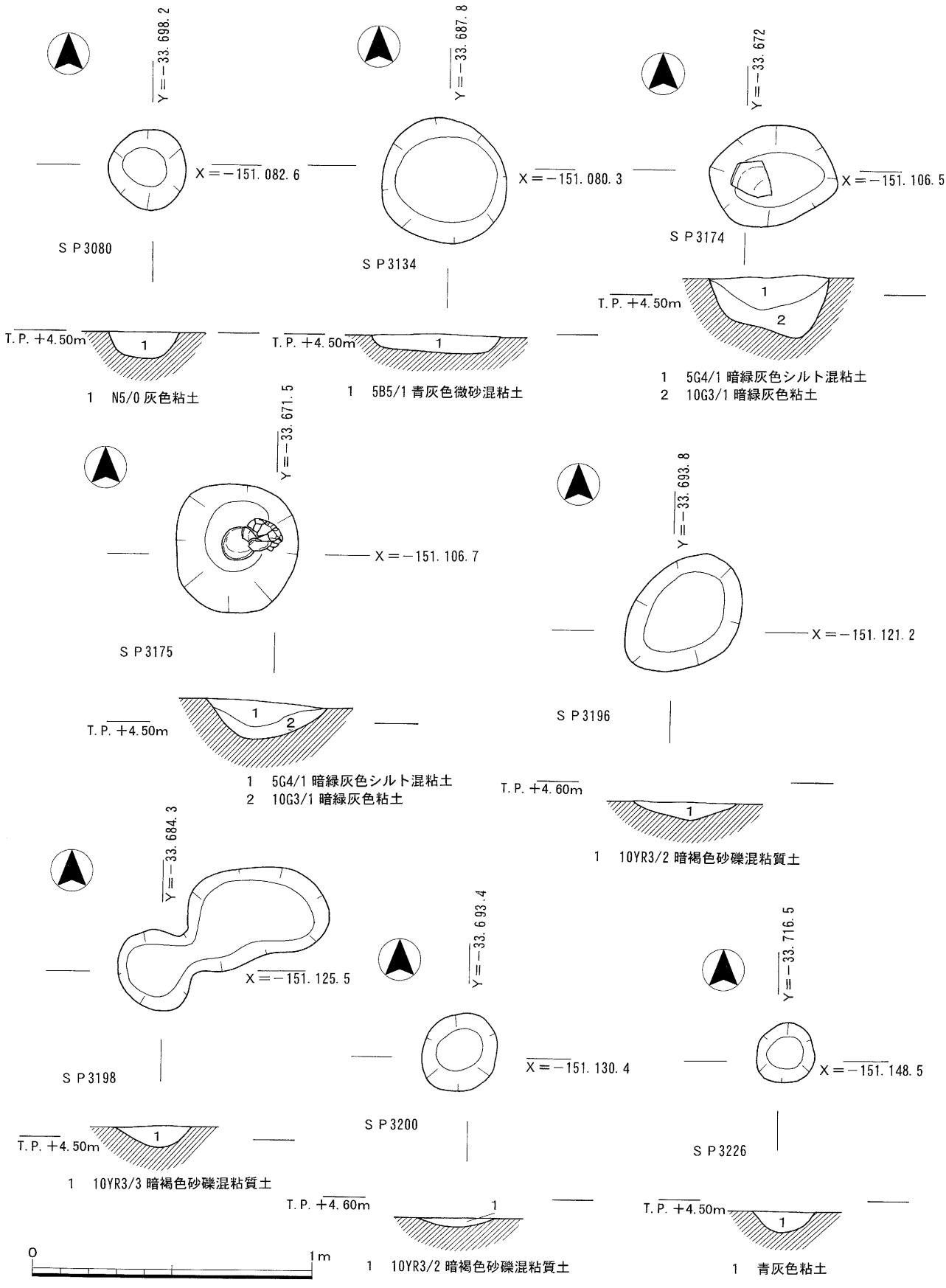
土師器皿１点(**120**)を図化した。口縁端部が内側に肥厚する大形皿である。復元口径22.2cm、器高3.2cmを測る。内面に螺旋暗文、放射暗文が施文されている。外面は口縁部ヨコナデ、以下底部にかけてヘラケズリを行う。色調は淡黄橙色。奈良時代前半。

ＳＰ 3175(第58図、図版二一・五八)

杯２点(**122・123**)を図化した。**122** は約1/4が残存している。復元口径13.0cm、器高3.3cmを測る。123は完形品で口径12.6cm、器高3.7cmを測る。裏面には「十」の墨書が記されている。共に奈良時代前半。



第58図　ＳＰ 3080(114・115)、ＳＰ 3134(119)、ＳＰ 3174(120)、ＳＰ 3175(122・123)、ＳＰ 3196(116)、ＳＰ 3198(121)、ＳＰ 3200(117)、ＳＰ 3226(118)出土遺物実測図



第59図　S P 3080、S P 3134、S P 3174、S P 3175、S P 3196、S P 3198、S P 3200、S P 3226 平断面図

ＳＰ 3196(第58図、図版二二)

布留式甕(甕Ｆ$_3$)片１点(116)を図化した。116は復元口径14.2cm。色調は赤褐色。布留Ⅳ期。

ＳＰ 3198(第58図、図版二二・五七)

山陰系の大形鉢１点(121)を図化した。121は小さく外反する頸部と口縁部の境に明瞭な稜を形成した後、上方に口縁部が直線的に伸びるもので、端部付近で小さく外反し丸味のある端面を作る。体部外面は上位でヨコハケ、以下タテハケを施す。色調は褐灰色。胎土からみて在地産である。

ＳＰ 3200(第58図、図版五七)

布留式甕(甕Ｆ$_3$)片１点(117)を図化した。117は復元口径15.0cmを測る。色調は赤褐色。布留Ⅳ期。

ＳＰ 3226(第58図、図版二二)

布留式甕(甕Ｆ$_2$)片１点(118)を図化した。118は復元口径15.2cmを測る。色調は淡黄橙色。布留Ⅳ期。

第８表　第３面　小穴(ＳＰ)一覧表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ 3001	6D	円形	0.40	0.40	0.14	N3/0暗灰色微砂質土	
ＳＰ 3002	〃	楕円形	1.24	0.55	0.30	暗青灰色砂礫混砂質土 暗青灰色粘土	弥生土器
ＳＰ 3003	78C	方形	0.65	0.30	0.14	N3/0暗灰色微砂質土	
ＳＰ 3004	8C	円形	0.37	0.34	0.10	〃	
ＳＰ 3005	〃	〃	0.42	0.38	0.11	〃	
ＳＰ 3006	8CD	隅丸方形	0.60	0.45	0.17	5PB4/1暗青灰色砂礫混砂質土	
ＳＰ 3007	8D	円形	0.44	0.39	0.11	〃	
ＳＰ 3008	〃	〃	0.40	0.34	0.09	〃	
ＳＰ 3009	〃	〃	0.36	0.34	0.10	〃	弥生土器
ＳＰ 3010	7E	〃	0.46	0.44	0.19	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＰ 3011	8E	〃	0.27	0.22	0.20	黄褐色微砂混粘質土	ＳＢ 301
ＳＰ 3012	〃	〃	0.35	0.29	0.45	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	弥生土器(Ⅴ) ＳＢ 301
ＳＰ 3013	〃	〃	0.25	0.25	0.20	黄褐色微砂混粘質土	ＳＢ 301
ＳＰ 3014	〃	〃	0.26	0.24	0.16	〃	ＳＢ 301
ＳＰ 3015	〃	〃	0.30	0.26	0.43	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	ＳＢ 301
ＳＰ 3016	〃	〃	0.32	0.22	0.21	黄褐色微砂混粘質土	ＳＢ 301
ＳＰ 3017	〃	〃	0.26	0.25	0.16	〃	ＳＢ 301
ＳＰ 3018	〃	〃	0.32	0.30	0.40	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 5Y3/1オリーブ黒色粘質土	弥生土器(Ⅴ) ＳＢ 301
ＳＰ 3019	〃	〃	0.51	0.49	0.40	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	ＳＢ 301
ＳＰ 3020	〃	〃	0.25	0.25	0.05	〃	
ＳＰ 3021	〃	〃	0.30	0.28	0.14	〃	
ＳＰ 3022	〃	〃	0.30	0.28	0.10	〃	
ＳＰ 3023	〃	不整円形	0.32	0.31	0.11	〃	
ＳＰ 3024	〃	円形	0.37	0.36	0.07	〃	
ＳＰ 3025	〃	〃	0.31	0.29	0.09	〃	
ＳＰ 3026	〃	〃	0.31	0.30	0.05	〃	
ＳＰ 3027	〃	〃	0.61	0.54	0.11	〃	弥生土器(Ⅴ)
ＳＰ 3028	〃	〃	0.49	0.40	0.13	〃	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
S P 3029	8F	円形	0.35	0.29	0.13	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3030	〃	〃	0.25	0.21	0.08	〃	弥生土器(V)
S P 3031	〃	楕円形	0.71	0.34	0.05	〃	
S P 3032	〃	円形	0.25	0.22	0.08	〃	
S P 3033	8G	楕円形	0.75	0.45	0.16	〃	
S P 3034	〃	円形	0.31	0.26	0.05	〃	
S P 3035	〃	〃	0.36	0.35	0.08	〃	
S P 3036	7G	〃	0.42	0.38	0.16	5PB3/1暗青灰色粘質土 オリーブ灰色微砂 灰色微砂混粘質土	
S P 3037	7・8G	〃	0.55	0.41	0.13	5PB3/1暗青灰色粘質土 N3/0暗灰色微砂質土 オリーブ灰色微砂	
S P 3038	7G	〃	0.35	0.24	0.50	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土 黄橙色微砂混粘質土 暗青灰色粘土	
S P 3039	〃	〃	0.39	0.36	0.18	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土 5PB3/1暗青灰色粘質土	
S P 3040	8G	〃	0.35	0.35	0.09	N3/0暗灰色微砂質土 オリーブ灰色微砂	
S P 3041	〃	〃	0.35	0.28	0.07	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3042	7H	〃	0.30	0.28	0.13	暗灰色砂礫混砂質土 7.5YR7/8黄橙色微砂質土	
S P 3043	〃	不整円形	0.25	0.17	0.03	暗灰色砂礫混砂質土	
S P 3044	〃	円形	0.40	0.40	0.23	〃	
S P 3045	〃	〃	0.55	0.48	0.23	暗灰色砂礫混砂質土 明青灰色粘土	
S P 3046	7I	〃	0.20	0.18	0.07	暗灰色砂礫混砂質土	
S P 3047	〃	楕円形	0.50	0.35	0.18	暗灰色砂礫混砂質土 明青灰色粘土	弥生土器
S P 3048	〃	〃	0.49	0.29	0.13	5PB4/1暗青灰色砂礫混砂質土	古式土師器
S P 3049	8H	円形	0.28	0.28	0.13	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土 N4/0灰色微砂混粘質土	古式土師器
S P 3050	〃	〃	0.19	0.15	0.07	N4/0灰色微砂混粘質土 オリーブ灰色微砂	
S P 3051	〃	〃	0.40	0.39	0.17	N4/0灰色微砂混粘質土 淡灰褐色粘土	
S P 3052	〃	〃	0.55	0.49	0.22	暗灰色砂礫混砂質土 淡灰褐色粘土 オリーブ灰色微砂	
S P 3053	8I	〃	0.31	0.28	0.07	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3054	〃	楕円形	0.70	0.32	0.16	〃	
S P 3055	8H	円形	0.20	0.19	0.12	N4/0灰色微砂混粘質土 淡灰褐色粘土	
S P 3056	〃	〃	0.24	0.20	0.14	N4/0灰色微砂混粘質土 淡灰褐色粘土	
S P 3057	8・9C	〃	0.23	0.35	0.13	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3058	9C	〃	0.40	0.25	0.17	〃	古式土師器
S P 3059	〃	〃	0.30	0.32	0.16	〃	
S P 3060	〃	〃	0.41	0.35	0.18	5B4/1暗青灰色微砂混粘土	
S P 3061	〃	〃	0.32	0.25	0.16	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3062	9・10C	〃	0.35	0.28	0.05	5B4/1暗青灰色微砂混粘土	
S P 3063	9CD	〃	0.45	0.34	0.20	N3/0暗灰色微砂質土 N6/0灰色細砂	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP 3064	9D	円形	0.30	0.25	0.22	N3/0暗灰色微砂質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
SP 3065	〃	〃	0.48	0.41	0.28	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
SP 3066	〃	〃	0.43	0.40	0.17	〃	
SP 3067	〃	〃	0.45	0.40	0.10	〃	
SP 3068	9DE	〃	0.43	0.31	0.09	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 10BG6/1青灰色微砂	
SP 3069	9E	〃	0.64	0.54	0.11	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
SP 3070	〃	〃	0.46	0.30	0.15	N3/0暗灰色細砂混粘質土	古式土師器
SP 3071	10E	〃	0.30	0.25	0.08	〃	
SP 3072	〃	楕円形	0.37	0.25	0.06	N4/0灰色微砂混粘質土	
SP 3073	9E	円形	0.55	0.50	0.18	N3/0暗灰色粘質土	
SP 3074	〃	〃	0.54	0.48	0.07	〃	
SP 3075	〃	〃	0.35	0.25	0.06	〃	
SP 3076	〃	〃	0.29	0.21	0.13	N5/0灰色粘土	
SP 3077	8･9E	〃	0.30	0.38	0.22	N3/0暗灰色粘質土 10BG6/1青灰色微砂	
SP 3078	9E	〃	0.51	0.51	0.18	N3/0暗灰色粘質土	
SP 3079	〃	〃	0.35	0.31	0.13	5B4/1暗青灰色微砂混粘土	
SP 3080	9F	〃	0.29	0.27	0.09	N5/0灰色粘土	古式土師器(布留Ⅳ)
SP 3081	〃	〃	0.40	0.15	0.28	〃	
SP 3082	〃	楕円形	0.60	0.48	0.16	N3/0暗灰色細砂混粘質土 10BG6/1青灰色微砂	
SP 3083	10C	円形	0.45	0.30	0.19	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
SP 3084	〃	楕円形	0.55	0.35	0.10	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
SP 3085	〃	円形	0.46	0.38	0.29	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土 N4/0灰色微砂混粘質土 5B5/1青灰色粘土	
SP 3086	〃	〃	0.36	0.31	0.08	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
SP 3087	〃	〃	0.47	0.35	0.11	N3/0暗灰色微砂質土 N4/0灰色灰色微砂質土	
SP 3088	〃	〃	0.59	0.50	0.17	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
SP 3089	〃	〃	0.28	0.20	0.14	〃	
SP 3090	11C	〃	0.46	0.41	0.16	5B5/1青灰色微砂混粘土 10BG5/1青灰色粘質土	
SP 3091	〃	楕円形	0.47	0.26	0.12	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
SP 3092	〃	隅丸方形	0.60	0.46	0.31	N3/0暗灰色粘質土 10BG5/1青灰色粘質土	
SP 3093	〃	円形	0.30	0.29	0.10	N3/0暗灰色微砂質土 N4/0灰色微砂質土	弥生土器
SP 3094	10C	〃	0.29	0.27	0.06	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
SP 3095	〃	〃	0.27	0.25	0.06	〃	
SP 3096	〃	〃	0.45	0.45	0.16	N4/0灰色微砂混粘質土	
SP 3097	〃	〃	0.36	0.25	0.12	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
SP 3098	10D	〃	0.31	0.30	0.05	N4/0灰色微砂混粘質土	
SP 3099	〃	〃	0.39	0.31	0.10	〃	
SP 3100	〃	〃	0.39	0.32	0.13	N4/0灰色微砂混粘質土	
SP 3101	〃	〃	0.54	0.44	0.32	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 N3/0暗灰色微砂質土	弥生土器
SP 3102	〃	〃	0.47	0.41	0.23	N3/0暗灰色粘質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
S P 3103	10D	円形	0.43	0.33	0.31	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 N3/0暗灰色微砂質土	
S P 3104	〃	〃	0.32	0.31	0.11	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3105	〃	〃	0.45	0.22	0.05	〃	
S P 3106	〃	〃	0.35	0.35	0.12	N3/0暗灰色微砂質土	
S P 3107	〃	〃	0.40	0.25	0.23	5B5/1青灰色微砂混粘土	
S P 3108	11D	〃	0.25	0.25	0.12	5B4/1暗青灰色微砂混粘土	
S P 3109	〃	〃	0.65	0.51	0.19	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 5B5/1青灰色粘土	
S P 3110	10E	〃	0.31	0.28	0.17	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3111	11E	〃	0.50	0.48	0.07	〃	
S P 3112	〃	〃	0.35	0.25	0.05	〃	
S P 3113	10E	楕円形	0.60	0.35	0.07	N3/0暗灰色細砂混粘質土	
S P 3114	〃	円形	0.30	0.22	0.07	〃	
S P 3115	〃	〃	0.31	0.26	0.10	N3/0暗灰色微砂質土	
S P 3116	〃	〃	0.55	0.55	0.46	5PB4/1暗青灰色砂礫混砂質土 7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	古式土師器(布留)
S P 3117	10F	〃	0.43	0.35	0.07	N3/0暗灰色細砂混粘質土	
S P 3118	〃	〃	0.58	0.51	0.18	N3/0暗灰色細砂混粘質土 10BG6/1青灰色微砂	
S P 3119	10E	〃	0.56	0.58	0.25	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3120	11E	〃	0.58	0.59	0.39	5B4/1暗青灰色微砂混粘質土 7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3121	〃	〃	0.35	0.31	0.09	N3/0暗灰色粘質土 10BG6/1青灰色微砂	
S P 3122	〃	〃	0.33	0.31	0.06	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3123	〃	〃	0.32	0.32	0.10	N3/0暗灰色粘質土	
S P 3124	〃	〃	0.40	0.38	0.14	N3/0暗灰色細砂混粘質土	
S P 3125	〃	〃	0.45	0.35	0.25	N3/0暗灰色細砂混粘質土 10BG6/1青灰色微砂	
S P 3126	11F	〃	0.42	0.38	0.09	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3127	9F	〃	0.38	0.20	0.19	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 7.5Y6/1灰色細砂	
S P 3128	〃	〃	0.25	0.21	0.16	N3/0暗灰色粘質土 N4/0灰色微砂質土	
S P 3129	〃	〃	0.21	0.21	0.18	N3/0暗灰色粘質土	
S P 3130	9G	〃	0.45	0.45	0.56	5B5/1青灰色微砂混粘土 7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 N3/0暗灰色細砂混粘質土	
S P 3131	〃	〃	0.50	0.45	0.51	5B5/1青灰色微砂混粘土 10BG5/1青灰色粘質土	
S P 3132	〃	〃	0.30	0.20	0.18	5B5/1青灰色微砂混粘土 7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土 N3/0暗灰色細砂混粘質土	
S P 3133	〃	〃	0.41	0.35	0.13	5B5/1青灰色微砂混粘土 7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3134	〃	〃	0.45	0.44	0.07	5B5/1青灰色微砂混粘土	土師器(奈良前)
S P 3135	9F	〃	0.28	0.25	0.14	暗緑灰色微砂混粘質土	
S P 3136	〃	〃	0.35	0.35	0.18	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3137	〃	〃	0.29	0.25	0.05	〃	
S P 3138	〃	〃	0.35	0.30	0.15	〃	
S P 3139	〃	〃	0.50	0.35	0.07	〃	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 3140	9F	円形	0.34	0.30	0.18	N3/0暗灰色粘質土	
S P 3141	〃	〃	0.30	0.26	0.20	5B4/1暗青灰色微砂混粘土 10BG6/1青灰色微砂	
S P 3142	9G	〃	0.10	0.10	0.14	暗緑灰色微砂混粘質土(礫含む)	
S P 3143	〃	〃	0.23	0.21	0.11	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3144	〃	楕円形	0.42	0.33	0.12	5B5/1青灰色微砂混粘土 N4/0灰色微砂質土	
S P 3145	〃	円形	0.25	0.20	0.08	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3146	9F	〃	0.45	0.44	0.08	〃	
S P 3147	〃	〃	0.35	0.32	0.11	〃	
S P 3148	10G	楕円形	0.36	0.24	0.04	〃	
S P 3149	9G	円形	0.40	0.36	0.06	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
S P 3150	〃	楕円形	0.55	0.35	0.08	〃	
S P 3151	10H	円形	0.41	0.35	0.15	N5/0灰色粘土 10BG5/1青灰色粘質土	
S P 3152	9H	隅丸方形	0.58	0.55	0.15	N5/0灰色粘土(鉄分含む) N4/0灰色微砂質土 10BG5/1青灰色粘質土	
S P 3153	〃	円形	0.40	0.35	0.15	N5/0灰色粘土	
S P 3154	9I	〃	0.52	0.40	0.10	〃	
S P 3155	〃	〃	0.42	0.35	0.13	N3/0暗灰色細砂混粘質土	
S P 3156	〃	楕円形	0.75	0.52	0.18	N4/0灰色微砂混粘質土(炭化物含む)	
S P 3157	〃	円形	0.45	0.40	0.15	〃	
S P 3158	〃	〃	0.40	0.34	0.15	〃	
S P 3159	10F	楕円形	0.75	0.31	0.22	オリーブ灰色微砂質土 青灰色粘土	
S P 3160	〃	円形	0.32	0.32	0.08	5B5/1青灰色微砂混粘土	
S P 3161	11F	〃	0.40	0.31		〃	
S P 3162	〃	〃	0.30	0.25	0.06	N5/0灰色粘土(鉄分含む)	
S P 3163	11G	〃	0.25	0.25	0.07	〃	
S P 3164	〃	〃	0.70	0.55	0.21	〃	
S P 3165	〃	〃	0.49	0.35	0.23	〃	
S P 3166	〃	〃	0.25	0.23	0.14	5B5/1青灰色微砂混粘土	
S P 3167	〃	〃	0.40	0.36	0.32	5B5/1青灰色微砂混粘土 N4/0灰色微砂混粘質土	
S P 3168	10H	〃	0.48	0.45	0.05	N4/0灰色微砂混粘質土	古式土師器
S P 3169	10I	〃	0.30	0.29	0.04	〃	古式土師器
S P 3170	〃	楕円形	0.35	0.25	0.14	〃	
S P 3171	〃	円形	0.25	0.20	0.09	〃	
S P 3172	〃	〃	0.25	0.25	0.15	〃	
S P 3173	11H	楕円形	0.42	0.30	0.19	N5/0灰色粘土	古式土師器(庄内)
S P 3174	〃	楕円形	0.45	0.37	0.23	5G4/1暗緑灰色シルト混粘土 10G3/1暗緑灰色粘土	土師器(奈良前)
S P 3175	〃	隅丸方形	0.46	0.43	0.14	〃	土師器(奈良前)
S P 3176	12D	円形	0.52	0.40	0.03	5B4/1暗青灰色微砂シルト	
S P 3177	〃	〃	0.43	0.36	0.08	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土	
S P 3178	12C	〃	0.35	0.32	0.07	〃	
S P 3179	14C・D	〃	0.40	0.38	0.12	〃	
S P 3180	14D	〃	0.32	0.30	0.13	〃	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 3181	14D	隅丸方形	0.70	0.50	0.13	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土	
S P 3182	13E	円形	0.43	0.35	0.16	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土 N4/0灰色微砂混粘質土	
S P 3183	14E	〃	0.48	0.45	0.11	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土	
S P 3184	12·13F	〃	0.45	0.42	0.15	〃	
S P 3185	13F	〃	0.33	0.31	0.18	〃	
S P 3186	12G	楕円形	0.52	0.32	0.02	〃	
S P 3187	〃	円形	0.48	0.35	0.11	5B4/1暗青灰色微砂質土	
S P 3188	〃	〃	0.39	0.32	0.05	〃	
S P 3189	〃	〃	0.35	0.25	0.12	〃	
S P 3190	7H	〃	0.70	0.58	0.06	〃	古式土師器
S P 3191	12G	〃	0.35	0.30	0.05	〃	
S P 3192	〃	〃	0.41	0.40	0.18	5B4/1暗青灰色微砂シルト 5B3/1暗青灰色粘質土	
S P 3193	〃	〃	0.45	0.26	0.13	5B4/1暗青灰色微砂シルト	
S P 3194	12H	〃	0.23	0.20	0.06	〃	
S P 3195	12F	〃	0.45	0.92	0.06	〃	
S P 3196	13F	楕円形	0.49	0.35	0.06	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土	古式土師器(布留Ⅳ)
S P 3197	13G	〃	0.50	0.34	0.05	〃	
S P 3198	〃	不定形	0.78	0.34	0.07	〃	古式土師器
S P 3199	13F	円形	0.35	0.30	0.14	〃	
S P 3200	14F	〃	0.30	0.27	0.03	〃	
S P 3201	〃	楕円形	0.47	0.38	0.18	〃	
S P 3202	14G	円形	0.30	0.25	0.08	5B4/1暗青灰色微砂混粘土	
S P 3203	〃	〃	0.36	0.31	0.12	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
S P 3204	14F	〃	0.35	0.23	0.07	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土	
S P 3205	〃	〃	0.50	0.38	0.20	〃	
S P 3206	〃	〃	0.35	0.32	0.06	〃	
S P 3207	〃	〃	0.39	0.31	0.06	〃	
S P 3208	〃	〃	0.56	0.49	0.21	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土 10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
S P 3209	13H	〃	0.25	0.18	0.05	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土	
S P 3210	14G	〃	0.40	0.32	0.15	5B4/1暗青灰色微砂シルト	
S P 3211	〃	〃	0.50	0.41	0.12	10YR3/3暗褐色砂礫混粘質土	
S P 3212	14·15G	〃	0.41	0.29	0.08	〃	
S P 3213	15G	〃	0.35	0.29	0.10	〃	
S P 3214	〃	楕円形	0.41	0.26	0.10	〃	
S P 3215	〃	円形	0.38	0.36	0.13	〃	
S P 3216	14H	〃	0.43	0.36	0.13	〃	
S P 3217	〃	楕円形	0.55	0.29	0.06	〃	
S P 3218	〃	円形	0.35	0.25	0.10	〃	
S P 3219	15I	〃	0.31	0.29	0.07	〃	
S P 3220	〃	〃	0.40	0.30	0.08	〃	
S P 3221	15C	〃	0.50	0.45	0.21	青灰色微砂混粘土	
S P 3222	15D	〃	0.65	0.58	0.34	青灰色粘土	
S P 3223	〃	〃	0.28	0.21	0.09	〃	
S P 3224	〃	〃	0.28	0.25	0.13	〃	

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 3225	15E	円形	0.28	0.25	0.06	青灰色微砂混粘土	
S P 3226	〃	〃	0.22	0.21	0.07	青灰色粘土	古式土師器(布留Ⅳ)
S P 3227	16E	〃	0.28	0.25	0.04	〃	
S P 3228	17C	〃	0.41	0.36	0.14	灰色粘土	
S P 3229	16C	〃	0.32	0.26	0.09	青灰色粘土	
S P 3230	16D	楕円形	0.60	0.40	0.12	〃	
S P 3231	16E	円形	0.36	0.35	0.13	〃	
S P 3232	〃	〃	0.42	0.39	0.25	〃	
S P 3233	16E·F	〃	0.55	0.55	0.19	青灰色微砂混粘土	
S P 3234	17D	〃	0.49	0.41	0.12	黄褐色微砂質土	
S P 3235	〃	楕円形	0.70	0.45	0.17	青灰色微砂混粘土	
S P 3236	〃	円形	0.72	0.45	0.08	〃	
S P 3237	17E	〃	0.38	0.28	0.09	〃	
S P 3238	17D	〃	0.40	0.40	0.14	〃	
S P 3239	17E	〃	0.68	0.50	0.09	暗オリーブ灰色微砂混粘土	
S P 3240	〃	〃	0.35	0.25	0.04	青灰色粘土	
S P 3241	〃	〃	0.35	0.31	0.08	青灰色粘質土	
S P 3242	〃	〃	0.40	0.32	0.09	青灰色微砂混粘土	
S P 3243	〃	〃	0.41	0.38	0.09	灰色微砂混粘土	
S P 3244	16FG	楕円形	0.68	0.30	0.07	黒褐色粘土混シルト	
S P 3245	16H	円形	0.35	0.30	0.30	青灰色微砂混粘土 灰色粘土	
S P 3246	15I	楕円形	0.63	0.43	0.17	青灰色粘土	
S P 3247	〃	円形	0.53	0.50	0.31	〃	
S P 3248	〃	〃	0.35	0.30	0.33	〃	
S P 3249	15H	〃	0.35	0.28	0.08	〃	
S P 3250	16I	〃	0.35	0.35	0.09	〃	
S P 3251	17H	〃	0.51	0.35	0.04	〃	
S P 3252	17I	〃	0.45	0.40	0.15	灰色微砂混粘土	
S P 3253	10G	楕円形	0.31	0.22	0.14	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土(鉄分含む)	
S P 3254	〃	円形	0.35	0.34	0.09	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土	
S P 3255	〃	〃	0.38	0.31	0.18	〃	
S P 3256	〃	楕円形	0.36	0.20	0.19	〃	
S P 3257	11E	円形	0.40	0.32	0.06	7.5Y4/2灰オリーブ色微砂質土	
S P 3258	8F	〃	0.69	0.62	0.16	〃	
S P 3259	10F	〃	0.26	0.21	0.11	〃	
S P 3260	17D	〃	0.20	0.18	0.20	青灰色粘土	
S P 3261	7E	〃	0.65	0.55	0.52	5PB4/1暗青灰色砂礫混砂質土 5PB3/1暗青灰色粘質土	弥生土器
S P 3262	7G	〃	0.55	0.48	0.65	10Y4/2オリーブ灰色微砂混粘質土 淡灰色粘土 明青灰色粘土 オリーブ灰色微砂 明青灰色シルト 灰白色微砂	古式土師器
S P 3263	8H	楕円形	0.51	0.42	0.34	N4/0灰色微砂混粘質土 淡灰色粘土 明青灰色粘土 淡灰褐色粘土 オリーブ灰色微砂	

・**第４面**〔弥生時代後期前半〕(第60図、図版二三～二五)

第４面は、帰属する層位を異にする遺構を、層位に関係なく調査区毎に任意の高さで平坦にして検出された面である。このため、帰属する層位を異にする遺構が同一面上で検出された。ここでは、遺構の帰属する層位により、第４－１面～第４－３面の３つの遺構面に大別し、各遺構面に帰属する遺構について記載する。

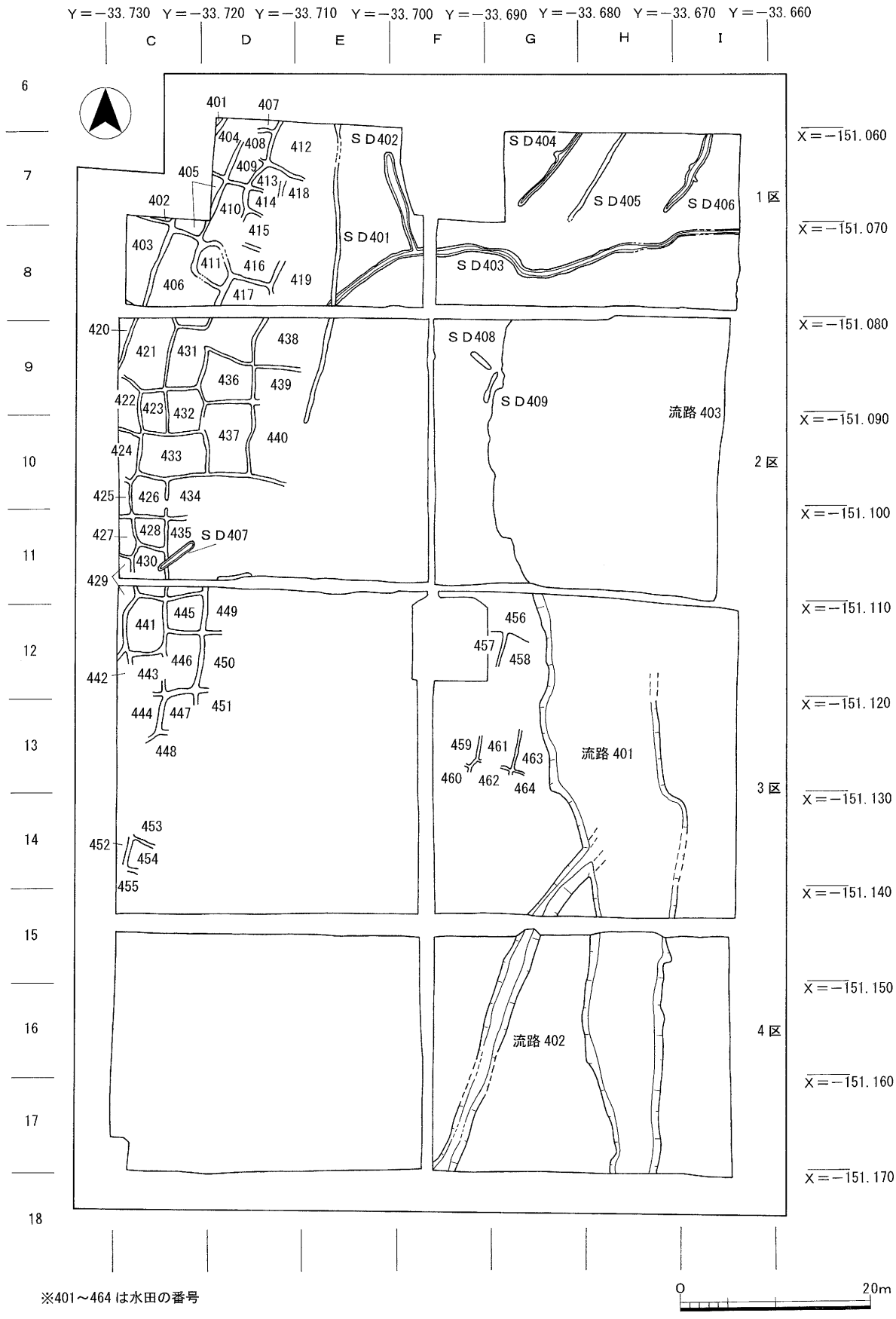
【第４－１面帰属遺構】(写真９、第９表)

第４－１面は、第Ⅷ層を除去した弥生時代後期の洪水層である第Ⅸ層の内、砂質土～粘質シルトを主体とする部分の上面(T.P.＋4.0～4.2m)である。第Ⅸ層の上位(弥生時代後期の第Ⅶ層中・第Ⅷ層上面)に帰属する遺構も本面に含める。発掘現場での実際の検出面は、第Ⅸ層上面～第Ⅹ－１層中の任意の面である。１区で検出された弥生時代後期の溝５条(**ＳＤ 401・ＳＤ 403～ＳＤ 406**)が第４－１面に帰属する遺構である。第Ⅹ－１層上面で検出された**ＳＤ 407**も第４－２面帰属の水田畦畔を切ることから本面の帰属とする。**ＳＤ 402・ＳＤ 408・ＳＤ 409**については、埋土が不明なため帰属は不明であるが、記載の便宜上本面で扱う。切り合いや層位から少なくとも４時期に亘って掘削されていることがわかる。各溝の検出地区・規模・埋土等については、第９表に示した。いずれの溝も埋土からの出土遺物はない。**ＳＤ 404・ＳＤ 405**については、平行して伸び埋土も同一であることから、同一の企図により掘削された一連の溝群と捉えることができる。溝が掘削された目的については詳らかにできないが、第４－２面帰属の水田遺構に後続する時期の土地利用に伴うものである。居住域に伴う遺構が検出されていないことと、弥生時代中期中葉以降、主に生産域として利用されていたことから考えて、生産活動に伴うものであったと推測される。

写真９　１区 弥生時代後期溝群(東から)

第９表　第４－１面 溝(ＳＤ)一覧表(単位m)

遺構番号	地区	検出長	幅	深さ	断面形状	埋土	備考
ＳＤ 401	6～10E	30.7	0.2～0.6	0.13	浅い皿形	不明	第Ⅶ層中遺構
ＳＤ 402	7E･F､8F	10.6	0.6～1.1	0.17	—	不明	ＳＤ 403 に切られる
ＳＤ 403	8E～I	45.2	0.6～1.2	0.48	椀形	灰黒色粘質土(炭化物含む)	第Ⅸ層上面遺構 ＳＤ 401 に切られる
ＳＤ 404	7G･H	10.1	0.4～0.7	0.25	Ｕ字形	灰白色細砂質土	第Ⅸ層上面遺構
ＳＤ 405	〃	10.6	0.35～0.5	0.13	椀形	〃	第Ⅸ層上面遺構
ＳＤ 406	7H･I	9.7	0.4～1.1	0.27	椀形	青灰色微砂混粘質土	第Ⅷ層上面遺構
ＳＤ 407	11C	4.4	0.7～0.8	0.11	—	不明	水田畦畔を切る
ＳＤ 408	9F･G	2.9	0.4～0.5	0.08	—	不明	
ＳＤ 409	〃	3.5	0.35～0.6	0.07	—	不明	



第 60 図　1 ～ 4 区第 4 面検出遺構平面図（S＝1 /600）

【第４－２面帰属遺構】

第４－２面は、弥生時代後期の洪水砂層である第Ⅸ層を除去した第Ⅹ－１層上面(T.P.＋4.0～4.4m)である。発掘現場での実際の検出面は、第Ⅹ－１層上面から下面にかけての任意の面である。１区～３区西部・３区東部の一部で検出された弥生時代後期の水田65筆(**水田401～水田465**)、３区・４区の東部で検出された**流路402**、１区・２区の壁断面で確認した**流路403**が第４－２面に帰属する遺構である。

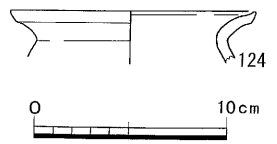
流路(**流路**)

流路402

３区南東部から４区東部にかけての14G・H、15G、16～17F・G地区で検出された。南南西―北北西方向に伸びる流路である。**流路401・流路403**の埋土を切り東壁沿いに伸び、２区東部で調査地外に抜けることが壁断面写真・航空写真から確認できる。**流路401・流路403**の上位では、埋土を一緒に掘削したため、平面的には検出されていない。検出部分での全長38.5m、幅2.0～3.0m、深さ0.85mを測る。埋土は、砂礫を主体とし、微砂質土～粘質土の薄層を挟む。埋土からの出土遺物はない。流路は、砂礫を主体として充填されていることから、上流である南側に本流路(河川)の存在が示唆され、直線的に伸びることから、その本流路から調査地付近に水を引くための人口流路と推測される。

流路403(第61図)

この流路は、北壁・東壁断面と１・２区間側溝の壁断面で確認した流路である。１区東部では、流路埋土より上位の第４－１面で遺構検出が行われたため、第４－２面では平面的には検出されておらず、２区東部では**流路401**の埋土として一緒に埋土が掘削されため、流路の肩に当たる部分は平面的に検出されていない。平面的には、１区・２区東部の下位面(第５面以下)で撹乱としてその底部分が検出されている(第63図)。断面および撹乱の平面的な位置から、２区南東部に南東側から流れて来て、２区東部で北に流れを変え、１区南東部で西に流れを変え、すぐに**流路503**の旧流路に重なるように北に流れを変え、調査地の北側に抜けていたと考えられる。流路にほぼ直交する１・２区間側溝の北壁部分で確認できる幅は約14.5m、深さは1.5m以上を測る。埋土は、１・２区間側溝の北壁部分では、西側斜面に灰白色砂礫が堆積し、東側に灰色を基調とする微砂～シルトが堆積する。出土遺物については、**流路403**と重なる部分では、**流路401**の埋土として一緒に掘削されたため、双方の埋土の遺物が混じって取上げられている。取上げられた位置から**流路403**の埋土に帰属することが明らかな出土遺物としては、弥生土器(河内第Ⅴ様式・第Ⅰ様式)の破片が数点ある。その内弥生土器１点(**124**)を図化した。**124**は第Ⅴ様式の甕である。口縁部から肩部にかけての約1/5が残存する。器面調整は肩部内面に横方向のヘラケズリ、それ以外の部分は内外面ともにヨコナデを施す。胎土には径３㎜以下の砂礫粒を含む。長石・石英が目立ち、生駒西麓産の角閃石の含有は微量である。色調は、外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面が灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。



第61図　流路403砂礫層出土遺物実測図

水田(**水田**)

水田(第10表、図版二四・二五)

調査地北西部を中心に畦畔で区画された水田64筆(**水田401**～**水田464**)が検出された。調査地北西部以外のところでは、3区東部で局地的に畦畔が検出された。畦畔が見られない1区・2区の中央部分でも、水田内で検出されたヒトの足跡の分布が見られることから、水田域はさらに広がっていたと考えられる。残りの良い調査地北西部の水田を見ると、調査地の南東側から北西側にかけて低くなる地形の等高線に沿って、概ね南北方向に伸びる畦畔を構築し、その間を東西方向に伸びる畦畔を構築することにより区画して水田を作ったことが看取できる。畦畔は水田耕作土である第X－1層を盛ることにより構築している。畦畔の規模は基底幅0.3～0.5m、高さ5cm前後を測る。畦畔には水口と断定できるものは確認できず、各水田への水の取込みは、標高の高い南東側から北西側に畦畔を越流させることにより行われたと考えられる。各水田については、第10表に示した。

第10表　第4－2面 水田一覧表(単位m)(田積の括弧内は検出部分の田積)

遺構番号	地区	田積(㎡)	標高(T.P.＋m)
水田401	6D	(0.5)	4.11～4.07
水田402	7C	(0.2)	4.11
水田403	7～8C	(29.1)	4.11～4.02
水田404	6～7D	(10.9)	4.12～4.17
水田405	7D、8C・D	(5.6)	4.16～4.08
水田406	8～9C・D	(35.6)	4.13～4.07
水田407	6～7D	(1.8)	4.32～4.23
水田408	7D	(3.1)	4.23～4.21
水田409	〃	4.0	4.21～4.14
水田410	7～8D	15.6	4.17～4.11
水田411	8C・D	10.0	4.16～4.11
水田412	6～7D・E	(35.1)	4.32～4.21
水田413	7D・E	(10.7)	4.27～4.19
水田414	7D	(3.5)	4.26～4.24
水田415	7～8D	(5.9)	4.26～4.22
水田416	8D	(13.8)	4.21～4.13
水田417	8～9D	(29.7)	4.24～4.11
水田418	7D・E	(12.6)	4.27～4.24
水田419	8D	—	4.21～4.17
水田420	8～9C	(4.1)	4.01～4.00
水田421	〃	(30.8)	4.09.～3.99
水田422	9～10C	(11.3)	4.05～4.00
水田423	〃	9.7	4.13～4.00
水田424	10C	(8.3)	4.06～4.04
水田425	10～11C	(3.8)	4.02～4.01
水田426	〃	12.8	4.16～4.04
水田427	11C	(6.1)	4.08～3.99
水田428	〃	7.8	4.15～4.05
水田429	11～12C	50.0	4.07～4.01
水田430	11C	(11.4)	4.13～4.03
水田431	9C・D	19.2	4.13～4.10
水田432	9C・D、10C	15.0	4.17～4.04
水田433	10C・D	27.3	4.13～4.02
水田434	10～11C	(3.8)	4.15～4.12
水田435	11C	(18.8)	4.18～4.15
水田436	9D	22.2	4.21～4.12
水田437	9～10D	30.8	4.26～4.16
水田438	9D・E	(35.3)	4.24～4.15
水田439	9D	(11.4)	4.24～4.19
水田440	9～10D	(20.5)	4.24～4.18
水田441	11～12C	19.2	4.10～4.09
水田442	12C	(0.9)	4.06
水田443	〃	(8.32)	4.08
水田444	12～13C	3.2	4.11
水田445	11～12C・D	12.4	4.15～4.14
水田446	12C	(19.5)	4.22～4.20
水田447	12C、13C	(6.8)	4.21
水田448	13C	－	4.20
水田449	11～12D	(4.1)	4.22
水田450	12C・D	(7.9)	4.26～4.25
水田451	12C・D、13C	(0.7)	4.25
水田452	14C	—	4.20
水田453	〃	—	4.20
水田454	〃	(5.1)	4.27
水田455	〃	—	4.30
水田456	11～12G	—	4.33
水田457	12G	(2.6)	4.33
水田458	〃	(4.2)	4.38～4.34
水田459	13F	(1.4)	4.40
水田460	〃	(0.1)	4.40
水田461	13G	(13.2)	4.43～4.39
水田462	〃	(2.4)	4.44
水田463	〃	(2.7)	4.45～4.41
水田464	〃	(0.2)	4.45

第４－２面の遺構の内、**流路 403** と水田は、ともに第Ｘ－１層上面に帰属する遺構であるが、水田の上位では第Ⅸ層が水田を覆って堆積し、**流路 403** 部分では流路が埋没した後に第Ⅸ層が堆積していることから、**流路 403** は水田よりは古いと考えられる。このことから、水田への取水源は**流路 403** ではなかったことがわかる。水田の取水源は、水田よりも高い位置にあり、水田の等高線に沿った畦畔とほぼ平行に伸びる**流路 402** であったと推測される。

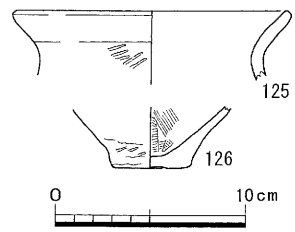
【第４－３面検出遺構】

第４－３面は、第Ｘ－１層を除去した第Ｘ－２層上面(T.P.＋4.0～4.1m)である。発掘現場での実際の検出面は、第Ｘ－１層上面から下面にかけての任意の面である。２区～３区中央部以東で検出された弥生時代後期の流路１条(**流路 401**)が第４－３面に帰属する遺構である。

流路(**流路**)

流路 401(第62図、図版二五)

９～18Ｇ・Ｈ地区で検出された。調査地東部を北流した流路で、２区で南東側からの**流路 403** により切られる。１区東部では、流路埋土より上位の第４－１で遺構検出が行われたため、第４－３面では平面的には検出されておらず、２区東部では**流路 403** の埋土と一緒に掘削されたため、左岸のみが検出された。そのため、２区以北での規模は不明であるが、調査地北東部の壁で流路の埋土に相当する地層を確認できることから、調査地の北東部に抜けて北側に伸びると推測される。検出部分での全長90.0m、幅4.6～10.2m、深さ0.45～1.0mを測る。埋土は、下位層に起因する拳大前後の粘質土の偽礫を多く含む砂礫・砂質土・粘質土の互層である。３区南部以南では、第Ｘ－１層を耕作土とする水田耕作により上部が削られるため、埋土の上層は殆ど残っておらず、南へ行くほど幅も狭くなっている。埋土の砂礫層中に下位層に起因する偽礫を多く含むことから、形成と埋没の時期差は殆どないと推測され、流路(河川)とするには疑問が残るが、流路状に検出されていることから流路としておく。埋土の砂礫層からは弥生土器(河内第Ⅰ様式・第Ⅳ様式・第Ⅴ様式)・石器(剥片)が出土している。その内第Ⅴ様式の土器２点(**125・126**)を図化した。**125** は甕である。口縁部から肩部にかけての約1/10が残存する。器面調整は頸部から肩部外面にかけて右上がりのタタキ、それ以外の部分は内外面ともに横ナデを施す。胎土は径２㎜以下の砂粒を含む。長石・雲母が目立ち、生駒西麓産の角閃石の含有は微量である。色調は、外面が灰黄褐色(10YR6/2.5)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。外面には煤が付着する。**126** は甕である。底部が残存する。底面は、ドーナツ底である。器面調整は外面に右上がりのタタキ、内面にハケ調整を施す。内面のハケ調整は底面ではクモの巣状に、それより上部では縦方向に施す。ハケメは８条/１cmである。底面はナデを施し、部分的に木葉痕が残る。胎土には径４㎜以下の砂礫粒を含む。長石・石英が目立ち、生駒西麓産の角閃石の含有は微量である。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR6.5/2)、内面がにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。第４－１面～第４－３面に帰属する遺構は、その帰属時期を層位・出土遺物から弥生時代後期に比定できるが、時期の細分はできない。



第 62 図　流路 401 出土遺物実測図

・**第５面**〔弥生時代中期後半〕(第62図、図版二六～三〇)

第Ｘ層～第Ⅻ層は自然堆積層と見なされていた層で、調査時に中間層として機械掘削の対象となっていた。３区の中間層を重機で除去し、２区西部の中間層の掘削中に堰の杭が検出されたため、杭が確認された以後の掘削は、流路の切込みや他の遺構の構築が確認できる面で遺構検出が行われた。第５面で検出された遺構は、主に第Ⅺ層(灰色微砂混粘土～粘質土)の上面(T.P.＋3.4～4.1m)に帰属するものが多いが、調査区により遺構が検出された面が異なり、同じ遺構でも調査区により遺構が検出された面が異なる。したがって、第63図に示した２区西部・３区以南の遺構の平面形は、下位面(第Ⅻ層上面)で撹乱として検出されたものである。

【流路・流路に伴う水利遺構・水田遺構】

第５面で検出された遺構の主なものは、弥生時代中期後半の流路と流路に伴う堰・杭列を中心とする水利遺構である。中間層としての機械掘削を免れた部分では、水田遺構も検出されている。これらの遺構は、１区では第Ⅺ層上面、２区東部では第Ⅺ層の上面・下面で検出されたが、２区西部・３区以南では中間層として第Ｘ～Ⅻ層が重機により除去されたため、第Ⅻ層上面で撹乱・痕跡として検出される形となった。流路埋土の掘削に際しては、流路内に堆積した砂礫のみが掘削されたため、本来の流路の肩より内側で検出されている部分があることが各種記録から確認できる。したがって、中間層としての機械掘削を免れた部分であっても、平面図に示したの流路の平面形態は、本来の流路の平面形態と若干異なるものと見られる。

流路(**流路**)

流路 501(図版二六)

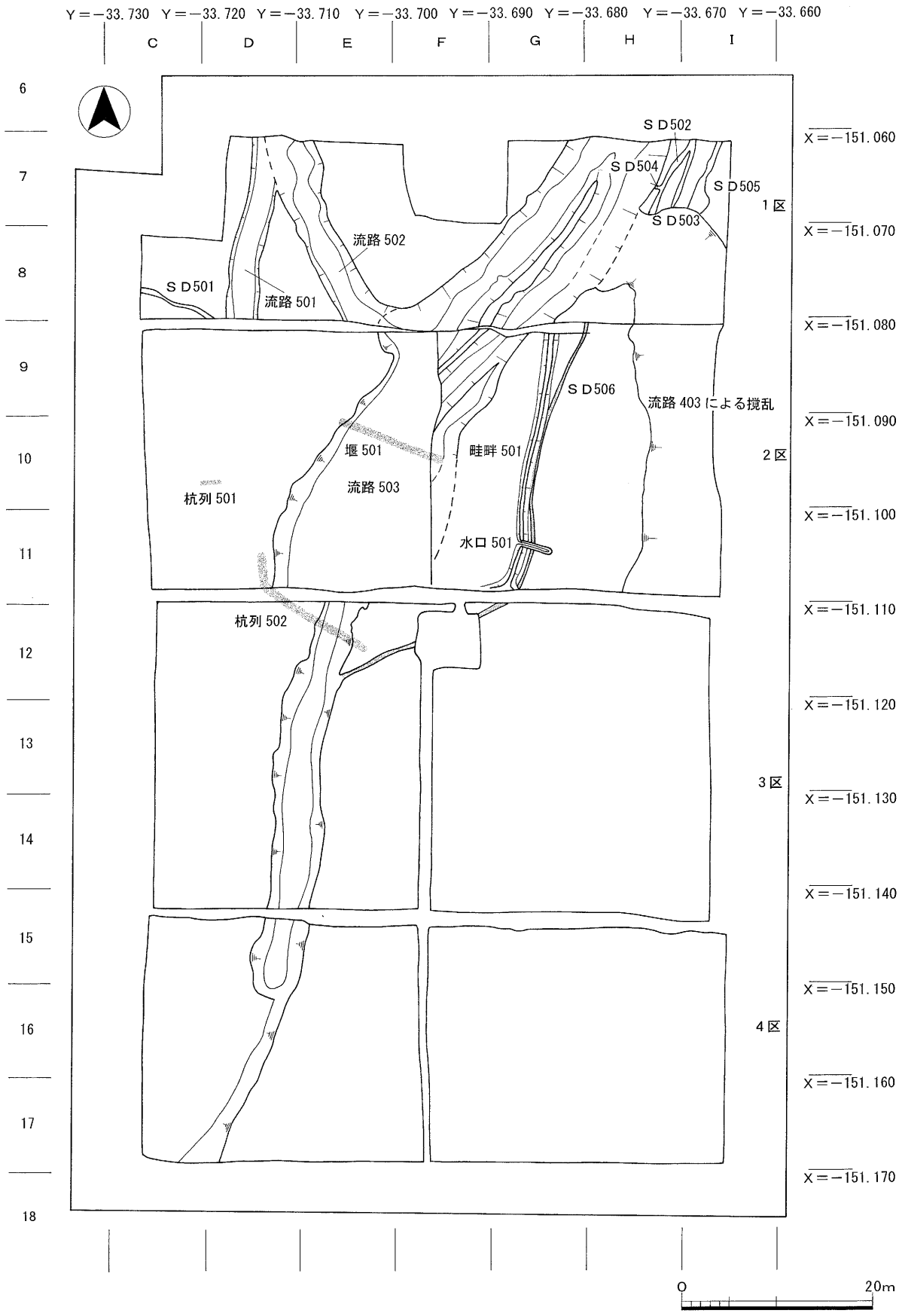
１区西部の７～９Ｄで検出された。検出部分での長さ19.3m、幅2.8～3.4m、深さ0.6～0.9mを測る。埋土は灰白色粗砂～細砂・灰色粘質シルトである。埋土からは、木本の植物遺体が出土しているが、人工遺物は出土していない。２区以南では平面的に検出されていないが、２区のＸ＝－151.095ラインに設けられた中間層確認トレンチの北壁断面では確認でき、この部分の以北では、ほぼ南北に伸びることが確認できる。２・３区間側溝および西壁の断面では確認できないことから、２区南西部で**流路 503** から分岐して北流した人工流路と推測できる。

流路 502(図版二六)

１区西部の７～８Ｄ・Ｅ、８Ｆで検出された。検出部分での長さ21.5m、幅3.4～5.0m、深さ0.85～1.25mを測る。埋土は灰色を基調とする細礫～微砂が互層で堆積する。埋土から人工遺物は出土していない。１・２区間の中央部付近で**流路 503** から分岐して北西方向に流れていた流路と推測できる。

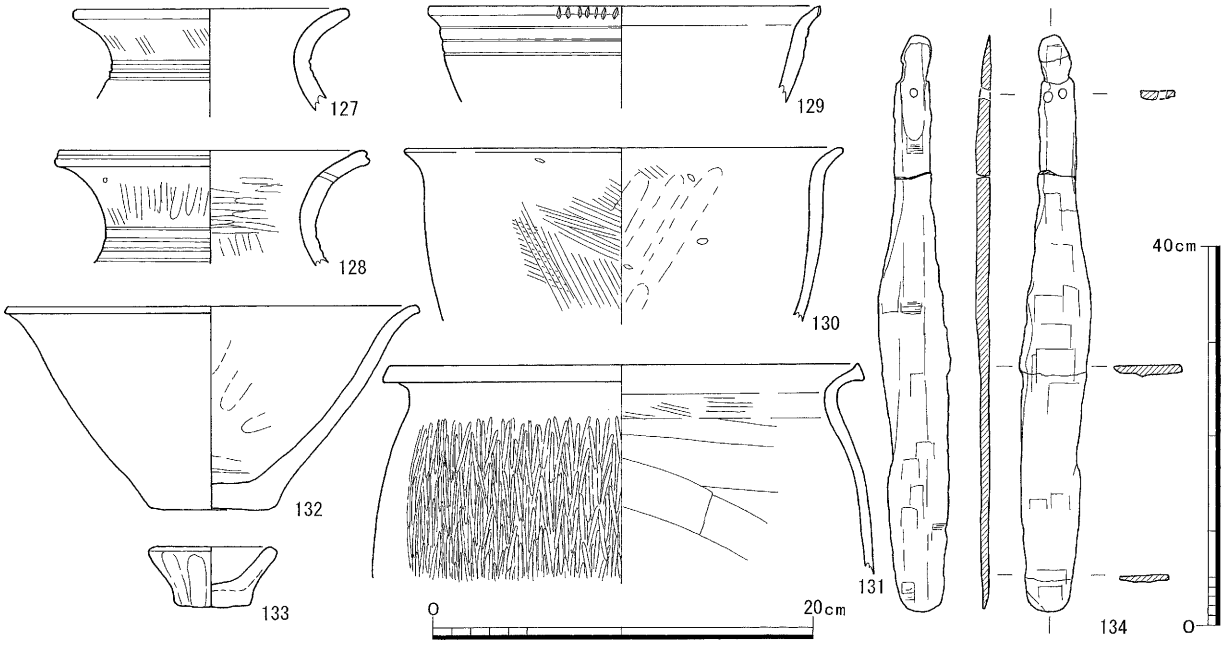
流路 503(第63図・図版二六・五八)

１区東部から４区西部にかけての７Ｇ・Ｈ、８Ｆ～Ｈ、９Ｅ～Ｇ地区で検出された。壁断面の写真等から、数時期の流路が重なるように切り合うことが確認できるが、同一の流路として検出された。検出部分での長さ120.5m、幅10.2～15.0m、深さ1.0～1.7mを測る。埋土は、全体的には灰白色砂礫を主体とするが、微砂～粘質シルトを主体とする部分や、互層をなす部分が見られる。底面に流痕が顕著に見られる。主に、**堰 501・杭列 502** 周辺の砂礫層から遺物が出土している。



第63図　1～4区第5面検出遺構平面図(S＝1/600)

人工遺物としては縄文土器(滋賀里Ⅳ式)・弥生土器(河内第Ⅰ様式～第Ⅳ様式)・石器(剥片)・木製品が整理用コンテナ１箱分、自然遺物としては木本の植物遺体が出土した。人工遺物の内弥生土器８点(127 ～ 133)・木製品１点(134)を図化した。127 は壺である。口縁部から肩部にかけての約1/5が残存する。器面調整は、頸部外面に縦方向のハケ調整を施した後、口縁部の内外面に横ナデを施している。それ以外の部分は器壁の磨耗のため不明である。ハケメは４条/１cmである。頸部に３条の沈線を施す。胎土には径６mm以下の砂礫粒を含む。長石・雲母・角閃石が目立つ。色調は、外面がにぶい褐色(10YR6/3)、内面が褐灰色(10YR5/1)を呈する。128 は壺である。口縁部から頸部にかけての約1/4が残存する。口縁端部に１条の沈線を施す。器面調整は、口縁部外面に縦方向のヘラミガキ、口縁部内面に横方向のヘラミガキを施す。頸部に施された４条の沈線が残存する。口縁部上半に内面から穿たれた径３mmの紐穴が１個残存する。胎土には径５mm以下の砂礫粒を含む。長石・角閃石・雲母が目立つ。色調は、外面が褐灰色(10YR6/1)、内面が灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。129 は甕である。口縁部から頸部にかけての小片である。口縁外端面に刻み目を施す。器面調整は、磨耗のため不明である。頸部に３条の沈線を施す。胎土には径３mm以下の砂礫粒を含む。長石・角閃石が目立つ。色調は、外面が褐灰色(10YR4/1.5)、内面が褐灰色(10YR5/1)を呈する。130 は甕である。口縁部から体部上半にかけての約1/10が残存する。器面調整は、外面にハケ調整、内面に指ナデを施す。ハケメは４条/１cmである。外面に１個、内面に３個の籾痕が見られる。胎土には径３mm以下の砂礫粒を含む。長石・雲母が目立ち、他に石英・角閃石を含む。色調は、外面が褐灰色(10YR6/1.5)、内面が黄灰褐色(10YR5/2)を呈する。131 は甕である。口縁部から体部上半にかけての約1/10が残存する。器面調整については、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に縦方向のハケ調整を施す。ハケメは４条/１cmである。内面は肩部に横方向のハケ調整、体部に板ナデを施す。胎土は径３mm以下の砂礫粒を多く含む。長石・雲母・角閃石が目立つ。色調は、内外面ともににぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。132 は鉢である。口縁部から体部にかけての約2/3を欠く。器面調整は、外面にナデを施し、内面に指ナデを施す。体部下



第 64 図　流路 503 出土遺物実測図

半の外面にナデの前に施した縦方向のハケメが残る。胎土には径６㎜以下の砂礫粒を多く含む。長石・石英・角閃石・雲母の含有が肉眼で確認できる。外面に黒斑が見られる。色調は、外面が灰褐色(7.5YR6/2)、内面がにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。**133** はミニチュアの鉢である。全体の約1/2が残存する。器面調整は、外面に縦方向に指ナデを施し、内面にナデを施す。胎土には径３㎜以下の砂礫粒を含む。長石・石英・角閃石が目立つ。外面に黒斑が見られる。色調は、外面が褐灰色(10YR5/1)、内面が赤褐色(10YR5/2)を呈する。**127** ～ **129** は河内第Ⅰ－２様式、**130** は第Ⅱ様式、**131** は第Ⅲ様式に比定できる。**134** は櫓形の木製品である。全長61.0cm、最大幅7.3cm、最大の厚さ1.5cmを測る。報告書執筆時点で実物は紛失しており、調査直後に実測した実測図と写真のみが残っている状態である。そのため、樹種・細部の加工については不明である。曲柄平鍬の鍬身あるいは櫓(羽の部分)のいずれかと推測される。

堰(**堰**)

堰 501(第65図、図版二八・二九)

２区西部の10Ｅ・Ｆ地区で、中間層の掘削時に**流路 503** に堆積した砂礫層から検出された。全長11ｍを測る。杭の本数は178本である。杭は**流路 503** に直交する形で垂直に打設されている。**流路 503** の底は、堰の下流側では上流側よりも0.7ｍ前後滝壺状に低くなっており、堰を越流した水の流れにより削られたと考えられる。

杭列(**杭列**)

杭列 501(第65図、図版二九)

２区西部の10Ｃ・Ｄ地区で検出された。全長3.0ｍを測る。杭の本数は23本である。東西方向に垂直に打設されている。第Ⅻ層上面で検出されたが、位置的に**流路 501** に伴うものと推測される。

杭列 502(第66図、図版三〇)

２区から３区にかけての西部11～12Ｅ・Ｄ地区で検出された。２区では第Ⅻ層上面で、３区では**流路 503** の底部で検出された。全長10.5ｍを測る。杭の本数は66本である。３区では**流路 503** に直交する形で、２区では**流路 503** に沿う形で垂直に打設されている。その位置から考えて、前者と後者は別の杭列で、前者が**ＳＤ 506** に水を流し入れるための堰で、後者が**流路 503** の護岸等の目的で打設されたしがらみと推測できる。

畦畔(**畦畔**)

畦畔 501(図版二八)

２区東部の９～11Ｇ地区の水田耕作土である第Ⅺ層上層(灰色微砂混粘土)上面(T.P.＋3.4～3.6ｍ)で検出された。概ね、南北に伸びるが、２区南端で南西方向に屈曲する。検出長27.0ｍ、基底幅1.2～1.5ｍ、上幅0.2～0.6ｍ、高さ0.1ｍを測る。２・３区間側溝北壁の断面観察から、第Ⅺ層下層(灰色微砂少量混粘土)の上面に、**ＳＤ 506** を掘削した際の排土を盛ることにより構築されたと推測される。畦畔の東側に沿って溝状の窪みが見られる。畦畔には**ＳＤ 506** の埋没後に**水口 501** が設けられており、畦畔に直交する形で、流痕と見られる溝状の窪みが検出された。東側がより深くより幅が広いことから、東側に水を流したことがわかる。

堰・杭列・畦畔の帰属時期は、層位・出土遺物等から弥生時代中期後葉に比定できる。

溝（ＳＤ）

第５面で検出された溝は、６条（ＳＤ 501 ～ＳＤ 506）である。帰属時期は、層位から弥生時代後期に比定できる。ＳＤ 501 については、西壁断面で第Ｘ－１層中に帰属することを確認できる。ＳＤ 502 ～ＳＤ 505 は、第Ⅻ層上面（黒色礫混粘質土）で検出されたが、ＳＤ 503・ＳＤ 505 については、北壁断面で**流路 401** の埋土の下面（第Ⅻ層中より上位）に帰属することを確認できる。ＳＤ 506（図版二八）は、２区東部と第３区北部の第Ⅺ層下層の上面で検出された。１区では平面的には検出されていないが、１・２区間側溝の北壁断面で**流路 401** の埋土の下面で確認できることから、第１区に続いていたことがわかる。上部が第Ⅺ層上層を耕作土とする水田耕作により攪拌を受けているため、第Ⅺ層下層の上面より上位に帰属する。位置的には、ほぼ**畦畔 501** の西側に沿って検出された。断面形が長方形を呈する溝である。溝の西側に沿って第Ⅺ層下層からなる畦畔状の盛上りが検出された。**流路 503** から分岐するもので、掘削後ほどなく流水により運搬されてきた砂で埋没している。**畦畔 501** の構築と関連する溝と推測される。埋土からの出土遺物は、ＳＤ 502 から弥生土器の破片が、ＳＤ 505 から加工木が出土している。各溝の規模・埋土等については、第11表に示した。

第 11 表　第５－１面 溝（ＳＤ）一覧表（単位ｍ）

遺構番号	地区	検出長	幅	深さ	断面形状	埋土	備考
ＳＤ 501	8C･D	8.2	0.2～0.5	0.11	長方形	灰黒色粘土	
ＳＤ 502	7H･I	8.2	0.3～0.5	0.09	浅いⅢ形	N6/0灰色微砂混粘質土	ＳＤ 503 に切られる
ＳＤ 503	〃	6.1	0.2～0.4	0.14	Ｖ字形	上位より、N3/0暗灰色微砂～細砂混粘質土・10BG4/1暗青灰色微砂混粘質土	
ＳＤ 504	7H	0.4	0.3～0.4	—	—	不明	
ＳＤ 505	7I	8.2	0.4～1.8	0.17	Ｖ字形	10BG5/1青灰色シルト・10BG4/1暗青灰色シルト混粘質土	２条の溝の重複
ＳＤ 506	9～11G･12E～G	49.8	0.3～0.5	0.26	長方形	N8/0灰白色微砂	

【第５面の水利遺構・水田遺構の変遷】

第５面で検出された弥生時代中期後半の流路と流路に伴う水利遺構・水田遺構については、層位や切合いを考慮した遺構検出・掘削が行われていない部分が多い。したがって、各遺構の関連性とその推移についてはよくわからない。その検証のために発掘現場で実測した平・断面図を見ると、平面と断面が遺構の切り合いなどにおいて矛盾するものがあり、検証の材料とならないものが多い。発掘現場での記録・記憶がこのような状態であるので、詳細には検証できないため、ここでは発掘現場での記録の断片から推測できる各遺構の時期的な変遷について以下に示す。**流路 503** の流路の変遷については検証ができず、堰・杭列と**流路 503** から分岐する流路・溝、畦畔との関連に留める。

Ⅰ：堰 501・流路 501・杭列 501　Ⅱ：杭列 502・ＳＤ 506　Ⅲ：畦畔 501・水口 501

以上の３時期にわたる水利・水田の変遷が見られ、**流路 503** は少なくとも各時期に対応する流路の変遷があったと推測できる。

堰501

Y＝−33.705

X＝−151.092

Y＝−33.700

Y＝−33.695

X＝−151.094

T.P. +3.5m

T.P. +2.5m

杭列501

Y＝−33.720

Y＝−33.718

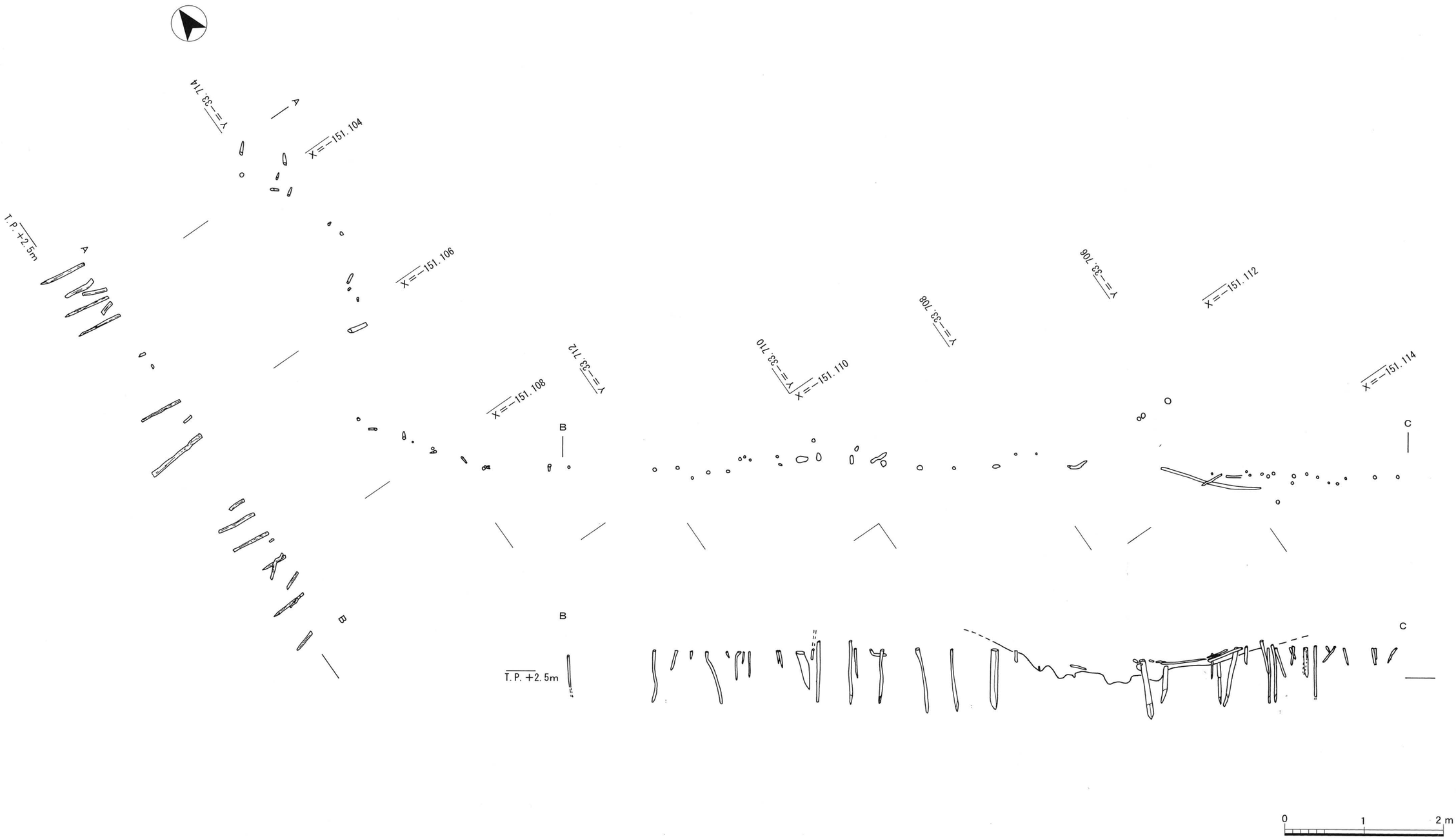
X＝−151.097

X＝−151.098

T.P. +2.5m

0 2m

第65図　堰501・杭列501立平面図（S＝1/40）



第 66 図　杭列 502 立平面図（S＝1/50）

・**第６面**〔弥生時代中期中葉〕(第69図、図版三一～三六)

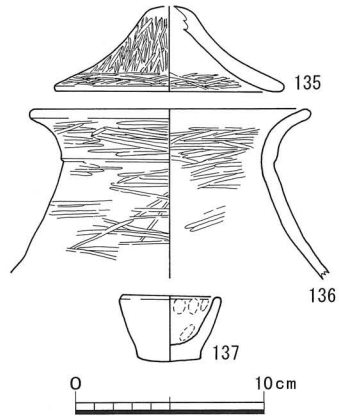
第Ⅻ層までを除去した第Ⅻ－１層上面(一部、第Ⅻ－２層上面)が第６面である。発掘現場での実際の検出面は第Ⅻ－１層上面から第Ⅻ－２層上面にかけての任意の検出面(T.P.＋2.9～3.5m)である。この面では、弥生時代中期中葉の畦畔(大畦畔・中畦畔・小畦畔)・水田を中心とする遺構と、弥生時代中期中葉ないし中期後半の土坑２基(**ＳＫ 601・ＳＫ 602**)・溝７条(**ＳＤ 601 ～ＳＤ 607**)、小穴７個(**ＳＰ 601 ～ＳＰ 607**)が検出された。

【水田遺構】

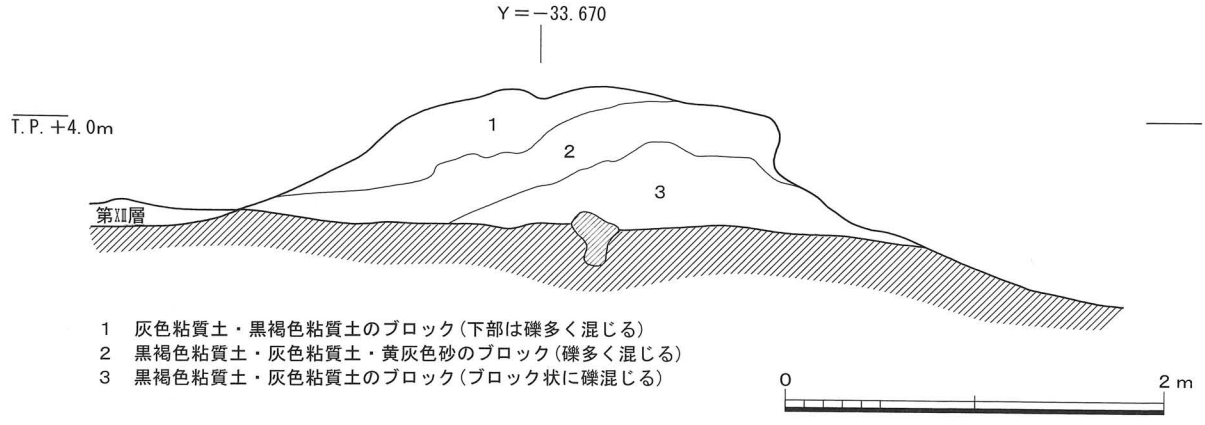
畦畔(**大畦畔・中畦畔・畦畔**)

大畦畔 601(第67・68図、図版三四～三六・五八)

３区・４区東部の12Ｉ、13～17Ｈ・Ｉ地区で検出された。検出長55.5m、基底幅3.5～5.4m、上幅0.4～1.7m、高さ0.7m前後を測る。畦畔の盛土・断面形状については、第68図に示した。盛土は第Ⅻ層上面に第Ⅻ層を主体とする土を盛ることで構築されている。畦畔の構築時に、構築面あるいは盛土の中に人頭大前後の石が置かれている。石は数個ずつまとめて置かれており、いくつかの群をなしている。石は、何らかの目的で置かれたものと考えられるが、具体的には不明である。畦畔東側の裾部で**石群 601**、西斜面で**石群 602** が検出された。盛土内と石群の石材は、生駒山西麓で産出される花崗岩である。畦畔の盛土の下部から杭列が検出されている。畦畔の盛土からは、石の他に弥生土器(河内第Ⅰ－２様式)が出土した。その内３点(**135**～**137**)を図化した。**135** は壺の蓋である。全体の約1/2が残存する。器面調整は、口縁部内外面に横方向のヘラミガキ、それ以外の部分に縦方向のヘラミガキを施す。残存部分に紐穴は見られない。胎土には径４㎜以下の砂礫粒を含む。長石・角閃石が目立つ。色調は、内外面ともに灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。**136** は壺である。口縁部から頸部にかけての約2/3と肩部の約1/3が残存する。器面調整は、内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。ヘラミガキは頸部より上位で密である。胎土には径６㎜以下の砂礫粒を含む。長石・石英が目立つ。色調は、内外面ともに灰

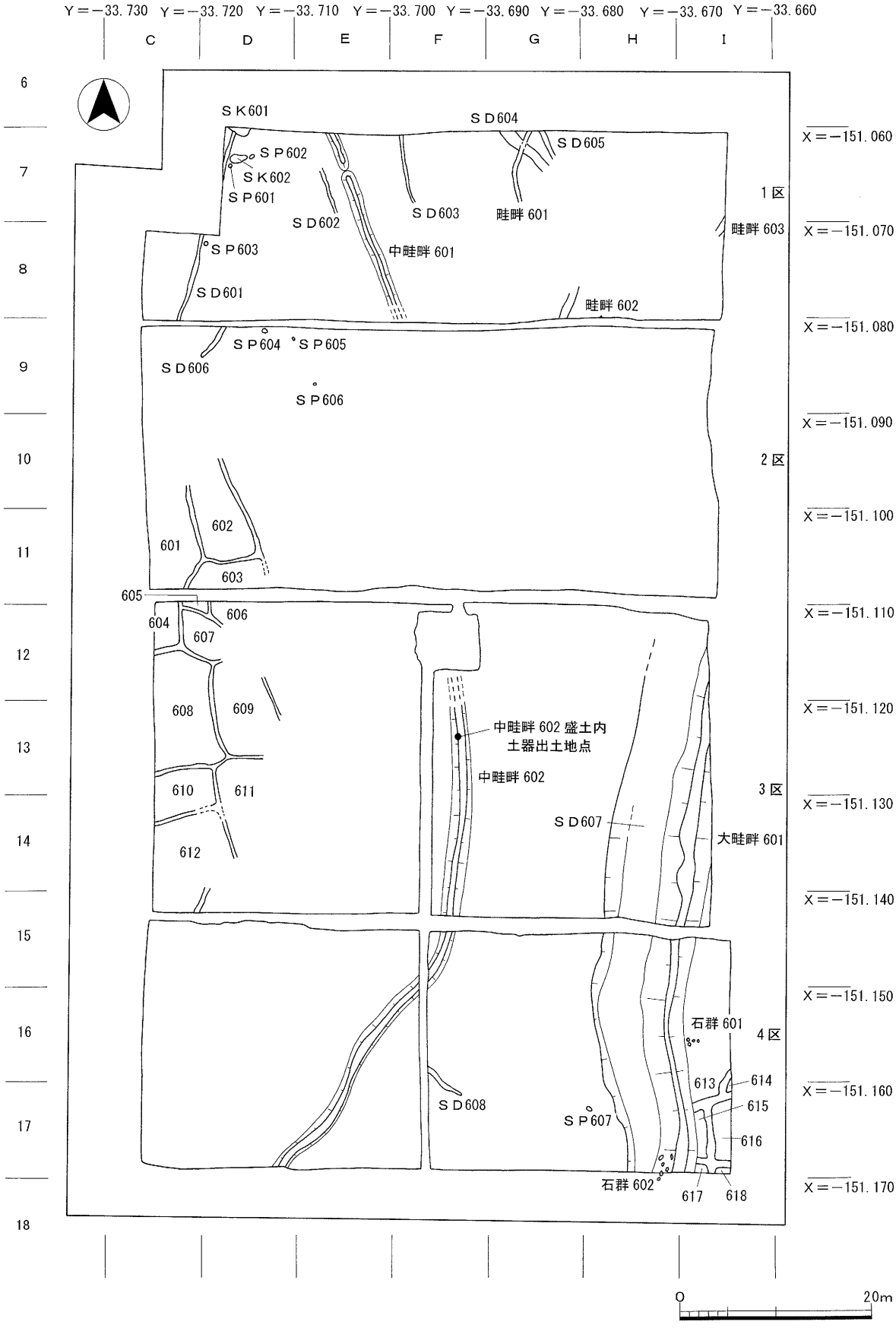


第 67 図　大畦畔 601　出土遺物実測図



1　灰色粘質土・黒褐色粘質土のブロック(下部は礫多く混じる)
2　黒褐色粘質土・灰色粘質土・黄灰色砂のブロック(礫多く混じる)
3　黒褐色粘質土・灰色粘質土のブロック(ブロック状に礫混じる)

第 68 図　大畦畔 601 断面図(Ｓ＝１/40)



第69図　1～4区第6面検出遺構平面図(S＝1/600)

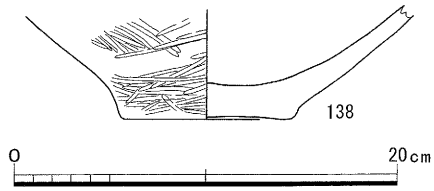
褐色(10YR6/2)を呈する。**137**はミニチュアの鉢である。ほぼ完形である。手づくねにより成形した後、ナデを施す。胎土には径3㎜以下の砂礫粒を含む。長石・石英・角閃石が目立つ。内面に煤が付着する。色調は、内外面ともに灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。畦畔の盛土から出土した遺物は弥生時代前期のものであるが、これらは、大畦畔の盛土の主体をなす第Ⅻ層あるいは第Ⅻ層中の遺構埋土に含まれていた遺物である可能性が高く、畦畔の構築時期を示すものではないと考えられる。

中畦畔601(図版三六)

1区の7E、8E・F地区で検出された。検出長19.8m、基底幅1.1～1.5m、高さ約0.2m前後を測る。第Ⅻ層を蒲鉾状に盛ることにより構築されている。1区の北部で途切れているが、水口であるかどうかは判断できない。畦畔の盛土下部から杭列が検出されている(図版三六)。畦畔の盛土からの出土遺物はない。

中畦畔602(第70図、図版三五・五八)

3区・4区の13～15F、16E・F、17D・E地区で検出された。検出長55.0m、基底幅1.2～2.2m、高さ0.25m前後を測る。第Ⅻ層を盛ることにより構築されている。畦畔の盛土内からは弥生土器が少量出土した。畦畔の盛土の下面で壺の底部4点が一括で出土した(図版三五、第69図に位置を示す)。その壺の底部の内1点(**138**)を図化した。**138**は底部と体部下端の約1/4が残存する。器面調整は、体部外面に縦方向のヘラミガキ、底部外面に横方向のヘラミガキを施す。底面と内面はナデを施す。胎土には径5㎜以下の砂礫粒を含む。長石・角閃石が目立つ。色調は、外面が灰黄褐色(10YR6/2)、内面が褐灰色(10YR6/1.5)を呈する。



第70図　中畦畔602出土遺物実測図

中畦畔601・中畦畔602は、1区南端から3区北端までの間が、**流路503**・試掘坑により削られているため検出されなかったが、本来は同一の畦畔であった可能性がある。

水田(**水田**)

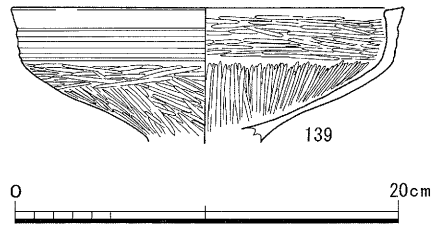
中畦畔601・中畦畔602の西側で、畦畔で区画された水田12筆(**水田601**～**水田612**)と、**大畦畔601**の東側で水田6筆(**水田613**～**水田618**)が検出された。**中畦畔601**の東側(1区東部)でも小規模な畦畔(**畦畔601**～**畦畔603**)が検出されていることから、大畦畔と中畦畔の間にも水田があったと考えられる。大畦畔・中畦畔が第Ⅻ層を盛ることにより構築されているのとは異なり、水田を区画する小規模な畦畔は、水田耕作土である第Ⅻ層を盛ることにより構築されている。水田を区画する畦畔の規模は、基底幅0.3～1.0m、高さ0.05m前後を測る。各水田については、第12表に示した。

第6面で検出された大畦畔・中畦畔・畦畔・水田の帰属時期は、層位から弥生時代中期中葉に比定できる。

土坑(**SK**)

1区西部の7D地区で、2基(**SK601**・**SK602**)が検出された。各土坑の規模・埋土等については、第13表に示した。**SK601**出土の1点(**139**)を図化した(第71図、図版五八)。**139**は、河内第Ⅳ－3・4様式に比定できる弥生土器高杯である。杯部の1/2余りが残存する。円盤充填により

脚部を付けた痕跡が残る。器面調整は杯部内面に縦方向のヘラミガキ、杯部外面に縦方向ないし横方向のヘラミガキ、口縁部内面・杯部上位に横方向のヘラミガキを施す。口縁部外面に4条の凹線を施す。口縁部外面に黒斑が見られる。胎土には径4㎜以下の砂礫粒を含む。長石・石英・雲母が目立ち、角閃石の含有は少ない。色調は、外面がにぶい褐色(7.5YR5.5/3)、内面が褐灰色(7.5YR4.5/1)を呈する。**ＳＫ601・ＳＫ601**の帰属時期は、出土遺物・埋土等から弥生時代中期後半に比定できる。



第71図　ＳＫ601出土遺物実測図

溝(ＳＤ)

7条(**ＳＤ601**～**ＳＤ607**)が検出された。各溝の規模・埋土等については、第14表に示した。**大畦畔601**の構築に伴う盛土を採取するために掘られたと考えられる**ＳＤ607**以外は小規模な溝で、形成における人為の有無や、性格を詳らかにできない。出土遺物は**ＳＤ608**の埋土から弥生土器の破片が3点出土した。第6面で検出された溝は全て、第Ⅷ－1層上面ないし第Ⅷ－2層上面に帰属することから、その帰属時期を弥生時代中期中葉に比定できる。

第12表　第6面 水田一覧表(田積の括弧内は検出部分の田積)

遺構番号	地区	田積(㎡)	標高(T.P.＋m)
水田601	10C､11C･D	(50.0)	2.88～2.77
水田602	10～11C･D	(42.0)	2.86～2.75
水田603	11C･D	(20.7)	2.92～2.82
水田604	11～12C	(17.0)	2.85～2.80
水田605	11～12C･D	(2.5)	2.84～2.82
水田606	11～12D	(1.1)	2.85
水田607	12C･D	(30.2)	2.86～2.80
水田608	12～13C･D	(73.0)	2.87～2.80
水田609	12～13D	(49.0)	2.91～2.81

遺構番号	地区	田積(㎡)	標高(T.P.＋m)
水田610	13～14C･D	(25.1)	2.87～2.81
水田611	13～14D	(25.8)	2.89～2.83
水田612	14～15C･D	(40.6)	2.94～2.83
水田613	17I	(11.6)	3.53～3.42
水田614	16～17I	(0.5)	3.56
水田615	17I	(5.0)	3.59～3.56
水田616	〃	(11.7)	3.59～3.53
水田617	〃	(1.4)	3.57
水田618	〃	(1.0)	3.54

第13表　第6面 土坑(ＳＫ)一覧表(単位はm)

遺構番号	地区	長軸	短軸	深さ	断面形状	埋土	出土遺物	備考
ＳＫ601	7D	2.3	0.8	0.05	浅い皿形	N4/0灰色細砂混粘質土	弥生土器1点(139)	ＳＤ601を切る
ＳＫ602	〃	1.8	0.8	0.08	浅い皿形	N4/0灰色細砂混粘質土	なし	

第14表　第6面 溝(ＳＤ)一覧表(単位はm)

遺構番号	地区	検出長	幅	深さ	断面形状	埋土	備考
ＳＤ601	8C･D､9C	13.5	0.25～0.55	0.06	浅い皿形	N4/0灰色細砂混粘質土	ＳＫ601に切られる
ＳＤ602	7E	5.0	0.25～0.4	0.07	浅い皿形	不明	
ＳＤ603	7F	7.2	0.25～0.35	0.06	浅い皿形	不明	
ＳＤ604	7G	5.8	0.85～1.4	0.11	浅い皿形	不明	水田畦畔より古い
ＳＤ605	〃	3.2	0.4～0.6	0.06	浅い皿形	不明	
ＳＤ606	9D	3.9	0.3～0.5	0.09	浅い皿形	不明	
ＳＤ607	12～13H･I､14～17H	53.9	2.5	0.22	皿形	茶褐色粗砂	大畦畔601に伴う
ＳＤ608	16～17F	3.9	0.3～0.6	0.08	浅い皿形	暗オリーブ灰色粘質土	

小穴(ＳＰ)

7個(ＳＰ 601 ～ＳＰ 607)が検出された。各小穴の規模・埋土等については、第15表に示した。いずれも出土遺物はない。埋土が不明なものを除き、第Ⅷ－1層・第Ⅷ－2層と埋土が類似することから、第Ⅷ－1層ないし第Ⅷ－2層の下面に帰属する遺構と考えられ、帰属時期は弥生時代中期中葉に比定できる。これらの小穴は、点在しておりその配列に規則性は認め難く、建造物を構成するものではないと考えられる。

第15表　第6面 小穴(ＳＰ)一覧表(単位はｍ)

遺構番号	地区	径(長径・短径)	深さ	断面形状	埋土
ＳＰ 601	7D	0.35	0.15	椀形	N6/0灰色細砂混粘土
ＳＰ 602	〃	0.5・0.35	0.07	浅いⅢ形	N4/0灰色細砂混粘質土
ＳＰ 603	8D	0.4	0.21	不明	不明
ＳＰ 604	9D	0.45	0.04	浅いⅢ形	灰黒色礫混粘質土
ＳＰ 605	〃	0.25・0.17	0.06	椀形	黒灰色砂礫混粘土
ＳＰ 606	9E	0.3・0.15	0.09	不明	不明
ＳＰ 607	17H	0.55・0.4	0.22	椀形	灰色粘土

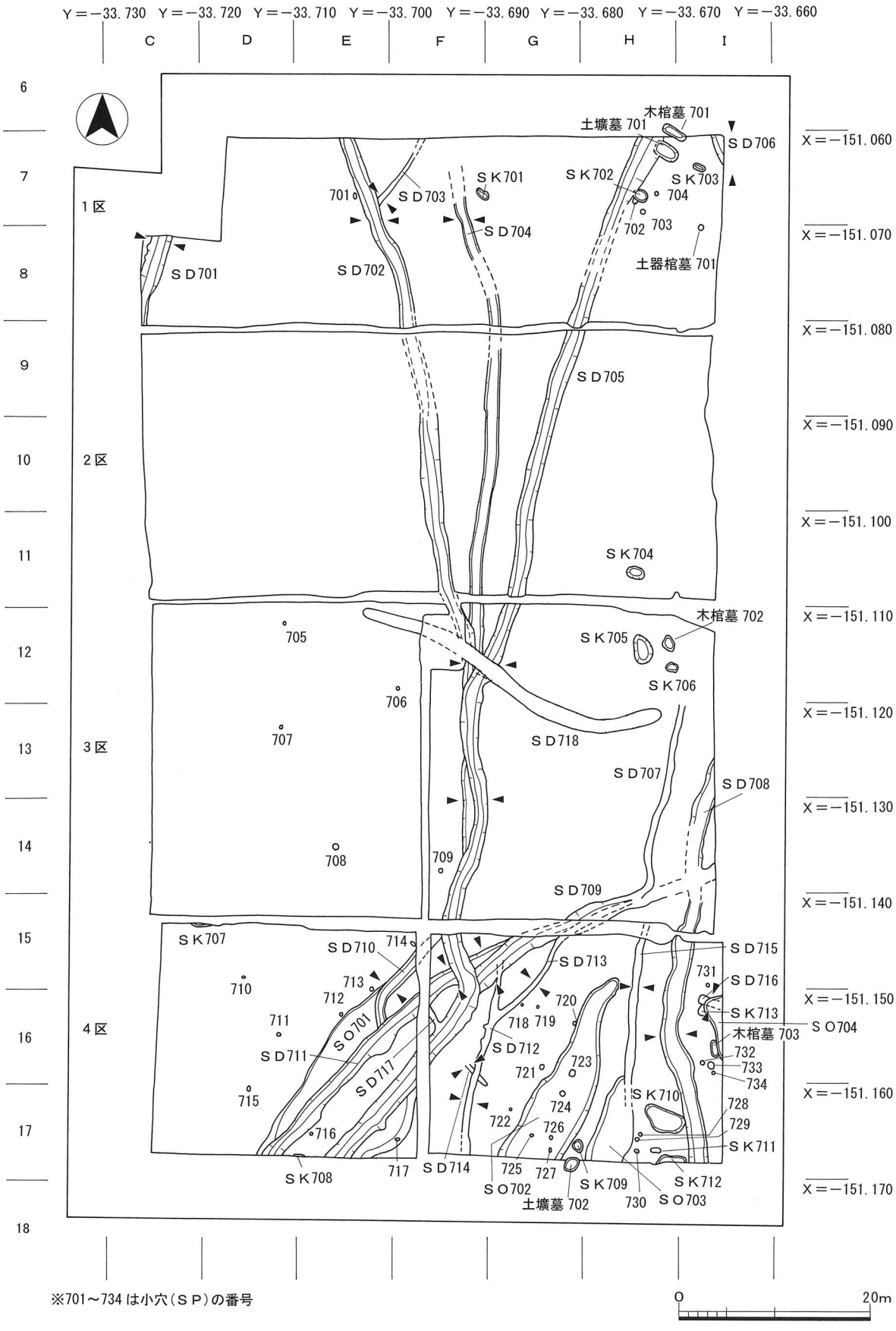
・第7面〔弥生時代前期前半～中期中葉〕(第72図・図版三七～四五)

第Ⅻ層上面(T.P.＋2.8～3.3m)で弥生時代前期の墓域、弥生時代中期中葉の溝を中心とする遺構群が検出され、第Ⅻ層下面(T.P.＋2.6～3.2m)で弥生時代前期ないし中期中葉の土坑・小穴・溝が検出された。第Ⅻ層下面で検出された遺構については、①第Ⅷ層下面に帰属する遺構で検出を遺漏していたもの、②第Ⅻ層上面で検出すべき遺構で検出を遺漏していたもの、③第Ⅻ層下面に帰属するものがあると考えられるが、明確にすることはできないものが多い。

【弥生時代前期前半の墓域】

第7面で検出された弥生時代前期前半の墓域は、調査地東部に分布している。調査地東部は自然河川の埋没により、微高地状に盛り上がった砂礫層が南北方向に伸びており、その微高地上に墓が作られたことが窺える。墓域は、1区北東部の**墓域Ⅰ**、3区北東部の**墓域Ⅱ**、4区東部の**墓域Ⅲ**に分けられる。2区東部は**流路403**により第Ⅻ層が削られているため、墓(墓域)があったかどうかは不明である。墓域が分布する微高地は、調査地の北側・南側・東側にも続くものと見られ、各墓域も西側を除く調査地外に広がる可能性が高い。

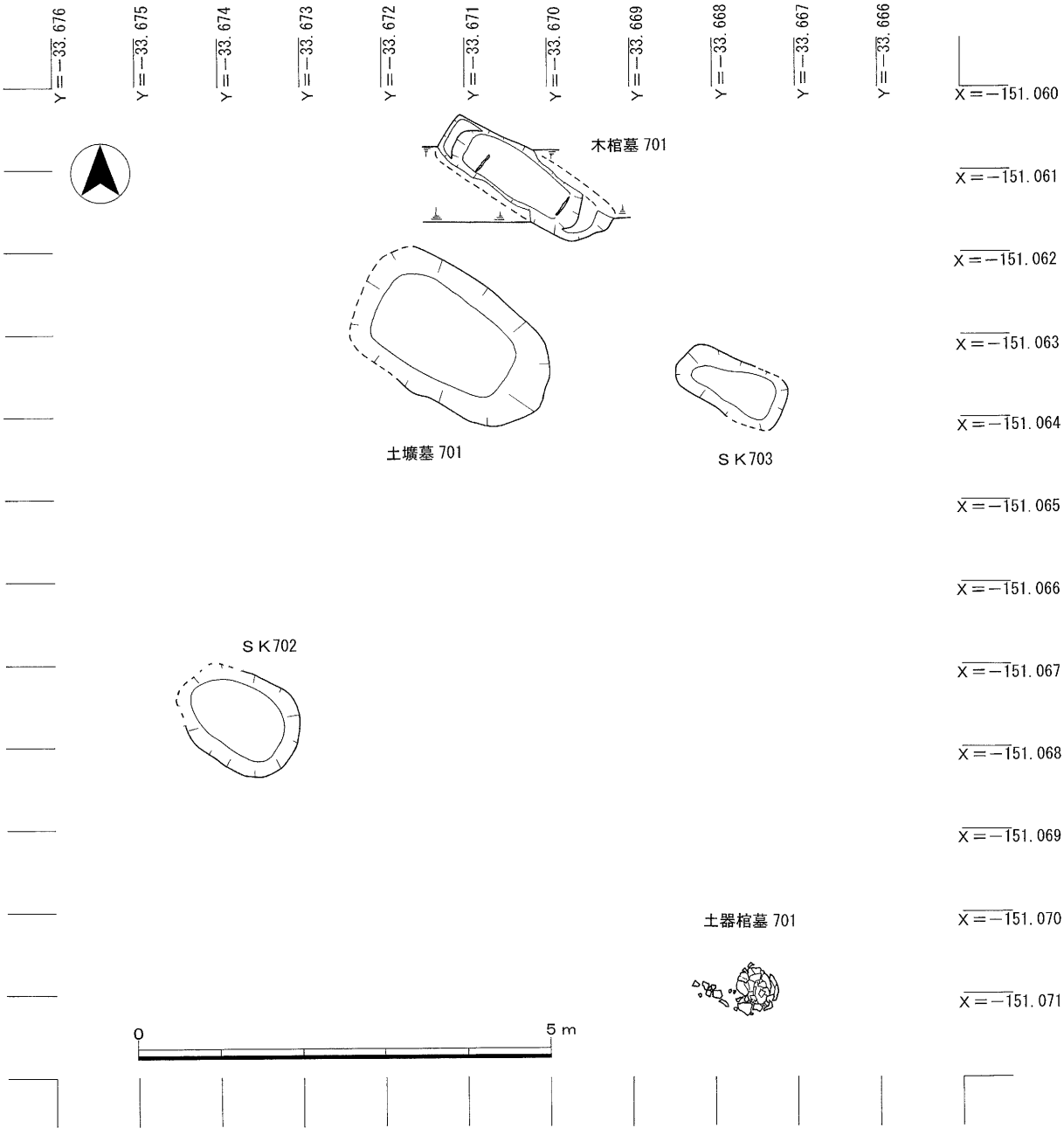
先ず、各墓域に帰属する墓および墓の可能性が高い土坑を示し、次に、墓域ごとに墓および墓の可能性が高い土坑について、その詳細を記載する。墓の可能性が高い土坑については、①埋土に第Ⅷ層より上位層に起因する土を含まないこと、②各墓域の木棺墓・土壙墓の墓壙と長軸方位をほぼ一にすることを以ってこれを認定した。以下では墓として記載するが、墓と断定できる遺構と区別するために、遺構種別としては土壙墓とせず土坑(ＳＫ)とした。**墓域Ⅰ**で検出された墓は、木棺墓1基(**木棺墓701**)・土壙墓1基(**土壙墓701**)・土器棺墓1基(**土器棺墓701**)で、**木棺墓701・土壙墓701**と長軸方位をほぼ一にするＳＫ 702・ＳＫ 703も含まれる。**墓域Ⅱ**で検出された墓は、木棺墓1基(**木棺墓702**)である。**墓域Ⅲ**で検出した墓は、**木棺墓703・土壙墓702**である。これらの墓以外にも、墓である土坑がある可能性や、検出を遺漏したものがあると見られる。



第72図　1～4区第7面検出遺構平面図（S＝1/600）

墓域Ⅰ(第73図、図版四〇～四四)

墓域Ⅰは、１区北東部に位置し、墓５基(**木棺墓 701・土壙墓 701・土器棺墓 701・ＳＫ 702・ＳＫ 703**)が検出された。**墓域Ⅰ**は西側が**流路 503**、南側が**流路 403** の形成により削られ、北側・東側は調査地外に至るため、その範囲は不明である。**墓域Ⅰ**の墓は、その長軸方位はＮ57° Ｗ～Ｎ62° Ｗを測り、概ね北西－南東方向に長軸を持つ。**墓域Ⅰ**は、検出面を覆う第Ⅲ層を耕作土とする水田耕作による攪拌が深く及んでため、検出面より上位にあった本来の構築面は削られている。攪拌は南に行くに従い深く及んでいるため、南に行くほど検出面の標高が低くなっている。したがって、検出された墓の底面の標高は概ねT.P.＋2.9～3.0mであるが、残存する墓の深さは南に行くほど浅く、埋土もその下部のみが残る。



第 73 図　墓域Ⅰ検出墓平面図(Ｓ＝１/80)

木棺墓 701（第74図、図版四一）

１区東部の７Ｈ・Ｉ地区で検出された。北西部・南東部を除き、側溝掘削により墓壙の上部が破壊されてしまった。全長2.25m、幅0.73m、検出面からの深さは0.52mを測る。長軸方位はＮ57°Ｗを測る。埋土については第74図に示したが、概ね第Ⅻ層・第Ⅺ層に起因するブロック土を主体とする。墓壙内で木棺の小口板２枚を検出した。小口板は墓壙の底に平行に据え立てられており、小口板を据えるための溝状の掘込みは確認されなかった。小口板の間隔は1.1m、小口幅は0.25mを測る。南東側の小口板は幅25.0cm、厚さ1.7cm、残存高23.0cmを測る。樹種は不明である。北西側の小口板については、記録がないため不明である。側板については、棺材は出土しておらず、埋土断面でも木質等の棺材の痕跡を確認できないので、存在していなかったと考えられる。ただし、小口板に挟まれた棺の側面を挟んで内外の埋土が明瞭に異なるため、埋葬時には側板に代わるものが存在したか、遺骸を包んで棺内に埋葬したと推測される。底板については、棺材は出土しておらず、埋土断面でもその痕跡を確認できないので、存在していなかったと考えられる。蓋板については、墓壙の上部が側溝掘削により破壊されたため、存在の有無は不明である。棺内からは人体に関わる遺物は出土しなかった。棺の規模が子供の歯が出土した**木棺墓 702** の棺に近いことから、子供を葬ったと考えられる。棺内の埋土上層から弥生土器（第Ⅰ様式）の破片１点が出土した。帰属時期は、出土遺物・埋土から弥生時代前期に比定できる。

構築方法としては、墓壙内の埋土断面の観察から、①墓壙を掘る、②墓壙の底に土を敷き、底を平らにする、③小口板を墓壙の底に敷いた土に差し込んで立てる、④小口板の外側に裏込め土を入れる、⑤棺の側面を側板に代わるもので区切る、⑥棺の外側に裏込め土を入れるという過程があったと考えられる。

土壙墓 701（第75図、写真10、図版四一・五九）

１区東部の７Ｈ・Ｉ地区で検出された。西側の上端は**ＳＤ 705** に切られる。検出長2.6m、幅1.55m、検出面からの深さは0.42mを測る。長軸方位はＮ57°Ｗを測る。埋土については第74図に示したが、４層からなり、第Ⅺ層に起因する砂礫が多く混じる４層と第Ⅻ層に起因する１～３層の２つに大別できる。埋土の長軸断面で１～３層の立ち上がりが垂直的であることが確認できることから、埋葬施設の存在を想定できる。墓壙内からは副葬品であるミニチュアの広口壷（**140**）と石が出土した。**140** は、口縁端部を僅かに欠くが、ほぼ完形である。頸部に一条の突帯を貼り付けており、体部上半には段を形成している。段の部分とその下位に沈線を施すことにより、突帯を表現しており、突帯上には刺突文を施す。器面調整は、外面の突帯より上位に縦方向のヘラミガキ、突帯より下位に横方向のヘラミガキを施す。底面と内面はナデを施す。頸部の突帯の上位に赤彩が線状に残る。胎土には径３㎜以下の砂礫粒を含む。長石・角閃石が目立つ。色調は、内外面ともに灰黄褐色（10YR5/2～4/2）を呈する。ミニチュアであるが、粗製ではなく広口壺の器形・調整に忠実に作られている。河内第Ⅰ－２様式に比定できる。帰属時期は、出土遺物から弥生時代前期前葉に比定できる。

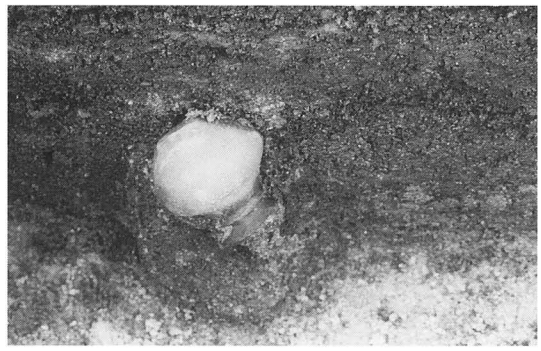
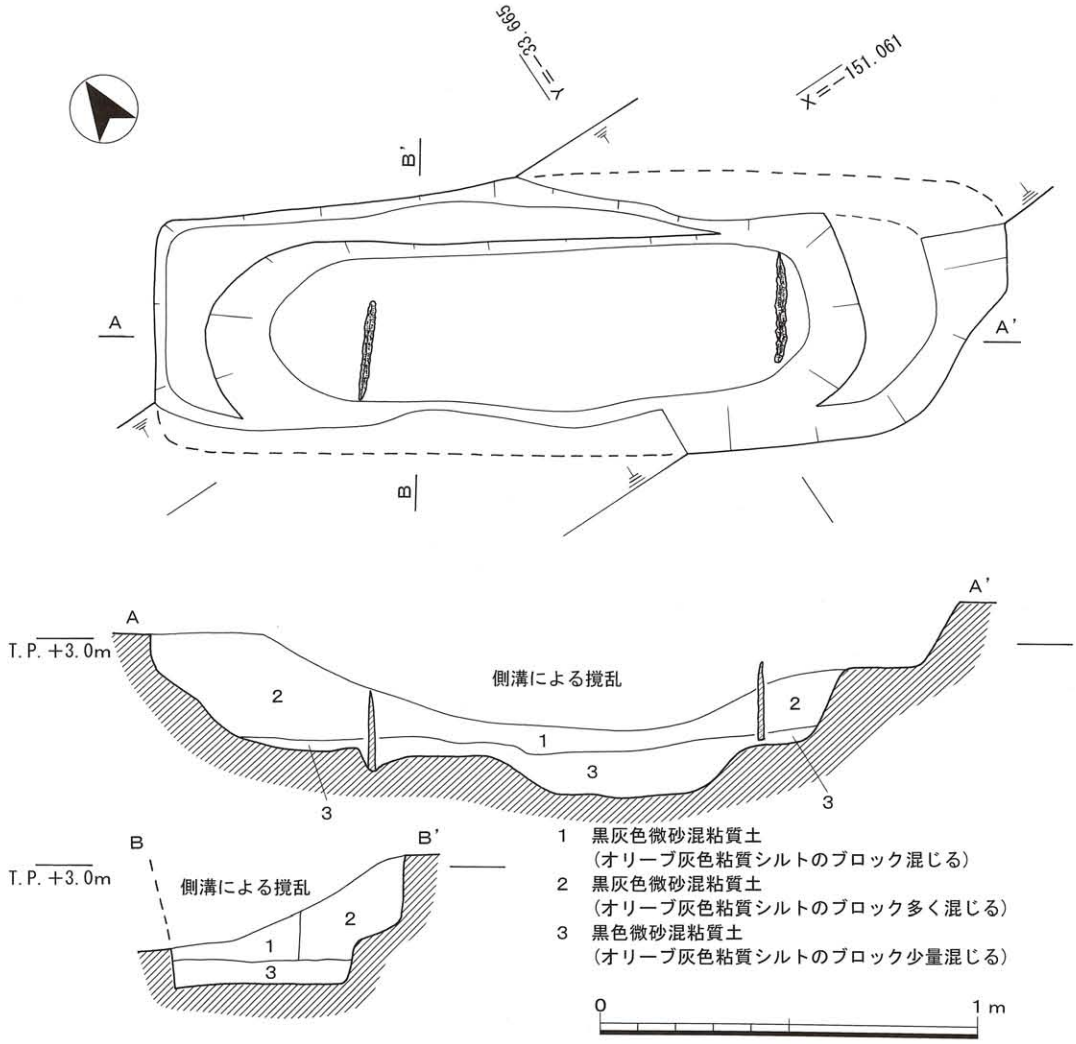
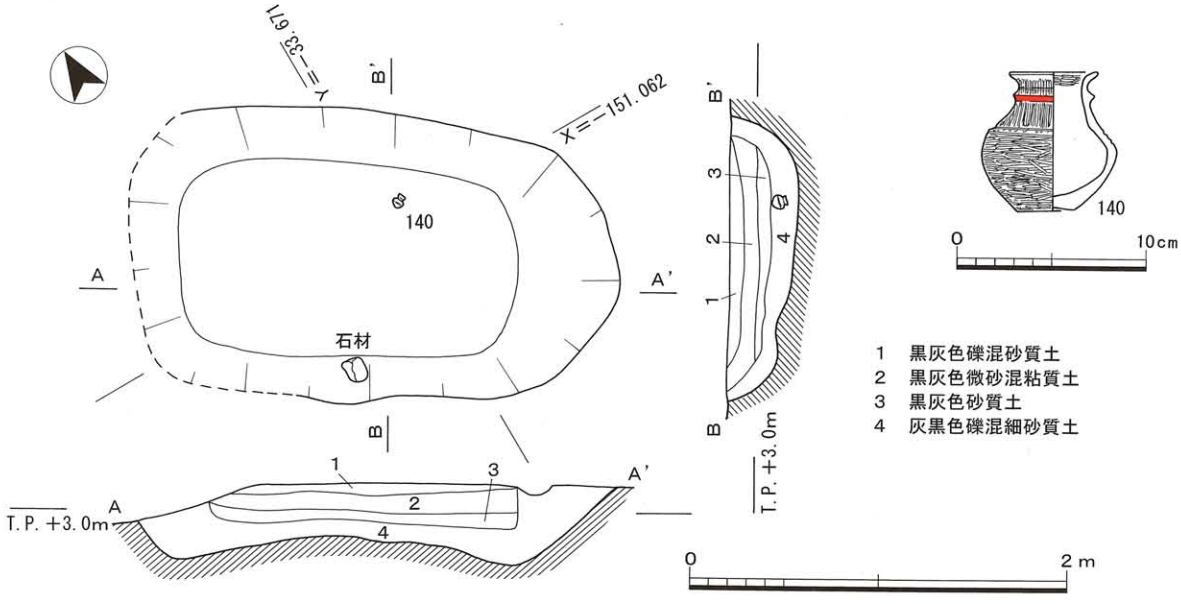


写真 10　土壙墓 701 遺物出土状況（南東から）



第 74 図　木棺墓 701 平断面図(S＝1/20)



第 75 図　土壙墓 701 平断面図(S＝1/40)および出土遺物実測図

土器棺墓 701（第76図、写真11、図版四一・五九）

１区東部の８Ｉ地区で検出された。**流路 403** の右岸に当たるため、その形成により上部が削られており、残存する墓壙の底の東側部分も土器棺の検出時に掘削されてしまったため、土器棺を埋設した墓壙とその埋土については不明である。土器棺には壺が使われており、出土状況（写真11）から、土器棺は底部を下にして、やや斜めに埋められていることがわかる。土器棺の上部に当たる口縁部から体部上半部分は、**流路 403** の斜面に散乱した状態で出土した。土器棺の中には別個体の壺の底部が棺内に落ちた状態で出土し、土器棺の外側でこの壺の底部と同一個体と判断できる壺の体部が、倒位に突き刺さった状態で出土した。この出土状況から、土器棺とは別個体の壺は、頸部から上位を欠いて、棺の蓋として用いられたものと考えられ、後に上部が破壊されたために底部が棺内に落ちたと推測できる。土器棺内部・周辺から人体に関わる遺物は出土しなかった。第76図に土器棺として使われた壺（**141**）、蓋として使われた壺（**142**）を図化した。**141** は口縁部から体部にかけて部分的に欠損するが、各部分は残存している。頸部と体部上位を削ることにより、段を形成している。器面調整は、外面には体部上位と下位に縦方向のヘラミガキを施し、体部中位に横方向のヘラミガキを施す。内面にはナデの後、横方向の粗いヘラミガキを施す。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。胎土には径３㎜以下の砂礫粒を含む。肉眼では長石・雲母が目立ち、実体鏡で角閃石の含有が認められる。色調は、外面がにぶい褐色（7.5YR6/3）、内面が灰褐色（7.5YR6/2）を呈する。**142** は体部の約1/2と底部から体部下位にかけて残存する２つの部分のもので、接合はしないが、同一個体と判断できる。体部上半部に幅1.4㎝前後の削出突帯を施し、突帯上に２条の篦描沈線を施す。器面調整は、内外面とも体部の上位に横方向のヘラミガキ、中位に右下がりのヘラミガキ、下位に縦方向のヘラミガキを施す。底面は粗くナデを施す。胎土には径７㎜以下の砂礫粒を含む。肉眼では長石・石英・雲母が目立ち、実体鏡で角閃石の含有が僅かに認められる。色調は、外面がにぶい褐色（7.5YR5/3）、内面がにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈する。**141・142** は、いずれも河内第Ⅰ－２様式に比定できる。**土器棺墓 701** の帰属時期は、出土遺物から弥生時代前期前半に比定できる。

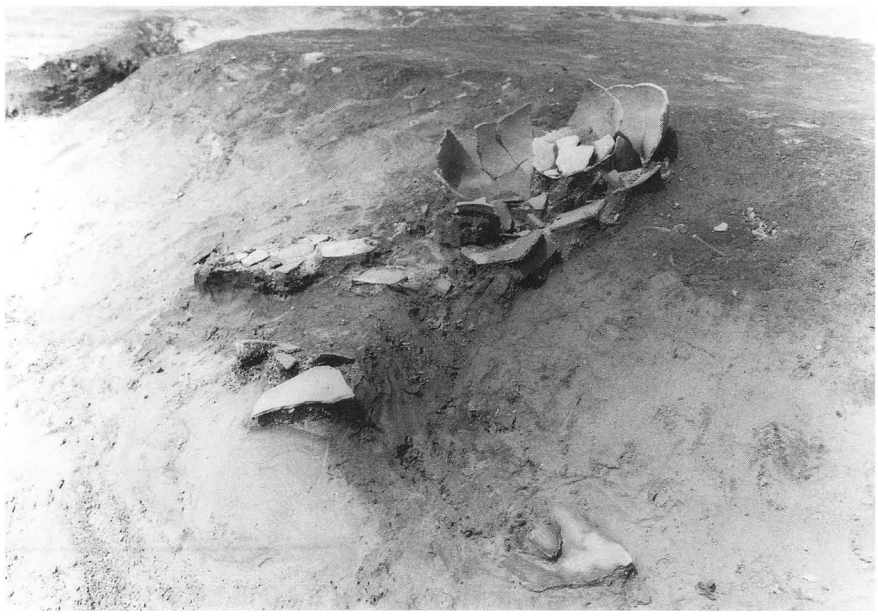
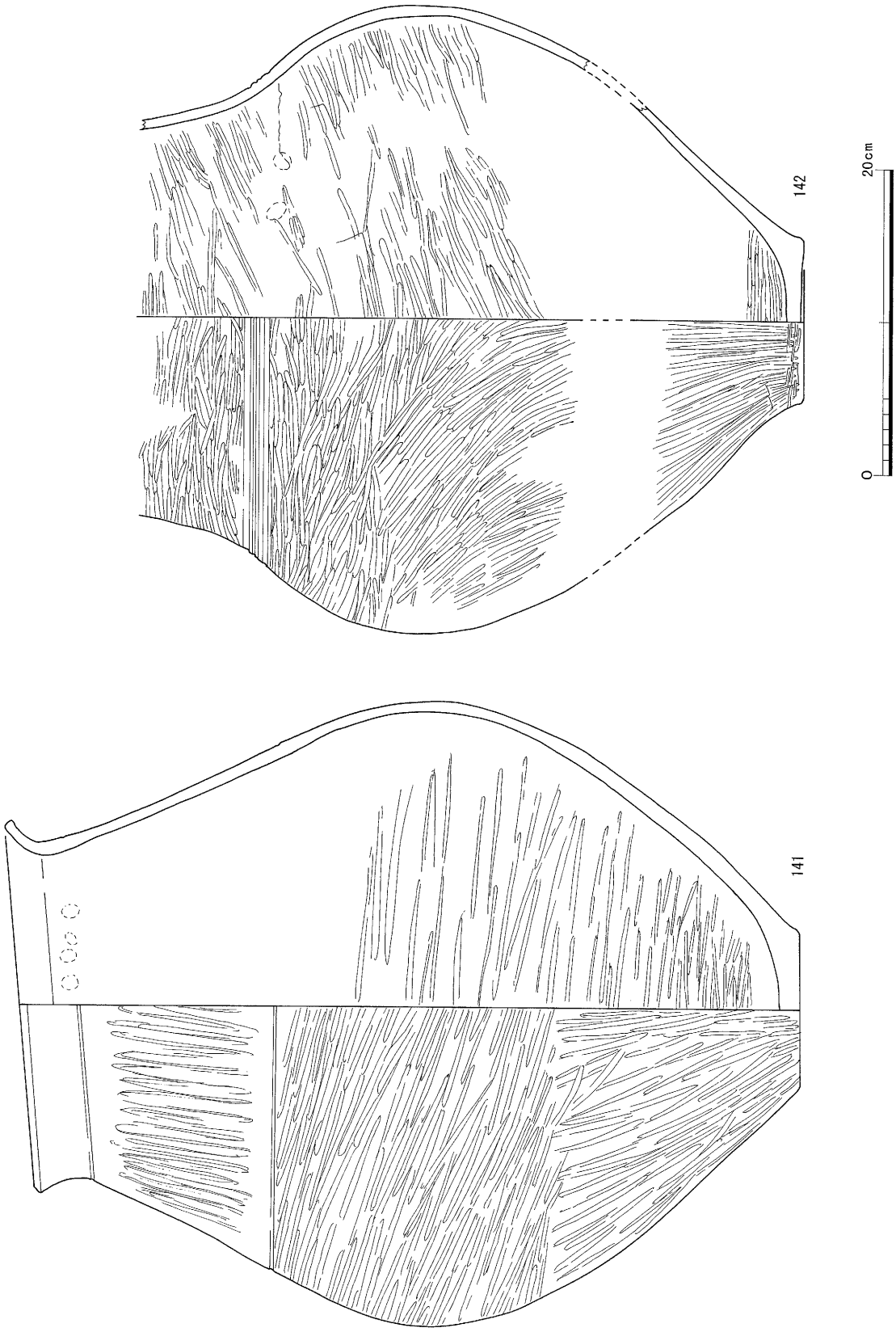


写真 11　土器棺墓 701 検出状況（南から）



第 76 図　土器棺墓 701 出土遺物実測図

ＳＫ 702（第78図）

１区東部の７Ｈ地区で検出された。西側の上端は**ＳＤ 705** に切られる。長径1.57m、短径1.14m、検出面からの深さは0.13mを測る。長軸方位はＮ59°Ｗを測る。埋土については第78図に示したが、残存する部分では第Ⅻ層に起因するブロック土を主体とする単層が残る。人体に関わるものを含め出土遺物はない。帰属時期は、埋土から弥生時代前期と見られる。

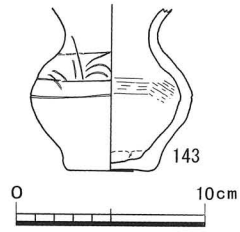
ＳＫ 703（第78図）

１区東部の７Ｉ地区で検出した。東部は東端を残し**ＳＤ 505** に切られる。長さ1.38m、幅0.7m、検出面からの深さ0.19mを測る。長軸方位はＮ62°Ｗを測る。埋土については第78図に示したが、残存する部分では第Ⅻ層に起因するブロック土に第Ⅺ層に起因する砂礫が混じる単層が残る。人体に関わるものを含め出土遺物はない。帰属時期は、埋土から弥生時代前期と見られる。

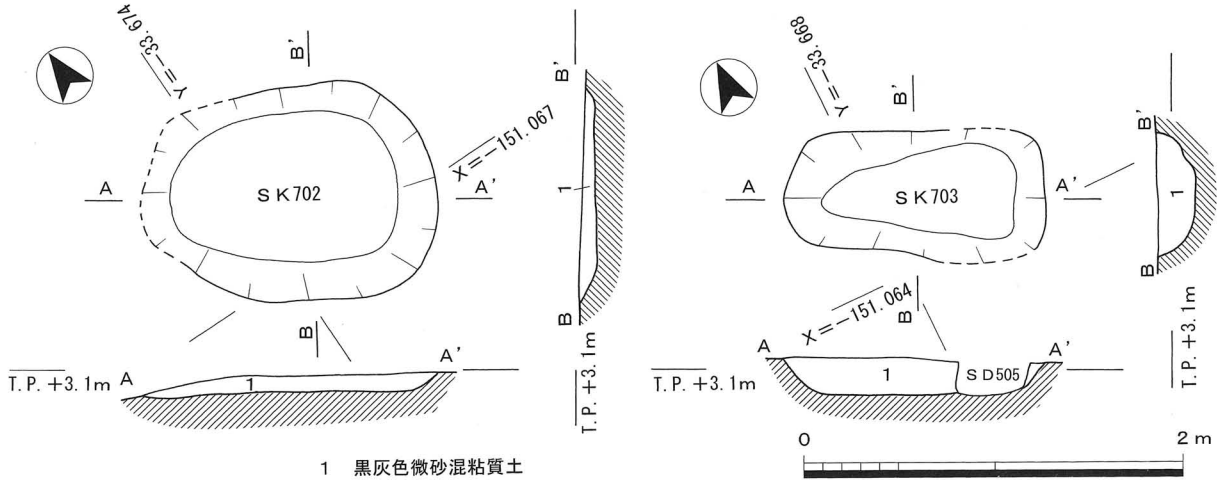
墓域Ｉ内出土遺物（第77図、写真12、図版五九）

墓域Ｉでの遺構検出の際、**土器棺墓 701** の東側で弥生土器のミニチュアの壺（**143**）が出土した。遺構に伴わない出土遺物として取上げられているが、出土状況（写真12）を見ると、土坑状の窪みの隅で出土していることが確認でき、土壙墓である可能性がある。ただ、窪みの埋土についての記録がないため、遺構と断定はできない。墓に伴う副葬品か供献土器であると推測される。**143** は、底部から口縁部にかけて残存するが、上位になるほど残存率は低く、口縁端部は欠損する。器面調整については、内外面ともに磨耗のため不明である。体部上半に篦描きによる文様を施しているが、土器の欠損と器壁の磨耗のため、文様の全体像を掴むことは難しい。残存部分に見られる線から、縦方向に２条１帯、横方向は上に１条、下に２条の線による方形区画を施し、その区画内に２条１帯の上弦重弧文を施していることが確認できる。胎土には径３㎜以下の砂礫粒を含む。肉眼では長石・石英が目立ち、実体鏡で角閃石の含有が認められる。色調は、内外面ともに橙色（5YR6/6）を呈する。

写真 12　墓域Ｉ内遺物出土状況（東から）



第 77 図　墓域Ｉ内出土遺物実測図



1　黒灰色微砂混粘質土

第 78 図　ＳＫ 702・ＳＫ 703 平断面図（Ｓ＝１/40）

墓域Ⅱ

墓域Ⅱは、３区北東部に位置し、墓１基(**木棺墓 702**)を検出した。**墓域Ⅱ**も**墓域Ⅰ**と同様に、検出面を覆う弥生時代中期中葉までの水田耕作土である第Ⅻ層による攪拌が及んでいるため、本来の構築面は削平されている。さらに検出時に第ⅩⅣ層の下部まで掘り下げているため、残存していた上部も若干削られている。

木棺墓 702(第79図、写真13、図版四三)

３区北東部の12Ｈ地区で検出した。長さ1.15m、幅0.47m、検出面からの深さ0.2mを測る。長軸方位はＮ5°Ｗを測る。墓壙底面の短辺部で幅0.1～0.15m、深さ0.1mの溝状の掘込みを検出した。埋土については第79図に示したが、概ね第ⅩⅣ層・第ⅩⅤ層に起因するブロック土を主体とする。短辺部の溝状の掘込みで小口板を検出した。小口板の間隔は0.9m、小口幅は0.3mを測る。北側の小口板は、幅33.3cm、厚さ2.5cm、残存高37.3cmを測り、南側の小口板は幅31.5cm、厚さ2.6cm、残存高44.5cmを測る。樹種は不明である。側板と底板については、棺材は出土しておらず、埋土断面でもその痕跡を確認できないことから、存在していなかったことがわかる。蓋板については、墓壙の上部が後の水田耕作により削られているため、存在の有無は不明である。

棺内埋土の上層から人歯２点が出土した。人歯２点を嶋田武男氏(調査当時、大阪市立大学医学部)に鑑定していただいた。その結果、上顎の大臼歯であること、５～７才の永久歯であることがわかった。埋土からは人歯以外の出土遺物はない。
帰属時期は、層位から弥生時代前期に比定できる。

構築方法としては、墓壙内の埋土断面の観察から、①墓壙を掘る、②墓壙の短辺部を溝状に掘り込む、③小口板を溝状の掘込みに立て、裏込めに土を入れる、④棺内に土を敷き平らにするという過程があったと推測される。

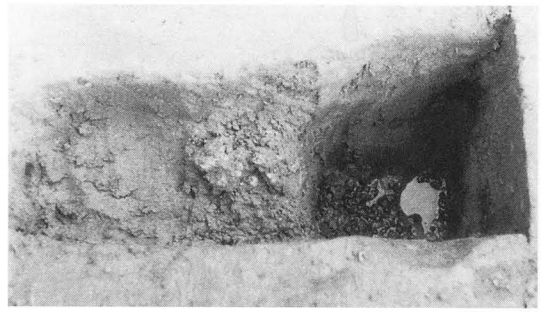
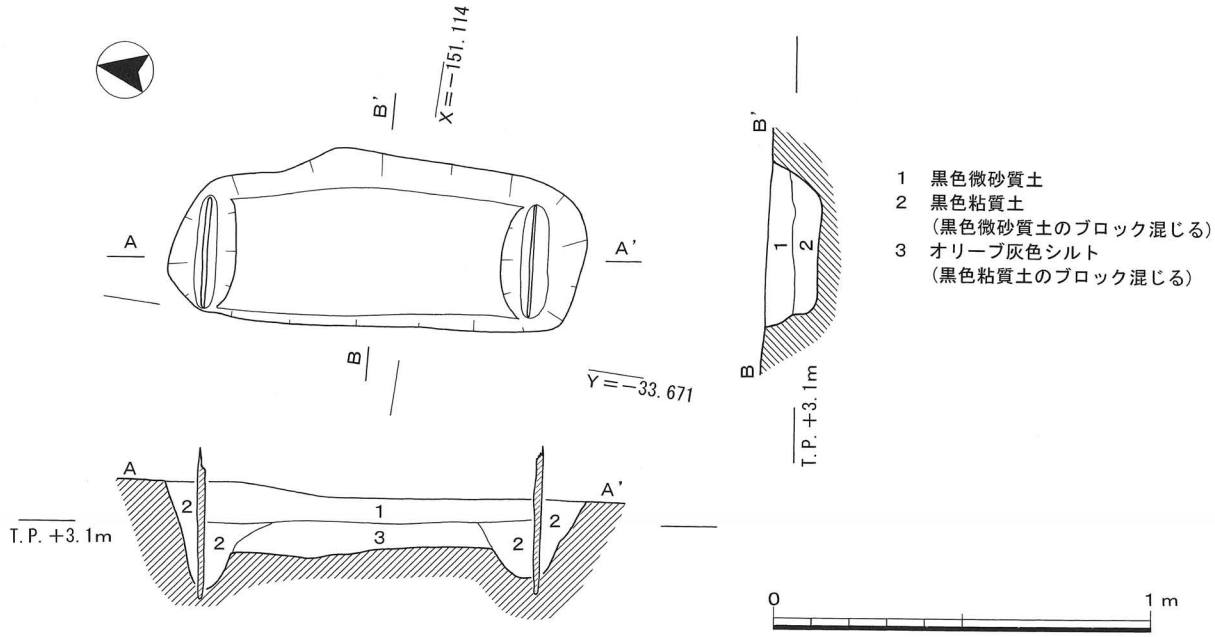


写真 13　木棺墓 702 人歯出土状況(西から)



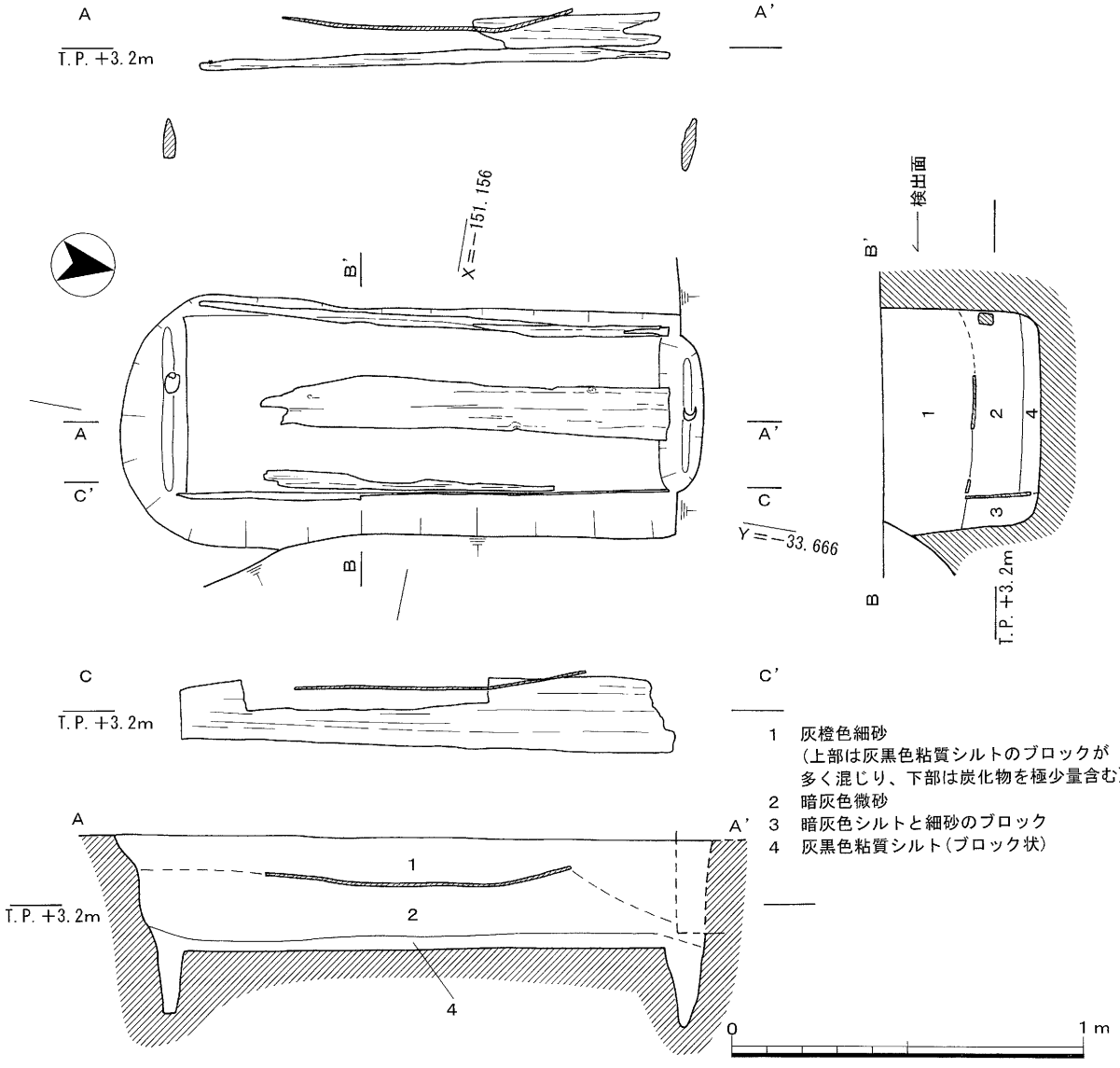
第 79 図　木棺墓 702 平断面図(Ｓ＝1/20)

墓域Ⅲ

墓域Ⅲは、４区南東部に位置し、墓２基(**木棺墓 703・土壙墓 702**)が検出された。

木棺墓 703(第80図、図版四三)

４区東部の16Ⅰ地区で検出された。墓壙の平面形状は不整な長方形を呈し、長軸方位はN4°Wを測る。北端は**大畦畔 601** の断面観察トレンチの掘削時に、その上部が破壊された。東端は**ＳＯ 704** により僅かに切られる。長さ約1.7m、幅0.7m、検出面からの深さ0.33mを測る。墓壙底面の短辺部で幅0.1m前後、深さ0.2m前後の溝状の掘込みが検出された。埋土については第80図に示したが、概ね第Ⅻ層・第Ⅺ層に起因するブロック土を主体とし、砂がちである。蓋板と側板が残存していた。蓋板は薄く腐敗が進んでいたため、検出時にはその一部が２枚残っていた。側板は、東側の側板が幅約20cmの薄い一枚板で、西側の側板が、数cm角の角材の上に幅約10cmの板を縦にして置かれていたことが確認できる。角材の上の板は墓壙の北西部で長さ50cmほどが残っていた。小口板はその一部が溝状の掘り込みの底で杭のように残存しており、腐敗が進んだ段階で抜き取られたと考えられる。底板については、棺材は出土しておらず、埋土断面でもその痕跡を確認できな



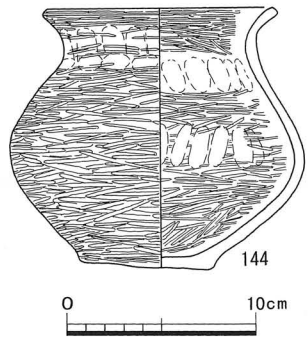
第 80 図　木棺墓 703 平断面図および棺材見通し断面図(Ｓ＝1/20)

いことから、存在しなかったと考えられる。棺材の樹種は不明である。残存する小口板の一部と側板の位置から、棺の内法寸法は長さ1.45m、幅0.5m前後に復元できる。棺の大きさは**木棺墓 701・木棺墓 702** に比べて長さ・幅ともに大きく、成人を埋葬したと推測される。棺内からは人体に関わる出土遺物はない。棺内の埋土から弥生土器(河内第Ⅰ様式)の破片１点が出土した。**木棺墓 703** の帰属時期は、出土遺物等から弥生時代前期に比定できる。

墓壙内埋土の縦断面の記録が不十分なため、構築方法を明確に復元できないが、①墓壙を掘る、②墓壙の短辺部を溝状に掘り込む、③小口板を溝状の掘込みに立て、裏込めに土を入れる、④棺内に土を敷き平らにするという過程があったと推測される。

土壙墓 702(第81・82図、写真14、図版四二・五九)

４区東部の17Ｇ地区で検出された。**土壙墓 702** は側溝掘削時に側溝の壁から小型壺が出土したために、遺構の存在が確認されたものである。当初、この遺構は調査担当者により溝と認識されたため、壺の出土を確認した後も側溝の掘削は続けられ、南北の両端を残し墓壙の中心部は破壊された。埋土については、断面図・埋土についての記載がないため明確ではないが、壺の出土状況を撮った写真に映る埋土から、基盤層のブロック土を主体とすることが確認できる。墓壙の平面形状は不整な隅丸方形と推測され、長軸方位はＮ10°Ｅ前後と推測される。長さ1.65m、残存部分の検出面からの深さは0.35mを測り、幅は1.2m前後と推測される。墓壙内からは副葬品である小型の広口壷(**144**)が、墓壙の南東隅で正位に埋納された状態で出土した。この他に拳大の石・弥生土器(河内第Ⅰ様式)の破片が数点出土した。**144** はほぼ完形である。器面調整は、内外面ともに横方向のヘラミガキを密に施す。頸部下位・体部中位の内面に成形時の指頭圧痕が残る。胎土には径６㎜以下の砂礫粒を含む。長石・石英・雲母・角閃石の含有が肉眼で確認できる。体部下位に黒斑が見られる。色調は、外面がにぶい黄橙色(10YR6/3)、内面がにぶい橙色(7.5YR5.5/4)を呈する。**144** は河内第Ⅰ－１・２様式に比定できる。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代前期前半に比定できる。



第 81 図　土壙墓 702 出土遺物実測図

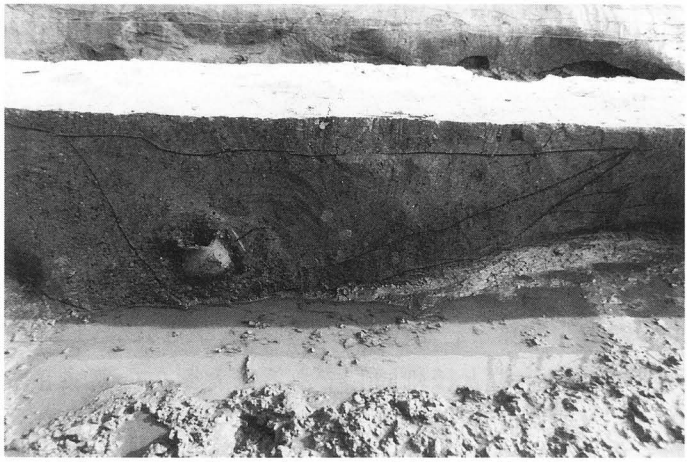
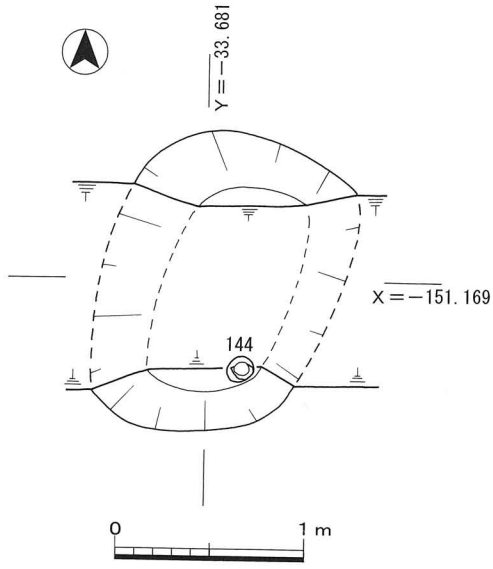


写真 14　土壙墓 702 断面および遺物出土状況(北から)



第 82 図　土壙墓 702 平面図(Ｓ＝1/20)

土坑（ＳＫ）

第７面で検出された土坑は、墓域の項で墓として記載したものを除き11基（**ＳＫ 701・ＳＫ 704～ＳＫ 713**）である。埋土が複数の層からなるものや、図化した遺物が出土したものについては、下記に個別に記載するが、埋土が単層で出土遺物がないものについては、第16表に示した。

第７面で検出した土坑は、その殆どが調査地東部の**墓域Ⅰ～墓域Ⅲ**で検出されており、土壙墓であるものもあると考えられるが、その可能性を積極的に支持できないので、土坑として以下に記載する。**ＳＫ 710・ＳＫ 711・ＳＫ 713**については、明瞭な掘り方を持たず、埋土が第Ⅻ層であることから、第Ⅻ層の窪みを検出したものと見られる。

第７面で検出した土坑の帰属時期は、**ＳＫ 710・ＳＫ 711・ＳＫ 713**が、層位から弥生時代前期前半に比定できる。その他のについては、帰属する層準を明確にできない**ＳＫ 704**を除き、埋土・層位から弥生時代中期中葉以前に比定できるが、詳細な時期は比定できない。

ＳＫ 701（第83図、図版四四）

１区東部の７Ｆ・Ｇ地区で検出された。長径1.35m、短径0.85m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土については第83図に示した。この遺構は第Ⅺ層中まで掘り込まれているが、①２・３層の細砂が基盤層である第Ⅻ層・第Ⅺ層に見られない、②１層が黒灰色粘質土と基盤層に起因するブロック土であり、埋め戻されたことが明らかである、③葉理等の自然堆積を示す構造が見られないことから、２・３層の細砂は埋め戻しの際に他所から採取して来たものである可能性が高い。出土遺物はない。ＳＫ701については、長軸方位が長軸方位はＮ52°Ｗを測り、**墓域Ⅰ**の**木棺墓 701・土壙墓 701**の長軸方位と近いことから、**墓域Ⅰ**に帰属する墓である可能性がある。

ＳＫ 704（第83図、図版四四）

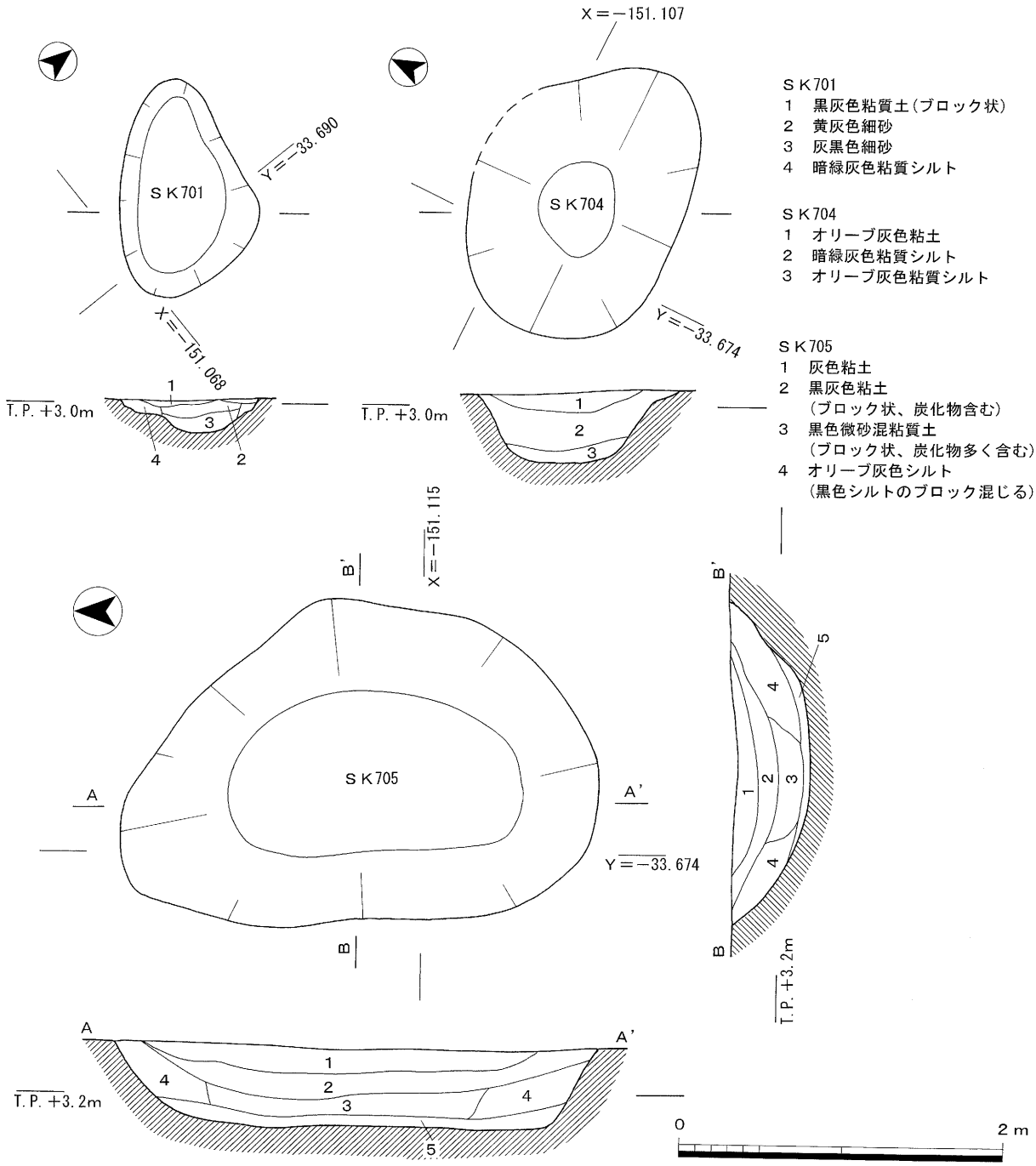
２区東部の11Ｈ地区で検出された。長径1.72m、短径1.24m、検出面よりの深さは0.42mを測る。埋土については第83図に示したが、基盤層である第Ⅺ層・第Ⅻ層に起因しない粘質の強い土である。２区東部では、基盤層である第Ⅻ層・第Ⅺ層の上面の標高が西側に比べて高いため、西側の第Ⅻ層上面と高さを揃えた第Ⅻ層下部ないし第Ⅻ層下面までの任意の面で遺構検出が行われた。**ＳＫ 704**の傍では第Ⅻ層の堆積が落込み状に浅く残っており、**ＳＫ 704**の埋土はこれを切ることが確認できる。**ＳＫ 704**が検出された上位では、**流路 401**の形成により第Ⅻ層上部まで削られており、**ＳＫ 704**が帰属する層位を明確にできない。**流路 401**の砂礫の流れ込みが見られないことから、帰属時期は弥生時代前期前葉以降で、**流路 401**の形成よりは前である。埋土からの出土遺物はない。

ＳＫ 705（第83図、図版四四）

３区東部の12Ｈ地区で検出した。長径2.97m、短径2.0m、検出面からの深さは0.54mを測る。埋土については第83図に示したが、灰色粘土の上層（１層）と第Ⅻ層・第Ⅺ層に起因するブロック土を主体とする下層（２層～５層）に分けられる。２層・３層には炭化物を含み、３層は４層を切り込む様に堆積することから、５層・４層が堆積した後に３層部分が掘り込まれ、３層・２層で埋められたと考えられる。埋土からは、弥生土器の破片数点と石が出土した。**ＳＫ 705**については、長軸方位がＮ5°Ｗを測り、**墓域Ⅱ**の**木棺墓 702**の長軸方位とほぼ同じであることから、墓域Ⅱに帰属する墓である可能性がある。

第16表　第7面 土坑（ＳＫ）一覧表（単位はｍ、括弧内は検出部分の規模）

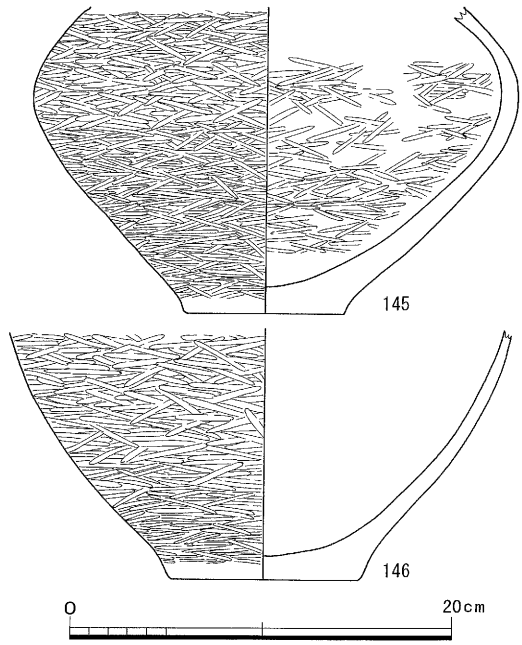
遺構番号	地区	長径	短径	深さ	断面形状	埋土	備考
ＳＫ 706	12H･I	1.06	0.84	0.08	浅い皿形	黒色微砂混粘質土･オリーブ灰色微砂質土のブロック	第Ⅻ層上面
ＳＫ 707	15CD	(0.92)	(0.4)	(0.16)	椀形か	暗灰色粘土	第Ⅻ層下面か
ＳＫ 708	17D･E	(0.9)	(0.13)	(0.12)	逆台形か	〃	第Ⅻ層下面か
ＳＫ 709	17G	1.26	1.02	0.24	逆台形	黒灰色粘質土	第Ⅻ層上面
ＳＫ 710	17H･I	4.3	2.2	0.3	皿形	黒灰色砂礫混シルト	〃
ＳＫ 711	17H	0.85	0.35	0.08	浅い皿形	黒色中砂（粘質高い）	〃
ＳＫ 713	16I	(2.4)	(1.3)	0.1	不整で底面に凸凹	暗灰色微砂質土	〃



第83図　ＳＫ 701・ＳＫ 704・ＳＫ 705 平断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＫ 712(第84図、図版五九)

４区東部の17Ｈ・Ｉ地区で検出された。南側は側溝に切られるため、平面形状は不明である。検出部分の東西長約3.0m、南北長約0.75m、検出面よりの深さは0.07mを測る。埋土については、記録がないため不明である。埋土からは、弥生土器(河内第Ｉ－１・２様式)の広口壺の体部以下が２個体(145・146)出土した。145は、体部中位以下が残存する。大きく張る体部を持つ。体部中位の最上部に段が残る。器面調整は、外面は右下がりのヘラミガキを密に施し、底面にヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラミガキを施す。体部中位の内面にヘラ状工具の痕が残る。胎土には径８㎜以下の砂礫粒を含む。角閃石・雲母・長石の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面がにぶい黄褐色(10YR5/3.5)、内面がにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。体部中位の外面に黒斑が見られる。146は、体部下半以下が残存する。器面調整は、外面は右下がりのヘラミガキを密に施す。内面はナデを施す。底面は磨耗しており、一定期間の使用が窺える。胎土には径７㎜以下の砂礫粒を含む。長石・角閃石・雲母の含有が肉眼で確認できる。体部下位の外面に黒斑が見られる。色調は、外面が灰黄褐色(10YR5/2.5)、内面はにぶい橙色(10YR6/3)を呈する。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代前期前半に比定できる。



第84図　ＳＫ 712出土遺物実測図

溝(ＳＤ)

第７面で検出された溝は、18条(ＳＤ 701 ～ＳＤ 718)である。その内、ＳＤ 703が第Ⅻ層下面に帰属し、それ以外の溝は第ⅩⅣ層上面に帰属する。以下に個別に記載する。

ＳＤ 701(第88図)

１区西部の８～９Ｃ地区で検出された。検出長9.8m、幅2.0m、検出面からの深さ0.46mを測る。埋土については第87図に示したが、第Ⅻ層に相当する暗灰色砂礫混粘土を主体とする上層と第ⅩⅣ層に起因するブロック土からなる下層に分けられる。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 702(第88図)

１区～３区中央部の７～８Ｅ、８～12Ｆ地区で検出された。ＳＤ 704を切り、ＳＤ 705に切られる。検出長約60m、幅2.0m、検出面からの深さ0.65mを測る。埋土については第88図に示したが、粘土のブロックを主体とする上層と第ⅩⅣ層に起因するブロック土からなる下層に分けられる。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 703(第88図)

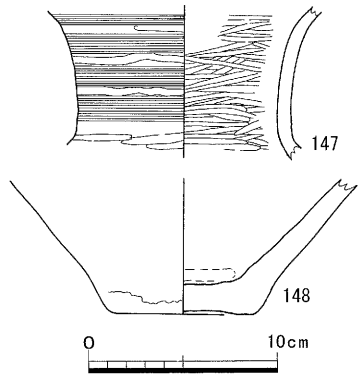
１区北部の７Ｅ・Ｆ地区で検出された。ＳＤ 702に切られる。検出長6.9m、幅0.35～0.7m、検出面からの深さ0.04mを測る。埋土は第Ⅻ層に相当する灰色砂礫混粘土の単層である。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 704(第88図、図版四五)

１区西部から３区中央部にかけての７～14Ｆ・Ｇ地区で検出された。**ＳＤ 702・ＳＤ 705** に切られる。検出長約70m、幅1.3m、検出面からの深さ0.43mを測る。埋土については第88図に示したが、暗灰色粘土からなる上層と第Ⅻ層に起因するブロック土からなる下層に分けられる。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 705(第85・88図、図版四五・五九)

１区東部から３区中央部にかけての７～８Ｈ、８～12Ｇ、12～17Ｆ、17Ｅ地区で検出された。検出長約116m、幅1.3～2.3m、深さ0.85mを測る。埋土については第88図に示したが、灰色を基調とする微砂質土のブロックを主体とする上層と第Ⅻ層に起因するブロック土を主体とする下層に分けられる。埋土からは、弥生土器(河内第Ⅰ様式・第Ⅲ様式)の破片が出土した。その内２点(**147・148**)を図化した。**147** は広口壷である。頸部の約1/3が残る。残存部分の頸部の形状から、長頸壷ではないと見られる。器面調整は内外面ともに横方向のヘラミガキを密に施す。外面にはヘラミガキ後に施された４帯の櫛描直線文が残る。胎土には径６㎜以下の砂礫粒を含む。長石・角閃石・雲母の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面が褐灰色(10YR4/1)、内面がにぶい黄褐色(10YR4.5/3)を呈する。第Ⅱ様式ないし第Ⅲ様式に比定できる。**148** は壷である。底部が残る。器面調整については、器壁の磨耗が著しく不明である。胎土には径12㎜以下の砂礫粒を多く含み、角閃石の含有が顕著である。他に長石・石英・雲母の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面が灰褐色(7.5YR6/2)、内面がにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。



第 85 図　ＳＤ 705 出土遺物実測図

ＳＤ 706(第88図)

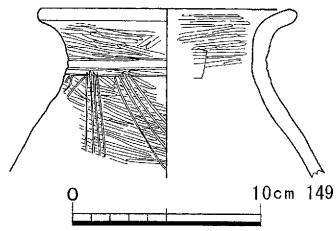
１区北西部の７Ｉ地区で検出された。検出長3.4m、幅1.5m、深さ約0.7mを測る。埋土については第88図に示した。埋土からは弥生土器１片が出土した。

ＳＤ 707

３区東部の13Ｈ・Ｉ、14～15Ｈ地区で検出された。検出長約30m、幅0.7m、検出面からの深さ約0.1mを測る。埋土については、記録がないため不明である。埋土からの出土遺物はない。溝の方向から**ＳＤ 713** と同一の溝であると推測できる。

ＳＤ 708(第86・88図、図版六〇)

３区～４区東部の13～14Ｉ、15～16Ｈ・Ｉ、17Ｉ地区で検出された。検出長約45m、幅1.3～2.6m、検出面からの深さ0.3～0.5mを測る。埋土については、第87図に示したが、概ね基盤層である第Ⅻ層・第Ⅺ層に起因する土である。埋土からの出土遺物は、弥生土器(第Ⅰ様式・第Ⅱ様式)の破片・サヌカイト剥片である。その内、弥生土器１点(**149**)を図化した。**149** は広口壷である。口縁部から体部上半にかけての約1/6が残存する。頸部から短く外反する口縁部を持つ。器面調整は、外面と口縁部から頸部にかけての内面に横方向のヘラミガキを密に施し、体部内面はナ



第 86 図　ＳＤ 708 出土遺物実測図

デの後、右下がりのヘラミガキを粗く施す。外面の体部と頸部の境に3条の篦描沈線を横方向に施し、その最下の沈線から4条を一単位とする篦描直線文を斜方向に施す。胎土には径5㎜以下の砂礫粒を多く含み、角閃石の含有が顕著である。他に雲母・長石の含有が肉眼で確認できる。色調は、内外面ともににぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

ＳＤ 709(第88図、図版四五)

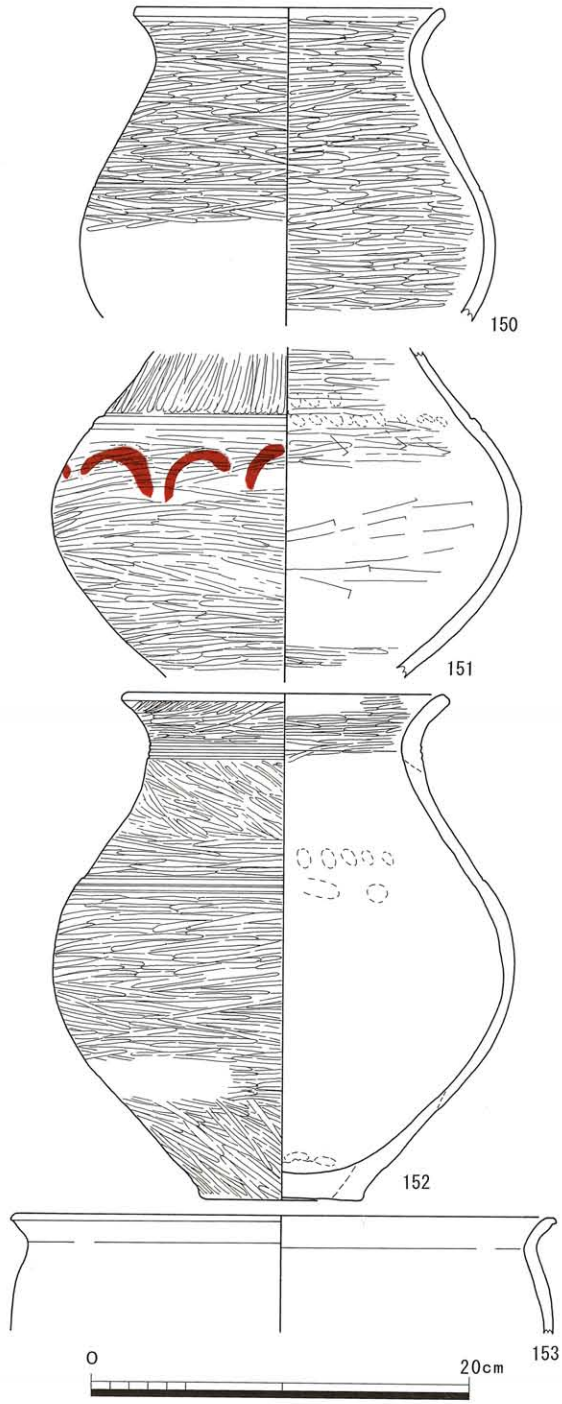
4区の15Ｆ～Ｈ、14Ｈ～Ｉ地区で検出された。**ＳＤ 711** を切り、**ＳＤ 705**・**ＳＤ 712** に切られる。全長約30m、幅約2.5m、検出面からの深さ約0.8mを測る。埋土については第88図に示したが、暗灰色シルトの薄層を挟み、その上下に第Ⅻ層・第Ⅺ層に起因する土のブロックが堆積する。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 710(第88図)

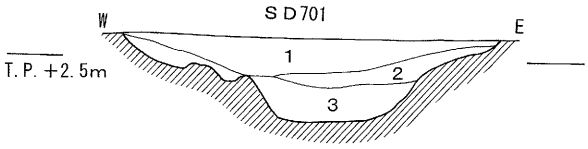
4区中央部の15～16Ｅ・Ｆ地区で検出された。全長約10m、幅1.2m、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土については第88図に示した。埋土からの出土遺物はない。帰属時期は、中央側溝の壁断面で埋土の上位に第Ⅻ－2層が載ることが確認できることから、弥生時代中期中葉以前に比定できる。

ＳＤ 711(第87・89図、図版四五・六〇)

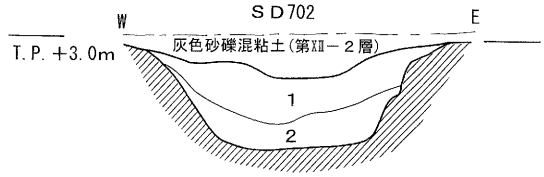
4区の17Ｄ～Ｅ、16Ｅ～Ｆ、15Ｆ～Ｇ地区で検出された。**ＳＤ 705**・**ＳＤ 709** に切られる。検出長36.5m、幅1.5～1.8m、検出面からの深さ0.6～0.8mを測る。埋土については第89図(**ＳＤ 709** と切り合う部分は第88図)に示した。埋土からは、弥生土器(第Ⅰ－2様式・第Ⅱ様式・第Ⅲ様式)の破片が出土した。出土遺物は他の遺構に比べて多く、その殆どが第Ⅰ様式の壺である。出土遺物の内、図化が可能な4点(**150**～**153**)を図化した。**150**～**152** は広口壺である。**150** は口縁部から体部中位にかけての約1/3が残存する。体部上半に1条の篦描沈線を施す。器面調整は内外面に横方向のヘラミガキを密に施す。胎土には径6㎜以下の砂礫粒を含み、長石・石英・角閃石・雲母の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面がにぶい黄褐色(10YR5/3)、内面が灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。**151** は体部上半の約9割と体部下半の約1/3が残存する。張った体部を持つ。体部上半には段を形成し、段の下位を削りだすことにより突帯となす。器面調整は外面の突帯より上位に横方向のヘラミガ



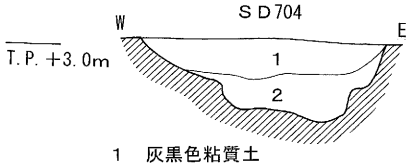
第87図　ＳＤ 711 出土遺物実測図



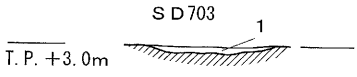
1　暗灰色砂礫混粘土
（暗オリーブ灰色粘質シルトのブロック混じる）
2　黒灰色細砂質土
3　黒灰色細砂混粘土



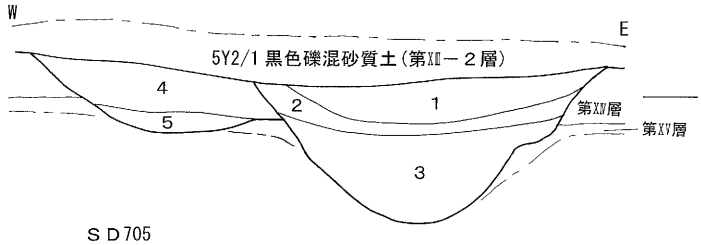
1　暗灰色細砂混粘土（一部に暗灰色細砂質土・
灰黒色細砂混粘質土のブロック混じる）
2　灰黒色細砂混粘質土（ブロック状）



1　灰黒色粘質土
2　黒灰色微砂混粘質土（炭化物含む）

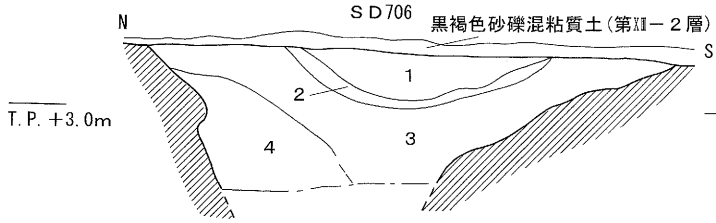


1　灰色砂礫混粘土

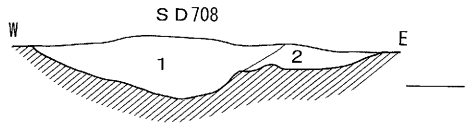


SD705
1　7.5Y4/1 灰色微砂質土（オリーブ灰色微砂のブロック混じる）
2　N3/0 暗灰色粘質土
3　5GY2/1 オリーブ黒色微砂混粘質土・N3/0 暗灰色微砂質土の
ブロック（炭化物含む）

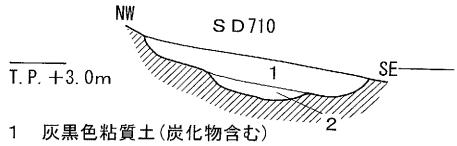
SD704
4　N2/0 黒色微砂混粘質土
5　5GY2/1 オリーブ灰色微砂混粘質土（炭化物含む）



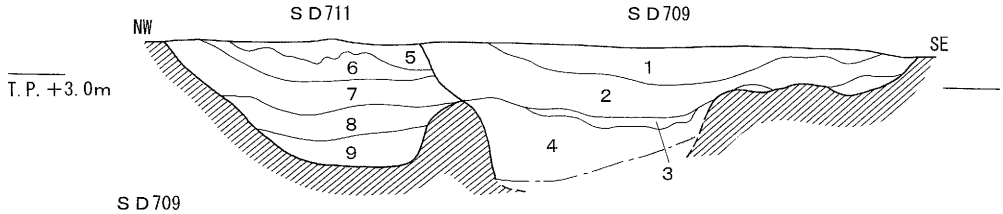
1　暗茶褐色砂質土
2　灰色粘土（ブロック状、炭化物含む）
3　暗灰色微砂混粘質土（炭化物含む）
4　暗オリーブ灰色微砂質土
（暗灰色微砂・オリーブ灰色シルトのブロック混じる）



1　黒灰色砂礫混粘質土
2　暗灰色シルト混細砂

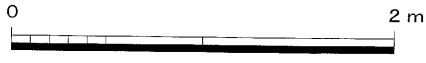


1　灰黒色粘質土（炭化物含む）
2　暗オリーブ灰色粘質シルト（ブロック状、炭化物含む）



SD709
1　暗灰色シルト
2　1に暗オリーブ灰色シルト・灰黒色粘質土のブロック多く混じる
3　暗灰色シルト
4　黒灰色粘質土・暗オリーブ灰色シルト・灰黒色シルトのブロック
SD711
5　乳灰色砂礫
6　灰黒色粘質土
7　黒灰色粘質シルト
8　黒灰色粘質土・灰黒色粘質シルト・暗オリーブ灰色シルト
のブロック
9　灰黒色粘質土・暗オリーブ灰色シルトのブロック

※断面図の実測箇所は第 72 図に示した。



第 88 図　第 7 面検出溝断面図①（S＝1/40）

キ、突帯より下位に横方向のヘラミガキを施す。内面は体部上半に横方向のヘラミガキを粗く施し、下半はナデを施す。内面の体部下半にはナデの前に施された板ナデによる工具痕が残る。外面の突帯の下位に赤色顔料により弧文を描いている。胎土には径4㎜以下の砂礫粒を含み、長石・雲母・石英・角閃石の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面がにぶい黄橙色(10YR6/3)・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面がにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。**152**は、口縁部から体部上半にかけての約1/2が残存する部分と体部上半から体部下半にかけての約1/2と底部が残存する部分の2つの部分からなり、接合はしないが同一個体と判断できる。張った体部を持ち、体部上半に段を形成する。頸部に3条の沈線、段の部分に幅2㎜前後の沈線を施し、その下位に幅1㎜の細い沈線を施す。器面調整は外面に横方向のヘラミガキ、内面にナデの後横方向のヘラミガキを粗く施す。胎土には径5㎜以下の砂礫粒を含み、長石・石英・雲母・角閃石の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面が灰黄褐色(10YR6/2)、内面が褐灰色(10YR5/1)を呈する。**153**は甕と見られる。口縁部から体部上半にかけての破片である。器面調整は、磨耗のため明瞭ではないが、外面はハケメと見られる筋が僅かに残り、ハケ調整を施すと推測される。内面には板状の工具痕が残る。胎土には径6㎜以下の砂礫粒を含み、長石・石英が目立ち、角閃石は僅かに含まれる。色調は、外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面が褐灰色(7.5YR6/1)を呈する。出土遺物は、**150**～**152**が河内第Ⅰ－2様式に、**153**が河内第Ⅱ様式に比定できる。

ＳＤ 712(第89図)

4区東部の15G、16F・G、17F地区で検出された。**ＳＤ 709**を切る。検出長約20m、幅0.5～0.8m、検出面からの深さ0.1～0.15mを測る。埋土については第89図に示した。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 713(第89図)

4区東部の15～16G地区で検出された。**ＳＤ 712**から分岐する。検出長約9.5m、幅0.48～0.6m、検出面からの深さ0.16mを測る。埋土については第89図に示したが、**ＳＤ 712**と同じである。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 714(第89図)

4区東部の16F地区で検出された。**ＳＤ 712**に切られる。検出長2.2m、幅0.5m、検出面からの深さ0.1mを測る。埋土については第89図に示したが、第Ⅻ層・第Ⅺ層に起因するブロック土からなる単層である。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 715(第89図)

4区東部の15～17H地区で検出された。**ＳＯ 703**を切る。断面形状が逆台形を呈する溝である。検出長15.1m、幅0.6～0.8m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土については第89図に示したが、第Ⅻ層・第Ⅺ層に起因するブロック土からなる上層と、炭化物を含む粘土からなる下層に分けられる。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 716(第89図)

4区東部の16I地区で検出された。**ＳＯ 704**に切られる。検出長2.4m、幅0.65m、検出面からの深さ0.12mを測る。埋土については第89図に示した。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 717

4区東部の16F地区で検出された。検出長1.8m、幅0.4m、検出面からの深さ約0.15mを測る。埋

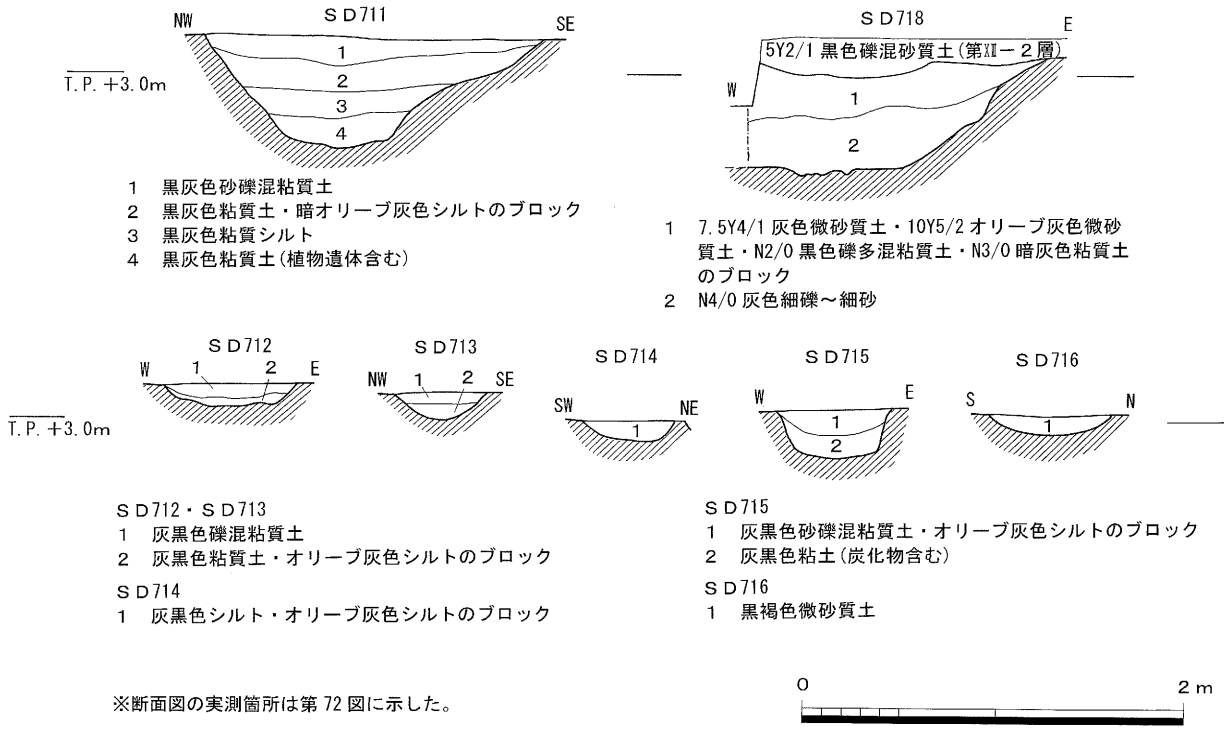
土については、記録がないため不明である。埋土からの出土遺物はない。

ＳＤ 718（第89図）

3区の北部で確認できる溝である。発掘現場では平面的には検出・掘削されていない。第72図の平面図は航空写真に写る埋土下層の砂礫の位置から復元したものである。砂礫部分の全長約34.5m、幅0.8～1.0mを測る。両端が更に伸びるかは不明である。第7面の調査終了後に、砂礫が見られる所に埋土を確認するためのトレンチが設定され、その断面のみが写真・実測図により記録されている。**ＳＤ 702・ＳＤ 704・ＳＤ 705** が分岐する部分で、これらの切り合いを確認すべく設定された埋土観察用のセクションに**ＳＤ 717** の埋土が掛かっており、これによると粘質土のブロックを主体とする上層と砂礫を主体とする下層の2つに分けられる。下層の中粒砂～細砂には葉理が見られる。セクション部分で第Ⅻ層上面からの深さは約0.6mを測る。このセクションの観察から、**ＳＤ 717** は**ＳＤ 705** を切ることが確認できる。セクション除去時に砂礫層中で杭の破片と底に打ち込まれた杭を検出した。杭付近の砂礫層から弥生土器が出土した。

第7面で検出された溝の帰属時期は、**ＳＤ 702・ＳＤ 703・ＳＤ 704・ＳＤ 705・ＳＤ 707・ＳＤ 708・ＳＤ 709・ＳＤ 711・ＳＤ 712・ＳＤ 713・ＳＤ 718** が、埋土からの出土遺物・遺構の切り合い・層位から弥生時代中期中葉に比定でき、**ＳＤ 714** が、埋土・遺構の切り合いから弥生時代前期に比定できる。これ以外の溝は弥生時代前期前半から中期中葉までに比定できる。

第7面で検出された溝の内、弥生時代中期中葉に比定できる溝は、その埋土がブロック土からなるものが多い。下位の溝の位置を踏まえて付け替えられているもの（**ＳＤ 702・ＳＤ 704・ＳＤ 705・ＳＤ 709・ＳＤ 711**）もあることから、短期間の内に掘削と埋め戻しが繰り返されたと考えられる。これらの溝の検出位置は、第6面で検出された大畦畔・中畦畔の検出位置と重なる部分が多く、第6面で検出された水田遺構と関連する遺構群として捉えることができる。ただ、どういう目的で掘削されたものであるかについては、詳らかにすることはできない。



ＳＤ711
1　黒灰色砂礫混粘質土
2　黒灰色粘質土・暗オリーブ灰色シルトのブロック
3　黒灰色粘質シルト
4　黒灰色粘質土（植物遺体含む）

ＳＤ718
1　7.5Y4/1 灰色微砂質土・10Y5/2 オリーブ灰色微砂質土・N2/0 黒色礫多混粘質土・N3/0 暗灰色粘質土のブロック
2　N4/0 灰色細礫～細砂

ＳＤ712・ＳＤ713
1　灰黒色礫混粘質土
2　灰黒色粘質土・オリーブ灰色シルトのブロック

ＳＤ714
1　灰黒色シルト・オリーブ灰色シルトのブロック

ＳＤ715
1　灰黒色砂礫混粘質土・オリーブ灰色シルトのブロック
2　灰黒色粘土（炭化物含む）

ＳＤ716
1　黒褐色微砂質土

※断面図の実測箇所は第72図に示した。

0　2m

第89図　第7面検出溝断面図②（Ｓ＝1/40）

小穴（ＳＰ）

第７面で検出した小穴は34個（ＳＰ 701 ～ＳＰ 734）である。小穴は主に第４区東部で多く検出されており、他の部分では疎らである。明瞭な掘り方を持つものや、埋土がブロック状のものが多く、何らかのヒトの活動により形成されたことがわかるが、配列には規則性は認め難く、建造物を構成するものではないと考えられる。ＳＰ 703・ＳＰ 704から杭あるいは柱根と見られる木が出土したが、その他の小穴からの出土遺物はない。ＳＰ 703については、木が出土したので小穴としたが、明瞭な掘方を持たない。ＳＰ 703・ＳＰ 704の周辺では、第Ⅺ層上面で杭列の痕跡が検出されており、この杭列と関係するものと推測される。各小穴の規模・埋土等については、第17表に示した。

第17表　第７面 小穴（ＳＰ）一覧表（単位はｍ）

遺構番号	地区	径（長径・短径）	深さ	断面形状	埋土
ＳＰ 701	7E	0.51・0.31	0.10	浅い皿形	不明
ＳＰ 702	7H	0.47・0.44	0.10	不明	不明
ＳＰ 703	〃	0.42	0.14	不整形	黒灰色粘質土
ＳＰ 704	〃	0.40	0.15	Ｕ字形	黒灰色粘質土（オリーブ灰色シルトブロック含む）
ＳＰ 705	12D	0.25	0.11	逆台形	N2/0黒色砂礫混粘質土（オリーブ灰色シルトブロック含む）
ＳＰ 706	12F	0.28	0.18	Ｕ字形	N2/0黒色微砂混粘土
ＳＰ 707	13D	0.30	0.19	逆台形	〃
ＳＰ 708	14E	0.70・0.62	0.17	浅い皿形	〃
ＳＰ 709	14F	0.46・0.40	0.40	Ｖ字形	N2/0黒色粘土（植物遺体を少量含む）
ＳＰ 710	15D	0.25	0.09	〃	暗灰色粘質土
ＳＰ 711	16D	0.30	0.07	椀形	暗灰色粘土
ＳＰ 712	16E	0.40・0.25	0.19	Ｕ字形	暗灰色粘質土
ＳＰ 713	15～16E	0.30	0.09	浅い皿形	〃
ＳＰ 714	15F	0.43・0.27	0.15	Ｖ字形	暗褐色微砂質土
ＳＰ 715	17D	0.27	0.07	浅い皿形	暗灰色粘質土
ＳＰ 716	17E	0.25	0.09	椀形	〃
ＳＰ 717	17F	0.30・0.20	0.10	浅い皿形	暗灰色微砂質土
ＳＰ 718	16G	0.24	0.07	椀形	黒灰色粘質土
ＳＰ 719	〃	0.27	0.08	逆台形	〃
ＳＰ 720	〃	0.26・0.20	0.06	Ｖ字形	灰黒色粘質土
ＳＰ 721	〃	0.46・0.38	0.11	不整形	黒灰色粘質土・暗オリーブ灰色シルトのブロック
ＳＰ 722	17G	0.24	0.07	椀形	〃
ＳＰ 723	16G	0.24	0.10	Ｖ字形	灰黒色砂礫混粘質土
ＳＰ 724	17G	0.28	0.12	椀形	〃
ＳＰ 725	〃	0.38・0.32	0.19	Ｕ字形	上位から、黒褐色と橙色土（炭・焼土含む）・黒色粘質土
ＳＰ 726	〃	0.33	0.08	〃	黒色粘質土
ＳＰ 727	〃	0.35・0.25	0.03	浅い皿形	暗灰色粘質土（オリーブ灰色粘質土ブロック含む）
ＳＰ 728	17H	0.50・0.30	0.06	〃	黒色中砂（粘性が高い）
ＳＰ 729	〃	0.30	0.11	椀形	〃
ＳＰ 730	〃	0.40・0.30	0.66	浅い皿形	〃
ＳＰ 731	15I	0.35・0.25	0.10	椀形	黒色微砂混粘土
ＳＰ 732	16I	0.50・0.32	不明	浅い皿形	不明
ＳＰ 733	〃	0.70	0.04	〃	黒色中砂（粘性が高い）
ＳＰ 734	〃	0.35・0.25	0.03	〃	〃

落込み（ＳＯ）

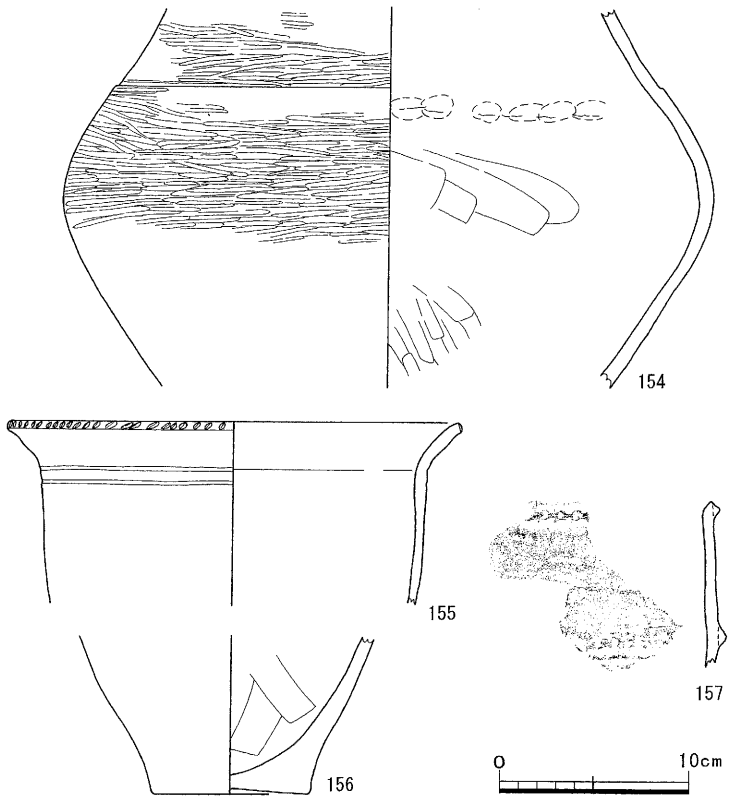
第７面で検出された落込みは、４箇所（ＳＯ 701 ～ＳＯ 704）である。

ＳＯ 701

４区西部の15～16Ｅ・16～17Ｄ地区で検出された。東西長13.4m、南北長18.5m、検出面からの深さ0.15mを測る。ＳＤ 711 に沿った落込みで、埋土は灰黒色粘質土（第Ⅷ－２層）の単層である。ＳＤ 705・ＳＤ 710・ＳＤ 711 は埋土の下面に切込みを確認できる。埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は、埋土・層位から弥生時代中期中葉に比定できる。

ＳＯ 702（第90図、図版六〇）

４区西部の15～16Ｈ・16～17Ｇ地区で検出された。東西長12.6m、南北長18.6m、検出面からの深さ0.2～0.3mを測る。埋土は黒灰色砂礫混粘質土（所により砂礫混じり、第Ⅻ層）である。埋土からは縄文土器（長原式）・弥生土器（第Ⅰ－２様式）の破片が少量出土している。その内、出土した弥生土器３点（154 ～ 156）、縄文土器１点（157）を図化した。154 は壺である。体部の約1/3が残存する。体部上半に段を形成する。器面調整は、外面に横方向のヘラミガキを密に施し、内面にナデを施す。胎土には径７㎜以下の砂礫粒を含み、角閃石の含有が顕著である。他に雲母・長石の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面がにぶい褐色（7.5YR5/3）、内面が褐灰色（10YR5/1）を呈する。外面に煤の付着が見られる。155 は甕である。口縁部から体部上半にかけての約1/2が残存する。口縁端部にＤ字状の刻み目を施し、頸部に２条の箆描沈線を施す。器面調整は口縁部に横ナデ、体部内面にナデ、体部外面に禾本科植物の稈によるものと見られる縦方向のナデを施す。胎土は径５㎜以下の砂礫粒を含み、石英・長石・角閃石の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面が褐灰色（10YR4.5/1）、内面が灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。外面には煤の付着が見られる。156 は甕である。底部と体部下半の一部が残存する。器面調整は外面にナデ、内面に板ナデを施す。外面にはナデの前に施された板ナデによる工具痕が残る。底面は粗くナデ付けており、籾痕が見られる。胎土には径６㎜以下の砂礫粒を含み、石英・長石・角閃石の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面が褐灰色（10YR5/1）、内面が灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。内面に炭化物が付着している。157 は深鉢である。口縁部から胴部上位にかけての小片である。口縁部と胴部に突帯を１条ずつ貼り付けている。突帯の断面形は三角形状で、突帯上にＤ字状の刻み目を施す。器面調整は内外面ともに板状工具による削痕が見られるが、ナデにより仕上げている。胎土には径３㎜以下の砂礫粒を多く含



第 90 図　ＳＯ 702 出土遺物実測図

み、雲母・長石・角閃石の含有が肉眼で確認できる。色調は、外面が灰黄色(2.5Y6/2)、内面が黄灰色(2.5Y5/1)を呈する。遺構の帰属時期は、埋土・出土遺物から弥生時代前期前半に比定できる。形成における人為の有無は不明である。

ＳＯ703

４区東部の16～17Ｈ地区で検出された。東西長5.0m、南北長8.8m、検出面からの深さ0.3m前後を測る。埋土は灰黒色砂礫混粘質土である。埋土からは弥生土器(第Ⅰ様式)の破片が少量出土した。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代前期前半に比定できる。南壁断面で第Ⅻ層を切ることを確認でき、人為的に形成されたと考えられる。

ＳＯ704

４区東部の16Ｉ地区で検出された。**木棺墓703**を切る。検出部分での東西長1.6m、南北長6.4m、検出面からの深さ約0.3mを測る。埋土は上層の暗灰色微砂混粘質土、下層の黒色細砂の２層に分けられる。埋土からの出土遺物はない。黒灰色粘土(第Ⅻ－２層)の下面に切込みが確認できる。遺構の帰属時期は、層位・遺構の切り合いから弥生時代前期前半以降中期中葉以前に比定できる。明瞭な掘方を持つことから、人為的に形成されたと考えられる。

２)遺構に伴わない出土遺物

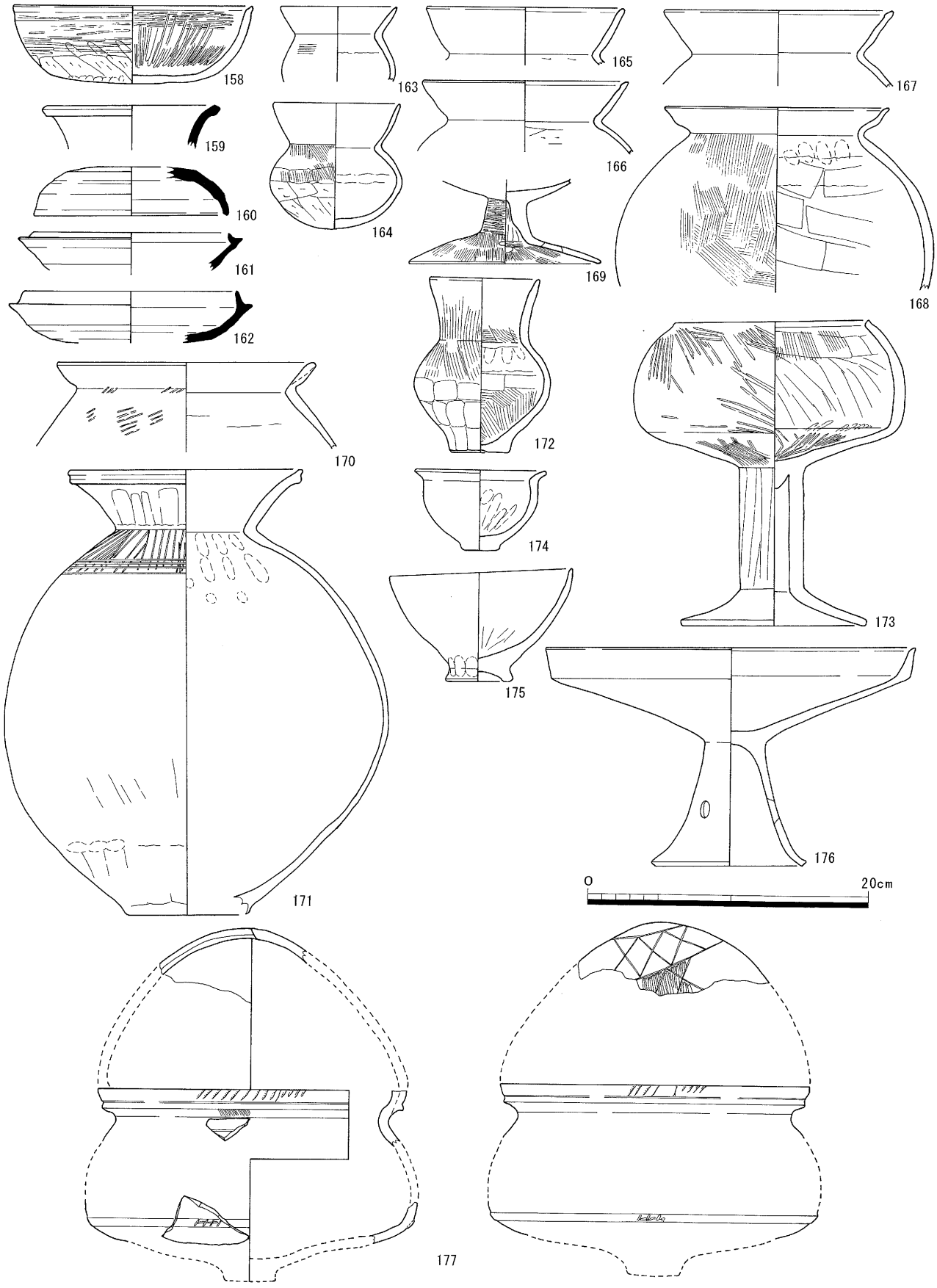
・第Ⅳ層出土遺物(第91図、図版六〇・六一)

20点(**158**～**177**)を掲載した。**158**は土師器杯Ｃに分類されるもので約1/2が残存している。口径17.1cm、器高5.6cmを測る。飛鳥Ⅰに比定される。１区７Ｈ地区出土。

須恵器は４点(**159**～**162**)図化した。**159**は口縁端部が外側に肥厚し内傾する面を形成するもので、提瓶の口縁部が想定される。内面に灰かぶりが認められる。６世紀代。**160**は平坦な天井部を持つ杯蓋である。田辺編年のＴＫ43型式(６世紀末)に比定される。**161**・**162**は杯身片である。**161**が田辺編年のＴＫ217型式(７世紀中葉)、**162**がＭＴ85型式(６世紀後半)に比定される。**159**・**160**が２区11Ｅ地区、**161**が２区10Ｅ地区、**162**が３区13Ｊ地区出土。

布留式土器に分類される古式土師器は７点(**163**～**168**)である。**163**・**164**は小形丸底壷(小形壷B_5)である。扁球形の体部に斜上方に伸びる口頸部が付くもので、共に体部最大径と口縁径がほぼ等しい。体部外面はハケ調整を多用している。布留式新相に比定される。**165**～**167**は布留式甕口縁部の細片である。口縁端部の内面肥厚が幅広のもので、布留式甕の最終段階(甕F_3)のものにあたる。３点共に淡赤褐色系の色調で胎土はやや粗い。布留式新相に比定される。**168**は二段に屈曲する口縁部を持つ甕である。体部外面の器面調整はハケを多用している。色調は淡褐色。**169**は精製の椀形高杯である。低い脚部で裾部は屈曲して大きく開く。スカシ孔は４方に穿たれている。布留式古相に比定される。**163**が２区10Ｃ地区、**164**が１区６Ｅ地区、**165**が１区８Ｄ地区、**166**が２区９Ｃ地区、**167**が１区８Ｄ地区、**168**・**169**が１区８Ｃ地区出土。

弥生土器は８点(**170**～**177**)である。全て弥生時代後期(第Ⅴ様式)に比定される。**170**はⅤ様式甕片である。口縁部は叩き出し技法によるもので、復元口径18.4cmを測る。非生駒西麓産。２区９Ｅ地区出土。**171**～**173**は壷類である。**171**は広口壷で約1/2が残存している。口径16.7cm、器高32.0cm、体部最大径27.4cmを測る。体部上半にヘラ先工具による横位の直線文４条と縦位の直線文で構成される文様が施文されている。色調は淡灰白色。非生駒西麓産。**172**は小形の長頸壷で



第 91 図　第Ⅳ層出土遺物実測図

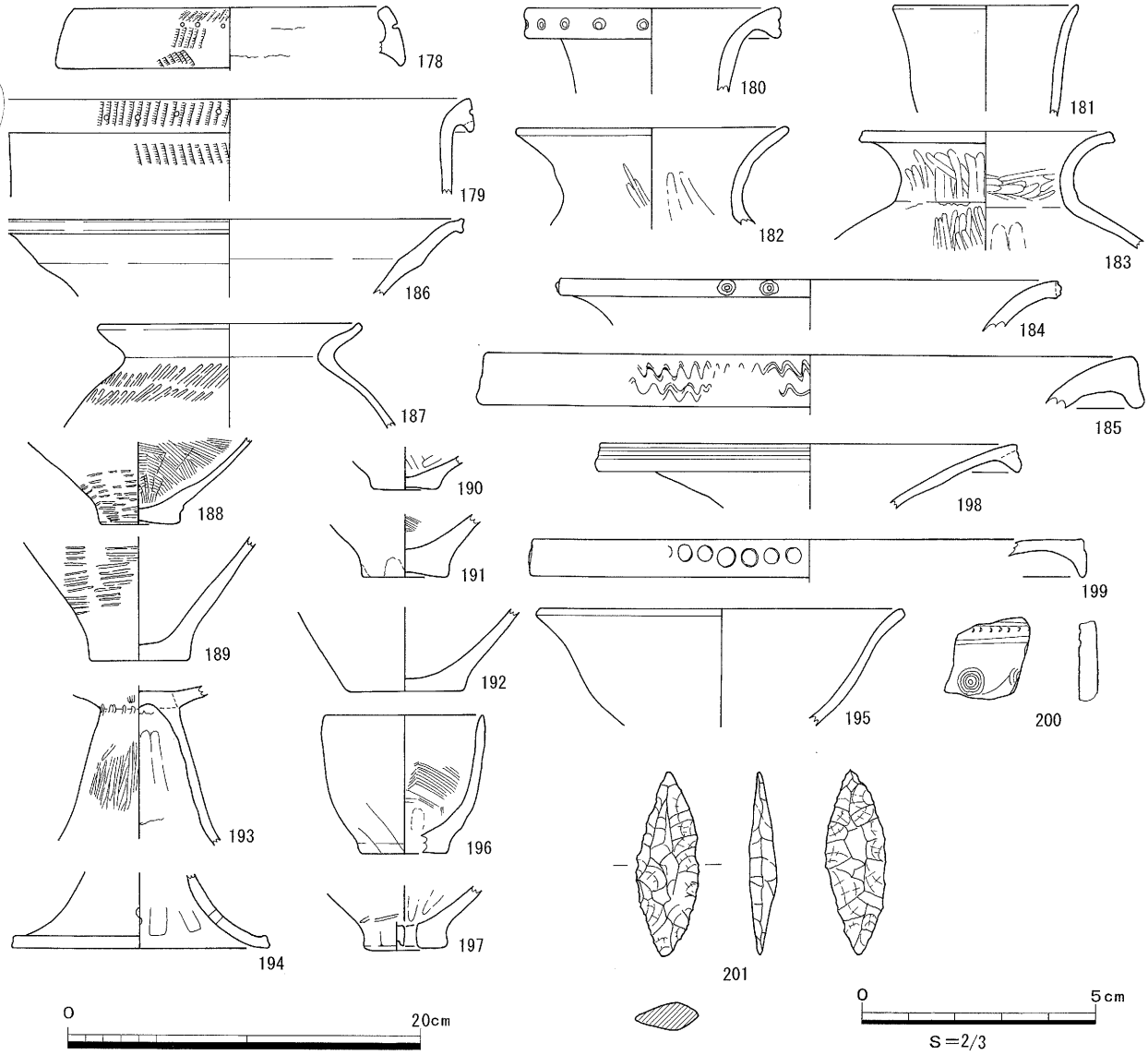
ある。完形品で、口径7.7cm、器高12.5cm、体部最大径9.8cm、底径4.0cmを測る。色調は淡灰白色。非生駒西麓産。173は台付無頸壷である。ほぼ完形品で口径13.8cm、器高22.0cm、裾部径13.0cmを測る。下膨れの体部から内湾する形状を持つ無頸壷に柱状部が中空で直線的に伸びる脚部が付く。壷部と脚部の接合には円盤充填手法が行われている。色調は褐灰色。生駒西麓産である。類例の少ないもので、脚部形状からみて後期前半の所産であろう。171は1区6E地区、172は1区8C地区、173が2区10C地区出土。174・175は小形鉢である。174は平底で半球形の体部から小さく外反する口縁部が付く。175は上げ底の脚部が付く直口の鉢である。共に色調は褐灰色である。生駒西麓産である。174が2区9C地区、175が1区8I地区出土。176は高杯である。大形の杯部に円錐状の脚部が付く有稜高杯である。図上で完形に復元が可能で、口径26.4cm、器高15.7cm、裾部径10.5cmを測る。色調は淡赤灰色。非生駒西麓産。1区8C地区出土。177は手焙形土器である。細片のみで全容は不明であるが覆部と体部が一体化した形態のものと推定される。覆部外面上位に横位に施された2本の直線文間に格子状文様が施文されている。色調は淡褐灰色。生駒西麓産である。2区9C地区出土。

・第Ⅵ層出土遺物(第92図、図版六一・六二)

24点(178～201)を図化した。弥生時代中期後半から後期に比定される遺物が中心である。178は付加状の口縁部を持つ広口壷である。内湾気味に広がる幅広の口縁端面に上から刺突列点文、刺突文、細かい簾状文、刺突列点文が施文されている。179は大形鉢の細片である。口縁部は外傾する幅広の端面を形成している。口縁端面外面に簾状文と刺突文、体部外面に簾状文が施文されている。色調は共に褐灰色。生駒西麓産。帰属時期は178が河内Ⅳ－2様式、179が河内Ⅲ－2様式。178が2区9D地区、179が1区8D地区出土。

180～186の7点は壷類である。いずれも口縁部の細片である。180・182～185は広口壷である。広口壷には、口縁端部を垂下させ幅広の端面を形成する180・185、口縁部が大きく外反する182・183、広口長頸の形状が推定される184がある。端面の施文は180が竹管文、184が竹管押圧円形浮文、185が波状文である。色調は褐灰色が180・182・183・185、赤褐色が184で全て生駒西麓産。181は長頸壷の口頸部片である。色調は赤褐色。生駒西麓産。186は二重口縁壷の口縁部片である。大形のものと推定され復元口径26.8cmを測る。色調は褐灰色。全体に丁寧な作りのもので胎土も良好である。実体鏡により角閃石の含有が認められる生駒西麓産。180が1区8E地区、181が2区9C地区、182・186が1区8H地区、183が2区9I地区、184が2区10H地区、185が2区9D地区出土。

甕は5点(187～191)を図化した。187はV様式甕片である。口縁部付近で緩やかに内湾するもので、口縁端部は外傾する小端面を形成している。色調は赤褐色。生駒西麓産。1区8H地区出土。188～190は甕底部である。188が2区10G地区、189が1区7H地区、190が2区10I地区出土。191・192は底部片で191が鉢、192と推定される。191が2区9C地区、192が1区7D地区出土。193・194は高杯である。共に円錐状を呈する中空の脚部片である。色調は褐灰色。生駒西麓産。193が2区10D地区、194が2区9F地区出土。195は鉢の口縁部から体部の細片である。復元口径20.4cmを測る中形の鉢である。色調は淡褐灰色。生駒西麓産。1区8H地区出土。196は平底の底部を有する小形の鉢である。色調は褐灰色。生駒西麓産。2区10I地区出土。197は底部有孔土器である。穿孔は焼成前で、貫通した1孔と途中で中断した1孔がある。色調は淡灰褐色。



第92図　第Ⅵ層出土遺物実測図

生駒西麓産。２区10Ｇ地区出土。**198・199**は大形器台の口縁部片と推定される。共に口縁端部を垂下拡張させるもので、**198**には二条の凹線、**199**には円形浮文が施文されている。**198**は生駒西麓産。**199**は灰白色の色調で非生駒西麓産。**198**は２区10Ｄ地区、**199**は２区９Ｉ地区出土。**200**の外面には横位に走る凸帯より上部に半裁の竹管文、下部に同心円文を押捺し連結したＳ字状の文様が施文されている。器種は明瞭でない。色調は外面が赤褐色、内面は褐灰色である。胎土は良好であるが、実体鏡で角閃石の含有が確認できる。生駒西麓産。Ｓ字意匠は「祭紋」土器の典型例であるとされており、これらの土器については、「ハレ」の土器としての役割を果たしたものと推定されている。八尾市域においては美園遺跡[註4]で弥生時代後期から古墳時代初頭に比定される「祭紋」土器が出土している。２区９Ｄ地区出土。

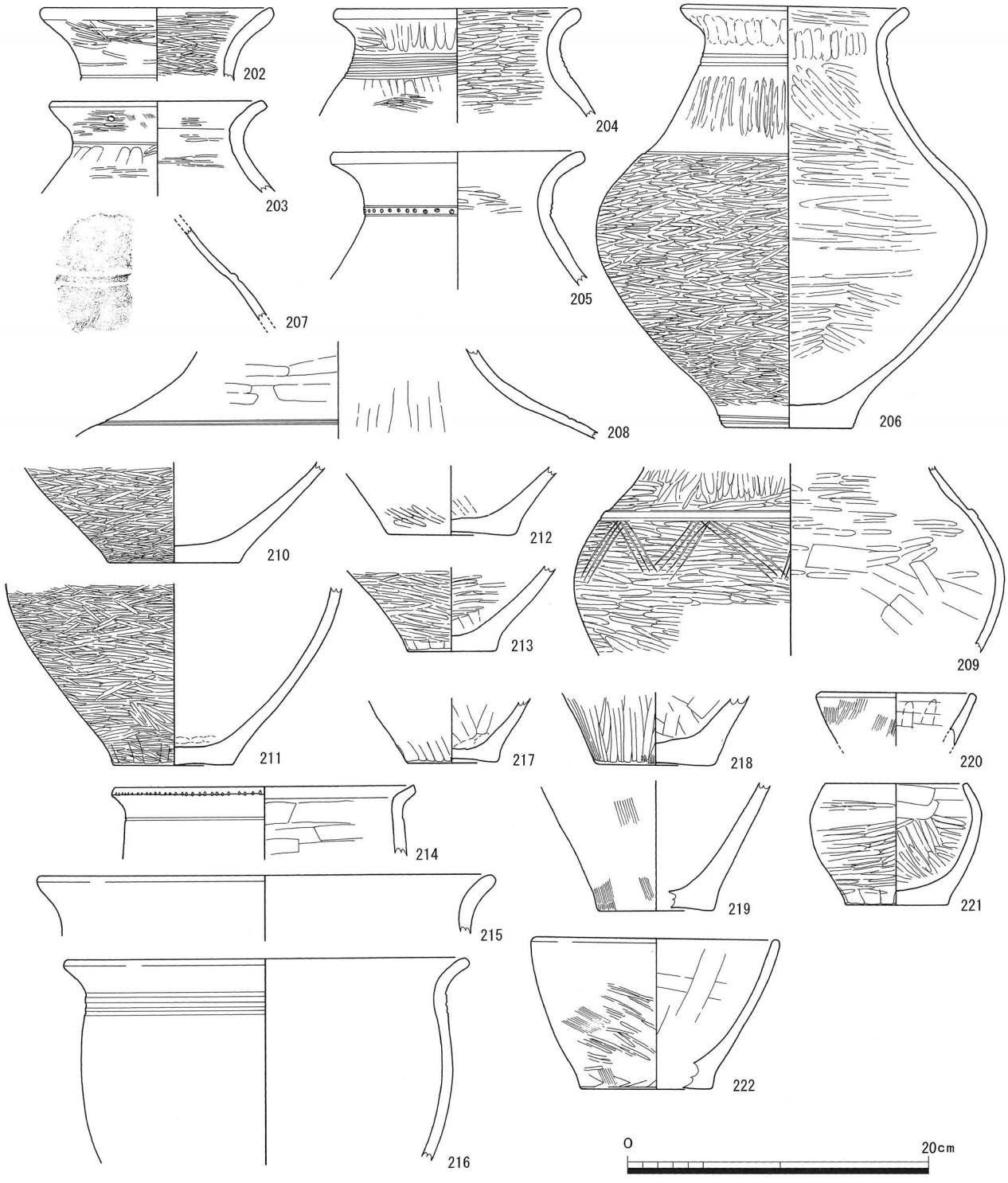
201は凸基無茎式石鏃である。完形品で長さ４cm、最大幅1.3cm、重さ2.5ｇを測る。菱形の断面を持つもので、両側辺に細かい剥離が施されている。サヌカイト製。２区８Ｆ地区出土。

・第Ⅻ層出土遺物(第93・94図、図版六二～六四)

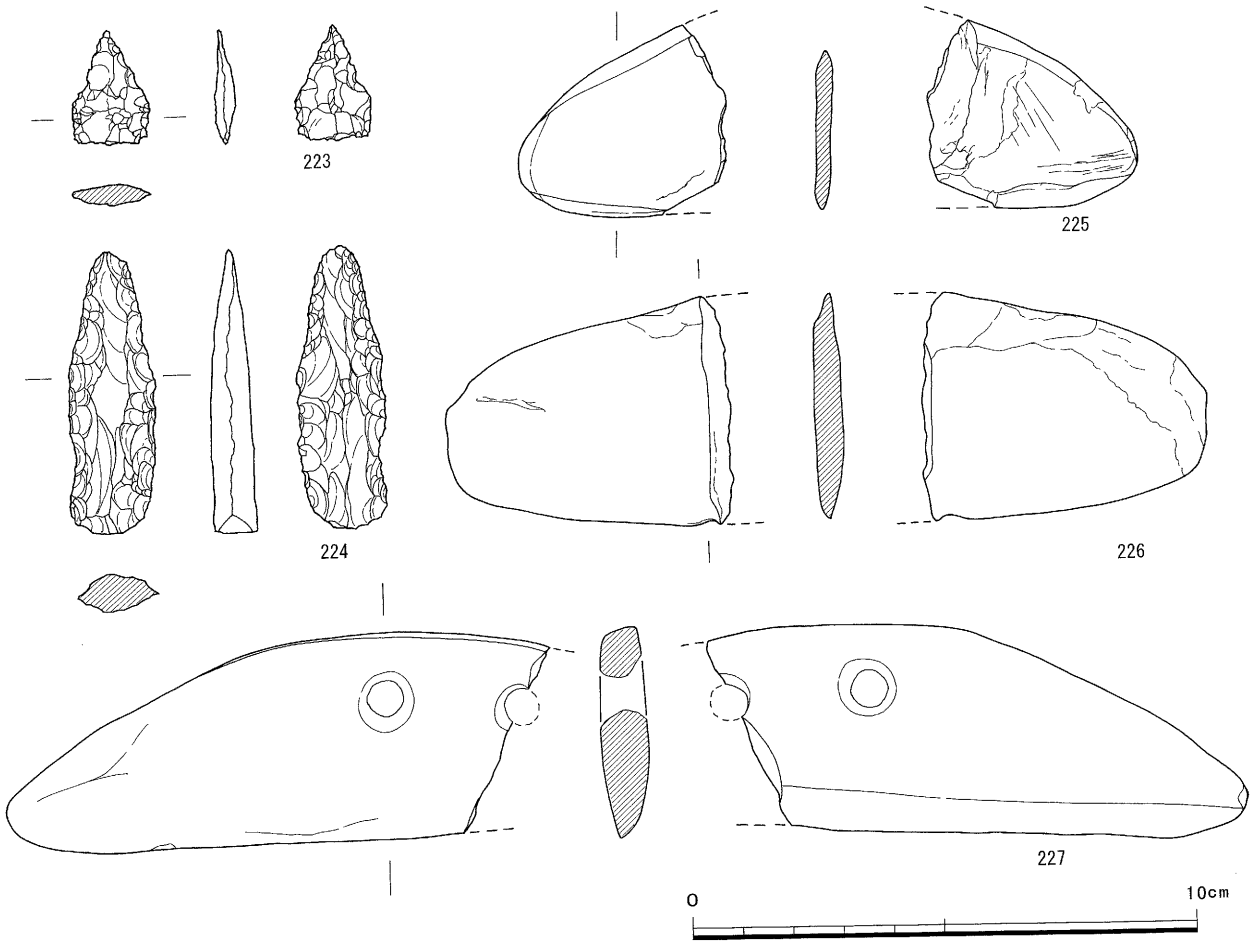
総数で26点(202 ～ 227)を図化した。202 ～ 222 が弥生土器類、223 ～ 227 が石器類である。時期的には弥生時代前期(河内Ⅰ－２様式)を中心とした資料である。

壷は12点(202 ～ 213)である。すべて広口壷に分類される。206 を除き細片が大半を占める。202 ～ 205 は口縁部から頸部上半の資料である。そのうち、ヘラ描沈線文が巡るものが 202 ～ 204、２本のヘラ描沈線文間に刺突文を施すものが 205 である。器面調整は内外面共に横位のヘラミガキが多用されている。203 の口縁部に紐孔が穿たれている。色調は褐灰色。生駒西麓産である。202 が４区16Ｈ地区、203 が４区17Ｆ地区、204 が４区16Ｆ地区、205 が４区17Ｈ地区出土。206 はほぼ完形に復元されるもので、口径14.5cm、器高28.0cm、体部最大径25.9cm、底径8.5cmを測る。頸部上半に２条のヘラ描沈線文、体部上位に段、底部の外側面に２条のヘラ描沈線文を施す。器面調整は内外面ともに横位の密なヘラミガキが多用されている。色調は褐灰色。生駒西麓産である。４区17Ｈ地区出土。207 ～ 209 は頸部から体部にかけての細片である。３点共に体部上位に削出突帯文とヘラ描沈線文を施す。207・209 はヘラ描沈線文より下部にヘラ描による３本を一単位とする山形文が施文されている。共に色調は褐灰色。共に生駒西麓産で 208 については表面が風化しており、裸眼で角閃石の含有が認められる。207 が４区16Ｈ地区、208 が３区13Ｆ地区、209 が４区16Ｉ地区出土。210 ～ 213 は壷底部である。平底を呈するもので、212・217 の裏面は僅かに窪む。色調は 212 が灰白色で他は褐灰色～赤褐色である。216 が非生駒西麓産、他は生駒西麓産である。210 が１区８Ｃ地区、211 が４区16Ｉ地区、212 が４区16Ｅ地区、213 が４区17Ｈ地区出土。214 ～ 219 は甕である。214 ～ 216 は口縁部から体部にかけての資料である。口縁端部の形状では、内傾する平坦面を持ち下端に刻み目を施文する 214、丸味を持つ 215・216 がある。体部上半のヘラ描沈線文は 214 が１本、216 が３本である。色調は３点共に褐灰色で生駒西麓産。214 が４区16Ｆ地区、215 が３区12Ｆ地区、216 が３区12Ｆ地区出土。217 ～ 219 は甕底部である。器面調整は 219 がタテハケ、217・218 が縦位のヘラミガキを多用している。217・219 は色調が褐灰色で生駒西麓産。218 が暗灰白色で非生駒西麓産である。217・219 が３区12Ｆ地区、218 が３区12Ｉ地区出土。220 ～ 222 は鉢である。220 は口縁部の細片。221 は平底の底部を持つもので、口縁部が体部上半から内湾する小形の鉢である。体部上位に紐孔が穿たれている。口径9.4cm、器高8.0cm、底部径6.8cmを測る。221 は口縁部が斜上方に内湾気味に伸びるもので、直口の口縁部を持つ。３点共に色調は褐灰色。生駒西麓産である。220 が３区13Ｇ地区、221 が４区16Ｉ地区、222 が４区17Ｈ地区出土。

223 ～ 227 は石器類である。223 は平基無茎式の石鏃である。完形品で長さ2.3cm、幅1.5cm、重さ1.1ｇを測る。両側辺に細かい剥離が施されており、特にＡ面側の鏑が明瞭である。サヌカイト製。１区９Ｄ地区出土。224 は細身で長い大形石鏃である。基部が折損している。残存長5.6cm、幅1.6cmを測る。両側辺にやや大きめの剥離が施されている。先端部分に丸みを持つため未成品と推定される。２区16Ｅ地区出土。225 ～ 227 は石包丁である。225・226 はともに表面にローリングによる研磨を受けている。石材は緑色片岩である。227 は直線刃半月形態の石包丁で約1/2が残存している。刃部は片刃である。両面および背部の研磨が丁寧で光沢を持つ。石材は黒色片岩である。225 が３区13Ｅ地区、226 が３区12Ｅ地区、227 は４区15Ｈ地区出土。



第 93 図　第Ⅳ層出土遺物実測図－ 1

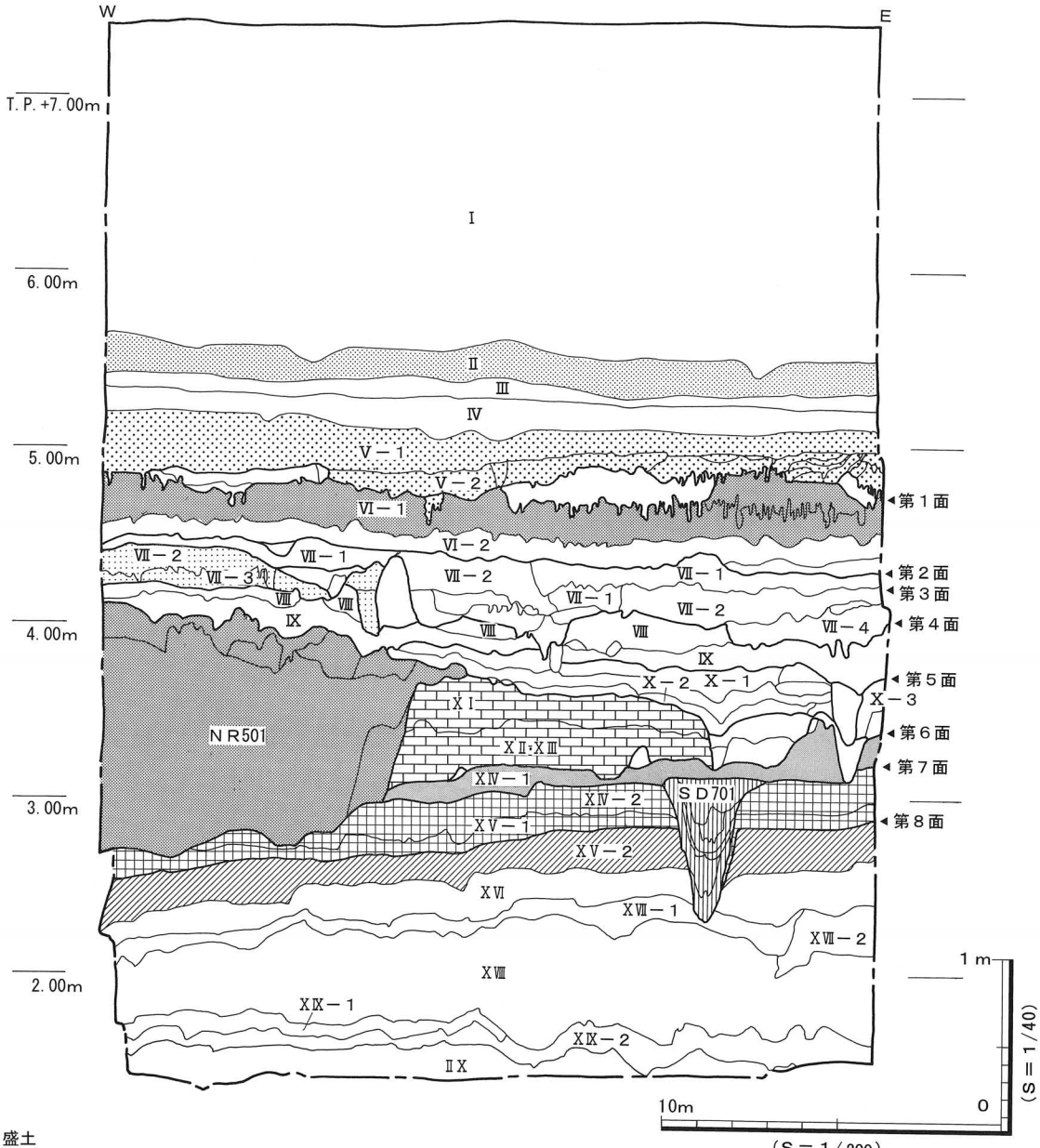


第 94 図　第Ⅻ層出土遺物実測図－ 2

第４節　北調査区（５区）検出遺構と出土遺物

１）各調査面の概要

北調査区と呼称した５区は南調査区の１区北東部に近接している。煙突建築部分を対象とした調査区で平面形状が八角形を呈するもので、調査面積は500㎡を測る。調査地区では３～５Ｈ～Ｊ地区にあたる。調査では、８面（１～８面）にわたる調査を実施した結果、弥生時代前期から室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。以下、検出した調査面毎に記す。



（S＝1／200）

第Ⅰ層　盛土
第Ⅱ層　5B3/1 暗青灰色粘土（旧作土）
第Ⅲ層　N3/0 暗灰色細砂混粘土（床土）
第Ⅳ層　7.5Y4/1 灰色粗砂混粘土
第Ⅴ－１層　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質細砂
第Ⅴ－２層　5Y6/4 オリーブ黄色細砂
第Ⅵ－１層　10BG3/1 暗青灰色粘土
第Ⅵ－２層　7.5Y5/1 灰色シルト～粗砂
第Ⅶ－１層　7.5Y4/2 灰オリーブ色粘質粗砂
第Ⅶ－２層　7.5Y3/2 オリーブ黒色粗砂
第Ⅶ－３層　5G4/1 暗緑灰色粘土質シルト
第Ⅶ－４層　N3/0 暗灰色粘土
（弥生中期後半の遺物を含む）
第ⅩⅤ－２層　5G6/1 緑灰色シルト
第ⅩⅥ層　5G5/1 緑灰色細砂混シルト
第ⅩⅦ－１層　10G4/1 暗緑灰色シルト混粘土
第ⅩⅦ－２層　10BG5/1 青灰色シルト混粘土
第ⅩⅧ層　10Y7/2 灰白色細砂
第ⅩⅨ－１層　5PB4/1 暗青灰色粘土
第ⅩⅨ－２層　2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土
第ⅡX層　N1.5/0 黒色粘土
第ⅩⅤ－１層　5G4/1 暗緑灰色シルト
第Ⅷ層　10Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土
第Ⅸ層　N4/0 灰色粘土
第Ⅹ－１層　10GY4/1 暗緑灰色シルト混粘土
第Ⅹ－２層　N5/0 灰色粘土
第Ⅹ－３層　5GY7/1 明オリーブ灰色シルト
第ⅩⅠ層　5B4/1 暗青灰色シルト質粘土
第ⅩⅡ・ⅩⅢ層　5PB4/1 暗青灰色粘質シルト
第ⅩⅣ－１層　5PB1.7/1 青黒色細砂混粘土
第ⅩⅣ－２層　5PB1.7/1 青黒色粗砂混粘土

第95図　北調査区（５区）断面図

・**第１面**〔室町時代〕(第96図、図版四六)

第Ⅵ－１層上面(T.P.＋4.6～4.8m)で水田２筆(**水田101**・**水田102**)、畦畔１条(**畦畔101**)を検出した。

水田は南北方向に伸びる**畦畔101**で区画されている。**畦畔101**の東に位置する**水田101**については大半が調査区外に至るため詳細は不明である。**水田102**は検出部分で東西幅20.3m、南北幅22.0mを測る。なお、**畦畔101**の西部を中心として、南北方向の歩行痕跡を残す無数の人の足跡が残されている。**畦畔101**は南調査区(１区)第１面で検出された**水田107**の東側を区画する畦畔にあたる。灰色シルト質粘土を盛り上げて構築されているもので、検出長12.3m、上面幅0.3m、基底幅1.2～1.9m、高さ0.08mを測る。南調査区の第１面で検出した水田面に対応しており、室町時代以降の水田面と推定される。

・**第２面**〔古墳時代前期～鎌倉時代〕(第97図、図版四七)

第Ⅶ－１層上面(T.P.＋4.3m)で古墳時代前期から鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。検出した遺構には土坑７基(**ＳＫ201**～**ＳＫ207**)、溝９条(**ＳＤ201**～**ＳＤ209**)、落込み１箇所(**ＳＯ201**)、小穴47個(**ＳＰ201**～**ＳＰ247**)がある。南調査区の第２・３面に対応する。

土坑(ＳＫ)

ＳＫ201

調査区北西部の３Ｈ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、長径0.8m、短径0.65m、深さ0.9mを測る。埋土は暗青灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ202

３Ｈ地区で検出した。不整の楕円形を呈するもので、長径0.8m、短径0.7m、深さ0.12mを測る。埋土は暗青灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ203

調査区中央部の３・４ＨＩ地区で検出した。不整の楕円形を呈するもので、長径1.2m、短径0.7m、深さ1.1mを測る。埋土は暗青灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ204

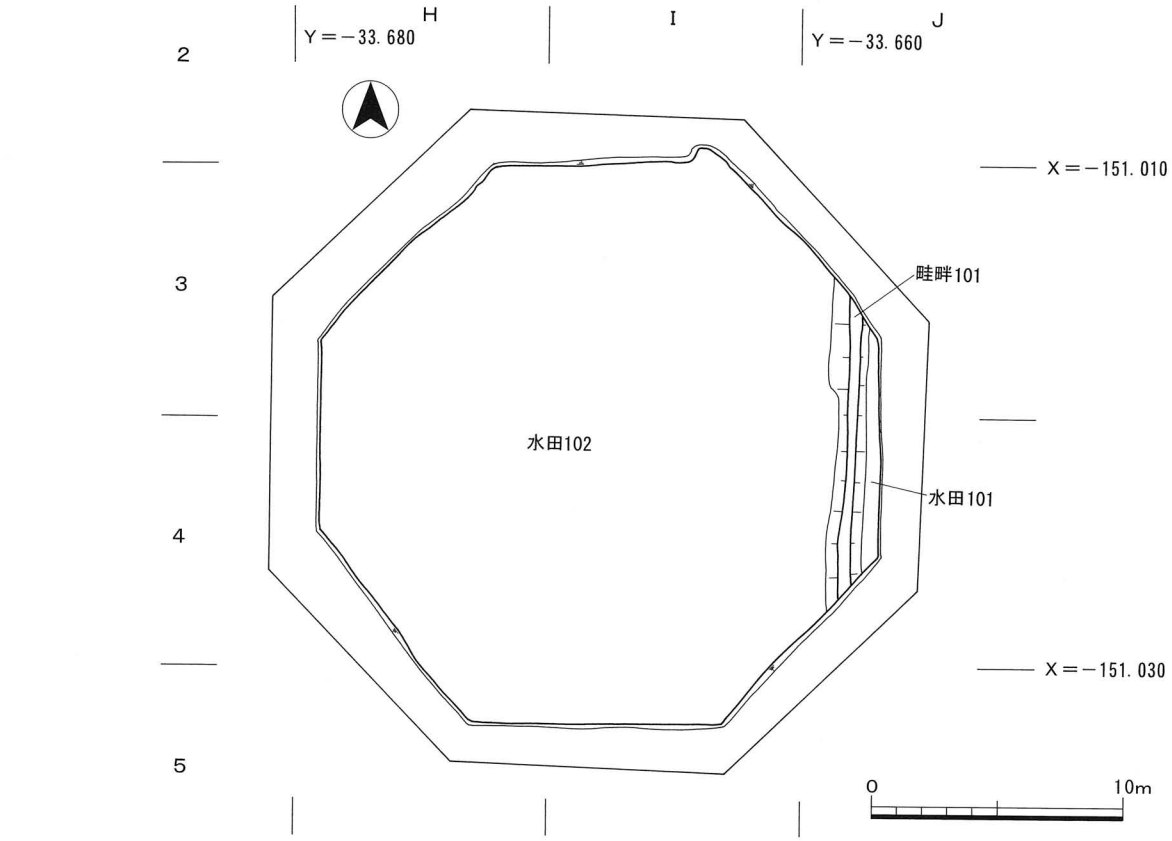
調査区南部の４Ｈ地区で検出した。北東部は**ＳＤ201**に切られている。検出部分で東西幅1.6m、南北幅1.3m、深さ0.09mを測る。埋土は暗青灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ205

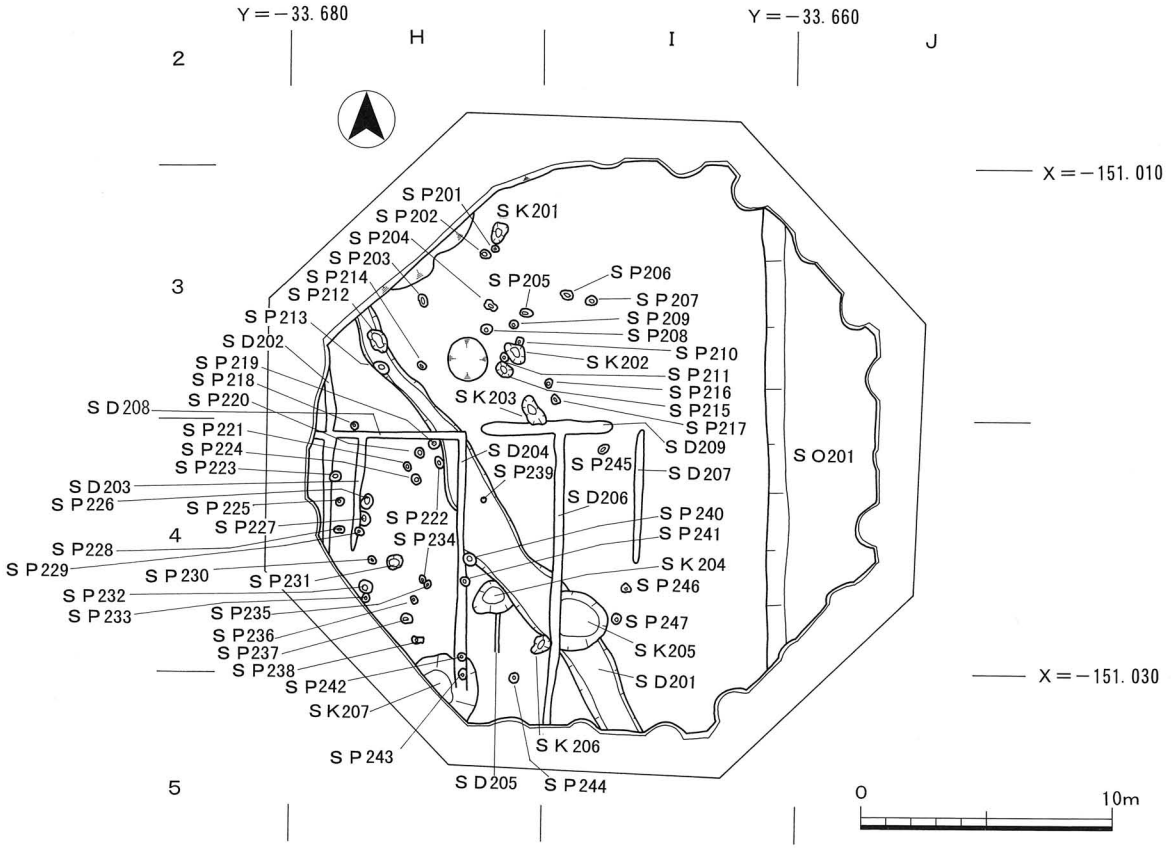
調査区南部の４ＨＩ地区で検出した。**ＳＤ201**を切り、西端は**ＳＤ206**に切られている。検出部分で東西幅1.8m、南北幅2.35m、深さ0.05mを測る。埋土は暗青灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ206

調査区南部の４ＨＩ地区で検出した。不整規模は検出部で、東西0.55m以上、南北0.6m以上、深さ0.05mを測る。断面は、逆台形を呈する。埋土は暗青灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。



第96図　5区第1面　平面図(S＝1/300)



第97図　5区第2面　平面図(S＝1/300)

ＳＫ 207

調査区南部の４・５Ｈ地区で検出した。南部は調査区外に至る。ＳＤ 204、ＳＰ 242、ＳＰ 243に切られている。検出部分で東西幅2.3m、南北幅2.5m、深さ0.09mを測る。埋土は暗青灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

溝（ＳＤ）

総数で９条を検出した。古墳時代前期に比定されるＳＤ201以外については、水田に伴う小溝で鎌倉時代のもので、本来の構築面は第Ⅵ－２層（T.P.＋4.5m）上面である。

ＳＤ 201

調度区中央をやや西よりに蛇行しながら南北方向に伸びる。幅0.6～1.9m、深さ0.05～0.15mを測る。埋土は黄色粗砂混粘土の単一層である。遺物は古墳時代前期に比定される布留式甕の細片等が極少量出土しているが図化し得たものはない。

ＳＤ 202 ～ＳＤ 209

水田耕作に関連する鋤溝・畝溝等の小溝である。溝は東西方向が２条（ＳＤ 208・ＳＤ 209）、南北方向が６条（ＳＤ 202 ～ＳＤ 207）である。小溝群は南調査区の第２面で検出されている水田面に対応する。法量等の詳細は第18表に示した。

第18表　第２面　溝（ＳＤ）一覧表（単位m）

遺構番号	地　区	全長（検出長）	幅（最大）	深さ	埋土	出土遺物
ＳＤ 202	3･4H	7.20	0.45	0.02	10GY4/1暗緑灰色粘質土	
ＳＤ 203	4H	4.45	0.38	0.04	〃	
ＳＤ 204	4･5H	9.98	0.45	0.06	〃	
ＳＤ 205	4H	1.95	0.12	0.02	〃	
ＳＤ 206	4･5I	11.55	0.48	0.14	〃	
ＳＤ 207	4I	5.35	0.32	0.07	〃	
ＳＤ 208	4H	6.05	0.28	0.02	〃	
ＳＤ 209	4H･I	5.25	0.55	0.07	〃	

落込み（ＳＯ）

ＳＯ 201

調査区東部３・４ＩＪ地区で検出した。南北方向に伸びるもので東部は調査区外に至る。検出部分で南北幅18.3m、東西幅4.5m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5YR4/2灰褐色細砂混粘土である遺物は古墳時代中期から飛鳥時代前半に比定される土師器・須恵器の破片が少量出しているが図化し得たものはない。遺構の帰属時期は飛鳥時代前半と推定される。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ 201 ～ＳＰ 247

調査区の中央部より西部で検出した。一部の小穴は、建物の柱跡を構成すると思われるが、配列を確認できたものはない。上面の形状では、円形・楕円形がある。規模は径0.19～1.02m、深さ0.08～0.3mを測る。埋土は黄褐色礫混粘土及び暗灰色シルト混粘土で、一部の小穴内からは土師器（布留式）が極少量出土している。法量等の詳細は第19表に示した。

第19表　第2面　小穴（ＳＰ）一覧表（単位m）

遺構番号	地　区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
ＳＰ 201	3H	円形	0.35	0.27	0.13	黄褐色礫混粘土	
ＳＰ 202	〃	〃	0.41	0.35	0.14	〃	
ＳＰ 203	〃	楕円形	0.50	0.35	0.20	〃	
ＳＰ 204	〃	不整円形	0.53	0.40	0.09	〃	
ＳＰ 205	〃	楕円形	0.58	0.30	0.30	〃	
ＳＰ 206	3I	不整円形	0.58	0.41	0.20	〃	
ＳＰ 207	〃	円形	0.40	0.38	0.25	〃	
ＳＰ 208	3H	〃	0.45	0.45	0.08	〃	
ＳＰ 209	〃	〃	0.35	0.32	0.30	〃	
ＳＰ 210	〃	〃	0.35	0.25	0.13	〃	
ＳＰ 211	〃	〃	0.40	0.35	0.15	〃	
ＳＰ 212	〃	楕円形	1.02	0.60	0.14	〃	
ＳＰ 213	〃	〃	0.70	0.45	0.06	〃	
ＳＰ 214	〃	〃	0.40	0.30	0.30	〃	
ＳＰ 215	〃	不整円形	0.71	0.68	0.13	〃	
ＳＰ 216	3I	円形	0.32	0.30	0.15	〃	
ＳＰ 217	〃	不整円形	0.39	0.25	0.19	〃	
ＳＰ 218	4H	円形	0.32	0.32	0.10	〃	
ＳＰ 219	〃	〃	0.42	0.40	0.15	〃	
ＳＰ 220	〃	〃	0.42	0.38	0.21	〃	
ＳＰ 221	〃	〃	0.35	0.31	0.13	〃	
ＳＰ 222	〃	楕円形	0.48	0.30	0.18	〃	
ＳＰ 223	〃	円形	0.42	0.42	0.07	〃	
ＳＰ 224	〃	〃	0.45	0.40	0.19	〃	
ＳＰ 225	〃	〃	0.35	0.35	0.15	〃	
ＳＰ 226	〃	楕円形	0.60	0.45	0.16	〃	
ＳＰ 227	〃	不整円形	0.52	0.42	0.19	〃	
ＳＰ 228	〃	楕円形	0.40	0.35	0.12	〃	
ＳＰ 229	〃	〃	0.35	0.28	0.14	〃	
ＳＰ 230	〃	〃	0.35	0.25	0.08	〃	
ＳＰ 231	〃	円形	0.68	0.55	0.19	〃	
ＳＰ 232	〃	〃	0.51	0.50	0.18	〃	
ＳＰ 233	〃	〃	0.30	0.30	0.20	〃	
ＳＰ 234	〃	〃	0.28	0.28	0.15	〃	
ＳＰ 235	〃	楕円形	0.35	0.21	0.14	〃	
ＳＰ 236	〃	〃	0.35	0.28	0.16	〃	
ＳＰ 237	〃	〃	0.48	0.40	0.41	暗灰色シルト混粘土	
ＳＰ 238	〃	不整円形	0.50	0.32	0.18	黄褐色礫混粘土	
ＳＰ 239	〃	円形	0.20	0.19	0.18	暗灰色シルト混粘土	
ＳＰ 240	〃	〃	0.52	0.40	0.25	黄褐色礫混粘土	
ＳＰ 241	〃	〃	0.36	0.35	0.24	〃	
ＳＰ 242	〃	〃	0.30	0.25	0.13	〃	
ＳＰ 243	4･5H	〃	0.38	0.33	0.10	〃	
ＳＰ 244	5H	〃	0.40	0.40	0.20	暗灰色シルト混粘土	
ＳＰ 245	4I	〃	0.40	0.31	0.28	〃	
ＳＰ 246	〃	〃	0.42	0.32	0.14	〃	
ＳＰ 247	4I	〃	0.39	0.30	0.09	暗灰色シルト混粘土	

・**第３面**〔弥生時代後期〕(第98図、図版四八)

第Ⅶ－２層上面(T.P.＋4.3～4.5m)で弥生時代後期の溝１条(**ＳＤ 301**)を検出した。南調査区で検出した第４－１面に対応する。

ＳＤ 301(図版四八)

３～５Ｈ・Ｉ地区で検出した。検出部分の北部で小さく蛇行するが、ほぼ南北方向に伸びる溝である。検出部分で幅1.6～2.2m、深さ0.2mを測る。埋土は上層が5GY4/1暗オリーブ灰色シルト、下層が10GY4/1暗緑灰色シルト混粘土で、第Ⅴ様式の遺物が少量出土している。

・**第４面**〔弥生時代中期後半〕(第99図、図版四九)

第Ⅷ層上面(T.P.＋3.9～4.2m)で水田２筆(**水田 401**・**水田 402**)、畦畔１条(**畦畔 401**)を検出した。南調査区で検出した第４－２面に対応する。

水田２筆は**畦畔 401** により東西に区画されるもので、東側を水田 401、西側を**水田 402** とした。**畦畔 401** は南南東－北北西に伸びるもので、検出長22.0m、上面幅0.5～1.1m、基底幅1.0～2.2m、高さ0.4mを測る。盛土は水田耕作土と同質の土層が盛られているが土壌化が顕著で色調は水田面より濃い。**水田 401** は検出部分で東西幅13.5m、南北幅22.5mを測る。**水田 402** は検出部分で東西幅8.5m、南北幅20.5mを測る。水田面の標高は**水田 402** の南西でT.P.＋4.22m、**水田 401** の東部でT.P.＋4.05mで東に向かって下がっている。**水田 401** の中央東よりの作土層下面で炭化を含む黒色土中に弥生時代中期後半に比定される第Ⅳ様式の甕片が数点出土していることから、水田構築時期は弥生時代中期後半以降に推定される。

・**第５面**〔弥生時代中期〕(第100図、図版五〇)

第X層上面(T.P.＋3.8m)で溝１条(**ＳＤ 501**)、第XI層上面(T.P.＋3.6m)で溝１条(**ＳＤ 502**)河川１条(**ＮＲ 501**)を検出した。南調査区で検出した第５面に対応する。

溝(ＳＤ)

ＳＤ 501(図版五〇)

調査区の東部で検出した。南南西－北北東にやや蛇行して伸びる溝である。検出長20.0m、幅0.7～1.4m、深さ0.4mを測る。埋土は10G4/1暗緑灰色粗砂混粘土である。遺物は弥生時代中期の土器片が少量出土している。

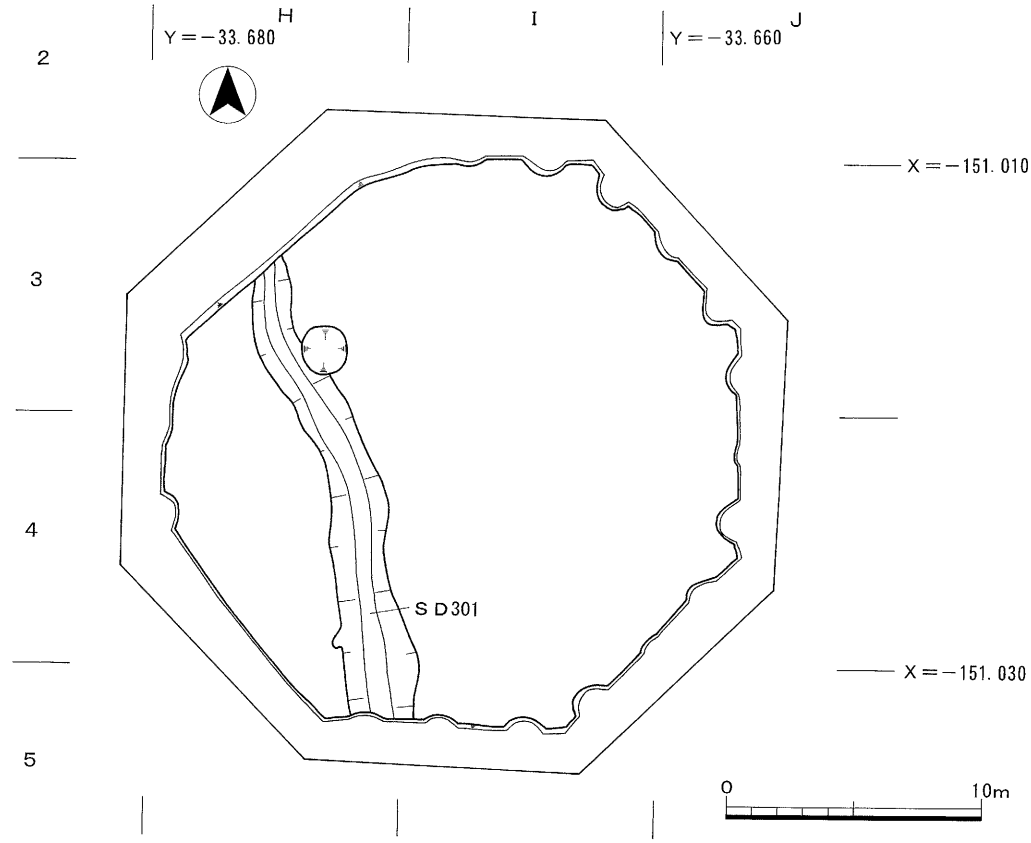
ＳＤ 502(図版五〇)

ＳＤ 501 の西側に並行に伸びる溝である。検出長22.5m、幅3.0m、深さ0.35mを測る。埋土は上層から5G4/1暗緑灰色粘土、5G6/1緑灰色細砂、5PB2/1青黒色シルト混粘土である。遺物は弥生時代中期の土器片が少量出土している。

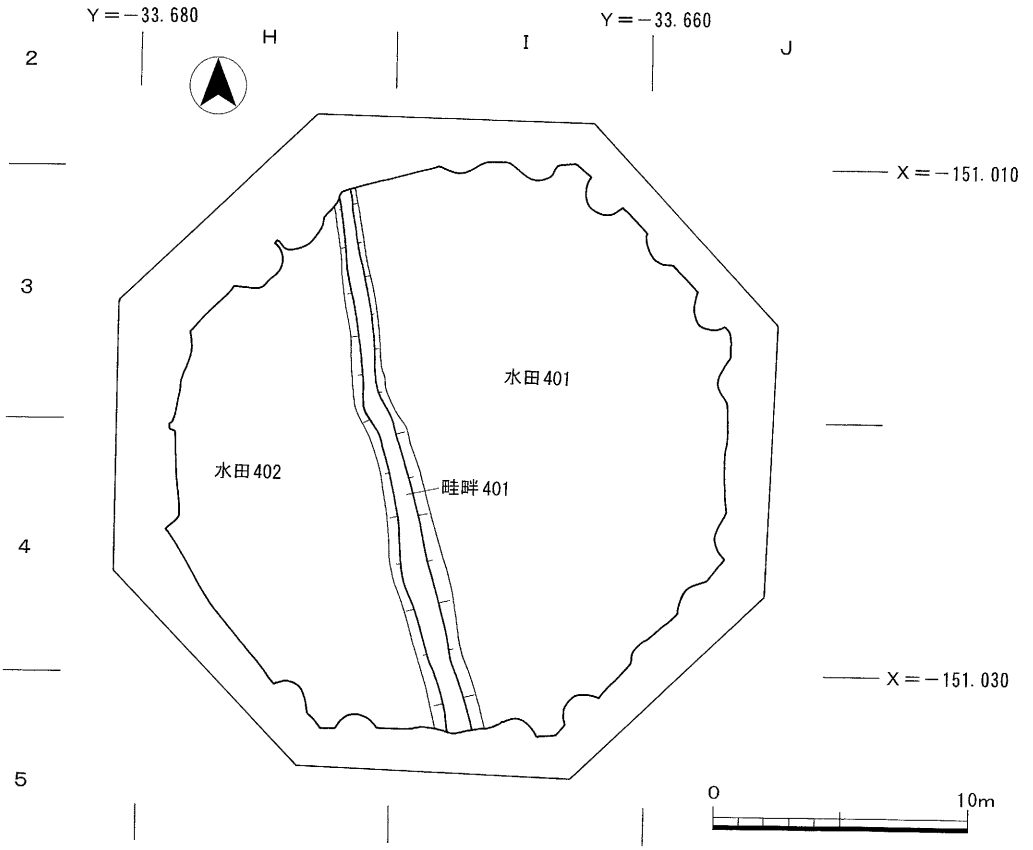
河川(ＮＲ)

ＮＲ 501

調査区の西部で河川の東岸を検出した。検出部分で検出長24.5m、幅10.5m以上、深さ1.45m以上を測る。南調査区の第５面で検出した**ＳＤ 504** の下流にあたる。河川は南調査区では南東－北東方向に伸びていたが、５区内では概ね北方向に流下している。埋土は細砂・粗砂・シルトの互



第98図　5区第3面平面図(S＝1/300)



第99図　5区第4面平面図(S＝1/300)

層である。遺物は弥生時代中期の土器片が少量出土している。

・第6面〔弥生時代中期〕(第101図、図版五一)

第XIV－1層上面(T.P.＋3.1～3.2m)で水田6筆(**水田601**～**水田606**)、畦畔7条(**畦畔601**～**畦畔607**)、溝1条(**SD601**)を検出した。南調査区で検出した第6面に対応する。

水田遺構は調査区の中央部以東で検出した。中央部より西部が第5面で検出した**NR501**により削平を受けているため、本来は調査区全面に広がっていたものと推定される。基本的には南南西－北北東に伸びる畦畔間を繋ぎ小区画水田とするものである。水田面の標高では、**水田605**の南部が最も低くT.P.＋3.07m前後で、その他の水田においては基本的には北から南へ向かって僅かに勾配を持っている。水口は2箇所で確認されており、**水田604**と**水田605**を繋ぐ位置に**水口601**、**水田603**と**水田606**を繋ぐ位置に**水口602**が設けられている。南調査区で検出した第6面に対応する。水田および畦畔等の詳細については、第20・21表で示した。

第20表　第6面　水田一覧表(単位m)

遺構番号	地　区	形　状	規模(東西×南北)	田積(㎡) ()検出値	標高(T.P.+)	備考
水田601	3･4IJ	長方形	4.5×16.5	74.3	3.19～3.13	
水田602	4･5I	—	4.5×5.5	(24.8)	3.18～3.16	
水田603	2･3I	—	3.8×6.0	(23.0)	3.14～3.11	
水田604	3･4I	長方形	4.5×11.5	51.8	3.15～3.09	
水田605	4･5I	—	3.5×6.0	(21.0)	3.08～3.07	
水田606	2･3I	—	2.8×11.5	(32.2)	3.12～3.07	

第21表　第6面　畦畔一覧表(単位m)

遺構番号	地　区	検出長	上　幅	基底幅	高さ	備考
畦畔601	3～5IJ	18.1	0.1～0.4	0.5～0.9	0.03	
畦畔602	2～4I	18.1	0.1～0.4	0.5～0.8	0.05	
畦畔603	2･3I	11.8	0.1～0.3	0.3～0.9	0.11	
畦畔604	3I	3.5	—	—	0.02	
畦畔605	4I	4.3	0.2～0.4	0.4～0.6	0.02	
畦畔606	3I	4.4	0.3～0.5	0.5～0.7	0.02	
畦畔607	4I	2.1	0.1～0.3	0.4～0.6	0.02	

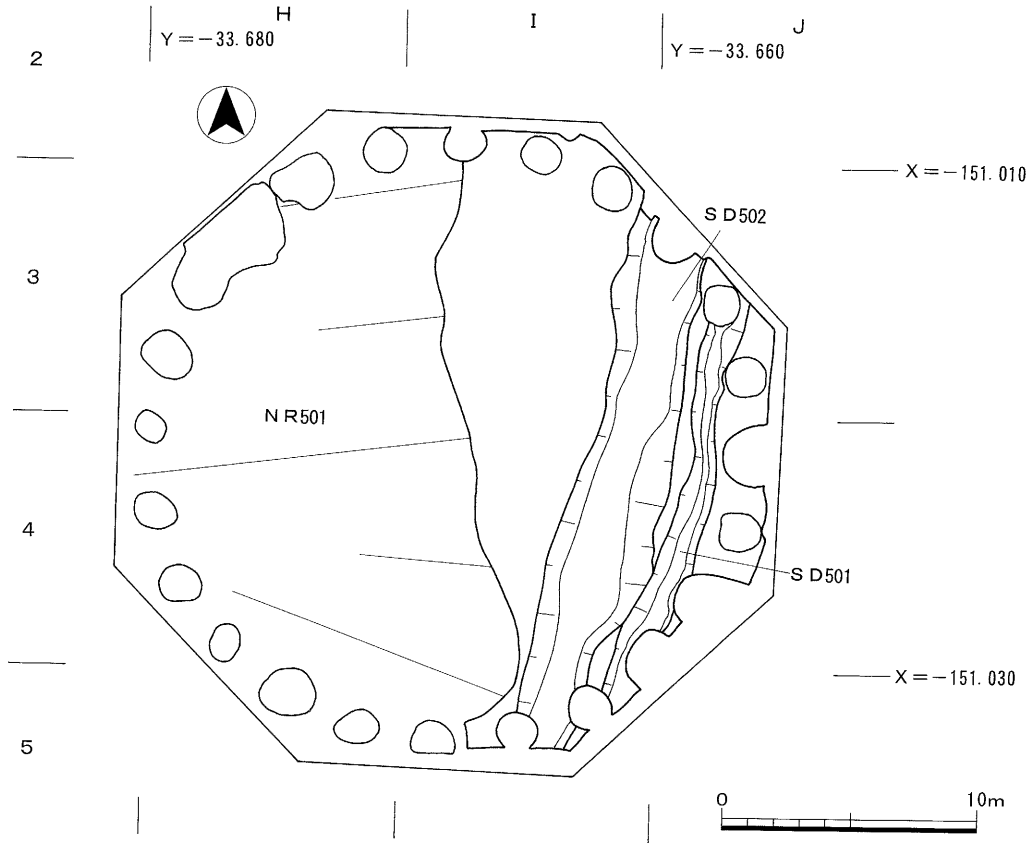
溝(SD)

SD601

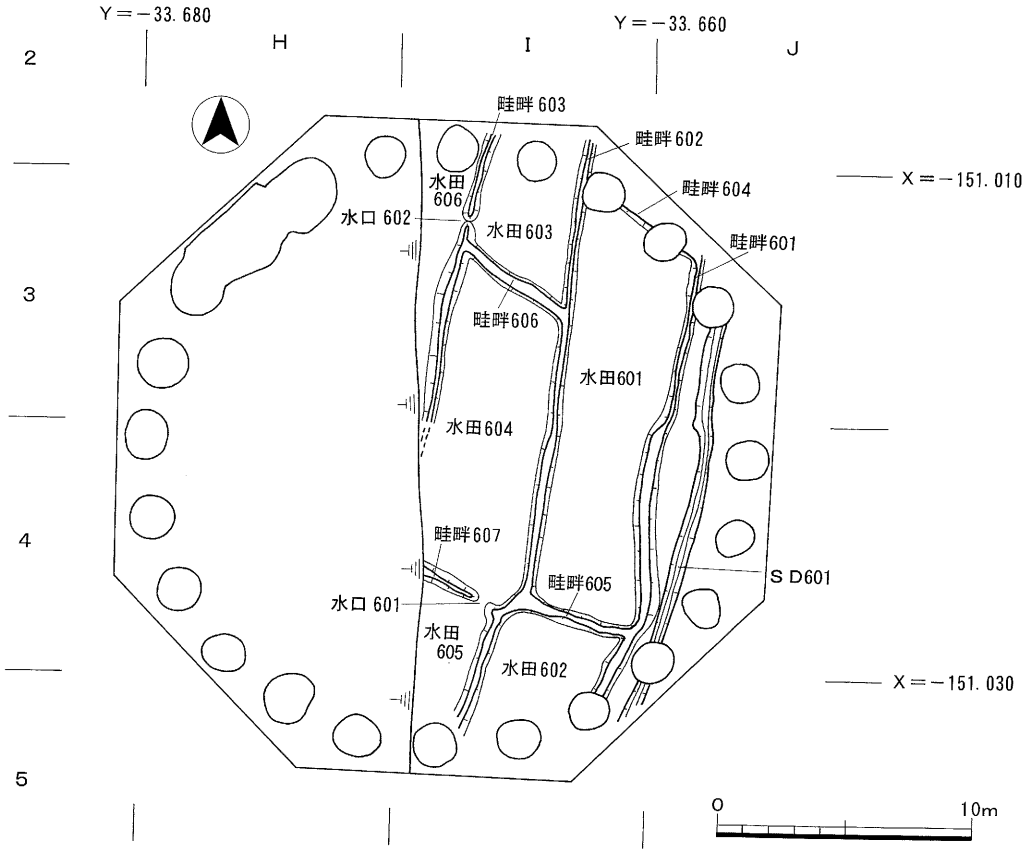
調査区東側で検出した。**畦畔601**の東側に並行して南北方向に伸びる。検出部分で検出長18.5m、幅0.4～0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は10G5/1緑灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。

・第7面〔弥生時代中期〕(第102図、図版五一)

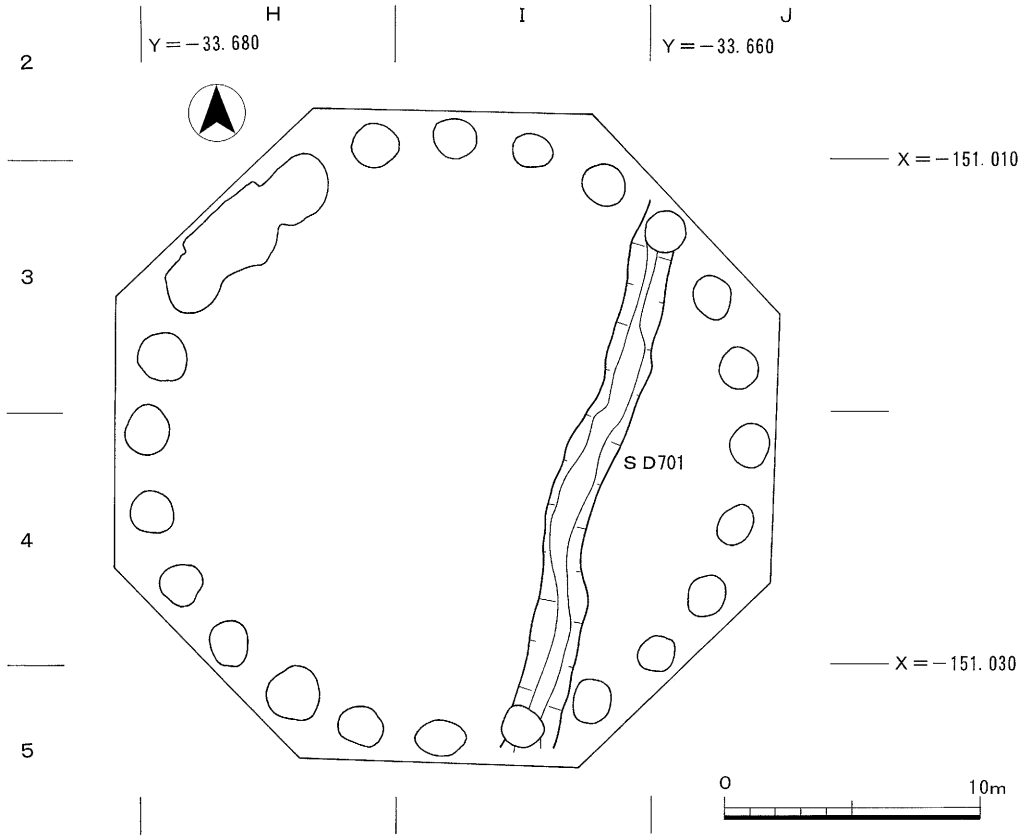
第XV－2層(T.P.＋3.1m)の上面で溝1条(**SD701**)を検出した。南調査区で検出した第7面に対応する。



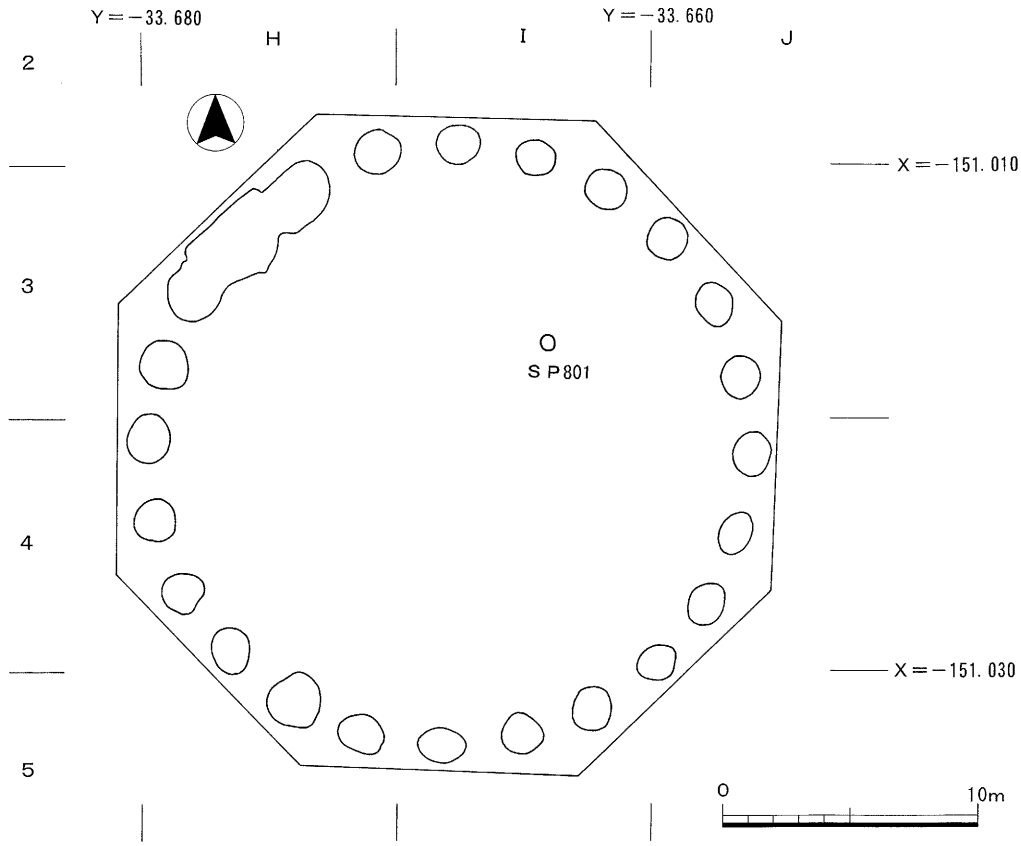
第100図　5区5面平面図(S＝1/300)



第101図　5区6面平面図(S＝1/300)



第102図　5区第7面平面図(S＝1/300)



第103図　5区第8面平面図(S＝1/300)

溝（ＳＤ）

ＳＤ 701

調査区東部の３～５Ｉ・Ｊ地区で検出した。南西－北東に伸びる。検出部分で検出長22.5m、幅1.7～2.0m、深さ0.8mを測る。埋土は2.5Y3/1オリーブ黒色シルト混粘土、7.5Y3/1オリーブ黒色粘土、5G3/1暗緑灰色シルト混粘土、N3/0暗灰色粗砂混粘土、2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混粘土である。遺物は出土していない。南調査区の第７面で検出したＳＤ 705に対応するものと考えられる。

・第８面〔弥生時代前期〕（第103図、図版五一）

第Ⅳ－２層上面（T.P.＋2.8～3.0m）で小穴１個（**ＳＰ 801**）を検出した。南調査区で検出した第７面に対応する。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ 801

３Ｉ地区で検出した。平面形状は円形で径0.6m、深さ0.3mを測る。埋土はN3/0暗灰色シルト混粘土、5YR7/1明褐灰色粘土、10YR2/1黒色細砂混粘土である。遺物は出土していない。南調査区の第７面に対応する。

註記

註１　泉森　皎　1973「第４章　池ノ内古墳群の遺物と遺跡に関する考察　第２節石製品」『磐余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝記念物調査報告　第28冊　奈良県教育委員会
本例は泉森　皎氏分類の第２形式（平根腸抉式）に分類される。

註２　申敬澈・金宰祐　2000「金海大成洞古墳群Ⅱ」『慶星大学博物館　研究叢書　第７輯』慶星大学博物館
第13号墳の主槨から出土したうちの４点（図面10－11～13、図面11－５）である。石材は緑色凝灰岩製のもので、日本から持ち込まれた倭系遺物とされている。時期的には、４世紀第２四半世紀とされている。

註３　平野吾郎・山田成洋・伊藤律子　1991「川合遺跡遺物編２　平成２年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書（石製品・金属製品図版編）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第32集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
第123図（138）。石材は暗緑色凝灰岩。時期は古墳時代初頭に比定されている。

註４　萬谷幸美　1985「第６節　美園遺跡出土のＳ字状浮文土器について」『美園』（財）大阪文化財センター

参考文献

弥生土器

・小林行雄・佐原　真　1964『紫雲出』詫間町文化財保護委員会
・寺沢　薫・森井貞夫　1989「２各地域の様式編年　１河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社
・原田昌則　2003「第５章　遺構・遺物の検討　第１節　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線４工区に伴う』（財）八尾市文化財調査研究会報告74　（財）八尾市文化財調査研究会　本文中の土器分類で〔　〕で示したものがそれにあたる。

古式土師器

・原田昌則　1993「第５章　まとめ　３）中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡（第１次調査）』（財）八尾市文化財調査研究会報告37　本文中の土器分類で（　）で示したものがそれにあたる。

須恵器

・田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
・田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

古代の土師器
・奈良国立文化財研究所　1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報32冊
・古代の土師器研究会編　1992「古代の土器Ⅰ　都城の土器集成」
・古代の土師器研究会編　1993「古代の土器Ⅱ　都城の土器集成」
条里関係
・棚橋利光　1982「八尾の条里制」『八尾市紀要　第6号』八尾市史編さん室
近世井戸
・河内一浩　1992「續・近世農耕井戸試考」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会

第４章　自然科学的分析

大竹西遺跡第１次発掘調査における花粉・珪藻分析

総合科学株式会社

１．調査概要

１－１．はじめに

大竹西遺跡は八尾市北西部の大竹・西高安町・上尾町にあたり、生駒山地西麓の扇状地先端部から河内平野に拡がる縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡である（第１図）。平成２年度の発掘調査結果によると、調査区で確認されている堆積層は20層に大別できている。この堆積層は出土遺物から縄文から弥生時代前期の墓域を中心とした遺構と、弥生時代中期から鎌倉時代の水田遺構と洪水堆積物から構成されている。

今回の花粉・珪藻分析は、堆積土中に含まれる花粉・胞子化石と、珪藻化石の組成を調べることによって、堆積当時の埴生・気候、農耕の変遷や堆積環境といった古環境の復原を目的として実施した。

１－２．分析内容及び数量

分析試料一覧を第１表に、試料採取位置及柱状図を第２図に示した。

分析は、第４区・９g、第２区・18h、第１～4区、11f、第３区・７eの４地点で採取された試料を用いて実施した。分析数量は次のとおりである。

分析項目	数　量
花粉分析	40点
珪藻分析	40点

２．花粉分析

２－１．試料

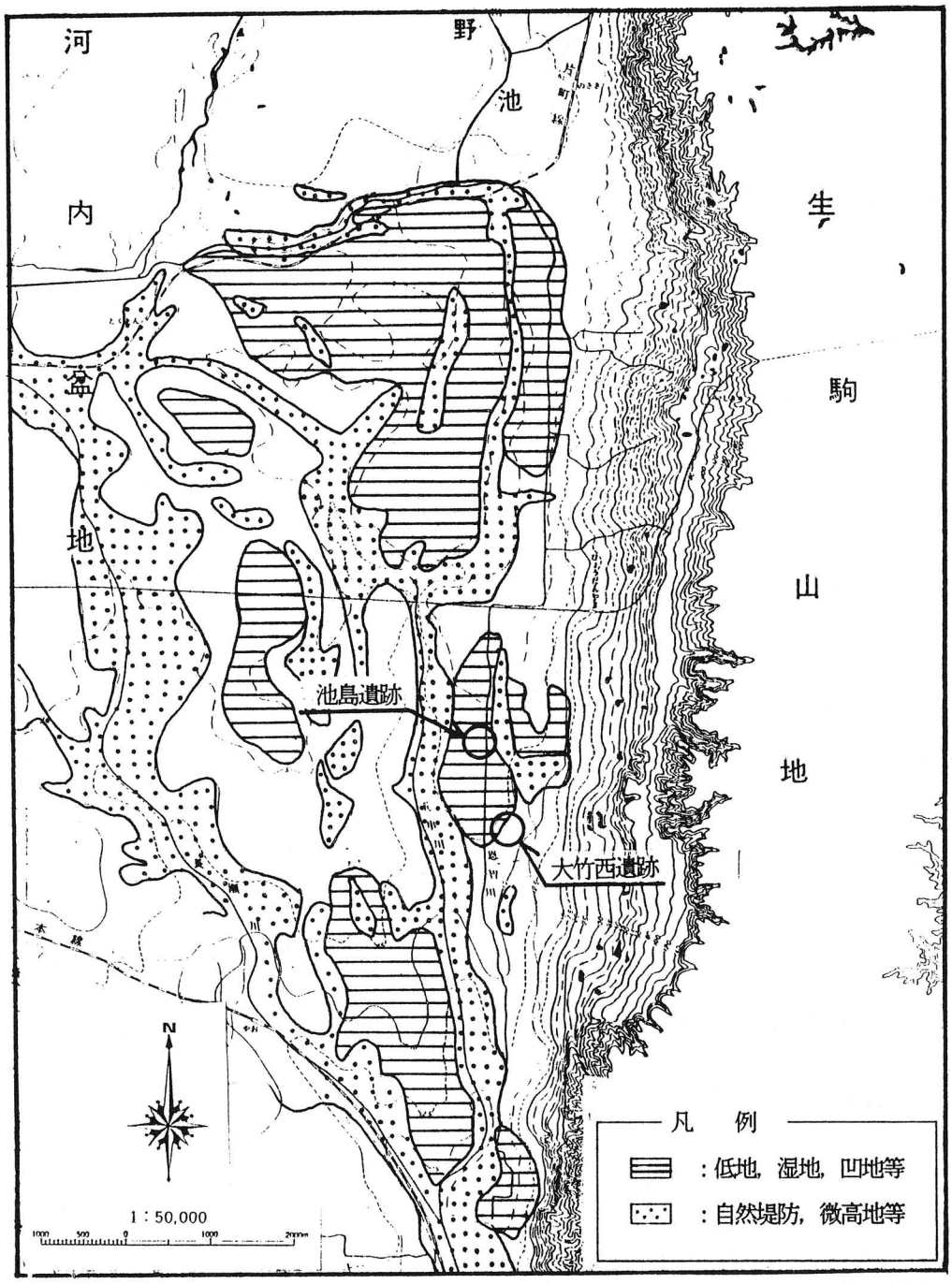
試料は、第１表及び第２図に示すとおりである。

２－２．分析方法

試料の処理は、すべて次の順序で行った。

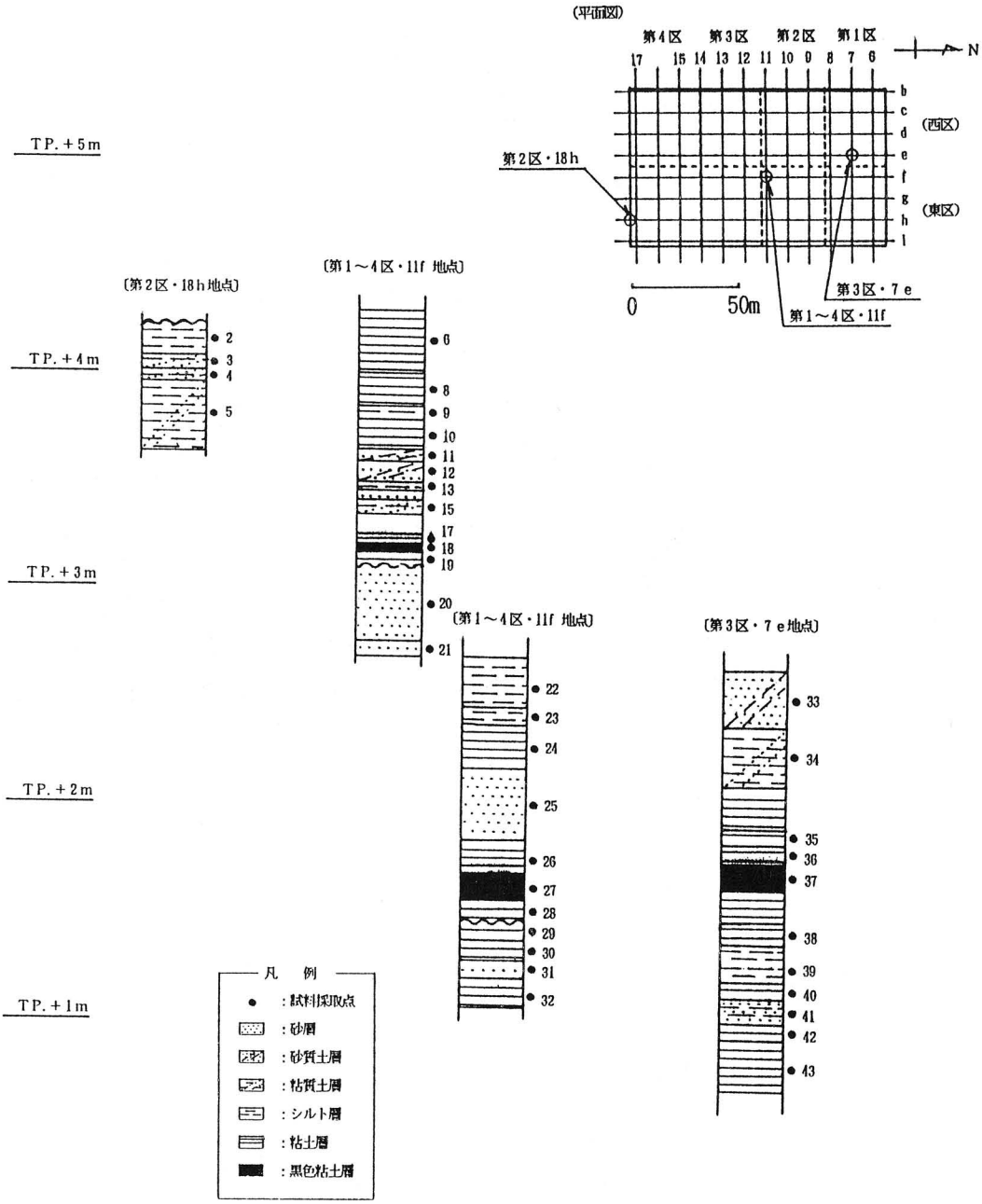
（１）採取した試料の汚染部分を除去し試料の粒度によって適量をとりだす。

（２）水酸化カリウム溶液を分散剤として加え、低速のホモジナイザーを用いて試料の泥化・分散処理を行う。



出典）土質工学会関西支部・関西地質調査業協会（1987）微地形区分図，新編大阪地盤図

第１図　大竹西遺跡位置図



第2図　試料採取位置及び柱状図

第１表　分析試料

試料No.	地区	遺構／断面	層名	時代
1	第４区・９ｇ	ＳＫ－21	4　暗褐色粘質シルト	古墳
2	第２区・18ｈ	大畦畔　南側断面	1　暗茶灰色砂礫混粘質土	弥生（中）
3	〃	〃	2　茶灰色砂礫混粘質土	
4	〃	〃	3　黒褐色砂礫混粘質土	
5	〃	〃	4　灰黒色砂礫混粘質土	
6	第１～４区11f	トレンチ北壁（東区）	11f 1　青灰色粘土（10BG5/１）	
8	〃	〃	〃　3　黄橙色微混粘質土	
9	〃	〃	〃　4　灰色シルト	
10	〃	〃	〃　5　灰色粘土	古墳
11	〃	〃	〃　6　橙色微砂混粘質土	
12	〃	〃	〃　7　暗灰色礫混粘質土	
13	〃	〃	〃　8　灰色粘質シルト	弥生
15	〃	〃	〃　10 灰色微砂混粘質土	
17	〃	〃	〃　12 灰オリーブ色粘土	
18	〃	〃	〃　13 黒色粘土	
19	〃	〃	〃　14 黒色礫混粘土	
20	〃	〃	〃　15 黒色微砂質土	
21	〃	〃	〃　16 暗オリーブ灰色微砂質土	縄文
22	第１～４区11f	下層確認トレンチ北壁（東区）	〃　17 オリーブ灰色シルト	縄文
23	〃	〃	〃　18 オリーブ灰色粘質シルト	
24	〃	〃	〃　19 灰色粘土	
25	〃	〃	〃　20 灰白色微砂～細砂	
26	〃	〃	〃　21 暗茶灰色粘土	
27	〃	〃	〃　22 黒色粘土	
28	〃	〃	〃　23 黒色～オリーブ灰色粘土	
29	〃	〃	〃　24 緑黒色粘土	
30	〃	〃	〃　25 明オリーブ灰色粘土	
31	〃	〃	〃　26 灰黒色微砂	
32	〃	〃	〃　27 灰黒色粘土	
33	第３区　７ｅ	下層確認トレンチ北壁（東区）	7e　1　暗オリーブ灰色細砂質土	縄文
34	〃	〃	〃　2　オリーブ灰色シルト混粘質土	
35	〃	〃	〃　3　暗灰色粘土	
36	〃	〃	〃　4　暗緑灰色粘土	
37	〃	〃	〃　5　黒色粘土	
38	〃	〃	〃　6　灰黒色粘土	
39	〃	〃	〃　7　明緑灰色微砂混粘質土	
40	〃	〃	〃　8　淡灰色微砂混粘土	
41	〃	〃	〃　9　淡緑灰色シルト～細砂	
42	〃	〃	〃　10 黒灰色粘土	
43	〃	〃	〃　11 灰色粘土	

（3）細粒物質の除去をおこなう。5 μmのマイクロフィルターを使用して粒径処理を確実にする。
（4）大型時計皿とアスピレータで攪拌しつつ微化石を濃縮する。
（5）比重1.6～1.9の重液中で遠心分離し、植物質を濃縮する。
（6）アセトリシス処理により脱水を行うと共にセルロース分を溶解・除去する。
（7）遠心分離機により水洗し、水溶性物質を溶解・除去する。
（8）グリセリンゼリーと混合してプレパラートを作成する。
（9）検鏡は800～1000倍の生物顕微鏡で、1試料に付き木本花粉200個体をめどに同定、計数を行った。

2－3．分析結果

花粉分析結果を第2表に、花粉ダイアグラムを第3図に示した。花粉ダイアグラムは木本花粉の数を基数として、百分率で表した。木本花粉が200個体に満たない点については出現個体数で表した。

No.6を除く全ての試料に花粉化石が含まれていたが、No.1・3・8・9・10・21・33の試料の花粉含有数はきわめて少なく、No.2・4・5・11・12・22・24・25の試料の花粉含有は少ない。なお、シダ胞子は全ての試料に含まれていた。

花粉・胞子は、全体で48種類が確認された。1試料の含有数が30%を占めるものを優占種とし、それに植生や農耕などを推定する上で注意すべき種類を加えて記載した。試料採取点毎の特徴は次のとおりである。

第4区・9g SK－21(No.1)

No.1の含有花粉は極めて少なく、木本花粉でアカガシ亜属(*Cyclobaranopsis*)、草本花粉でイネ科(*Gramineae*)、タデ属(*Persicaria*)がわずか含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

第2区・18h　大畦畔　南端壁面(No.2～5)

No.2の含有花粉は極めて少ない。木本花粉で常緑針葉樹のマツ属(*Pinus*)、モミ属(*Abinus*)スギ属(*Cryptameries*)が含まれている。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属(*Aritemisia*)がわずかに含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

No.3の含有花粉は極めて少ない。木本花粉でスギ属、草本花粉でヨモギ属以外のキク科(Compositae)がわずかに含まれている。シダ胞子の含有も少ない。

No.4の含有花粉は少ない。木本花粉でマツ属などの常緑針葉樹が優占している、草本花粉ではイネ科が優占している。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属(*Ceratopteris*)も含まれている。

No.5の含有花粉は少ない。木本花粉で常緑広葉樹のアカガシ亜属、シイノキ属(*Castanopeis*)が優占している。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優占している。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

第１～４区・11ｆ　トレンチ北壁(東区)(No.６、８～13、15、17～21)

No.６は木本花粉、草本花粉とも含まれていないが、シダ胞子は多量に含まれている。

No.８の含有花粉は極めて少ない。木本花粉でヤマモモ属(*Myrica*)、草本花粉ではイネ科がわずかに含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

No.９の含有花粉は極めて少ない。木本花粉でスギ属が優占している。草本花粉ではイネ料だけが含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

No.10の含有花粉は極めて少ない。木本花粉でスギ属が優占している。草本花粉ではイネ科だけが含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.11の含有花粉は少ない。木本花粉でアカガシ亜属、シイノキ属、コナラ属(*Quercu*)などの常緑広葉樹が優占している。草本花粉ではヨモギ属が優占している。シダ胞子は多量に含まれている。

No.12の含有花粉は少ない。木本花粉でツガ属(*Tsuga*)、アカガシ亜属が比較的多く含まれている。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優占している。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.13の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属が優占し、次いでツガ属、スギ属、シイノキ属、コナラ亜属が比較的多く含まれている。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優占している。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラヒ属も含まれている。

No.15の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属などの常緑広葉樹が優占している。草本花粉の含有は少ないが、イネ科、ヨモギ属が含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラヒ属も含まれている。

No.17の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属が優占しており、他にマツ属、ツガ属などの常緑針葉樹が比較的多く含まれている。草本花粉はイネ科が優占しており、他に農耕植物のアブラナ科も含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.18の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属、ツガ属が優占している。草本花粉はイネ科が優占しており、他にカヤツリグサ科(Cyperaceae)、ヨモギ属も比較的多く含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.19の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属、スギ属が優占している。草本花粉はイネ科が優占しており、他に水田雑草のセリ科(Umbellifereae)、農耕植物のアブラナ科も含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.20の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属、マツ属が優占している。草本花粉はヨモギ属、イネ科が優占している。シダ胞子は多量に含まれている。

No.21の含有花粉は極めて少ない。木本花粉で低木のモチノキ属(*Ilax*)、草本花粉でヨモギ属以外のキク科が含まれている。

第１～４区・11f　下層確認トレンチ北壁(東区)(No.22～32)

No.22の含有花粉は少ない。木本花粉ではモミ属、ツガ属、アカガシ亜属、ヤマモモ属が含まれている。草本花粉ではヨモギ属だけが含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

No.23の含有花粉は多い。木本花粉で常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占しており、次いで常緑針葉樹のモミ属、ツガ属が多く含まれている。草本花粉はイネ科、タデ属が含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

No.24の含有花粉は少ない。木本花粉ではアカガシ亜属、スギ属が多く含まれている。草本花粉ではイネ科だけが含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

No.25の含有花粉は少ない。木本花粉ではマツ属、アカガシ亜属が多く含まれている。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が含まれている。シダ胞子の含有も少ない。

No.26の含有花粉は多い。木本花粉で常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占しており、次いで常緑針葉樹のマツ属、モミ属、ツガ属が多く含まれている。また、エノキ属(*Celtis*)など落葉広葉樹も含まれている。草本花粉はイネ科、水田雑草のセリ科が比較的多く含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.27の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属が優占しており、次いでマツ属、モミ属、スギ属が多く含まれている。草本花粉はイネ科、ヨモギ属が優占している。シダ胞子の含有はやや少ない。

No.28の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属が優占しており、次いでマツ属、モミ属、が多く含まれている。また、落葉広葉樹のケヤキ属(*Zelkava*)、ハンノキ属(*Alnus*)なども含まれている。草本花粉はイネ科、カヤツリグサ属が優占している。シダ胞子の含有はやや少ない。

No.29の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属が優占しており、次いでツガ属、モミ属、ケヤキ属(*Zelkava*)が多く含まれている。草本花粉はイネ科、カヤツリグサ属が優占している。シダ胞子の含有はやや少ない。水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.30の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が全木本花粉の75%を占め、次いでモミ属、コナラ亜属が多く含まれている。草本花粉はイネ科が優占している。シダ胞子は多く含まれている。

No.31の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が非常に優占し、次いでモミ属、ツガ属が多く含まれている。草本花粉はイネ科が優占しており、湿地性のガマ属(*Typha*)、ミクリ属(*Sparganium*)も含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.32の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が非常に優占し、次いでコナラ亜属が多く含まれている。草本花粉は湿地性のガマ属が優占している。シダ胞子の含有はやや少ない。

第3区・7e　下層確認トレンチ北壁(西区)(No.33～42)

No.33の含有花粉はきわめて少ない。木本花粉ではツガ属、アカガシ亜属、コナラ亜属が含まれている。草本花粉ではヨモギ属のみ含まれている。シダ胞子の含有も少ない。

No.34の含有花粉は多い。木本花粉で常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占しており、次いで常緑針葉樹のモミ属、マツ属が多く含まれている。草本花粉はヨモギ属、イネ科が優占している。シダ胞子は多量に含まれている。

No.35の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が優占しており、次いでマツ属、モミ属、ツガ属、常緑落葉樹のハンノキ属、ケヤキ属が多く含まれている。草本花粉はイネ科が優占して

第2表　花粉分析結果(1)

分類群	試料番号	第2区・18G					第1～4区・11 f												
		1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	15	17	18	19	20	21
常緑針葉樹	Pinus(マツ属)	-	3	-	4	3	-	-	1	1	-	2	11	1	22	16	10	10	-
	Abies(モミ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	9	1	8	16	4	-	-
	Tsuga(ツガ属)	1	2	-	2	1	-	-	-	-	-	5	16	2	25	28	4	6	-
	Cryptomeria(スギ属)	1	2	1	3	2	-	-	4	2	2	1	16	9	11	2	18	-	-
	Podocarpus(マキ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Sciadopitys(コウヤマキ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Other Conifer(その他の針葉樹)	-	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	11	4	12	10	8	2	-
常緑広葉樹	Cyclobalanopsis(アカガシ亜属)	3	2	-	3	6	-	-	1	1	9	5	69	70	41	28	12	10	-
	Castanopsis(シイノキ属)	-	-	-	-	9	-	-	-	-	3	-	16	10	11	8	2	2	-
	Myrica(ヤマモモ属)	-	-	-	1	1	-	1	-	-	1	1	2	4	5	2	-	2	-
	Symplocos(ハイノキ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
	Mallotus(アカメガシワ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
	Fagus(ブナ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Quercus(コナラ亜属)	-	1	-	3	-	-	-	-	-	3	2	15	12	8	2	4	4	-
落葉広葉樹	Alnus(ハンノキ属)	1	-	-	-	-	-	-	1	-	3	3	3	11	2	-	2	-	-
	Betula(カバノキ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Carpinus(クマシデ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-	2	-	-
	Carpinus tschoroskii(イヌシデ)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
	Celtis(エノキ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
	Zelkova(ケヤキ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-
	Fraximus(トリネコ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Pterocarya(サワグルミ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
低木	Acer(カエデ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Ilex(モチノキ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4	-	-	1
	Ericaceae(ツツジ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第2表　花粉分析結果(2)

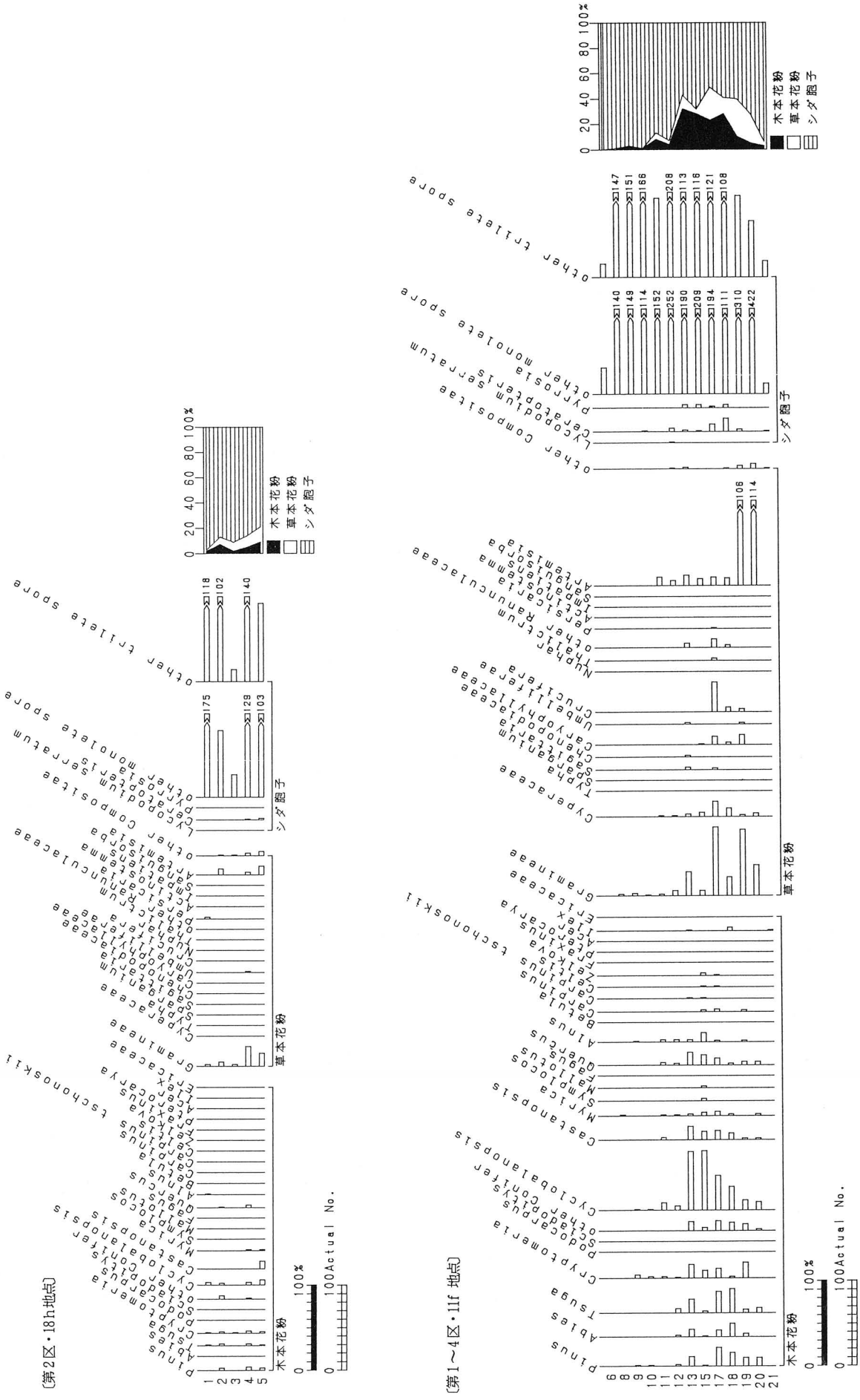
分類群	試料番号	第2区・18G					第1～4区・11 f												
		1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	15	17	18	19	20	21
草本	Gramineae(イネ科)	2	5	2	23	15	-	2	3	1	2	6	28	6	81	22	78	36	-
	Cyperaceae(カヤツリグサ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	3	5	18	10	2	4	-
	Typha(ガマ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Sparganium(ミクリ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Sagittaria(オモダカ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	2	-	-	-	-
	Chenopodiaceae(アカザ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
	Caryophyllaceae(ナデシコ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	10	3	12	-	-
	Umbelliferae(セリ科)	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2	-	-
	Cruciferae(アブラナ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	35	6	4	-	-
	Nuphar(コウホネ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Thalictrum(カラマツソウ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
	Other Ranunculaceae(その他のキンポウゲ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	10	3	-	-	-
	Persicaria(タデ属)	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	Actinostemma(ゴキツル属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Impatiens(ツリフネソウ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Sanguisorda(ワレモコウ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Artemisia(ヨモギ属)	-	7	-	3	10	-	-	-	-	10	6	12	8	10	9	106	114	-
	Other Compositae(その他のキク属)	-	1	1	3	5	-	-	-	-	-	1	2	-	-	1	4	6	1
シダ胞子	Lycopodium serratum(トウゲシバ)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	Ceratopteris(ミズワラビ属)	-	-	-	1	2	-	-	-	1	-	4	2	1	9	16	3	-	1
	Pyrrosia(ヒトツバ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4	2	4	-	-	-
	Other monolete type(その他の単条型)	175	80	27	103	103	31	140	149	114	152	252	190	209	194	111	310	422	12
	Other trilete type(その他の三条型)	118	102	14	140	92	16	147	151	166	93	208	113	116	121	108	96	66	19
木本花粉数		6	14	1	17	22	-	1	7	4	21	21	170	136	150	116	66	36	1
草本花粉数		4	13	3	30	30	-	2	3	1	13	14	57	20	170	54	208	160	1
シダ胞子数		293	182	41	270	197	47	287	300	281	245	465	309	330	326	239	409	488	32
合計		303	209	45	317	249	47	290	310	286	279	500	536	486	646	409	683	684	34

第2表　花粉分析結果(3)

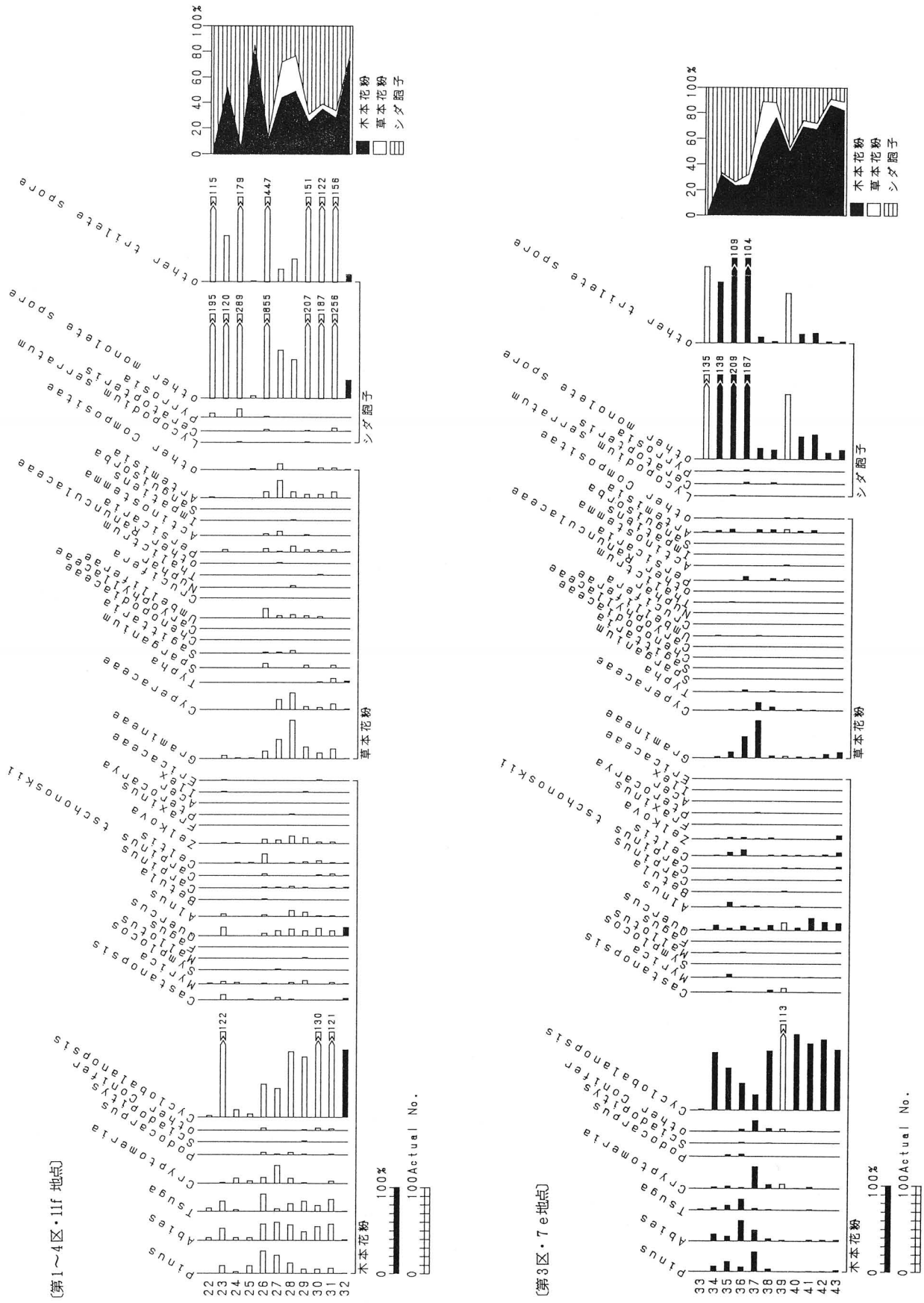
分類群 ＼ 試料番号		第1～4区・11f区											第3区・7e										
		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
常緑針葉樹	Pinus(マツ属)	-	9	2	9	26	21	12	5	5	6	3	-	14	32	14	58	10	-	1	2	3	7
	Abies(モミ属)	3	14	3	3	19	21	18	10	16	19	5	-	18	16	64	32	9	1	1	5	8	7
	Tsuga(ツガ属)	4	12	2	-	20	3	9	12	7	14	2	1	6	16	34	6	2	-	1	2	2	2
	Cryptomeria(スギ属)	-	1	6	3	7	21	6	1	-	3	1	-	4	8	4	64	15	5	2	5	2	-
	Podocarpus(マキ属)	-	-	-	-	3	1	3	1	-	1	-	-	-	6	8	-	1	-	-	-	-	1
	Sciadopitys(コウヤマキ属)	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4	-	2	-	-	-	-	1
	Other Conifer(その他の針葉樹)	-	-	-	-	3	-	-	1	3	2	-	-	2	-	8	32	12	3	-	2	2	3
常緑広葉樹	Cyclobalanopsis(アカガシ亜属)	2	122	9	4	39	34	77	71	130	121	282	1	148	138	86	46	216	113	203	218	362	301
	Castanopsis(シイノキ属)	-	6	-	1	-	3	1	-	-	-	8	-	-	4	-	-	9	5	-	2	2	2
	Myrica(ヤマモモ属)	1	3	2	-	1	-	2	4	-	2	3	-	2	10	-	-	1	-	2	2	1	3
	Symplocos(ハイノキ属)	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1
	Mallotus(アカメガシワ属)	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	3
	Fagus(ブナ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	2	-	-	-	1	1
	Quercus(コナラ亜属)	-	10	-	-	3	6	8	6	9	6	37	1	14	8	14	8	19	9	8	40	42	37
落葉広葉樹	Alnus(ハンノキ属)	-	3	-	-	2	-	7	5	1	1	2	-	2	16	4	4	2	-	3	-	2	2
	Betula(カバノキ属)	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	Carpinus(クマシデ属)	-	-	-	-	1	1	2	1	-	1	5	-	2	4	2	-	2	-	-	-	1	6
	Carpinus tschoroskii(イヌシデ)	-	-	-	-	2	-	-	-	1	2	2	-	-	-	-	-	1	1	2	-	1	10
	Celtis(エノキ属)	-	-	1	1	11	-	1	2	3	1	3	-	2	12	20	-	4	1	3	2	7	17
	Zelkova(ケヤキ属)	-	1	1	-	5	4	9	7	2	2	-	-	2	6	6	2	5	-	1	-	1	21
	Fraximus(トリネコ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-
	Pterocarya(サワグルミ属)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
低木	Acer(カエデ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	Ilex(モチノキ属)	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
	Ericaceae(ツツジ科)	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第2表　花粉分析結果(4)

分類群 ＼ 試料番号		第1～4区・11f											第3区・7e										
		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
草本	Gramineae(イネ科)	-	4	1	1	9	23	46	14	7	12	2	-	4	20	68	112	9	2	4	3	20	31
	Cyperaceae(カヤツリグサ科)	-	-	-	-	-	12	20	4	3	7	4	-	-	4	4	24	13	-	4	2	1	-
	Typha(ガマ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	1	5	8	-	-	2	8	-	6	-	2	2	1	2
	Sparganium(ミクリ属)	-	-	-	-	5	-	-	3	-	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
	Sagittaria(オモダカ属)	-	-	-	-	1	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Chenopodiaceae(アカザ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	Caryophyllaceae(ナデシコ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Umbelliferae(セリ科)	-	-	-	-	11	3	4	3	2	-	1	-	2	-	-	2	1	-	-	-	-	-
	Cruciferae(アブラナ科)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	Nuphar(コウホネ属)	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Thalictrum(カラマツソウ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
	Other Ranunculaceae(その他のキンポウゲ科)	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Persicaria(タデ属)	-	3	-	-	4	1	7	3	2	3	2	-	-	2	14	-	9	2	1	1	2	1
	Actinostemma(ゴキツル属)	-	-	-	-	2	5	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	Impatiens(ツリフネソウ属)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Sanguisorda(ワレモコウ属)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	Artemisia(ヨモギ属)	1	-	-	-	7	20	7	4	4	7	1	1	6	12	-	10	11	4	5	9	2	3
	Other Compositae(その他のキク属)	-	-	-	1	-	7	-	-	2	2	2	-	2	-	-	-	1	1	2	1	1	-
シダ胞子	Lycopodium serratum(トウゲシバ)	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-	-	1	-	-
	Ceratopteris(ミズワラビ属)	-	-	-	-	2	-	-	1	-	4	2	-	-	-	6	-	6	-	-	1	-	-
	Pyrrosia(ヒトツバ属)	5	-	10	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	2	6	-	-	-	-	-	-	-
	Other monolete type(その他の単条型)	195	120	289	3	855	57	46	207	187	256	78	135	304	586	454	32	33	77	62	82	34	46
	Other trilete type(その他の三条型)	115	54	179	1	447	15	27	151	122	156	32	90	158	304	284	18	7	59	25	35	9	9
木本花粉数		10	183	26	21	143	116	156	128	178	181	355	3	220	280	272	254	312	139	229	281	437	425
草本花粉数		1	7	1	2	39	73	90	32	22	39	21	1	14	42	94	148	51	10	18	20	27	38
シダ胞子数		315	174	479	4	1305	72	73	360	309	416	112	255	466	896	750	50	46	136	87	119	43	55
合計		326	364	506	27	1344	261	319	520	509	636	488	229	700	1218	1116	452	409	285	334	420	507	518



第3図　花粉ダイアグラム(1)



第3図　花粉ダイアグラム(2)

いる。シタ胞子は多量に含まれている。

No.36の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属、モミ属、ツガ属、ケヤキ属の順に多く含まれている。草本花粉ではイネ科が優占しており、湿地性のガマ属も含まれている。シダ胞子は多量に含まれており、水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.37の含有花粉は多い。木本花粉でスギ属、マツ属などの常緑針葉樹が優占している。次いで常緑広葉樹のアカガシ亜属が多く含まれている。草本花粉はイネ科が優占している。シダ胞子の含有はやや少ない。

No.38の含有花粉は多い。木本花粉でアカガシ亜属が優占しているが、スギ属など常緑針葉樹も多く含まれている。草本花粉はカヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属の順に多く、湿地性のガマ属も含まれている。シダ胞子の含有はやや少ない。水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.39の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が全木本花粉の81%を占め、次いでコナラ亜属が多く含まれている。草本花粉ではイネ科が少なく、ヨモギ属が優占している。シダ胞子は多量に含まれている。

No.40の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が全木本花粉の89%を占め、次いでコナラ亜属が含まれている。草本花粉はヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科が含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。

No.41の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が非常に優占し、次いでコナラ亜属が多く含まれている。草本花粉はヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ料、ガマ属が含まれている。シダ胞子は多量に含まれている。水生植物のミズワラビ属も含まれている。

No.42の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が非常に優占し、次いでコナラ亜属が多く含まれている。草本花粉はイネ科が優占している。シダ胞子の含有はやや少ない。

No.43の含有花粉は多い。木本花粉ではアカガシ亜属が非常に優占し、次いでコナラ亜属が多く含まれている。また、ケヤキ属、エノキ属などの落葉広葉樹も比較的多く含まれている。イネ料が優占している。シダ胞子の含有はやや少ない。

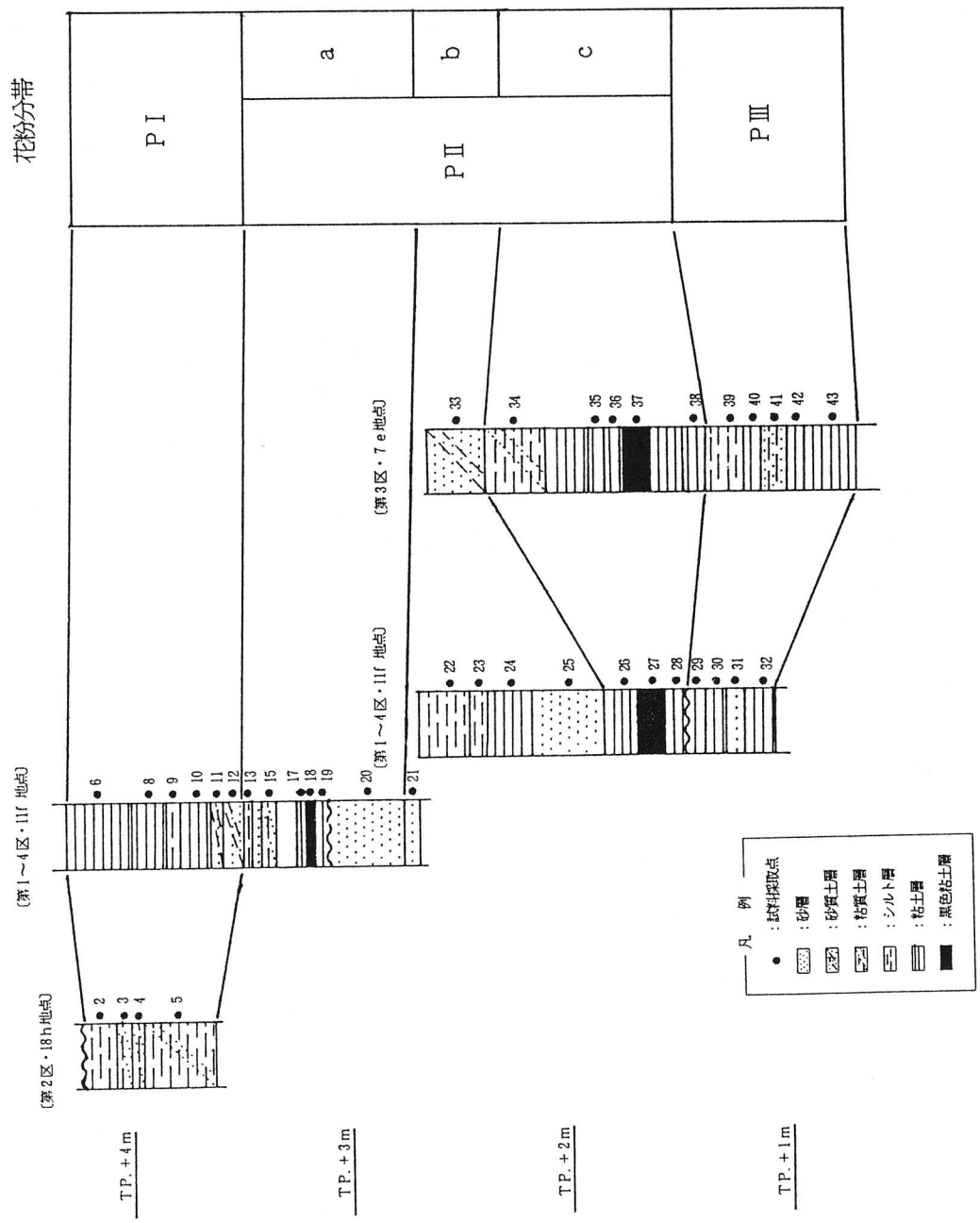
2－4．考察

（1）植生及び農耕の変遷

花粉分帯を第4図に示した。花粉分帯は花粉化石の出現状況の変化、組成の変化などから植生及び農耕の変遷を考えるためにゾーン分けし、3つの花粉帯に分けた。各々の珪藻帯の特徴を下位から順に述べる。

PⅢ帯(No.29～32、No.39～43)

木本花粉でアカガシ亜属が優勢で、マツ属、モミ属、ツガ属など針葉樹が少ないことから、遺跡周辺の植生は人間による森林破壊が行われる以前の極相林であったと考えられる。草本花粉は少なく、イネ科、ヨモギ属、ガマ属が含まれること、シダ胞子で水生植物のミズワラビ属が含まれることなどから、水辺の湿地と草地が共有している土地環境が推定される。


花粉分帯
PⅠ
a
b
c
PⅡ
PⅢ
〔第2区・18h地点〕
〔第1～4区・11f 地点〕
〔第1～4区・11f 地点〕
〔第3区・7e地点〕
TP.＋4m
TP.＋3m
TP.＋2m
TP.＋1m
凡　例
：試料採取点
：砂層
：砂質土層
：粘質土層
：シルト層
：粘土層
：黒色粘土層

第4図　花粉分帯

PⅡ帯(No.13～28、No.32～38)

全体の植生としての変化はないが、花粉の出現状況の変化から3つの亜帯に分けた。

PI－c帯(No.26～28、No.34～38)

木本花粉でアカガシ亜属が優勢であるが、マツ属、モミ属、ツガ属など針葉樹も多く含まれていることから、退跡周辺で人間による森林破壊が行われ始めたと考えられる。草本花粉は農耕の存在を直接示すようなイネ属やソバ属は含まれていないものの、イネ科やシダ胞子で水生植物のミズワラビ属が含まれることは、間接的であるが農耕活動を示していると考えられる。

PI－b帯(No.21～25、No.32)

花粉含有量が少ない。とくに試料No.21とNo.25ではシダ胞子もかなり少ない。これは、砂質の堆積物であるため、花粉が分解消失したものと考えられる。このため、当時の植生や農耕状況を推定することは難しい。

PI－a帯(No.13～20)

木本花粉でアカガシ亜属が最も多く、ついでマツ属、モミ属、ツガ属など針葉樹やシイノキ属、コナラ亜属など広葉樹も比較的多く含まれていることから、常緑広葉樹林に針葉樹が加わった暖温帯林が成立していたことを示している。草本花粉ではイネ科の他にカヤツリグサ科、ヨモギ属なども比較的多く含まれることから、周辺に草地が拡がっていたと考えられる。

PI帯(No.1～12)

花粉の含有量も少なく、種類数も少ない。木本花粉ではマツ属、スギ属、アカガシ亜属が多く含まれていることから、当時の植生は常緑広葉樹林に針葉樹が加わった森林であったと考えられる。草本花粉ではイネ科が含まれることから農耕の可能性も考えられる。また、シダ胞子が多量に含まれることは、シダ植物が生育するのに適した温暖湿潤な環境であったと推定できる。ただ、花粉の含有が少ないにもかかわらず、シダ胞子が多量に存在するのは、花粉が分解消失するような堆積環境(例えば、農耕などによって紫外線にさらされる)下でも、胞子は残存することを示すものと考えられる。

(2)既存資料との対比

大阪平野全体との対比

前田(1984)は、大阪湾岸を含めた大阪平野の花粉分析結果(前田；1976，1977，安田；1978)を基にして完新世(後氷期)の植生変遷を次の4つの花粉帯に区分している。

①落葉樹林時代Ⅰ期　コナラ林(約10,000～8,000年前)

②落葉樹林時代Ⅱ期　コナラ・エノキ—ムクノキ林(約8,000～6,500年前)

③照葉樹林時代Ⅰ期　カシ・シイ・マツ・スギ林(約6,500～2,000年前)

③照葉樹林時代Ⅱ期　ヤシ・シイ・マツ・スギ林(約2,000～現在)

今回の花粉分析結果と前田(1984)の区分とを比較すると、花粉帯PI、PⅡはマツ属とイネ科が増加しているという特徴から照葉樹林時代Ⅱ期に、花粉帯PⅢはアカガシ亜属を基調としているという特徴から照葉樹林時代Ⅰ期にそれぞれ対比できる。

池島遺跡との対比

池島遺跡(1990)の分析結果と比較すると、木本花粉の出現状況からみた植生の変遷はよく一致しているが、草本花粉の含有量および種類とも少ない。これは、池島遺跡周辺では弥生時代中期以降にイネ科が急増し、さらに、古墳時代以降にはイネ科のほかにワタ、ゾバ、ゴマ、ナタネなどの農耕植物の花粉が含まれており、この地域で集約的な農耕が営まれていたことが推定されているが、大竹西遺跡付近ではこのような農耕は営まれていなかったと考えられる。

3．珪藻分析

3－1．試料

試料は、第1表及び第2図に示すとおりである。

3－2．分析方法

試料の処理は、すべて次の順序で行った。

（1）採取した試料を乾燥させ、その乾燥試料から約2gをとる。

（2）乾燥試料を過酸化水素で泥化させる。

（3）泥化した試料に蒸留水をくわえて攪拌し、そののちに粒子を完全に沈澱させて上澄み液をすてる。これを数回くりかえす。

（4）上の処理の終了した試料について蒸留水をくわえて200ccにし、十分に攪拌したのち、約10秒放置して粗粒な粒子を沈澱させ、上澄み液を50cc採取する。

（5）採取した上澄み液に、蒸留水を加えて200ccとし、それを十分攪拌したのち、0.5ccをスライドグラスにとり、乾燥させてからカバーグラスで封入し、プレパラートを作成する。

（6）検鏡は1000倍の生物顕微鏡で、1試料につき珪藻遺骸200個体をめどに同定・計数を行った。

3－3．分析結果

珪藻分析結果を第3表に、群集百分比グラフを第5図に示した。群集百分比グラフは、塩分変化に着目して淡水生種、淡水―汽水生種、汽水生種、汽水―海水生種、海水生種の5群に分類し、その占める割合として示した。

No.11を除くすべての試料に珪藻化石が含まれていたが、No.1・6・8・9・20・25・33の試料の含有殻数はきわめて少なく、No.2・3・10・19・21・22・23・24・34の試料の含有殻数は少ない。

珪藻化石は、全体で39属210種(未定種を含む)が識別された。1試料の含有殻数の30%以上をしめる種類を優占種、30～10%程度含まれている種類を特徴種とし、それに堆積環境を推定するうえで注意するべき種を加えて記載した。試料採取地点毎の特徴は次のとおりである。

第4区・9g　SK－21(No.1)

No.1の含有殻数はきわめて少なく、淡水生種の*Pinnularia spp.*の破片などが少々含まれるの

みである。

第2区・18h　大畦畔　南端壁面(No.2～5)

No.2の含有殻敷は少ない。特徴種として淡水生種の*Pinnularia spp.*・*Synedra ulna*・*Hantzschia amphiaxys*が含まれている。

No.3の含有殻敷は少なく、破片となっていて、殻が少し溶けている。優占種は*Pinnularia spp.*である。特徴種として*Synedra* ulna・*Hantzschia amphiaxys*が含まれる。

No.4の含有殻数は普通であるが、殻は少し溶けている。優占種は*Pinnularia spp.*・*Synedra ulna*、特徴種として*Hantzschia amphiaxys*・大型淡水生種の*Cymbella spp.*の破片・淡水生種の*Anamoeoneis sphaerophora*が見られる。そのはかの特徴的な種には淡水—汽水生種の*Bacillaria paradoxa*・内湾汽水生種*Cyclotella caspia*が少々含まれる。

No.5の含有穀数は普通である。優占種は*Pinnularia spp.*特徴種は*Hantzschia amphiaxys*・*Synedra ulna*である。

第1～4区　11f　トレンチ北壁(東区)(No.6、8～13、15、17～21)

No.6の含有殻数はきわめて少ない。*Pinnularia spp.*・*Hantzschia amphiaxys*が少々含まれる。

No.8の含有殻数はきわめて少ない。*Pinnularia spp. Synedra ulna*が多く、そのほかの特徴的な種として真流水淡水生種の*Surirella angusta*が含まれる。

No.9の含有殻数はきわめて少ない。*Synedra ulna*が優占するが、そのほか*Pinnularia spp.*などが含まれる。

No.10の含有殻数は少ない。優占種は*Synedra ulna*で殻の保存がよい。そのほかの特徴的な種として淡水生種の*Cocconeis placetula*・*Cynbella turgidula*などが含まれる。

No.11は珪藻化石は含まれない。

No.12の含有殻数は普通である。優占種は*Synedra ulna*、特徴種は*Pinnularia spp.*である。そのほかの特徴的な種として淡水—汽水生種の*Synedra ulna*・*Rhopalodia gibberula*や汽水一海水生種の*Achnanthes breviopes var. intermedia*などが含まれる。

No.13の含有殻数は普通である。優占種は*Synedra ulna*、特徴種は*Cymbedra turgidula*である。そのほかの特徴的な種として*Cocconeis placentula*・*Rhopalodia gibberula*・*Achnanthes bripes var. intermedia*および汽水一海水生種の*Navicula flavellata*がみられる。そのほかわずかに海水生種を含む。

No.15の含有殻数は普通である。特徴種は*Synedra ulna*・淡水生種の*Frogilaria construens*・*Pinnularia spp.*である。そのほかの特徴的な種として*Rhopalodia gibberula*・*Achnanthes breviopes var. intermedia*・真止水淡水生種の*Cynbella sinvata*・真流水淡水生種の*Caloneis schroedri*・好流水淡水生種の*Gyrosigna acuminatun*などが含まれる。

No.17の含有殻数は普通である。特徴種は*Pinnularia spp.*・*Caloneis schroedri*である。そのほかの特徴的な種として*Rhopalodia gibberula*・*Gyrosigna acuminatun*が含まれる。

No.18の含有殻数はやや豊富である。特徴種は*Pinnularia spp.*・*Caloneis schroedri*、そのほかの特徴的な種として*Hantzschia amphiaxys*・*Rhopalodia gibberula*などが含まれる。

No.19の含有殻数は少ない。特徴種は*Pinnularia spp.*・*Synedra ulna*、そのほかの特徴的な種として*Caloneis schroedri*などが含まれる。

No.20の含有殻数はきわめて少ない。特徴種は*Pinnularia spp.*・*Synedra ulna*・*Hantzschia amphiaxys*、そのほかの特徴的な種として*Caloneis schroedri*が含まれる。

No.21の含有殻数はきわめて少ない。優占種は*Pinnularia spp.*、特徴種は*Synedra ulna*・*Hantzschia amphiaxys*、そのほかの特徴的な種として*Caloneis schroedri*が含まれる。

第1～4区・11f　下層確認トレンチ北壁(東区)(No.22～32)

No.22の含有殻数は少ない。優占種は*Synedra ulna*、特徴種は*Pinnularia spp.*である。そのほか汽水―海水生種のAchnathes brevipes var.や淡水一汽水生種のThalassiosira bramaptraeが含まれる。

No.23の含有殻数は少ない。優占種はSynedra ulna、特徴種はPinnularis spp.・Cocconeis placetulaである。そのほか*Achnanthes brevipes var.intermedia*などが含まれる。

No.24の含有殻数はやや少ない。優占種*Synedra ulna*、特徴種は*Cocconeis placentula*・*Pinnularia spp.*である。そのほかの特徴的な種*Achnathes brevipes var.intermedia*や淡水―汽水生種の*Rhoicosphenia abbreviata*などが含まれる。

No.25の含有殻数はきわめて少ない。特徴種は淡水一汽水生種の*Achnanthes lanceolata forma ventricosa*である。含有殻数がきわめて少ないので問題があるが、淡水生種の割合が少ないのが特徴である。

No.26の含有殻数はやや豊富である。特徴種は*Pinnularia spp.*、そのほかの特徴的な種として淡水生種の*Eunotia praerupta var.bidens*・真止水淡水生種の*Cynbella sinuata*が含まれる。

No.27の含有殻数は普通である。優占種は*Pinnularia spp.*、特徴種は*Eunotia praerupta var.bidens*・大型の*Cynbella spp.*である。

No.28の含有殻数は普通である。優占種は*Pinnularia spp.*、特徴種は*Cynbella spp.*、そのほか淡水生種の*Stauroneis phoenicentron*などが含まれる。

No.29の含有殻数は普通である。特徴種は*Eunotia praerupta var.bidens*・*Synedra ulna*・*Pinnularia spp.*で、そのほかの特徴的な種として*Achnanthes brevipes var.intermedia*・*Synedra fasciculata*が含まれる。

No.30の含有殻敷は普通である。特徴種は*Eunotia prarupta var.bidens*・*Synedra ulna*、そのほか*Pinnularia spp.*・*Achnanthes brevipes var.intermedia*・*Synedra fasciculata*などが含まれる。

No.31の含有殻数はやや豊富である。特徴種は*Synedra ulna*・*Synedra fasciculata*・*Eunotia praerupta var.bidens*、そのほかの特徴的な種として淡水―汽水生種の*Thalassiosira bramaptrae*などが含まれる。また、わずかではあるが海水種を含んでおり、淡水生種の割合は80%以下となっている。

No.32の含有殻数はやや豊富である。特徴種は*Pinnularia spp.*・*Synedra ulna*などの淡水生種であるが、そのほかの特徴的な種として干潟海水生種の*Nitzschia glanurata*や海水生種の*Diplaneis smithii*や淡水―汽水生種の*Synedra fasciculata*・*Thalassiosira bramaptroe*を含んでいて、淡水種の割合は80%以下である。

第３区・７ｅ　下層確認トレンチ(西区)

No.33の含有殻数はきわめて少なく、破片が多い。優占種は*Synedra ulna*、特徴種はPinnularia spp.。

No.34の含有殻数はやや少ない。特徴種は*Synedra ulna*・*Pinnularia spp.*・*Cocconeis placetula*である。

No.35の含有殻数は普通である。特徴種は真止水淡水生種*Cynbella sinuata.*と不定淡水生種の*Cocconeis placentula*で、そのほかの特徴的な種として、*Achnanthes lanceolata farma ventricosa*や好流水淡水生種*Gamphonena parvulum*・*Gyrosigma scuminaturn*などを含む。止水生種と流水生種が混在するが、止水生種が優勢である。

No.36の含有殻数は普通である。特徴種はEunotia praerupta var・bidens・Caccneis placentula・Synedra ulna・Pinnularia spp.。そのほか真・好流水生種のCaloneis schroederi・Gyrosigma acminatumを含む。

No.37の含有殻敷は普通である。特徴種は*Pinnularia spp.*・大型の淡水種*Cynbella aspera*・*Cynbella spp.*である。そのほかの特徴的な種も大型の淡水種である*Diploneis yatukaensis*・*Pinnularia dactylus*・*Pinnularia viridis.*などが多く含まれる。これらの大型の殻をもつものはどれも保存がよいのが特徴である。

No.38の含有殻数はやや豊富である。優占種は*pinnularia spp.*・*Eurotia puraerupta var.bidens*・*Cyrbella spp.*、そのほか*Pinnularia viridis*などが含まれる。

No.39の含有殻数は普通である。優占種は*Synedra ulna*、特徴種は*Eunotia proerupta var.bidens*である。そのほか汽水―海水生種の*Achnathes brevipes var.intermedia*・どちらかというと流水淡水生種の*Achnanthes inflata*・真流水生淡水種の*Caloneis schroederi*などが見られる。

No.40の含有殻数はやや豊富である。特徴種は*Synedra ulna*・*Pinnularia spp.*・*Eunotia praerupta var.bidens*、そのほか*Synedra fasciculata*などが含まれる。

No.41の含有殻数は普通である。特徴種は*Synedra ulna*・*Pinnularia spp.*・*Cocconeis placetula*である。そのほか*Diploneis smithii*などの海水生種がわずかに含まれている。

No.42の含有殻数は普通である。優占種は内湾干潟海水生種の*Nitzschia glanurata*、特徴種は同じく*Diploneis smithii*・汽水生種の*Cyammatohora macilenta*・淡水生種の*Pinnularia spp.*、そのほかの特徴的な種として浮遊海水生種の*Cyclotella striata*がわずかに含まれる。優占種*Nitzschia glanuratan*には破片となったものが多い。この試料は全体としてみると、淡水生種が21%に対して海水生種が63%で、海水生種が優勢である。この試料は内湾の干潟環境と考えられるが、淡水の流入や波の影響の強い環境の堆積物と推定される。

No.43の含有殻数はやや豊富である。優先種は*Nitzschia glanurata*、特徴種は*Diploneis smithi*、そのほかの特徴的な種として*Cyclotella striata*が含まれる。この試料の全体では、淡水生種はわずかに３%ほどふくまれているにすぎず、海水生種が82%を占め、内湾の干潟環境と考えられる。

第3表　珪藻分析結果（1）

単位：個数

種名	生息水域		第2区・18g				第1～4区・11f											
		1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	15	17	18	19	20	21
Achnanthes brevipes var.intermedia	B-M	-	-	-	-	1	-	-	-	6	-	1	4	3	-	-	-	-	-
Ach. clevei	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Ach. Convergens	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Ach. delicatula	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Ach. exigua	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Ach. inflata	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. lanceolata forma ventriocosa	F-B	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	3	1	1	1	1	-
Ach. minutissima	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. minutissima var.cryptocephala	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. rostrata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. sp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. sp.cfr.septentrionalis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Actinocyclus sp.	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora angusta.	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. holsatica	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. javanica	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. ovalis var.affinis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Amp. ovalis var.labyca	F-B	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	3	2	2	4	7	2	-	-
Amp. pediculus	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. polita	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. sp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Anomoeomeis sphaerophora	F	-	3	-	13	4	-	-	-	-	-	1	3	-	7	10	4	-	2
Bacillaria paradoxa	F-B	-	-	-	8	8	-	-	-	1	-	-	1	2	3	1	-	1	-
Caloneis bacillum var.bacillum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	1	-	-
Cal. bacillum var. labyca	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Cal. schroederi	F	-	5	-	2	-	-	-	-	-	-	2	3	8	20	24	8	2	3
Cal. siliculas	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-
Cal. ventricosa	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Camphlodiscus sp.	B-M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ceratoneis recta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis diminuta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Coc. placentula	F	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	12	14	7	-	1	-	-	2
Coc. Scutellum	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Coc. sp.	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella caspia	B	-	1	-	7	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Cyc. meneghiniana	F	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyc. ocellata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Cyc. striata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella aequalis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. aspera	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-
Cym. caspidata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	-
Cym. clevei	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. heteropleura	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. lacustris	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. lanceolata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. microcephara	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Cym. naviculiformis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	4	3	-
Cym. sinuata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4	11	-	-	-	-	-
Cym. sp.	F	-	4	1	15	10	-	-	2	-	-	2	2	3	1	-	2	1	1
Cym. tumida	F	-	-	-	1	-	-	-	2	5	-	2	5	1	-	-	-	-	1
Cym. turgida	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. turgidula	F	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	16	23	6	1	1	-	-	-
Cym. ventricoca	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	1	-	-
Diploneis bombus	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Dip. interrupta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Dip. ovalis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dip. smithii	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Dip. suborbicularis	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dip. Yatukaensis	F	-	1	-	3	-	-	-	-	1	-	3	-	-	2	3	2	-	-

第３表　珪藻分析結果（２）

単位：個数

種名	生息水域		第２区・18ｇ				第１～４区・11ｆ												
		1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	15	17	18	19	20	21
Epithemia sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Epi. turgida	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Epi. zebra	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Epi. zebra var.saxonnca	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia arcusu	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. bigibba	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. curvata var.linearisa	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. flexuosa	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. Gracilis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. luunaris	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Eun. monodon	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. pectinalis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. pectinalis var.minor	F	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Eun. pectinalis var.undulata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. praerupta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. praerupta var.dibens	F	-	5	1	1	1	-	-	-	1	-	3	-	3	1	1	-	-	-
Eun. sp.	F	-	-	-	3	-	-	-	2	-	-	2	7	-	-	-	-	-	1
Eun. Tenella	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria brevistriata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Fra. construens	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	6	20	5	8	1	-	-
Fra. construens var.binodis	F	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Fra. construens var.venter	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-
Fra. interstincta var.rostrata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
Fra. leptstauron var. dubia	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Fra. pinnata	F	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	3	6	-	-	-	-	-
Fra. sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. vancherial var.perminuta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Fra. virescence	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Frustulia sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Fru. vulgaria	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-
Gomphonema acuminatum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	3	-	-
Gom. acuminatum var.coronata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gom. Angustatum	F	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. christenseni	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. clevei	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	3	2	-	-	-	-	-
Gom. constrictum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. glacile	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. heleveticum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. intricatum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. intricatum var.pumila	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. lingulatum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. longiceps	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. Minutum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gom. olivaceum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. parvulum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Gom. pseudangur	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gom. sp.	F	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	6	4	2	-	-	-	-	-
Gom. tetrastigmatum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	3	-	-	-	-	-	-
Grammatophora macilenta	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma acuminatum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	10	15	6	-	1	-
Gyr. scalproides	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Gry. sp.	B	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys	F	1	9	8	16	40	1	-	1	3	-	2	4	6	15	20	7	4	6
Han. distincte-punctata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Han. Virgata var.capitellata	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Meiosira distans	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mei. sp.1	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	-	-	-
Mei. sp.2	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-
Meridion circulare	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-

注）生息水域の記号はF：淡水、B：汽水、M：海水を表す

第3表　珪藻分析結果（3）

単位：個数

種名	生息水域		第2区・18g				第1～4区・11f												
		1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	15	17	18	19	20	21
Navicula absoluta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	16	-	-	-
Nav. alpha	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. americana	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	2	-	-	-
Nav. anglica	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	8	7	1	-	-
Nav. bacillum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-
Nav. capitata var.linearis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. caspidata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	2
Nav. confervacea	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Nav. contenta	F	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. cryptocephala	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. elginensis	F	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	4	11	1	-	-
Nav. elginensis var. neglecta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. flavellata	B-M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Nav. gastrum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. goeppertiana	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nav. ignota var. angrica	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. Laevissima	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	6	1	6	2	-	-
Nav. marina	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. mutica	F	-	4	2	11	10	-	1	-	1	-	5	5	5	2	1	4	1	-
Nav. oppugnata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. peregrina	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	3
Nav. peregrina var. hankensis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. protracta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
Nav. pupula	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	1	-	-
Nav. pusilla	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. slesvicensis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
Nav. sp.1	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. sp.2	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. sp.3	F	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	4	1	2	-
Nav. subminuscula	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. tokyoensis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. viridula var. rostellta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. vitreae	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium affine	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Nei. affine var. amphirhynchus	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nei. Iridisl	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	9	5	-	1	-
Nei. sp.	F	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	1	-	1
Nitzschia acidoclinata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Nit. cocconeiformis	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. filiformis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. fonticola	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Nit. frustulum	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	4	-	-	-
Nit. glanurata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. hantzschiana	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Nit. ignorata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Nit. kutzingiana	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. marginulata var. subconstrica	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. obutusa	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	2	-	-
Nit. obutusa var. scalpelliformis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. paleacea	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Nit. parvula	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nit. punctata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. sigma	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Nit. sp.1	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Nit. sp.2	?	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	4	-	-
Nit. tryblionella var. levidensis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. tryblionella var. victoriae	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-
Opephora marty	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
Paralia sulcata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注）生息水域の記号はF：淡水、B：汽水、M：海水を表す

第3表　珪藻分析結果（4）

単位：個数

種名	生息水域		第2区・18g				第1～4区・11f												
		1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	15	17	18	19	20	21
Pinnularia acrospheria	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-
Pin. borealis	F	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Pin. dactylus	F	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	9	5	-	-	-
Pin. gibba	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-
Pin. leptosoma	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-
Pin. molaris	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	3	-	-	-
Pin. sp.1	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. sp.2	F	3	22	35	59	80	4	1	3	-	-	25	10	18	34	25	20	10	20
Pin. stmotophoroides	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. subcapitata	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Pin. subcapitata var. paucistriata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Pin. Substmotophora	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. Viridis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	3	-	1	-
Rhoicosphenisa abbreviata	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Rhopalodia gibba	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	-	-	-
Rho. gibberula	F-B	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	2	9	-	1	-
Rho. quisumbirgiana	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis gibba	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
Sta. phoenicenteron	F	-	1	-	-	2	-	-	-	2	-	2	7	4	11	4	2	4	2
Sta. smithii	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Surirella angustae	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sur. sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Sur. tenera	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-
Synedra fasciculata	F-B	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4	5	2	-	-	-	-	-
Syn. rumpens	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	5	1	-	-	-	-	-
Syn. ulna	F	-	22	11	56	35	-	2	19	72	-	67	77	46	14	7	15	6	16
Tabellaria fenestrata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Talasiosira sp.	M	-	-	-	-	1	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Terpsionoe amricana	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Thalassionema nitzschioides	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Tha. Bramaptrae	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明種	?	1	1	1	1	1	-	-	-	1	-	1	-	-	2	1	-	1	-
淡水種の穀数		4	83	59	187	191	5	5	30	100	0	182	208	202	191	209	97	39	61
淡水ー汽水種の穀数		0	1	0	10	10	0	0	0	2	0	15	10	12	11	19	3	3	0
汽水種の穀数		0	1	0	7	1	0	0	0	0	0	8	1	1	5	4	0	0	0
汽水ー海水種の穀数		0	0	0	0	1	0	0	0	6	0	1	6	3	0	0	0	0	0
海水種の穀数		0	0	0	0	1	0	0	1	3	0	0	2	0	2	1	0	0	0
含有珪藻穀数		5	87	60	205	205	5	5	31	112	0	207	227	219	212	234	104	43	61

注）生息水域の記号はF：淡水、B：汽水、M：海水を表す

第3表　珪藻分析結果（5）

単位：個数

種名	生息水域	第1～4区・11f											第3区・e									
		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
Achnanthes brevipes var.intermedia	B-M	4	2	11	-	2	-	1	3	6	5	1	-	3	-	1	-	-	11	5	2	-	-
Ach. clevei	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Ach. Convergens	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	5	1	-	-	-	-	-	-	-
Ach. delicatula	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. exigua	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. inflata	F	-	-	-	-	1	-	-	4	-	3	2	-	2	-	-	1	-	3	6	-	-	-
Ach. lanceolata forma ventriocosa	F-B	-	1	1	3	5	3	2	2	-	-	-	-	2	18	16	-	-	2	-	2	-	-
Ach. minutissima	F	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
Ach. minutissima var.cryptocephala	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. rostrata	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. sp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Ach. sp.cfr.septentrionalis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Actinocyclus sp.	B	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Amphora angusta.	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Amp. holsatica	M	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
Amp. javanica	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. ovalis var.affinis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. ovalis var.labyca	F-B	-	-	-	-	-	5	3	4	3	10	8	-	2	2	-	-	-	2	1	2	-	-
Amp. pediculus	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. polita	B	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amp. sp.	?	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	3	-	-	1	1	-	1	1	-	-
Anomoeomeis sphaerophora	F	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-
Bacillaria paradoxa	F-B	-	-	-	-	9	3	4	-	-	1	3	-	3	3	6	-	1	1	4	-	-	3
Caloneis bacillum var.bacillum	F	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cal. bacillum var. labyca	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Cal. schroederi	F	-	-	-	-	1	-	2	3	1	-	-	-	3	-	5	1	2	2	2	4	-	-
Cal. siliculas	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cal. ventricosa	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Camphlodiscus sp.	B-M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Ceratoneis recta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cocconeis diminuta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-
Coc. placentula	F	2	11	18	1	16	-	-	7	12	20	17	-	17	22	23	-	3	4	1	22	-	-
Coc. Scutellum	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Coc. sp.	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella caspia	B	-	6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	6
Cyc. meneghiniana	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyc. ocellata	F	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyc. striata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	11	
Cymbella aequalis	F	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. aspera	F	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	2	-	-	25	-	-	3	-	-	-
Cym. caspidata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. clevei	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. heteropleura	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Cym. lacustris	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. lanceolata	F	-	-	-	-	-	1	1	-	-	4	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-
Cym. microcephara	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. naviculiformis	F	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. sinuata	F	1	4	-	2	13	-	-	4	2	1	-	1	5	25	11	-	-	-	-	-	-	-
Cym. sp.	F	-	7	10	1	5	28	39	4	8	-	7	3	3	-	10	34	22	1	13	4	2	-
Cym. tumida	F	4	1	-	-	1	-	-	3	10	6	5	-	4	5	9	-	1	7	3	14	-	-
Cym. turgida	F	-	-	-	-	-	-	-	-	^	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cym. turgidula	F	-	3	-	-	3	-	-	10	5	-	3	-	7	13	6	-	-	7	1	5	-	-
Cym. ventricoca	F	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis bombus	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dip. interrupta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dip. ovalis	F	-	-	-	-	5	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-
Dip. smithii	M	-	-	2	-	2	3	-	1	-	1	4	-	2	-	-	-	-	-	-	2	48	27
Dip. suborbicularis	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dip. Yatukaensis	F	2	1	1	-	2	11	4	-	-	-	2	-	1	-	1	11	6	4	2	-	1	-

注）生息水域の記号はF：淡水、B：汽水、M：海水を表す

第3表　珪藻分析結果（6）

単位：個数

種名	生息水域	第1～4区・11f											第3区・7e										
		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
Epithemia sp.	F	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Epi. turgida	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Epi. zebra	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Epi. zebra var.saxonnca	F	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia arcusu	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. bigibba	F	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. curvata var.linearisa	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. flexuosa	F	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Eun. Gracilis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eun. luunaris	F	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	1	1	3	-	2	-	-	-	-	-
Eun. monodon	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Eun. pectinalis	F	1	-	-	-	-	-	-	3	6	5	-	-	1	-	-	4	9	-	8	3	-	-
Eun. pectinalis var.minor	F	-	-	-	-	5	16	1	2	2	1	3	-	-	-	-	1	-	-	1	2	-	-
Eun. pectinalis var.undulata	F	-	-	4	-	-	-	-	-	7	1	2	-	4	1	-	4	2	-	14	4	-	-
Eun. praerupta	F	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
Eun. praerupta var.dibens	F	3	6	4	-	18	2	2	33	43	25	9	1	5	6	27	11	21	56	39	20	-	-
Eun. sp.	F	4	2	9	-	15	2	2	2	6	-	9	2	4	-	2	5	8	-	-	-	-	1
Eun. Tenella	F	1	-	-	-	2	1	2	-	-	1	-	-	-	-	-	4	-	1	-	-	-	-
Fragilaria brevistriata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. construens	F	-	1	2	-	1	1	-	-	-	3	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	2
Fra. construens var.binodis	F	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. construens var.venter	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. interstincta var.rostrata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. leptstauron var. dubia	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. pinnata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. sp.	F	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fra. vancherial var.perminuta	F	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	2	2	2	-	-	-	-	-	-	-
Fra. virescence	F	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Frustulia sp.	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Fru. vulgaria	F	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum	F	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Gom. acuminatum var.coronata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Gom. angustatum	F	-	6	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Gom. christenseni	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. clevei	F	1	1	6	-	-	-	-	-	-	5		-	-	5	1	-	-	3	2	-	-	-
Gom. constrictum	F	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	1	-	-
Gom. glacile	F	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gom. heleveticum	F	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. intricatum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. intricatum var.pumila	F	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
Gom. lingulatum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-
Gom. longiceps	F	-	1	-	-	5	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Gom. Minutum	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-
Gom. olivaceum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. parvulum	F	-	-	2	-	1	-	-	1	-	-	3	-	1	4	3	1	2	-	1	1	-	-
Gom. pseudangur	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gom. sp.	F	-	-	-	1	-	2	4	-	1	1	6	-	2	2	2	1	1	2	-	3	-	-
Gom. tetrastigmatum	F	-	-	8	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Grammatophora macilenta	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	24	9
Gyrosigma acuminatum	F	-	-	-	-	3	-	-	3	1	4	2	-	-	6	8	-	-	-	-	1	-	-
Gyr. scalproides	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gry. sp.	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-
Hantzschia amphioxys	F	1	3	4	-	8	12	9	12	8	4	6	1	6	5	6	8	4	1	17	5	1	-
Han. distincte-punctata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	5	-	-
Han. Virgata var.capitellata	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-
Meiosira distans	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mei. sp.1	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	16
Mei. sp.2	F	-	-	-	-	1	-	2	3	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1
Meridion circulare	F	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注）生息水域の記号はF：淡水、B：汽水、M：海水を表す

第3表　珪藻分析結果（7）

単位：個数

種名	生息水域	第1～4区・11f											第3区・7e										
		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
Navicula absoluta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. alpha	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nav. americana	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Nav. anglica	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. bacillum	F	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. capitata var.linearis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. caspidata	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. confervacea	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. contenta	F	-	1	-	-	5	4	-	-	-	-	-	-	-	7	2	-	-	-	-	-	-	-
Nav. cryptocephala	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. elginensis	F	-	-	-	-	1	5	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. elginensis var.neglecta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-
Nav. flavellata	B-M	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	3	-	-	-	2	-	1	-	-
Nav. gastrum	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Nav. goeppertiana	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. ignota var.angrica	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Nav. laevissima	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. marina	M	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	6
Nav. mutica	F	2	3	6	-	10	3	3	6	13	1	4	3	11	1	4	2	-	5	6	3	1	-
Nav. oppugnata	F	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. peregrina	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-
Nav. peregrina var.hankensis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Nav. protracta	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. pupula	F	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nav. pusilla	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Nav. slesvicensis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. sp.1	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Nav. sp.2	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nav. sp.3	F	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	1	-	-
Nav. subminuscula	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Nav. tokyoensis	F	-	-	-	-	-	3	2	-	1	2	3	-	1	-	-	1	2	-	-	2	5	-
Nav. viridula var.rostellata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nav. vitreae	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium affine	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nei. affine var.amphirhynchus	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nei. iridisl	F	-	-	1	-	1	3	1	-	-	2	6	-	-	1	1	1	3	-	1	1	-	-
Nei. sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia acidoclinata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. cocconeiformis	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	10
Nit. filiformis	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nit. fonticola	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. frustulum	B	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. glanurata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	67	150
Nit. hantzschiana	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. ignorata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. kutzingiana	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. marginulata var.subconstrica	M	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-
Nit. obtusa	F	-	-	-	-	3	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1
Nit. obtusa var.scalpelliformis	B	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Nit. paleacea	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. parvula	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. punctata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. sigma	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3
Nit. sp.1	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Nit. sp.2	?	-	-	-	-	3	5	-	2	1	3	2	-	-	-	1	3	2	-	2	-	-	-
Nit. tryblionella var.levidensis	B	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nit. tryblionella var.victoriae	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Opephora marty	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Paralia sulcata	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3

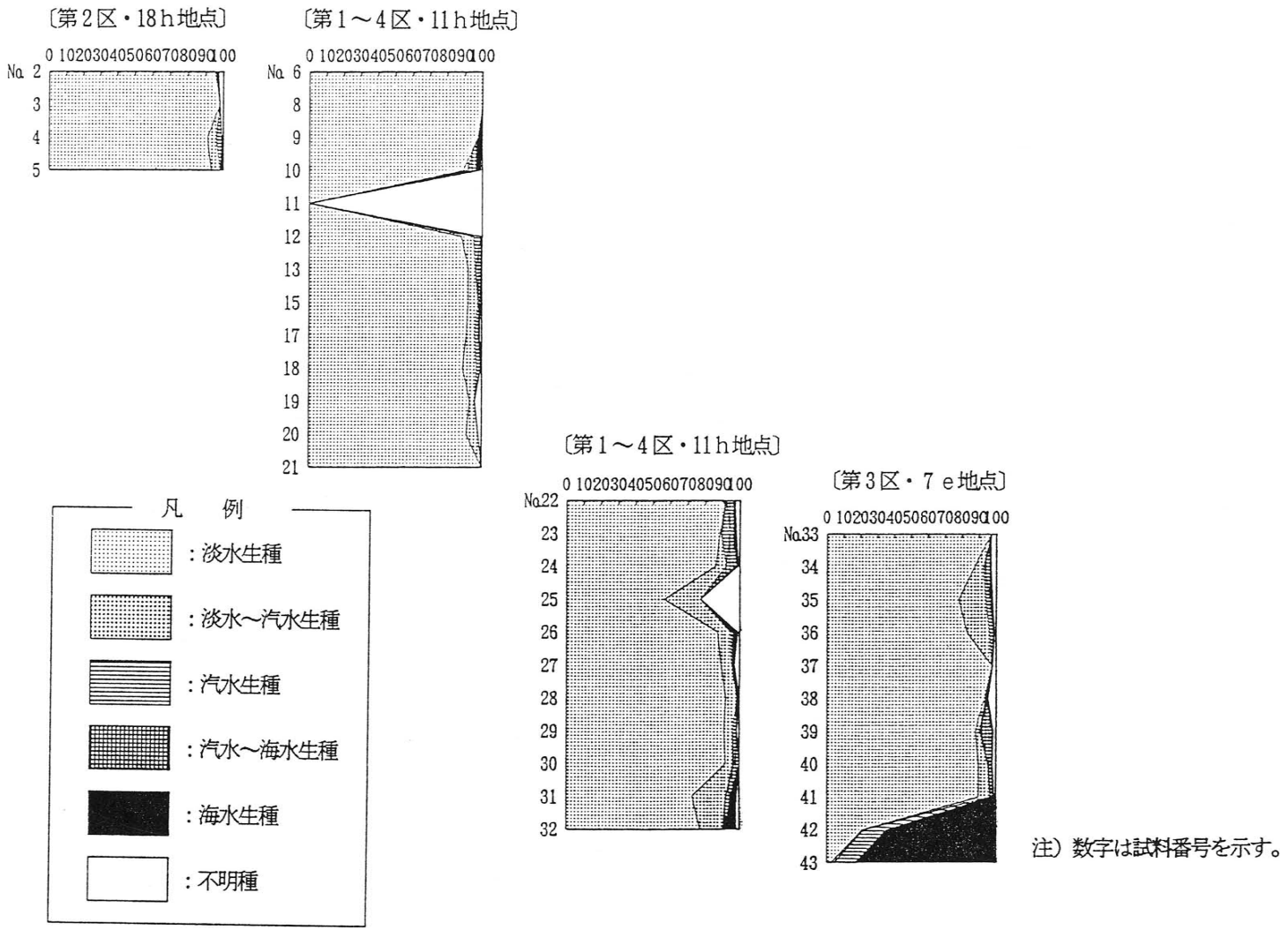
注）生息水域の記号はF：淡水、B：汽水、M：海水を表す

第3表　珪藻分析結果（8）

単位：個数

種名	生息水域	第1～4区・11f											第3区・7e										
		22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
Pinnularia acrospheria	F	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. borealis	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. dactylus	F	-	-	-	-	2	1	-	9	4	4	1	-	-	-	-	14	7	-	-	-	-	-
Pin. gibba	F	-	-	-	-	-	-	-	3	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. leptosoma	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Pin. molaris	F	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. sp.1	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. sp.2	F	16	18	17	-	38	76	72	22	13	14	28	6	22	5	19	40	66	6	44	29	35	4
Pin. stmotophoroides	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. subcapitata	F	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. subcapitata var.paucistriata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pin. substmotophora	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Pin. viridis	F	-	-	-	-	-	2	-	2	1	-	-	-	-	-	-	14	20	-	-	-	-	-
Rhoicosphenisa abbreviata	F-B	-	-	10	-	-	-	1	-	-	1	2	-	-	-	2	-	-	-	-	2	-	-
Rhopalodia gibba	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rho. gibberula	F-B	-	-	-	-	-	2	2	1	-	1	1	-	-	2	-	-	1	-	-	-	3	2
Rho. quisumbirgiana	F-B	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis kriegeri	F	-	-	-	1	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Sta. phoenicenteron	F	-	1	3	-	3	5	19	8	3	4	10	-	1	1	-	2	11	3	1	3	-	-
Sta. smithii	F	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
Stephanodiscus sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	1	-	2	1	-	-	-
Surirella angustae	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Sur. sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sur. tenera	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Synedra fasciculata	F-B	-	-	-	-	2	-	-	3	4	23	14	-	1	1	2	-	1	-	7	7	-	1
Syn. rumpens	F	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	3	-	-	-	-	1	-	-
Syn. ulna	F	35	40	61	-	13	1	3	33	40	46	26	12	42	17	20	8	13	65	44	60	-	-
Tabellaria fenestrata	F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Talasiosira sp.	M	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	5	5
Terpsionoe amricana	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Thalassionema nitzschioides	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Tha. bramaptrae	F-B	1	-	-	-	1	-	-	1	-	7	3	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
不明種	?	-	-	2	3	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	1	-	-	-
淡水種の殻数		79	111	162	8	210	192	187	191	201	167	178	30	162	165	187	203	214	182	215	198	47	9
淡水ー汽水種の殻数		1	1	11	3	17	13	12	11	8	45	31	0	10	34	30	0	3	5	12	13	3	6
汽水種の殻数		0	6	0	0	2	3	0	0	2	1	2	0	2	5	4	1	1	2	1	2	29	32
汽水ー海水種の殻数		4	2	11	0	2	0	1	4	6	5	2	0	3	3	1	0	0	13	5	3	1	0
海水種の殻数		0	3	2	0	7	3	3	1	0	9	14	0	2	2	1	0	2	2	1	2	139	219
含有珪藻殻数		84	124	189	14	241	216	203	210	218	230	230	31	185	211	226	208	230	207	238	219	219	266

注）生息水域の記号はF：淡水、B：汽水、M：海水を表す



第5図　珪藻群集百分比グラフ

注）数字は試料番号を示す。

3－4．考察

（1）堆積環境の変遷

珪藻分帯を第6図に示した。珪藻分帯は珪藻化石の出現状況の変化、群集の変化などから堆積環境を考えるためにゾーン分けし、5つの珪藻帯に分けた。各々の珪藻帯の特徴を下位から順に述べる。

DV帯（No.42～43、No.30～32）

全体として内湾の河口付近の堆積環境と考えられるが、位置的なものから2つの亜帯にわけられる。

DV～b帯（No.42～43）

内湾干潟海水生種の*Nitzschia glanurata*・*Diploneis smithii*などが卓越することから、泥質な堆積物からなる内湾が埋積されて平野に移行する過程の、潮間帯の干潟堆積物と考えられる。

DV－a帯（No.30～32）

淡水―汽水生種の*Achnanthes brevipes var.intermedia*、内湾干潟海水生種の*Nitzschia glanurata*・*Diploneis smithii*などが特徴的に含まれるところから、かなり河口に近い位置の河川堆積物と推定される。

DⅣ帯（No.26～29、No.35～41）

全体として河川～河口域の堆積環境を示しているが、位置的なものなどから3つの亜帯に分けられる。

DⅣ－C帯（No.27～29）

比較的流水を好む淡水一汽水生種の*Achonathes lanceolata forma ventricosa*や真流水淡水生種の*Caloneis schroederi*を含むことから、比較的河口に近い堆積物であると考えられる。

DⅣ－b帯（No.35～41）

真流水淡水生種の*Caloneis schroederi*や好流水淡水生種の*Gamphonema parvulum*・*Gyrosigma acuminatum*などが特徴的に含まれることから、流れのある河川の堆積物と推定される。ただし、試料No.37などは大型の殻をもつ淡水生種の保存がよいことから、後背湿地の堆積物と考えられる。全体としては、網状河川堆積物と推定できる。

DⅣ－a帯（No.26）

真止水の*Cynbella sinuata*が特徴的に含まれ、わずかであるが汽水・海水生種が含まれることから、比較的河口に近い後背地の湿地の堆積環境が考えられる。

DⅢ帯（No.20～25、No.33～34）

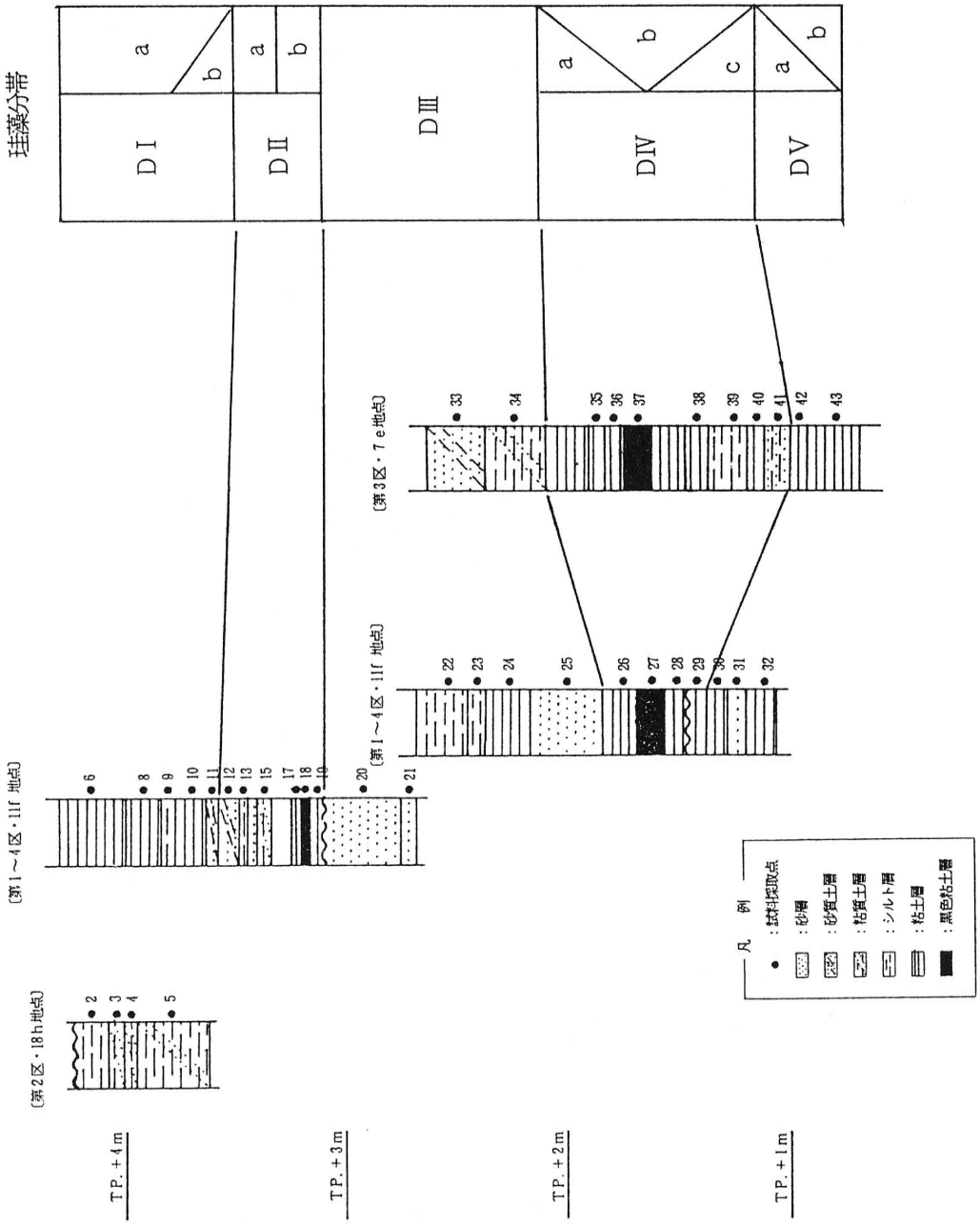
珪藻化石をあまり含まず、殻が破片となったものが多いことから二次的な成因（洪水の影響など）で、堆積場の環境を示さないことも考えられる。

DⅡ帯（No.12～19）

全体として河川の堆積物であるが、珪藻化石の組成から2つの亜帯に分けられる。

DⅡ－b帯（No.17～19）

真流水淡水生種の*Caloneis schroederi*や好流水淡水生種*Gyrosigma acuminatum*などが特徴的


珪藻分帯
DⅠ
DⅡ
DⅢ
DⅣ
DⅤ
a
b
c
〔第1～4区・11f 地点〕
〔第2区・18h地点〕
〔第3区・7e地点〕
〔第1～4区・11f 地点〕
TP.＋4m
TP.＋3m
TP.＋2m
TP.＋1m
凡 例
：試料採取点
：砂層
：砂質土層
：粘質土層
：シルト層
：粘土層
：黒色粘土層

第6図　珪藻分帯

に含まれることから、流れのある河川の堆積物であると考えられる。

DⅡI－a帯（№12～15）

淡水一汽水生種の*Achnanthes brevipes var.intermedia*・淡水一汽水生種の*Synedra fasculata*や汽水生種の*Melosira sp.*を特徴的に含むことから、汽水の影響のある比較的穏やかな河川（たとえば河口に近い蛇行河川）の堆積物と考えられる。

DI帯（№1～11）

淡水域の堆積物であるが、珪藻化石の含有量から2つの亜帯に分けられる。

DI－b帯（№4～5）

淡水生種の*Prinnularia spp.*・*Synedra ulna*・*Hontzschia amphiaxy*が多く含まれ、わずかに汽水生種・海水生種を含んでいるが、生態的に特徴のある種がなく、水域を特定することは困難である。

DI－a帯（№1～3、№6～11）

珪藻化石をあまり含まず、殻が破片となったものが多いことから二次的な堆積物であると推定できる。

（2）既存資料との対比

海進・海退の対比を第7図に、大阪平野の古地理図を第8図に示した。

海進・海退の対比

佐藤・前田・熊野（1983）は、神戸市玉津において珪藻分析およびラジオカーボン年代測定によって約8,000年前から約4,500年前まで縄文海進を報告している。

大阪平野における珪藻分析による海進・海退の状況は、内湾に多くの河川が流入している地形条件によって地域によって大きく違っている。

大竹西遺跡の近傍の池島遺跡においては、縄文時代から弥生時代前期の洪水堆積層直前までは汽水域であったが、大竹西遺跡ではこれより早い時期（縄文時代後期）には潮間帯の干潟の河口域の堆積物から河川域の堆積物に以降している。

これは、池島遺跡よりも大竹西遺跡が河川の上流域に位置しているという地形的条件によるものと考えられる。

大阪平野の古地理図について

梶山・市原（1985）は、遺跡の化石や考古遺物を基にして大阪平野のおいたちを次の5つの時代に分けて古地理図を作成している。

①河内湾Ⅰの時代（約7,000～6,000年前，縄文時代前期前半）

②河内湾Ⅱの時代（約5,000～4,000年前．縄文時代前期～縄文時代中期）

③河内潟の時代（約3,000～2,000年前，縄文時代晩期～弥生時代前半）

④河内湖Ⅰの時代（約1,800～1,600年前，弥生時代前半～古墳時代）

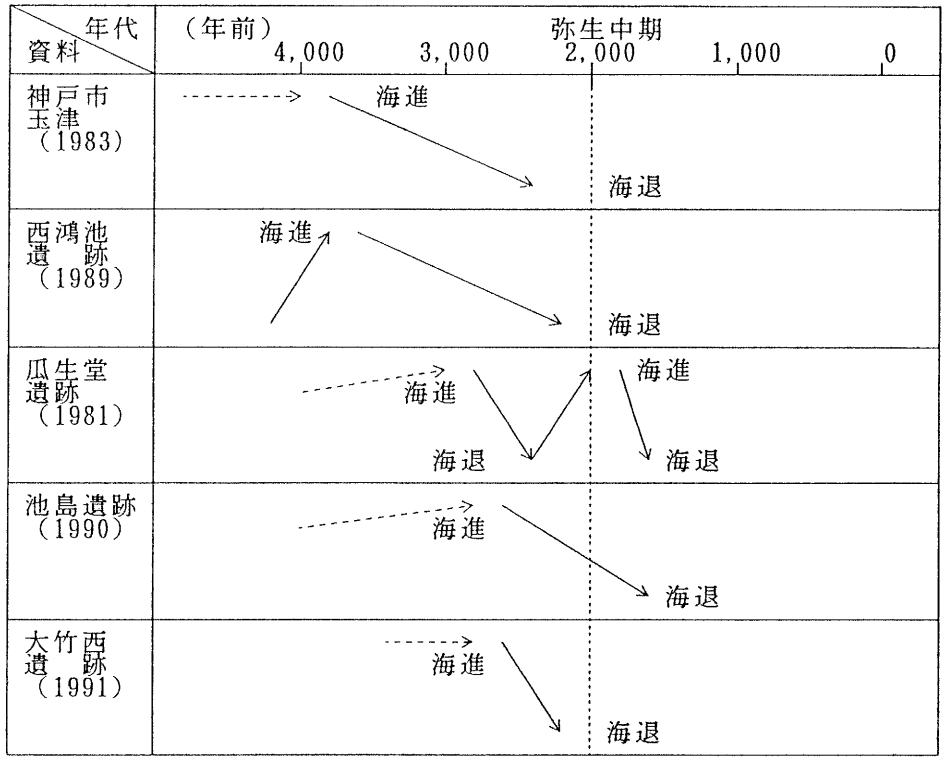
⑤河内湖Ⅱの時代（5世紀ごろ）

今回の珪藻分析結果を梶山・市原(1985)の古地理図と対応させると、花粉分析結果と考古遺物による年代から、珪藻帯DVは河内湾Ⅱの時代、DⅣ～DⅡは河内潟の時代にそれぞれ対応できる。このうち珪藻帯DVにあたる河内湾Ⅱの時代の古地理図をみると、大竹西遺跡付近は池島遺跡を中心に広がる「干期は草原、雨期は水域となる地域」にあたっているが、今回の珪藻分析結果では「潮間帯の干潟の河口域」という堆積環境が推定されている。また、池島遺跡の珪藻分析結果からもこの時代の堆積環境は「河口付近から潮汐の影響を受ける海岸～河口」と推定されている。したがって、河内湾Ⅱの時代の古地理図は恩智川沿いに大竹西遺跡付近まで入江もしくは潮汐の影響を受ける河川が延びていたように加筆修正を行う必要がある。

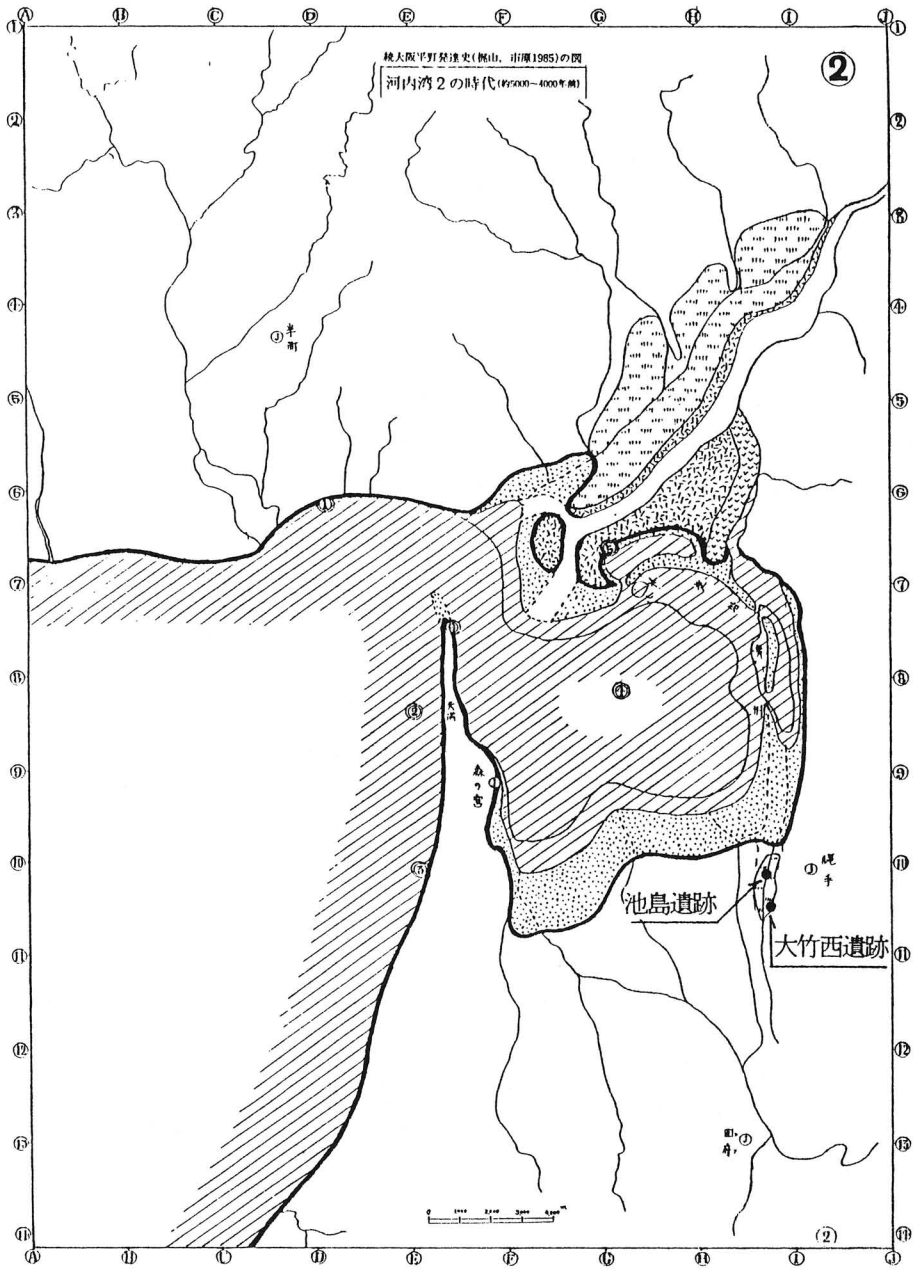
4．まとめ

花粉分析、珪藻分析によって明らかになった大竹西遺跡の古環境の変速を第9図に示した。

花粉分析と珪藻分析による分滞区分を比較してみると、両者はよく一致していることがわかる。しかし、詳しくみると花粉帯のPⅡ－bと珪藻帯DⅢを境にして下位では珪藻帯が移行した後に花粉帯が移行しているが、上位ではその逆になっている。このことは、下位では堆積環境が変化することによって植生が変化している（自然環境の変化が主体）のに対して、上位では植生が変化することによって堆積環境が変化している（人為による環境変化が主体）ことを表しているものと考えられる。

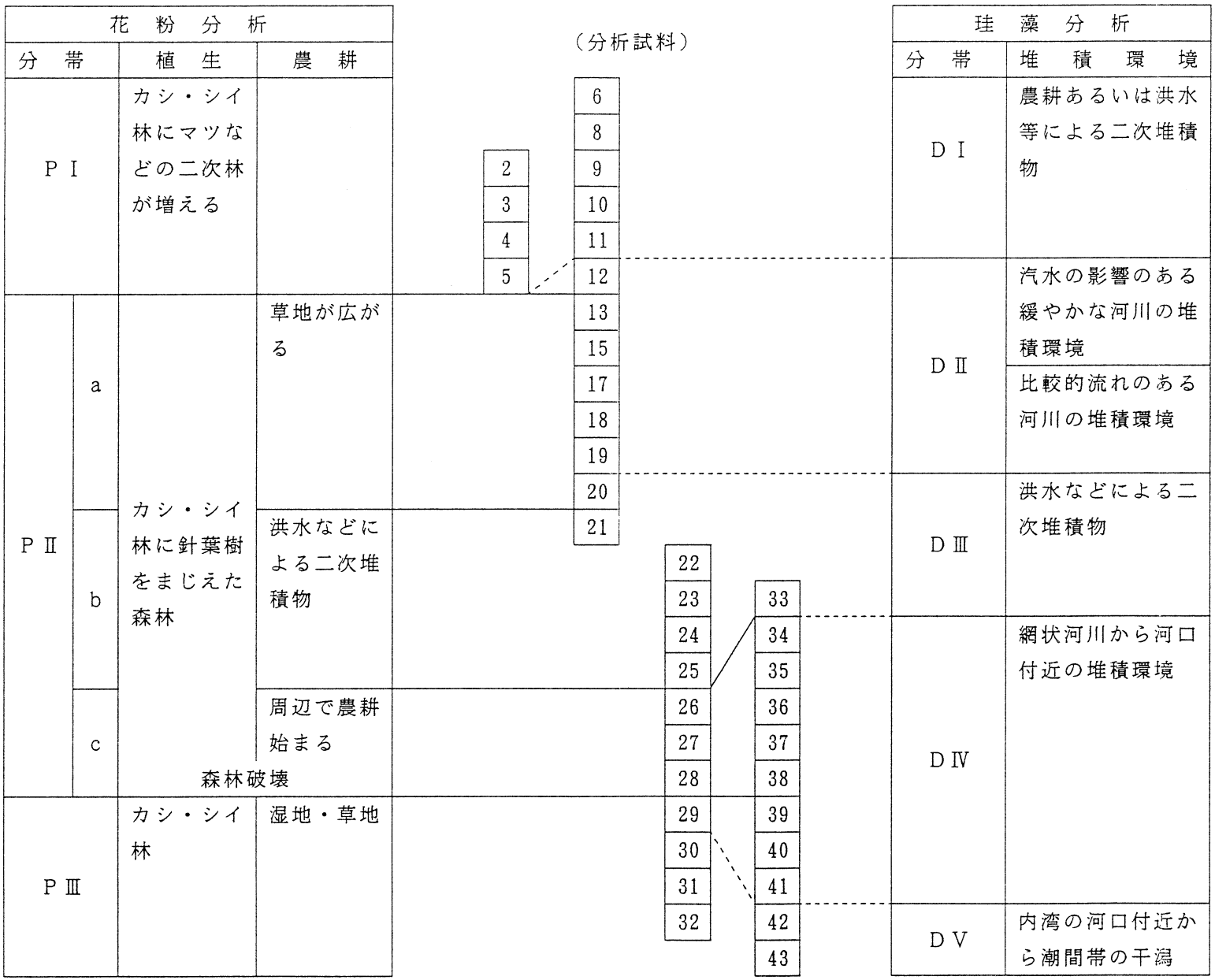


第7図　海進・海退の対比



出典）梶山彦太郎・市原　実（1985）続大阪平野発達史

第８図　河内湾Ⅱの時代の古地理図



注）数字は試料番号を示す。

第9図　大竹西遺跡の古環境変遷

参考文献

・前田保夫　1984　花粉分析学的研究よりみた近畿他方の洪積（更新）世以降の植生変遷　日本植生誌　至文堂　p.87－100
・安田喜憲　1984　大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変速と古地理　第四紀研究16（4）　p.211－229
・佐藤裕司・前田保夫・熊野　茂　1983　神戸市玉津における珊羊集と完析世海面変動　第四紀研究22（2）　p.77－90
・梶山彦太郎・市原　実　1985　続大阪平野発達史　古文物研究会　9 p.
・土質工学会開西支部・関西地質調査業協会　1987　微地形区分図　新編大阪地盤図　コロナ社　285p.

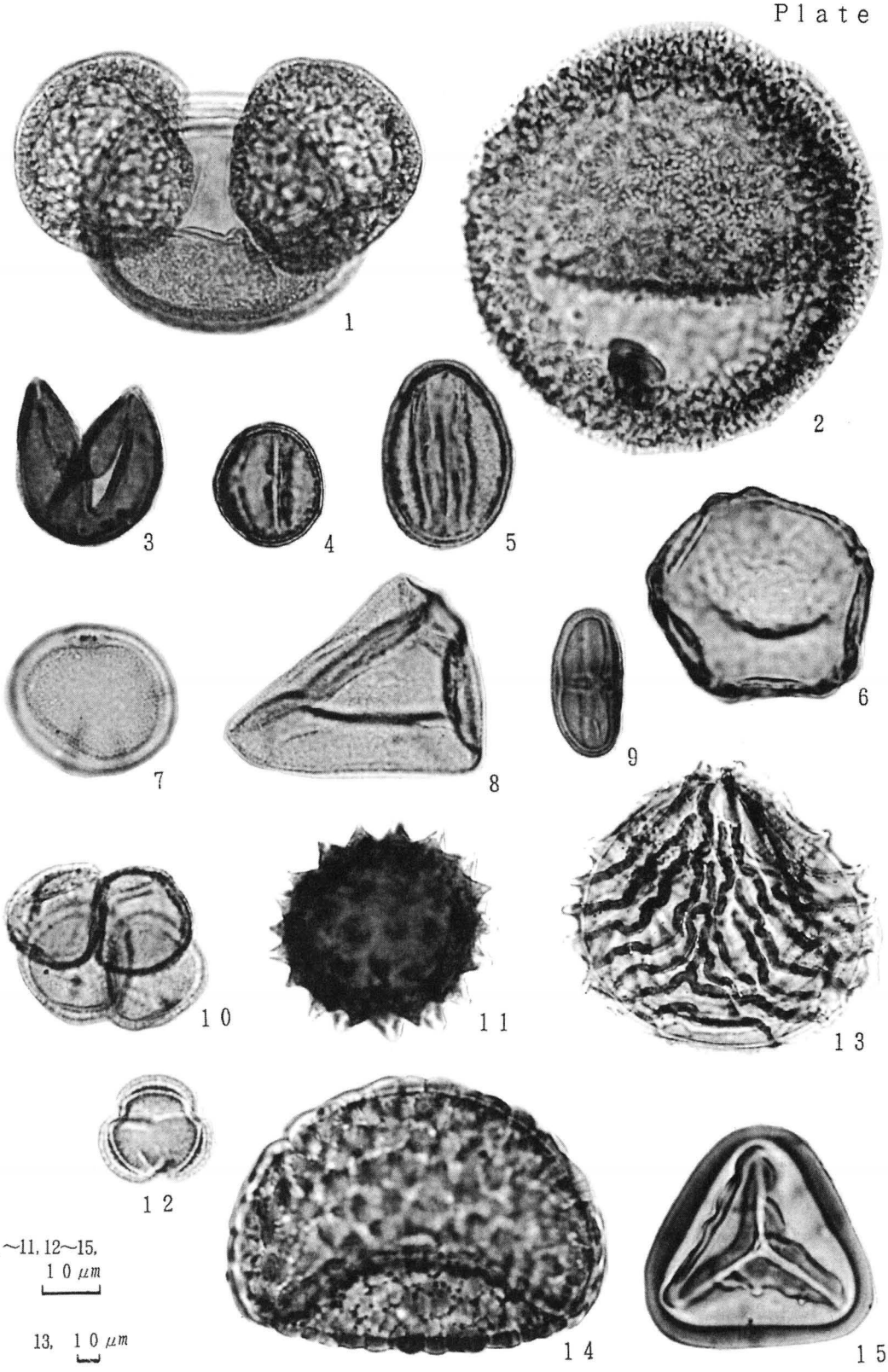
図　　版

図版1

（花粉化石・シタⅦ包子イヒ右）

1．マツ属（*Pinus*）
2．ツガ属（*Tuuga*）
3．スギ属（*Cryptmeria*）
4．アカガシ亜属（*Cyclobalamopsis*）
5．コナラ亜属（*Quercus*）
6．ケヤキ属（*Zelkoba*）
7．イネ科（Gramineae）
8．カヤツリグサ科（Cyperaceae）
9．セリ科（Umeblliferae）
10．ガマ属（*Typha*）
11．キク科（Compositae）
12．ヨモギ属（*Artemisia*）
13．ミズワラビ属（*Ceratopteris*）
14．単条型シダ胞子
15．三条型シタⅦ包子

Plate I



1～11, 12～15, 10 μm

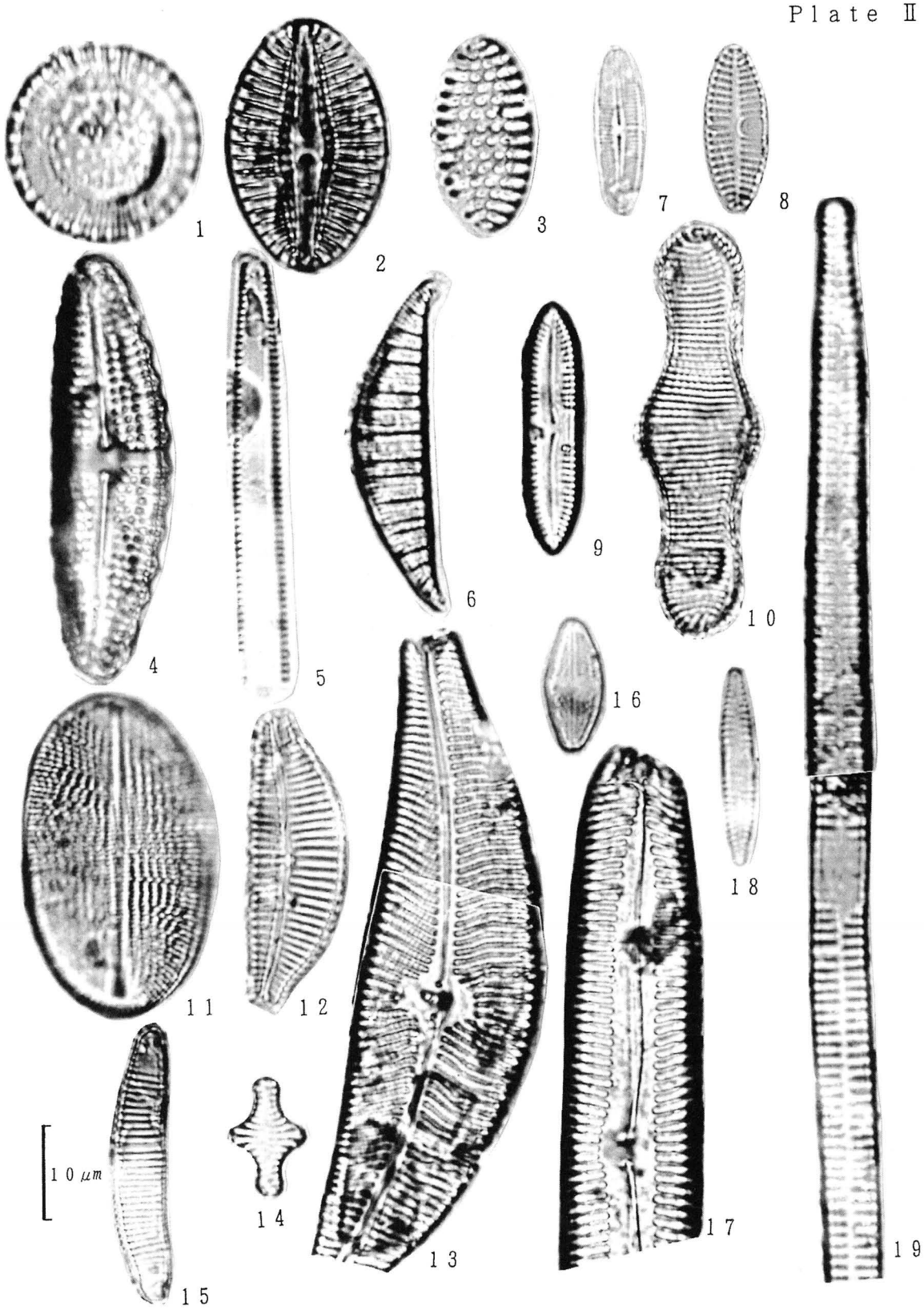
13, 10 μm

図版 2

(珪藻化石)

1．*Cyclotella striata* (海水生種)
2．*Diploreis smithii* (海水生種)
3．*Nitzchia gramulate* (海水生種)
4．*Achnanthes brevipes var.intermedia* (海水—汽水生種)
5．*Synedra faciculate* (汽水生種)
6．*Rhopalodia gibberula* (汽水—淡水生種)
7．*Achnanthes convergens* (汽水—淡水生種)
8．*Achnanthes lanceolate* (汽水—淡水生種)
9．*Caloneis schroederi* (淡水生種)
10. *Achnanthes inflata* (淡水生種)
11. *Cocconeis placentula* (淡水生種)
12. *Cymbella tugidula* (淡水生種)
13. *Cympella tumidal* (淡水生種)
14. *Fragilaria consruens* (淡水生種)
15. *Eunotia pectinalis* (淡水生種)
16. *Navicula mutica* (淡水生種)
17. *Pinnular dactylus* (淡水生種)
18. *Synedra rumpens* (淡水生種)
19. *Synedra ulna* (淡水生種)

Plate Ⅱ



第5章　まとめ

大竹西遺跡の遺跡範囲西部にあたる平野部一帯では、本調査を実施して以降、公共事業に伴う発掘調査が平成3年に第2次調査(ＯＴＮ91－2)、平成8年に第3次調査(ＯＴＮ96－3)、平成11年に第4次調査(ＯＴＮ99－4)が実施されており、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出されている。しかしこれらの調査を除けば、民間における開発のテンポが緩慢な地域であり、この地域を考古学的に分析し得る資料の蓄積が少ない現状にある。ここでは、大竹西遺跡の北西約700mに位置し、府の総合的な治水対策の一環として行われている恩智川治水緑地建設に伴って1989年以降、(財)大阪文化財センター〔1995年4月～(財)大阪府文化財調査研究センター、2002年4月から(財)大阪府文化財センター〕により継続して行われている池島・福万寺遺跡の調査成果を基に、本調査で検出した各時期の集落推移を概観してみたい。

弥生時代前期前半

当該期の遺構は第7面で検出した。調査地東部で検出した南北方向に伸びる自然河川跡の微高地上から、弥生時代前期前半(中段階)の木棺墓・土器棺墓・土壙墓で構成される墓域3箇所(墓域Ⅰ～Ⅲ)が検出されている。便宜上3箇所に区別しているが、墓域Ⅰと墓域Ⅱの間には後世の河川による削平があり、本来は墓域Ⅰ・Ⅱを含めた大規模な墓域を構成していた可能性がある。同時期の墓域が、池島・福万寺遺跡の池島Ⅱ期調査区で検出されており、大竹西遺跡と同様、河川埋没跡の微高地上が墓域として選地されている。墓域を構成した木棺墓・土壙墓の中で、小形壷を副葬するものが本調査では**土壙墓701・702**、池島・福万寺遺跡の池島Ⅱ期調査区では木棺墓433に認められた。中村大介氏(中村2006)によれば、小形壷の副葬行為は朝鮮半島南部から稲作文化の受容とともに北部九州を経て近畿地方へ副葬習俗が伝播したものと推定されており、大竹西遺跡、池島・福万寺遺跡の検出例はそれらを裏付ける資料の一つとなろう。これらの墓域に関連した集落域としては、大竹西遺跡では調査地の南東約140m地点で実施された第3次調査(ＯＴＮ96－3)で当該期の遺物が出土した自然河川が検出されている。池島・福万寺遺跡においては、墓域の西部にあたる福万寺Ⅰ期地区で流路・杭列等の遺構が検出されているが集落域の中心としては、大竹西遺跡と同様、河川堆積の影響が少なかったと推定される墓域東方の高燥な自然堤防上に存在したものと考えられる。また両遺跡共に、弥生時代前期前半の弥生土器に伴って縄文時代晩期の突帯文土器が出土しており、河内潟東南部における稲作文化受容期の「住み分け論」を考えるうえで、多くの示唆に富む資料を提供している。

弥生時代中期前半～中葉

中期前半の遺構としては、第7面で検出した溝等が中心で、当該期においては、集落域から隔絶された位置であったようである。同時期の水田は池島・福万寺遺跡の福万寺Ⅰ期で検出されている。

中期中葉の遺構としては、第6面で検出した水田遺構がある。3・4区の東端を南北方向に伸びる**大畦畔601**、1～4区のほぼ中央部を南北に区切る**中畦畔601・602**および2・3区の西部で水田が検出されている。池島・福万寺遺跡の福万寺Ⅰ期の第12－1面で検出されている水田面に対応するものと推定される。

弥生時代中期後半～後期後半

弥生時代中期後半～後期後半にかけては、後背湿地に堆積した堆積物を切る形で、河川の形成・移動・埋没が繰り返されており、これらの沖積作用の合間を縫って水田を中心とする生産域として利用されている。中期後半では、第５面の２・３区西部で検出した水田遺構に関連した堰・杭列・人口流路等が検出されている。後期前半においても引き続き、第４－２面の１～３区西部で検出した水田を主体とする生産域が検出されている。当該期の居住域としては、大竹西遺跡内では調査地の東部に近接し、鋳造鉄剣が出土した第３次調査（ＯＴＮ96－３）、池島・福万寺遺跡では、福万寺Ⅰ期地区の第11ｂ面検出された建物38を中心とする居住域がある。第４－２面で検出された水田面が流路堆積層である第Ⅸ層により廃絶した後、１・２・４区の第Ⅶ層上面には後期後半の集落域が形成されている。この居住域に関連する生産域としては、池島・福万寺遺跡の福万寺Ⅰ期・池島Ⅰ期地区の第11－２a面で検出された水田面が対応するものと推定される。

古墳時代初頭前半～前期後半（庄内式古相～布留式新相）

当該期の遺構は１～３区を中心に、古墳時代初頭前半～前期後半（庄内式古相～布留式新相）の長期に亘って集落が営まれている。

古墳時代初頭（庄内式期）の集落は、１区西部で検出したＳＢ301を中核とする集落構成が推定され、古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）にかけて継続して集落が営まれている。

古墳時代前期前半～後半（布留式古相～新相）の集落域は、１区の西部・２区全域・３区東部で検出されている。前期前半（布留式古相）においては、１・２区の西部を中心に推移している。前期中～後期（布留式中相～新相）においては、２区の全域および３区の東部に及ぶもので、この時期に集落域が最も拡大していたことが推定される。池島・福万寺遺跡の池島Ⅰ期の調査では、弥生時代中期後半面の廃絶後の洪水により形成された微高地を中心に集落域が形成されており、本調査地成果と同様、古墳時代初頭前半～前期後半（庄内式古相～布留式新相）の長期間に亘る集落形成が行われている。

中河内地域での当該期の集落動向は、小規模な集落単位が大規模な集落に発展することなく、頻繁に居住域を移動することが一般的で、庄内式期後半～布留式期前半にかけて集落数が爆発的に増大し、布留式前半をピークとして激減することが加美・久宝寺遺跡群、中田・東郷遺跡群の調査で確認されている。そのような趨勢にあって、本遺跡および池島・福万寺遺跡の池島Ⅰ期を含めた広範囲にわたって、古墳時代初頭前半～前期後半（庄内式古相～布留式新相）の長期に亘って集落域を維持した集団が存在したことが明らかとなった。また出土遺物のおいても、本調査地のＳＫ356から出土した瑪瑙製の鏃形石製品や池島・福万寺遺跡から出土した画文帯神獣鏡、方格四乳鏡の鏡片、内行花文鏡の鏡片を利用した懸垂鏡の存在は当該期の集落の中でも、卓越した優位性を持つ集団であったことが推定されよう。

当遺跡東方の生駒山地西麓部においては、前期の西の山古墳・花岡山古墳、中期初頭の心合寺山古墳、中期末の鏡塚古墳に至るまでの首長墓の累世的な古墳群を形成する「楽音字・大竹古墳群」が形成されている。大竹西遺跡、池島・福万寺遺跡の前期段階における長期間に亘る安定勢力集団の存在は、「楽音字・大竹古墳群」の継続した古墳築造を牽引し得た要因の一つであったと推定される。

飛鳥時代前期・奈良時代前半

当該期に比定される遺構は、２区の第３面で検出されている。井戸・土坑・小穴等の遺構が検出されているが、いずれも散発的な分布状況であるため、集落域の中核部から離れた位置であったものと推定される。飛鳥時代前半のものとしては、**ＳＥ 311・ＳＫ 347**、奈良時代前期のものとしては、**ＳＰ 3134・3174・3175** がある。飛鳥時代前半のＳＥ 311 を除けば、いわゆる土器埋納遺構に分類されるものである。池島・福万寺遺跡の福万寺Ｉ期地区の成果によれば、第９ｂ層を中心に７世紀前半～８世紀後半の土器埋納遺構が多数検出されており、これらは、微高地縁辺の非水田域の境付近に集中して分布することが指摘されている。

鎌倉時代

水田に関連する遺構が第２面で検出されている。これらの水田に関わる当該時期の集落域としては、調査地点の西方約500ｍ地点の池島・福万寺遺跡で昭和57年に実施された市立上ノ島小学校建設に伴う池島・福万寺遺跡第１次調査（ＦＫ82－１）がある。この調査では、河内郡と高安郡の郡界を画する道路をはさんで溝（堀）で囲繞された中世の居館が検出されている。屋敷地内に庭園を構成したと推定される池状遺構が存在することや、鉄製武器、豊富な中国産磁器等の出土遺物から鎌倉時代前期（13世紀前半）に成立した在地領主の屋敷地であったと推定される。

鎌倉時代において調査地の位置する河内郡一帯は玉櫛荘と呼ばれる平等院を領家とする摂政家領であり、弘安四～五年（1281～1282）の『勘仲記』によれば、その領主的名の一人であった助重名の地頭が荘民と衝突事件を起こしたことが記されている。当該期の河内の地頭はいずれも有力でない武士であり、在地を領主化するために、地頭の権限を越えた非法を繰り返していたことがこれらの史料から窺い知ることができよう。

なお、調査地の北３町の位置には東西に伸びる十三街道が伸びている。十三街道については、鎌倉時代に書かれた『聖徳太子伝私記』に「従二河辺一南北有二二道一、太子之四天王寺往還道也、一南路名二椎坂路一、河内国高安郡通二八部路一也、一北路名二玉野耶路一、河内国通二高安路一也」と記されている。このうちの「玉野耶路（玉租道）」が十三街道にあたるもので、当該期の集落成立において、これらの主要街道が何らかの影響を与えたことは想像に難くない。

室町時代初頭～江戸時代

第１面で検出した水田遺構が中心で、鎌倉時代に引き続き水田を主体とする耕作地としての土地利用が行われている。調査地点は河内郡条里一条の小字名「矢（やくさ）」の十四坪と十五坪にあたり、調査で検出した東西方向に伸びる**畦畔 109** が十四坪と十五坪を区画する坪境畦畔にあたる。水田面の上部には洪水砂層である第Ⅳ層が厚く堆積しており、これにより水田の機能が停止したと推定される。池島・福万寺遺跡の第１次調査（ＦＫ82－１）では、集落域の廃絶成因となった室町時代初頭の流路堆積層が検出されており、本調査で検出した第Ⅳ層についても同時期のものであった可能性が高い。８基検出した近世の農耕用井戸については、本来は第Ⅲ層を構築面とするもので、大和川の付け替え以降、顕在化する綿花等の商品作物の栽培に使用されたものと推定される。

参考文献

・高萩千秋　1992「大竹西遺跡(第2次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告34』(財)八尾市文化財調査研究会
・西村公助・樋口　薫　1997「7．大竹西遺跡第3次調査(OTN96－3)」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫　2001「Ⅳ大竹西遺跡(第4次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告67　(財)八尾市文化財調査研究会
・中村大介　2006「弥生時代開始期における副葬習俗の受容」『日本考古学　第21号』日本考古学協会
・2006「池島・福万寺遺跡 現地公開資料　池島・福万寺遺跡Ⅱ(その2－1)IFJ04－2調査区」(財)大阪府文化財センター 池島支所
・福永信雄　1997「河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金関恕先生の古希をお祝いする会
・市村慎太郎　2002「池島・福万寺遺跡の古式土師器段階－池島Ⅰ期の成果から－」『大阪文化財研究　第21号』(財)大阪府文化財調査研究センター
・亀井　聡・國乘和雄他　2005「池島・福万寺遺跡　発掘調査概要ＸＸＸ－99－2調査区(1999年)の調査概要－」(財)大阪府文化財センター
・山田隆一　1994「古墳時代初頭前後の中河内地域－旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて－」『弥生文化博物館研究報告第3集』大阪府立弥生文化博物館
・井上智博・畑　暢子他　2002「八尾市・東大阪市所在　池島・福万寺遺跡2(福万寺Ⅰ期地区)－一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書－　遺構・遺物編」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第79集』(財)大阪府文化財センター
・國乘和雄　1992「東大阪市池島所在　池島・福万寺遺跡　発掘調査概要Ⅸ　－91－1・2調査区の概要－」(財)大阪文化財センター
・佐伯博光　1997「池島・福万寺遺跡　発掘調査概要ＸⅧ－94－1・2調査区の概要－」(財)大阪府文化財調査研究センター
・森　浩一　1978「第三章　古墳文化と古代国家の誕生　第一節　古墳の発生と古墳前期の文化　6河内の前期古墳」『大阪府史　第1巻　古代編Ⅰ』大阪府
・宮川　満　1976「第二節、第四節」『大阪府史　第三巻　中世編Ⅰ』大阪府
・中井　均　1991「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として」『中世の城と考古学』㈱新人物往来社
・米田敏幸他　1990「福万寺遺跡－上之島町北3丁目22－1の調査－」『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』(財)八尾市文化財調査研究会
・棚橋利光　1982「八尾の条里制」『八尾市紀要　第6号』八尾市史編さん室

図　　版